# 西海考古

第12号

2022年3月

西海考古同人会

題字　兵働翠苑（日展作家）

表紙デザイン　中村　幸

# 目　　次

在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺の検討 ……宮﨑　貴夫（ 1 ）
―弥生時代後期の長崎県本土地域を中心として―

古墳出現前夜における鉄製武器からみた地域間交流 ……立谷　聡明（ 33 ）
―西北九州と有明海沿岸地域を中心に―

前方後円墳分布周縁地域の社会 ……古門　雅高（ 53 ）
―長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に―

いま磁器を使っているのは波佐見のおかげ ……宮﨑　貴夫（ 89 ）
―日本の生活文化のなかの波佐見焼―

【研究ノート】門前タイプ土器の検討 ……礒村　康行・大坪　芳典（109）
―長崎県における縄文時代早期後葉の土器研究【序章】―

【研究ノート】石製羽口の集成 ……土岐　耕司（117）

【資料報告】長崎市三重地区・東上遺跡について ……宮下 雅史・竹田 ゆかり・渡邊　康行（131）
―五島灘（角力灘）を望む弥生時代砂丘遺跡の予察的評価―

執筆者一覧 ……（161）

# 在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺の検討

－弥生時代後期の長崎県本土地域を中心として－

宮﨑　貴夫

## はじめに

長崎県本土地域の弥生文化が、北部九州地域と異なっていることに気づいたのは、1977 年の佐世保市宇久松原遺跡の調査（宮﨑編 1983）であった。1979 年～ 1981 年には、南島原市今福遺跡の調査（宮﨑編 1984、宮﨑編 1985、町田・宮﨑編 1986）を担当し、小田富士雄が西北九州の弥生文化について著した『五島列島の弥生文化』（小田 1970）と「西北九州」『三世紀の考古学』下巻（小田 1983）を学ぶことによって、それが確信へと変わってきた。それを、1995 年に「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化」として『風土記の考古学』５のなかにまとめた（宮﨑 1995）。1995 年から 1999 年には、壱岐の原の辻遺跡の調査を担当し、「魏志倭人伝」に記された一支国の交流拠点集落の状況を体験することができた。また、石橋新次の論文「糸島型祭祀用土器の成立とその意義」（石橋 1992）を評価することで目からウロコが落ちたように視野が広がり、壱岐から西北九州地域までを見通すようになった。

2011・12・14 年には、〈有明海をめぐる弥生時代の交流〉をテーマとして長崎県考古学会と肥後考古学会との合同大会が開催された。2015 年には、その成果を踏まえ九州各県と瀬戸内地方の研究者が参加した九州考古学会との合同研究大会が開催され、瀬戸内・近畿地方までを視野にいれた広域の弥生社会について議論をおこなう画期的な研究会となった。

筆者は、それらの大会で発表した内容を「環有明海とその周辺をめぐる交流と変動」として『長崎地域の考古学研究』（宮﨑 2019）のなかにまとめたが、両研究会の成果を踏まえたものにはなっていない。そこで「肥前型器台」の問題については､検討をおこなって『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第 12 号の原稿として提出している（宮﨑 2022）。ご参照いただきたい。ここでは、長崎県本土地域における在地系壺の地域性と搬入された甕棺・大甕・大壺について検討をおこなってみたい。

## １．在地系壺の地域性について

諫早市森山町に所在する西ノ角遺跡は、県道改良工事に伴って 1983 年に発掘調査が実施され、1985 年に調査報告書が刊行された（高野編 1985）。筆者はこの報告書なかで土器を担当した。Ⅳ総括の「まとめ」では「１．西ノ角遺跡出土の土器ついて」の節を立て、西ノ角遺跡の小児甕棺に使用された壺形土器に注目し、大村市富の原遺跡、南島原市北有馬町今福遺跡の発掘成果を併せて、弥生後期の在地系壺形土器として「西ノ角型壺」、「富の原型壺」、「今福型壺」を提唱し、これらの壺が地域性をもつことを指摘したことがある（宮﨑 1985）。西ノ角遺跡の報告書刊行からすでに 35 年が経過し、新たな調査成果や西九州新幹線関係の調査によって大村市竹松遺跡の資料などが蓄積されてきている。そのことで、新たに「竹松型壺」を設定するなど検証する必要がでてきた。この節では、長崎県本土地域における在地系壺の地域性の検討をおこないたい（註 1）。

（１）「今福型壺」について（図２・３）

今福遺跡は、島原半島南東部に位置し、有馬川北岸の標高 10 ㍍～ 30 ㍍の河岸段丘に立地する。県道改良工事に伴って、調査が 1979 年～ 1981 年に実施され、1984 年～ 1986 年に三冊の調査報告書を刊

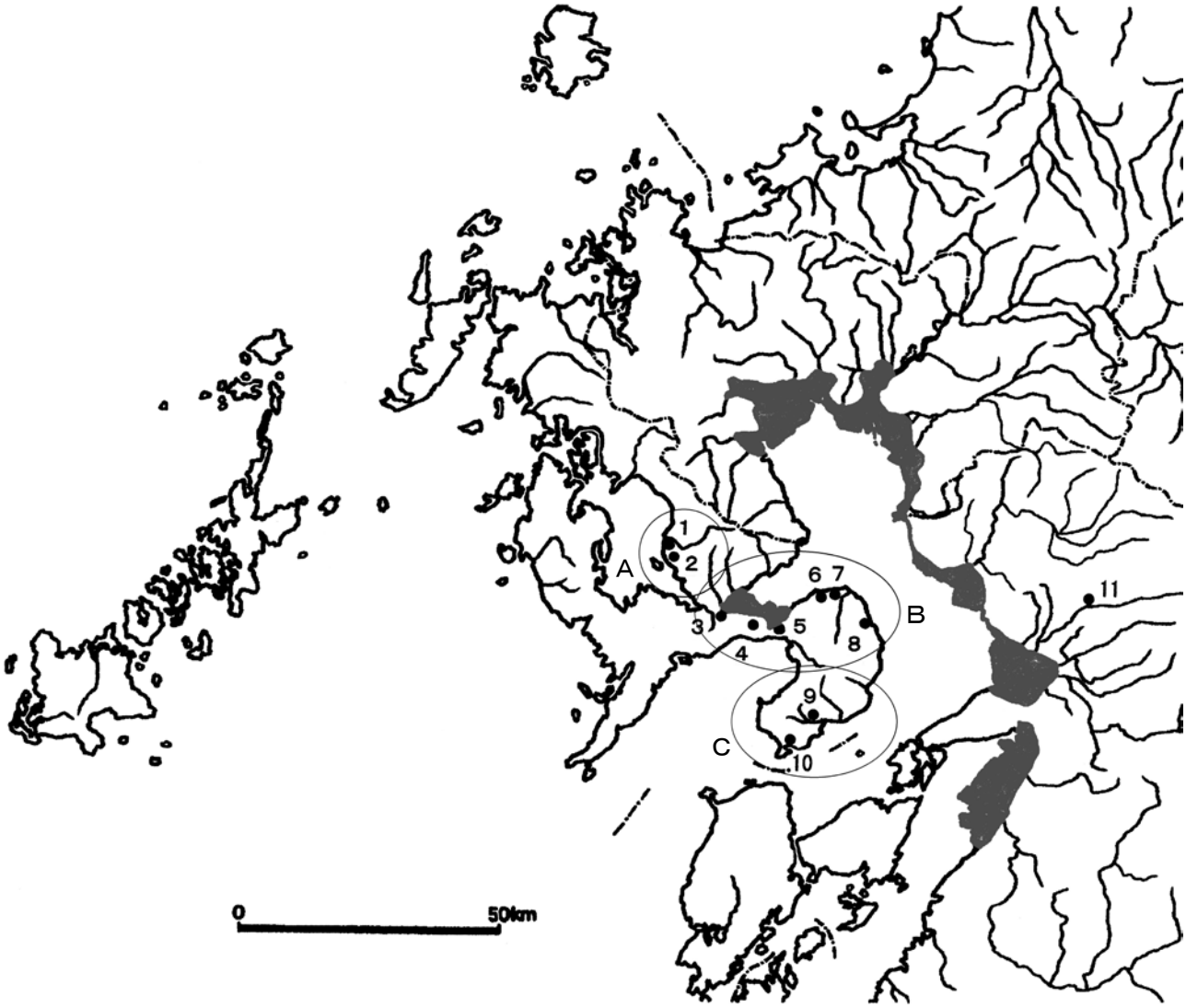



**図１　弥生後期における在地系壺の地域性**

**（有明海と八代海の海岸線は、石橋 2015 文献掲載の下山正一と土井男『多良山麓研究』1966 を参考にした推定ライン）**
**Ａ～Ｃは在地系壺の地域エリア／Ａ:富の原型壺･竹松型壺エリア、Ｂ:西ノ角型壺エリア、Ｃ:今福型壺エリア　１竹松、２富の原、３小栗・立石、４西ノ角、５火箱、６伊古、７佃、８景華園、９今福、10 口之津貝塚、11 梅ノ木・山尻**

行した（宮﨑編 1984、宮﨑編 1985、町田・宮﨑編 1986）。今福遺跡は、弥生時代と中世の重複した複合遺跡である。弥生時代については、弥生時代中期から弥生時代終末期の集落遺跡であり、竪穴住居跡２棟、ドングリ貯蔵穴１基、小児カメ棺墓５基、土壙墓１基、濠１条、土坑、溝、自然流路などが検出された。小児カメ棺墓は、Ｂ地区で３基、Ｃ地区で２基確認されている。

図２は、瀬戸内系凹線文高杯の影響を受けて、弥生後期初頭に成立した「見かけ３条突帯」に関連した土器を掲載したものである。１は弥生中期末の高杯で、南島原市口之津（くちのつ）貝塚の弥生式土器の報告をおこなった松藤和人が凹部を削ることによって突帯的な効果をもたせたという資料である（松藤・古田ほか 1975）。なお、松藤は、高杯でなく脚台付鉢と報告している。２は、雲仙市佃（つくだ）遺跡で出土した甕棺墓（図３－１）の上ガメに使用した筆者が杯部に「見かけ３条突帯」をめぐらす「高杯Ｂ」としている資料で、弥生後期初頭（後期Ⅰ）の資料である。３は図３－２の今福Ｂ地区１号カメ棺の上ガメに使用された「高杯Ｂ」であり、弥生後期前葉（後期Ⅱ）の同段階と推定する今福Ｂ地区３号カメ棺墓（図３－３）を「今福型壺」７としてあげた。弥生後期中葉（後期Ⅲ）では、今福Ｃ地区１号カ

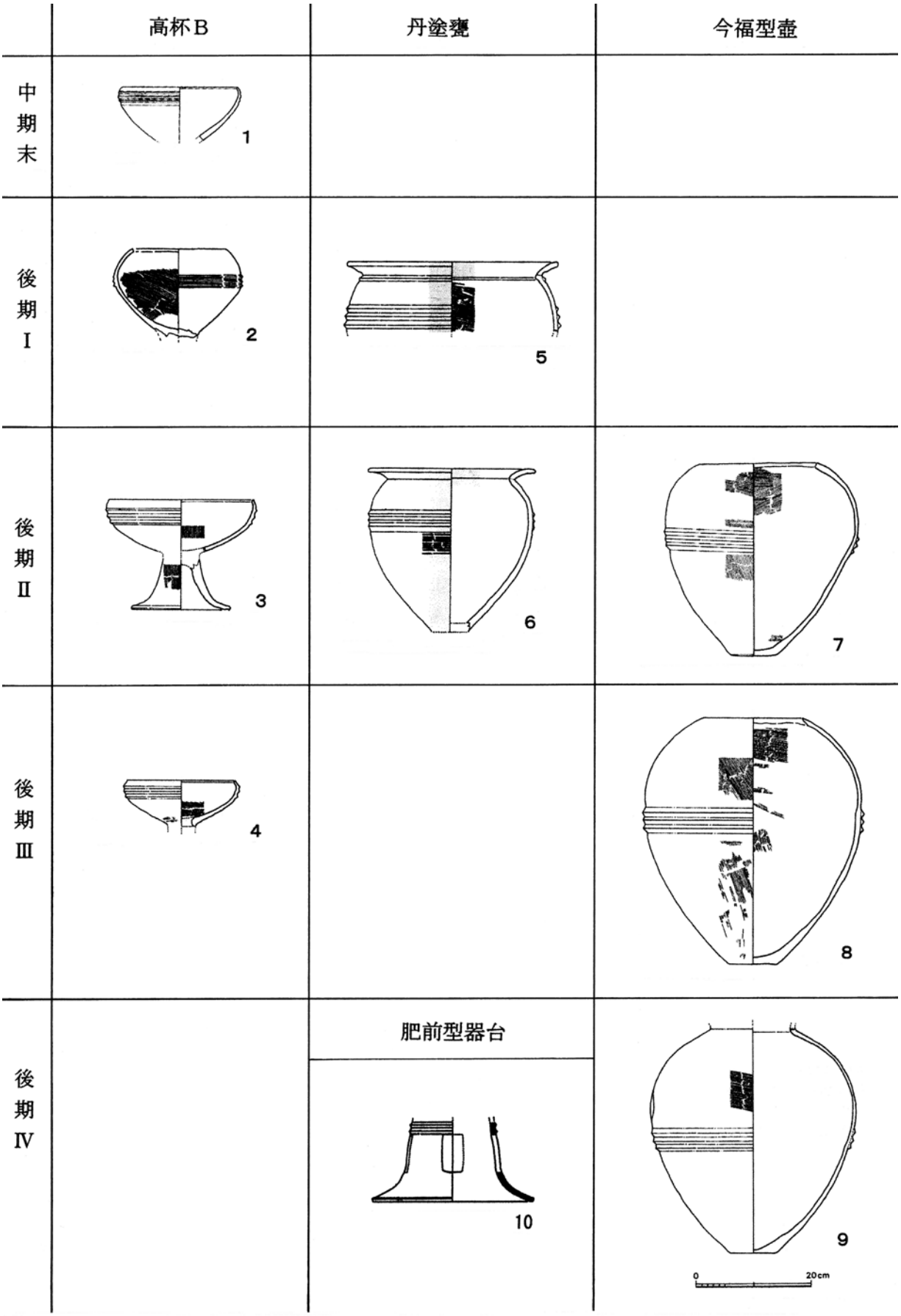



図２　「見かけ３条突帯」と「今福型壺」（１／10）

１口之津貝塚、２佃87区ＳＢ１カメ棺、３今福Ｂ区１号カメ棺、４・８今福Ｂ区３号カメ棺、５・６・10今福Ａ区土器溜、７今福Ｃ区２号カメ棺、９今福Ｂ区３号溝Ⅱ・Ⅲ層

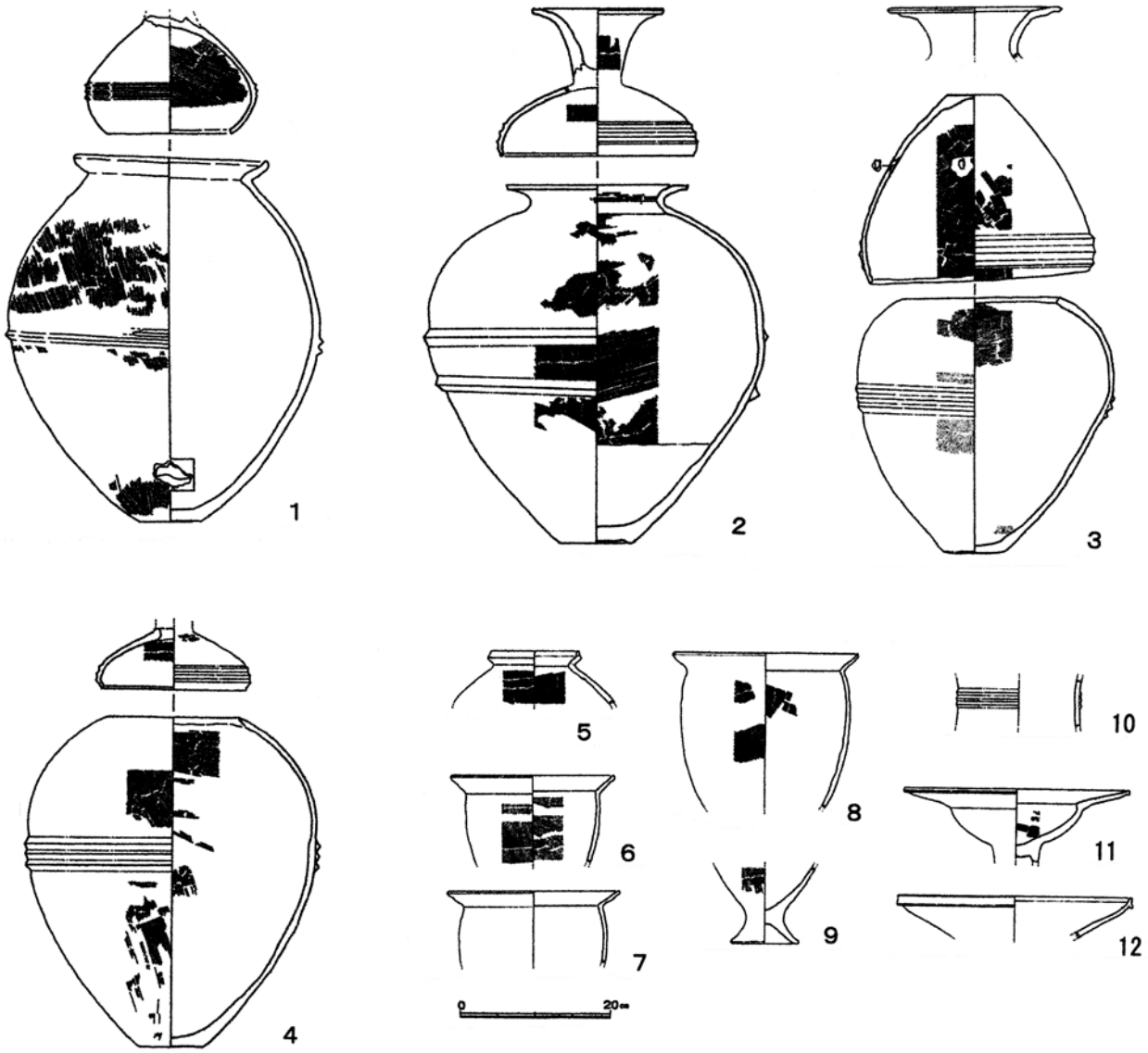



図３　「今福型壺」と関連する土器（１／10）

１佃 87 区ＳＢ１甕棺、２今福Ｂ区１号カメ棺、３今福Ｃ区２号カメ棺、４今福Ｂ区３号カメ棺、５～ 12 今福Ｂ区３号溝Ⅱ・Ⅲ層

メ棺墓（図３－４）の「高杯Ｂ」４と「今福型壺」８をあげた。弥生後期後葉１段階（後期Ⅳ）としたのは、今福Ｂ地区３号溝（濠）のⅡ・Ⅲ層から出土した土器（図３－５～ 12）に伴った「今福型壺」９をあげた。９は、Ⅱ層とⅠ層で接合関係が認められたので、報告書ではⅠ層の出土品として扱ったが、Ⅱ層に廃棄されていた資料が、Ⅰ層に廃棄された土器によって攪乱されたものと理解してⅡ層出土品として修正しておきたい。Ⅱ・Ⅲ層では、「見かけ３条突帯」の「肥前型器台」（図３－ 10）が共伴しており、この段階に「肥前型器台」のなかで最も古いと位置づけられる資料 10 が伴うと推定している（宮﨑 2022）。「今福型壺」は、後期Ⅱ期（後期前葉）から後期Ⅳ期（後期後葉１段階）まで確認されており、器形は肩が張った胴部から倒卵形へと変化している。

「見かけ３条突帯」の壺の胴部破片は、口之津貝塚などで出土しているが、全体的な形状が判明しないので、「今福型壺」であるのか判断できないが、「今福型壺」は現在のところ今福遺跡を中心とする島原半島南部地域に分布する在地系壺としておきたい（図 1）。

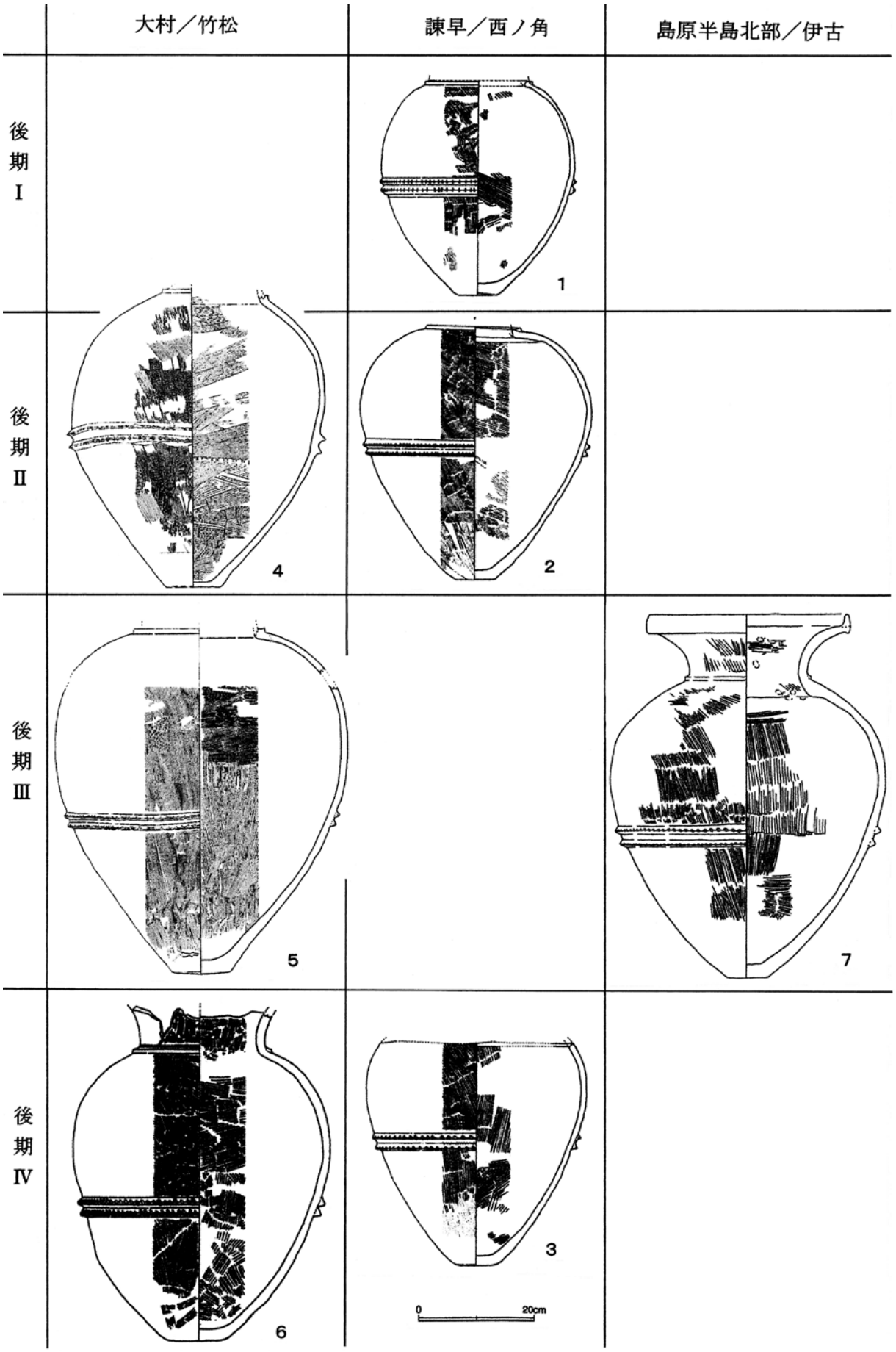



図４　「西ノ角型壺」（1／10）

１西ノ角３号カメ棺、２西ノ角１号カメ棺、３西ノ角２号カメ棺、４「竹松Ⅳ」ＳＴ３、５「竹松Ⅲ」ＳＴ38、６「竹松Ⅲ」ＳＴ35、７伊古

（２）「西ノ角型壺」について（図４・８）

西ノ角遺跡は、諫早市森山町に所在し、諫早湾の旧海岸線から２㌔、橘湾から１㌔ほど内側にある井牟田盆地に南面する標高 70 ㍍前後の緩やかな丘陵傾斜面に立地する。西ノ角遺跡から４㌔ほど東側には、島原半島の付け根にあたる愛津地峡を挟んで雲仙市愛野町火箱遺跡がある。1983 年に実施さた発掘調査では、竪穴住居跡１棟、土坑１基、溝、小児カメ棺墓３基などの遺構が検出され、遺跡が弥生時代中期から古墳時代初頭前後の集落遺跡であることが判明した（高野編 1985）。

西ノ角遺跡の壺として取り上げるのは、３基のカメ棺である。図４の１は１号カメ棺である。口頸部を打ち欠いた壺で、墓壙から高杯脚部片が出土してところから、これを蓋として使用した可能性が高い。壺の胴部は肩が丸く張りをもちずんぐりした形状の倒卵形をなす。頸胴界に１条の三角突帯、胴中位に刻目を施した２条の三角突帯を巡らす。底部は平底である。高杯は、「高杯Ｂ」の脚部片と推測される（図７－１）。後期Ⅰ期（後期初頭）に位置づけた。２は２号カメ棺である。倒卵形の胴部は攪乱によって斜め半分を欠失しているが、体上部で打ち欠かれた可能性をもつ。胴部に２条の刻目突帯を巡らす。底部は少し丸みをもつ平底である。後期Ⅱ期（後期前葉）に位置づけた。３は３号カメ棺である。口頸部を打ち欠いた倒卵形の胴部であるが、前の二者に比較すると全体的に丸みをもち、底部が少し上げ底になっている。調査報告書では、形態的な特徴から３号カメ棺（弥生後期初頭）→１号カメ棺（弥生後期前半の後葉）→２号カメ棺（弥生後期後葉）として「西ノ角型壺」の型式変遷を捉えていたが、そののち雲仙市伊古遺跡の資料７と大村市竹松遺跡の資料４～６が追加されたので、３の西ノ角２号カメ棺は後期Ⅳ期（後期後葉１段階）に位置づけたい。

雲仙市伊古遺跡は、雲仙普賢岳から緩やかに伸びる標高 14 ㍍～ 20 ㍍の火山麓扇状地に立地する。調査は圃場整備事業に伴って 2005 年から 2008 年に実施され、旧西郷川の河道跡などが確認されたが、Ｄ６区外側から弥生中期後半～弥生後期後半期の出土資料のなかに当該資料がある（辻田・村子編 2017）。７は短く内湾した複合口縁をもつ壺で、肩が張った倒卵形の胴部には２条の刻目突帯を巡らし、頸部と胴部の境界に三角突帯１条をめぐらす。底部は小さめの平底である。この伊古遺跡出土資料によって、「西ノ角型壺」の全体的な形状が判明した。後期Ⅲ期（後期中葉）に位置づけたい。

竹松遺跡は、長崎新幹線建設に伴って調査が実施され、小児カメ棺墓として出土した「西ノ角型壺」が３個体出土している（古門編 2018、中川編 2019）。竹松遺跡の遺構名が長いので、「報告書」遺構名と略する。４～６ともに、頸胴界に三角突帯１条、肩部に張りをもつ胴部に２条の刻目突帯を巡らす壺で、いずれも頸部から上部を打ち欠いている。「竹松Ⅲ」ＳＴ 35 の６は台付甕を上ガメと組み合わさったカメ棺で、台付甕の形状から後期Ⅳ期（後期後葉１段階）に位置づけられる。「竹松Ⅳ」ＳＴ３の４を後期Ⅱ期（後期前葉）、「竹松Ⅲ」ＳＴ 38 の５を後期Ⅲ期とする。

「西ノ角型壺」は、後期Ⅰ期（後期初頭）から後期Ⅳ期（後期後葉１段階）に、島原半島北部地域と諫早市西ノ角遺跡と大村市竹松遺跡で出土している。竹松遺跡では、後述する「竹松型壺」が併行する時期に存在するので、「西ノ角型壺」は諫早から島原半島北部のエリアに分布する在地系壺と推測したい（図 1）。竹松遺跡の「西ノ角型壺」は、島原半島北部から小栗遺跡群などが所在する諫早地峡の「船越」を経由して、何らかの品物を収納された容器（コンテナ）として搬入された可能性がある。

（３）「富の原型壺」について（図５・６・７）

富の原遺跡は、郡川によって形成された標高５㍍前後の緩やかに傾斜する扇状地に立地する。遺跡は 1980 年に甕棺が発見されたことで、1981 年から 1986 年まで範囲確認調査が実施され、1987 年に調査報告書が刊行されている（稲富・橋本編 1987）。遺跡は、弥生時代中期中頃～中期後葉期の環濠と住居跡、弥生中期前葉～後期前葉期の箱式石棺墓を主体とした墓域が確認されている。小児カメ棺とし

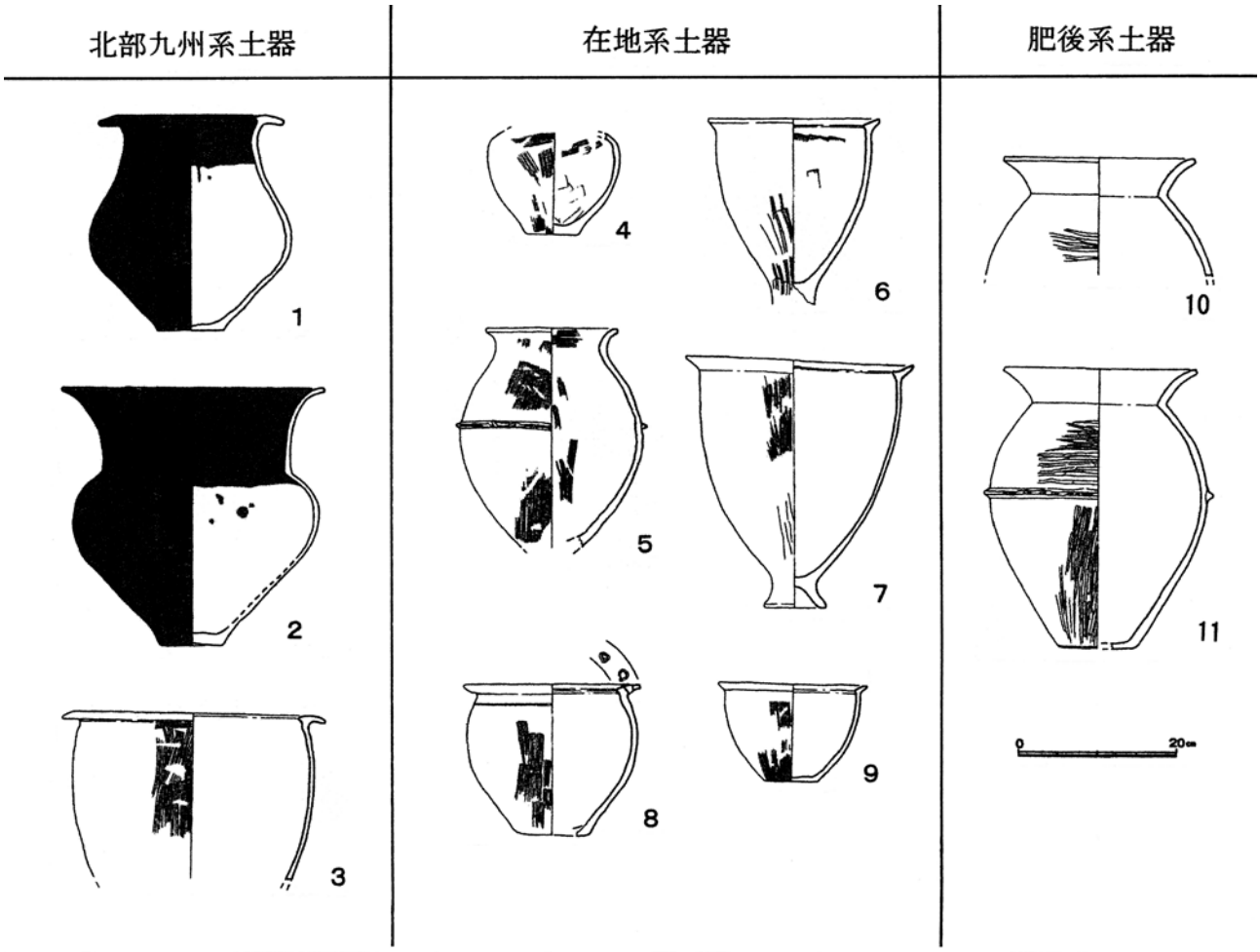



図５　富の原遺跡環濠出土土器（1／10）

て使用された「富の原型壺」の出現を見る上で参考になるのが、弥生中期後葉に環濠を埋める際に一括廃棄された環濠出土資料である（図５・大野編 2005）。一括出土土器は、北部九州系土器（１～３）、在地系土器（４～９）、肥後系土器（10・11）に区分される。１・２は鋤先形口縁と広口の丹塗壺、３は鋤先形口縁の甕で、須玖Ⅱ式古段階の資料である。10・11 は朝顔形に外湾する単口縁の広口壺で、長めの胴中位に一条の刻目突帯を巡らす。この資料は、熊本県白川流域の菊池郡菊陽町の梅ノ木（うめのき）遺跡（亀田他編 2001）などにみられる弥生中期の肥後系壺で、白川流域の遺跡から富の原遺跡に搬入された資料と推測される。在地系土器には、小形壺（４）、外湾する単口縁の広口壺（５）、台付甕（６・７）、鉢（８・９）があり、器種的には高杯を欠いているが、在地系甕・壺・鉢に北部九州系丹塗土器を補完した構成であろう。このような「補完型」の土器様式構成は、雲仙市十園（じゅうぞの）遺跡４区ＳＢ２住居跡（竹中編 2005）においても認められる。壺（５）は、頸胴界の区分をもたない胴部に１条の刻目突帯をもっているが、肥後系壺（11）をモデルとして地元で製作されたことが推測され、この壺（５）がモデルとなって「富の原型壺」が創出され、墓域において小児棺として転用されることになったと考えられる。

図６では、富の原遺跡のＡ地点とＢ地点の墓域で出土した６基のカメ棺を掲載したが、とくにＡ地点７号カメ棺（３）、Ａ地点８号カメ棺（４）、Ｂ地点 18 号カメ棺（６）を取り上げ、上ガメに使われた台付甕と形態との変化から変遷を捉えたのが図７である。図７では、中期末がＡ地点７号甕棺（１）、後期Ⅰ期（後期初頭）がＡ地点８号カメ棺（２）、後期Ⅱ期（後期前葉）がＢ地点 18 号カメ棺（３）

として変遷を捉えた。竹松遺跡の調査によって、カメ棺として「竹松Ⅳ」２・３区ＳＴ１資料（４）を加えることができた（中川他編 2019）。この４を後期Ⅲ期（後期中葉）の「富の原型壺」の最終形態として理解しておきたい。

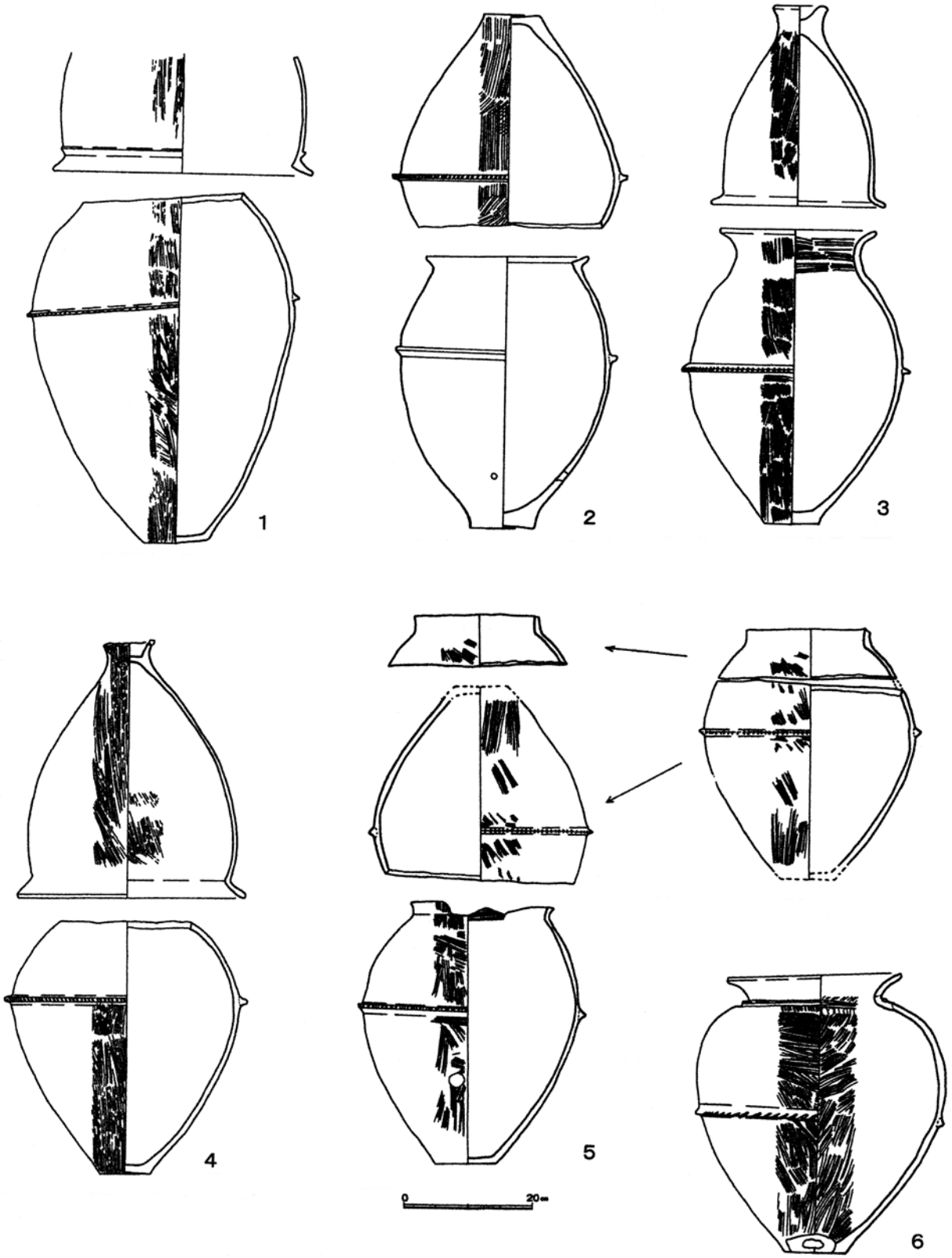



図６　富の原遺跡の「富の原型壺」関係カメ棺（１／10）

１Ａ地点 10 号カメ棺、２Ａ地点５号カメ棺、３Ａ地点７号カメ棺、４Ａ地点８号カメ棺、５Ｂ地点 17 号カメ棺、６Ｂ地点 18 号カメ棺

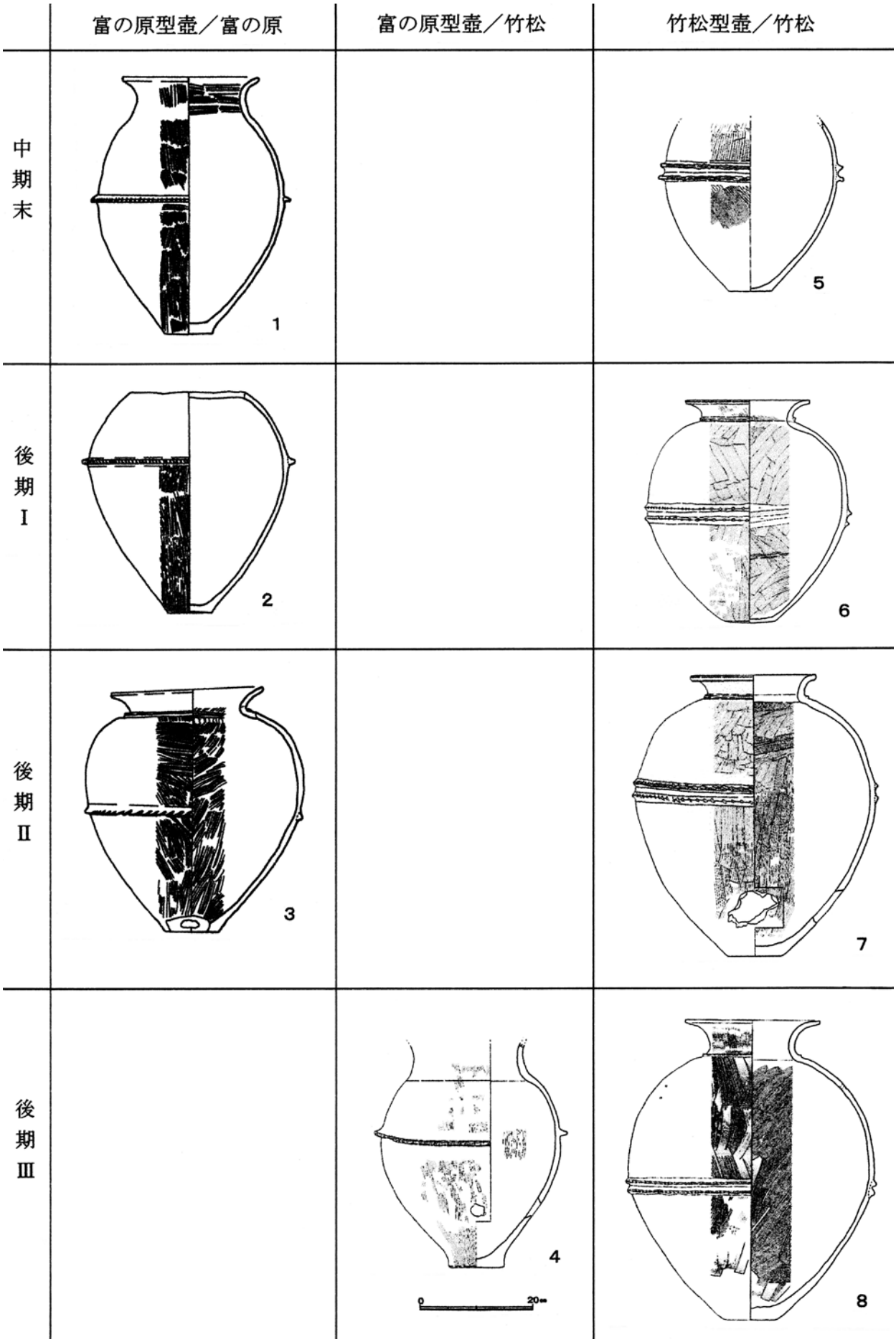



図７　「富の原型壺」と「竹松型壺」（１／10）

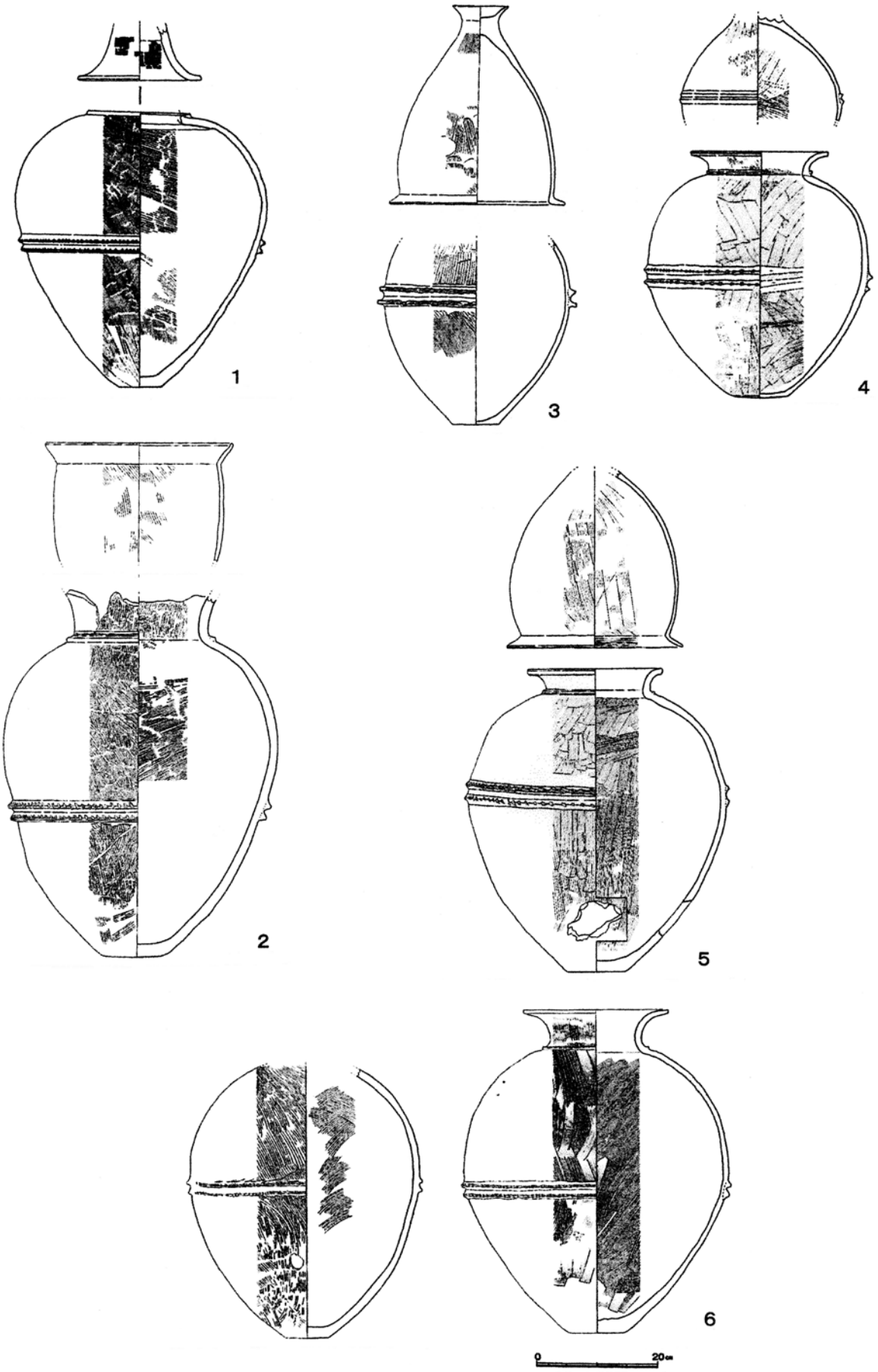



図８　「西ノ角型壺」(1、2) と「竹松型壺」(3 ～ 6) のカメ棺（１／10）

１西ノ角１号カメ棺、２「竹松Ⅲ」ＳＴ35、３「竹松Ⅳ」竹松２区ＳＴ２、４「竹松Ⅳ」３区ＳＴ３、５「竹松Ⅴ」２区ＳＴ１、６「竹松Ⅲ」Ｂ区ＳＴ１

「富の原型壺」は、大村市富の原遺跡で中期末から後期Ⅱ期（後期前葉）まで存続し、竹松遺跡で後期Ⅲ期（後期中葉）の資料を最終形態した在地系壺で、大村平野をエリアとして捉えたい（図 1)。

（４）「竹松型壺」について（図７・８）

竹松遺跡は、郡川下流域の標高 10㍍前後の扇状地に立地する。西九州新幹線関係の発掘調査によって、縄文時代晩期から古墳時代にかけての集落遺跡で、古代においても豪族関係の建物施設が検出されている。ここでは、「竹松型壺」として設定する在地系壺について記したい。

球形状の胴部をもち朝顔形に開く広口壺は、弥生式土器の壺としてポピュラーな形態である。球状胴部に１条の刻目突帯をもつ壺は、熊本県白川流域の熊本市山尻（やまじり）遺跡で見られる（原田 1999）が、「竹松型壺」のような球状胴部に２条の刻目突帯をもつ資料は他地域で見ることがなく、竹松遺跡独特な型式として「竹松型壺」を設定したい。図８の３～６は、竹松遺跡から出土した「竹松型壺」の台付甕や壺との組合せがわかる資料である。図７は、上ガメの台付甕や壺自体の形態から、「竹松型壺」の変遷を捉えたものである。中期末は「竹松Ⅳ」（中川編 2019）２区ＳＴ２（５)、後期Ⅰ期（後期初頭）は「竹松Ｖ」（杉原編 2020）３区ＳＴ３（６)、後期Ⅱ期（後期前葉）は「竹松Ｖ」２区ＳＴ１（７)、後期Ⅲ区（後期中葉）は「竹松Ⅲ」（古門編 2018）Ｂ区ＳＴ１（８）である。

「竹松型壺」は、中期末から後期Ⅲ期（後期中葉）に大村市竹松遺跡で出土が確認される在地系壺で、大村平野の「富の原型壺」と併行して存在することが判明した。このことは、交流拠点として成立した富の原遺跡と在地の集落である竹松遺跡との遺跡の性格の違いが表現されていることがうかがえるが、後期中葉以降には富の原遺跡が衰退することによって、大村平野の中心的位置が竹松遺跡に移っていったことが推測される。「富の原型壺」と「竹松型壺」は同じ大村平野をエリアとして近接した位置に関係にありながら、両者の遺跡の性格の違いが反映されたものと捉えておきたい（図 1)。

以上の「今福型壺」（後期Ⅱ期～Ⅳ期)、「西ノ角型壺」（後期Ⅰ期～Ⅳ期)、「富の原型壺」（中期末～後期Ⅲ期)、「竹松型壺」（中期末～後期Ⅲ期）の在地系壺の変遷が捉えられた。それらの在地系壺の小地域性を捉えたのが図１である。Ａ：大村平野、Ｂ：諫早から島原半島北部、Ｃ：島原半島南部の三つのエリアをおさえた。このエリアは、台付甕を共有する社会の小地域性として把握したい（図 1)。

## ２．甕棺と大甕について

今福遺跡では、「く」の字形に外反する口縁をもつ平底の大形甕が多く出土しており、北部九州系の大甕として報告していた。2012 年の肥後考古学会と長崎県考古学会の合同大会では、主要な発表の付録のような資料として「今福遺跡にみる交流資料」の小文を掲載した（宮﨑 2012)。ここでは、今福遺跡で多く出土している北部九州系の「大甕」に注目して、「大甕」の用途として穀物などの運搬の運搬具（コンテナ）であったことを推定し、佐賀・筑後地域から大甕に収納した穀物を、今福遺跡などの島原半島の住民が輸送に当たることで、今福遺跡などに大甕がもたらされたことを指摘した（宮﨑 2012)。さらに、2019 年の「環有明海とその周辺をめぐる交流と変動」のなかでは、有明海沿岸平野部の大集落で希求されていた「鉄」の対価物として、佐賀・筑後地域から「大甕」に収納された「米」を船に積み、島原半島の人々がその輸送に携わっていたことで、弥生後期になると今福遺跡が拠点集落に発展する要因になったとまとめた（宮﨑 2019)。

（１）甕棺と貯蔵用大甕の分類（図９）

橋口達也は、器高 80㌢以上の大形棺を成人用埋葬甕棺として、それ以下は小形棺として区別している（橋口 2005)。小郡市教育委員会の速水進哉は横隈狐塚（よこくまきつねづか）遺跡の報告書のなかで、大形棺。中形棺、小形棺の区分している（速水 1985)。図 9 は、速水の甕棺変遷図から作成したもので、甕棺には形態から

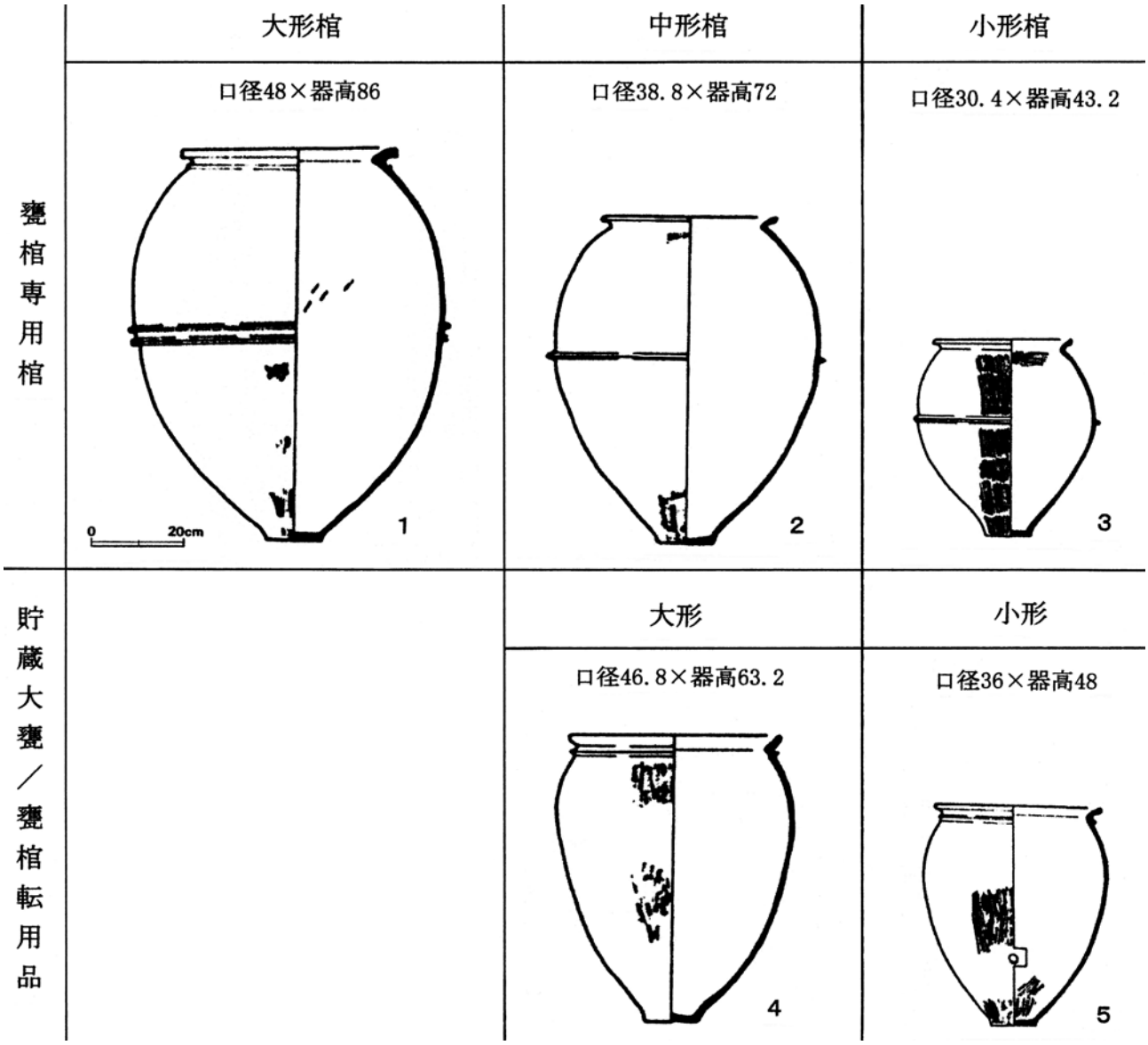



図９　甕棺と貯蔵大甕の分類（1／16・速水 1985 より作図）

見ると体中位に突帯をもつ大形棺１と中形棺２だけでなく、同様に胴部に突帯をもつ器形の器高 60 ｾﾝﾁ以下の小形棺３があり、筆者は胴部に突帯をもつ甕棺形をなしていることから、これも甕棺専用棺であったと推論する。すなわち甕棺専用棺は、大形棺を成人用、中形棺と小形棺を幼児・小児用として製作されていたものと考えたい。

この他に大形の甕形のものがある。これは、北部九州地域に一般的な平底の煮炊き甕を拡大した大甕であり、横隈狐塚遺跡では大形４と小形５のサイズが見られる。これは、もともと甕棺専用として製作されたものでなく、機能的には貯蔵用の大甕であったものをカメ棺墓として転用したものと推察する。この貯蔵用大甕は､筑後川流域の佐賀県から福岡県一帯で製作されていることから「筑紫系大甕」と呼称したい。西北九州地域の壺棺と同様に、横隈狐塚遺跡では貯蔵用大甕がカメ棺に転用されていると理解しておきたい。なお筆者は、小児用の土器棺として転用された貯蔵用大甕、煮炊き用甕、壺棺を含めて「カメ棺」と呼んでいる。

## ３．長崎県本土地域の弥生中期末～後期の甕棺墓

（１）長崎県本土地域の弥生中期末～後期の甕棺墓（図 10・11 ～ 14）

図 10 は、長崎県本土地域において弥生中期末～後期Ⅵ期の甕棺出土遺跡をドットで落としたもので、現在 14 ヵ所があげられる。参考のため、小郡市横隈狐塚遺跡 14 の位置を落としている。

図 11 ～ 14 は、長崎県本土地域の弥生中期末から後期甕棺の変遷図である。甕棺の編年については、橋口達也が甕棺の編年などを 2005 年にまとめた『甕棺と弥生時代年代論』（雄山閣）と、蒲原宏行が 2009 年に橋口編年のＫⅢｃ式からＫⅣｃ式までの甕棺の変遷を検討した「桜馬場『宝器内蔵甕棺』の相対年代」『地域の考古学』を参考にして編年案を組み立てたものである（橋口 2005、蒲原 2009）。

図 11 は、弥生中期末段階の橋口編年のＫⅢｃ式に相当する甕棺である。１は富の原遺跡Ｂ地点 16 号甕棺墓で、下ガメは口縁部から上、上ガメは胴部上部から上を打ち欠いて合口式甕棺としてもので、さらに上ガメの打ち欠いた体上部を上甕に重ねた、三重棺といえる甕棺である（稲富・橋本編 1987）。右上に復元された甕棺を図示しているが、器高は 78 ㌢で、大形棺としておきたい。大形棺の合口式甕棺墓で、鉄戈が副葬されていたことから弥生中期末段階の族長クラスの墓と推測できる。２は、諫早市小栗（おぐり）Ａ遺跡で出土した丹塗壺を上カメにもつ器高 56 ㌢の小形棺の甕棺墓である（秀島編 1983）。である。３は、雲仙市伊古（いこ）遺跡Ｆ区３号甕棺墓である。台付甕を下ガメに、上ガメに器高 52 ㌢小形棺を

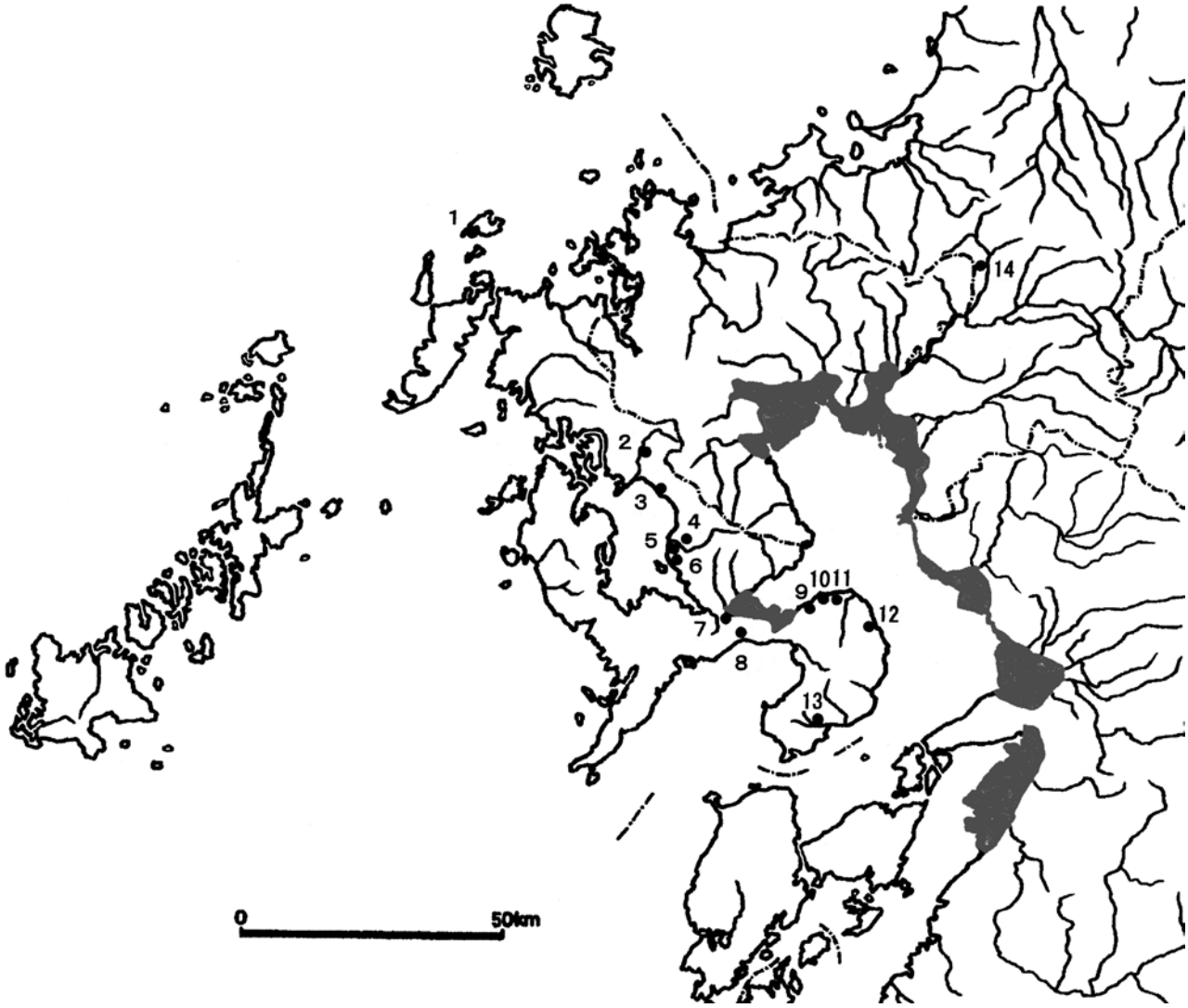



図 10　長崎県本土地域の弥生中期末～後期の甕棺出土地（14 は横隈狐塚遺跡）

１長畑馬場、２麻生瀬、３白井川、４岩名、５竹松、６富の原、７小栗、９陣ノ内、10 伊古、11 佃、12 景華園、13 今福

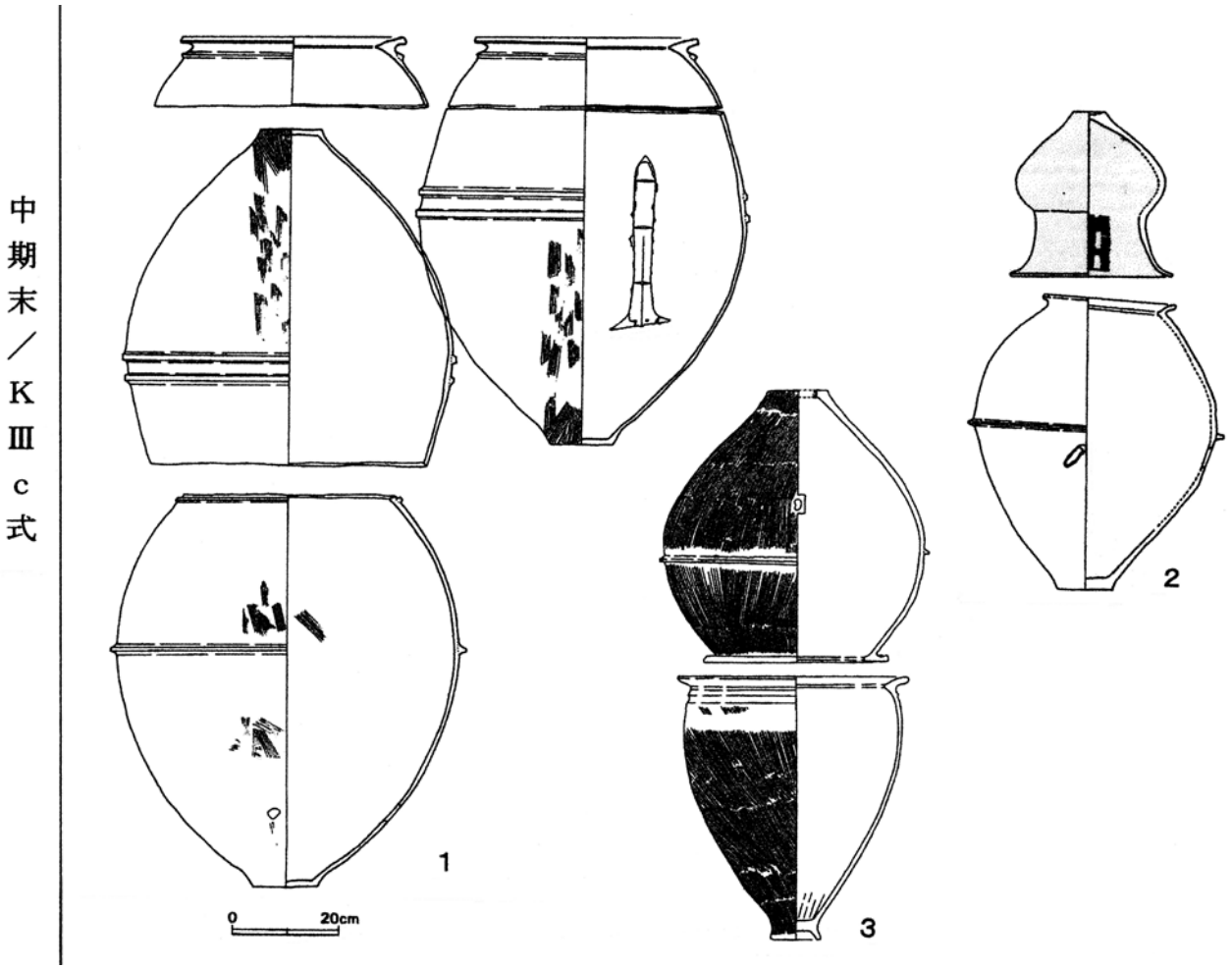



図 11　弥生中期末の甕棺墓（1／16）

甕棺番号対象：１富の原Ｂ地点 16 号甕棺、２小栗Ａ甕棺、３伊古Ｆ区３号甕棺、４富の原Ａ地点２号甕棺、５富の原Ｂ地点 20 号甕棺、６富の原Ｂ地点 23 号甕棺、７富の原Ａ地点６号甕棺、８麻生瀬１号甕棺、９「竹松Ⅳ」３区ＳＴ６、10 伊古Ｊ区甕棺、11 佃 87 区ＳＢ１住居跡甕棺、12 佃 31 区１号甕棺、13 景華園甕棺、14 富の原Ａ地点４号甕棺、15 白井川甕棺、16「竹松Ⅳ」２区ＳＴ２、17「竹松Ⅴ」３区ＳＴ２、18 有喜上原３号甕棺、19 今福Ｂ地区２号甕棺、20 岩名甕棺、21 長畑馬場ＳＴ９、22 有喜上原２号甕棺、23 今福Ｃ地区１号甕棺、24「竹松Ⅲ」ＳＴ 36、25 陣ノ内甕棺、26「竹松Ⅲ」ＳＴ 37、27 一本木１号甕棺

被せた合口式甕棺墓である（辻田・村子他編 2010）。

図 12 は、後期Ⅰ期（後期初頭）の甕棺で、橋口編年のＫⅣａ式段階の甕棺である。４は、富の原遺跡Ａ地点２号甕棺墓である（稲富・橋本編 1987）。体上部から上を打ち欠いた甕棺を上ガメにし、口縁が「く」の字形に外湾し倒卵形胴部の甕棺を下ガメにした合口式甕棺である。下ガメの器高は 78 ㌢の大形棺である。大形棺の合口式甕棺で、鉄戈が副葬されていたことから族長クラスの墓と推測できる。５は富の原遺Ｂ地点 20 号甕棺墓である（稲富・橋本編 1987）。口縁が「く」の字形に外反した倒卵形胴部の甕棺を下ガメにして、胴下半から上部を打ち欠いた大形棺を二つ被せる三重式甕棺である。下ガメに器高 88 ㌢の大形棺を使っており、鉄剣が副葬されていることから、これも族長クラスの墓と推測できる。この甕棺からは、熟年男性と女性との３体分の人骨片が確認されており、男性は縄文人的な形質をもっている所見がだされている（松下・分部・中谷 1987）。このことから、１体だけ埋葬される北部九州地域の甕棺では考えられない「追葬」がおこなわれていたことが想定できる。長崎県本土・五島地域では、箱式石棺墓に追葬した例が認められることから、それを甕棺葬にも応用したことになる。この甕棺が三重式甕棺であることによって、他地域で確認されている三重式甕棺において「追葬」を

後期Ⅰ／KⅣa式

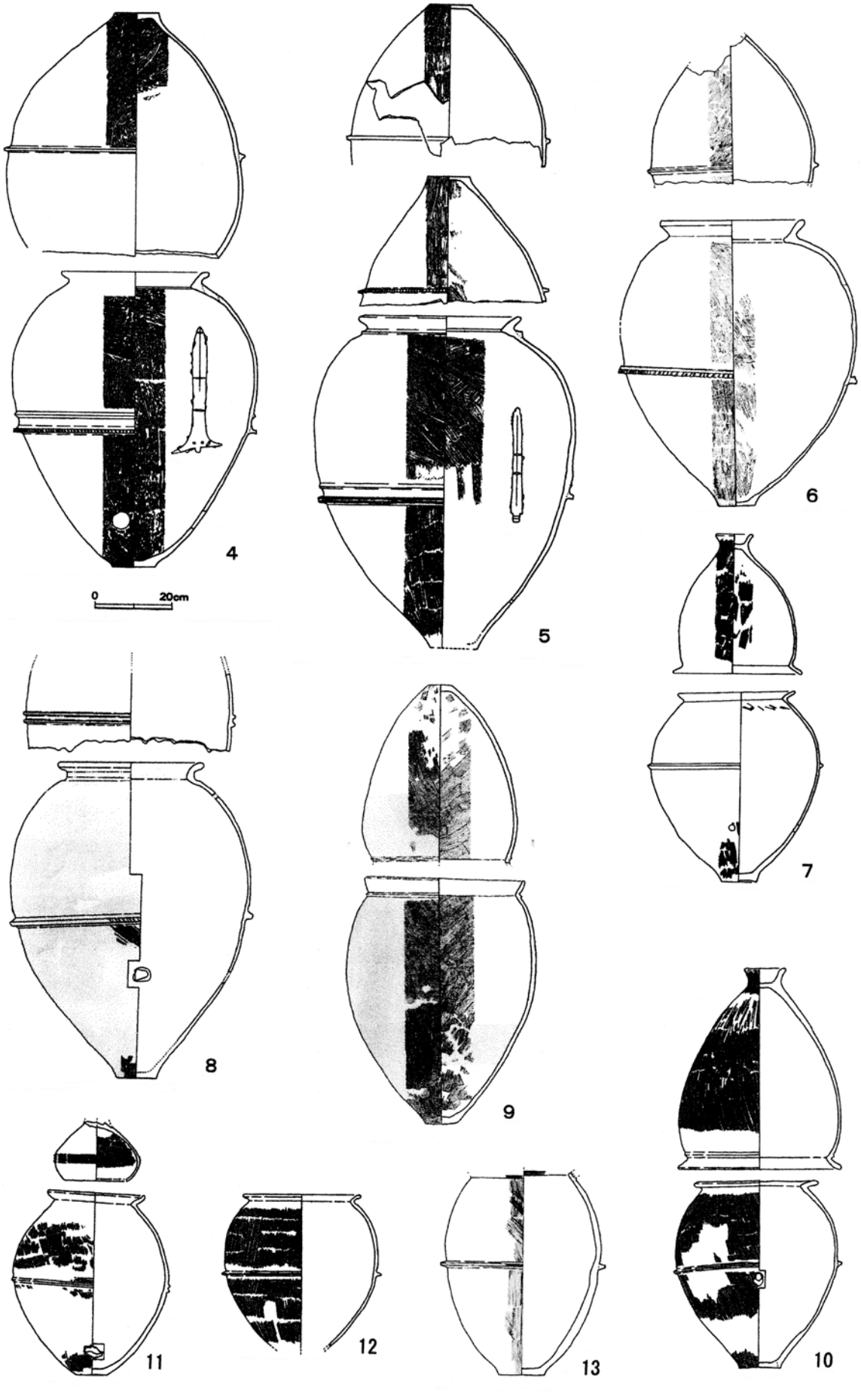



図12　後期Ⅰ期の甕棺墓（1／16）

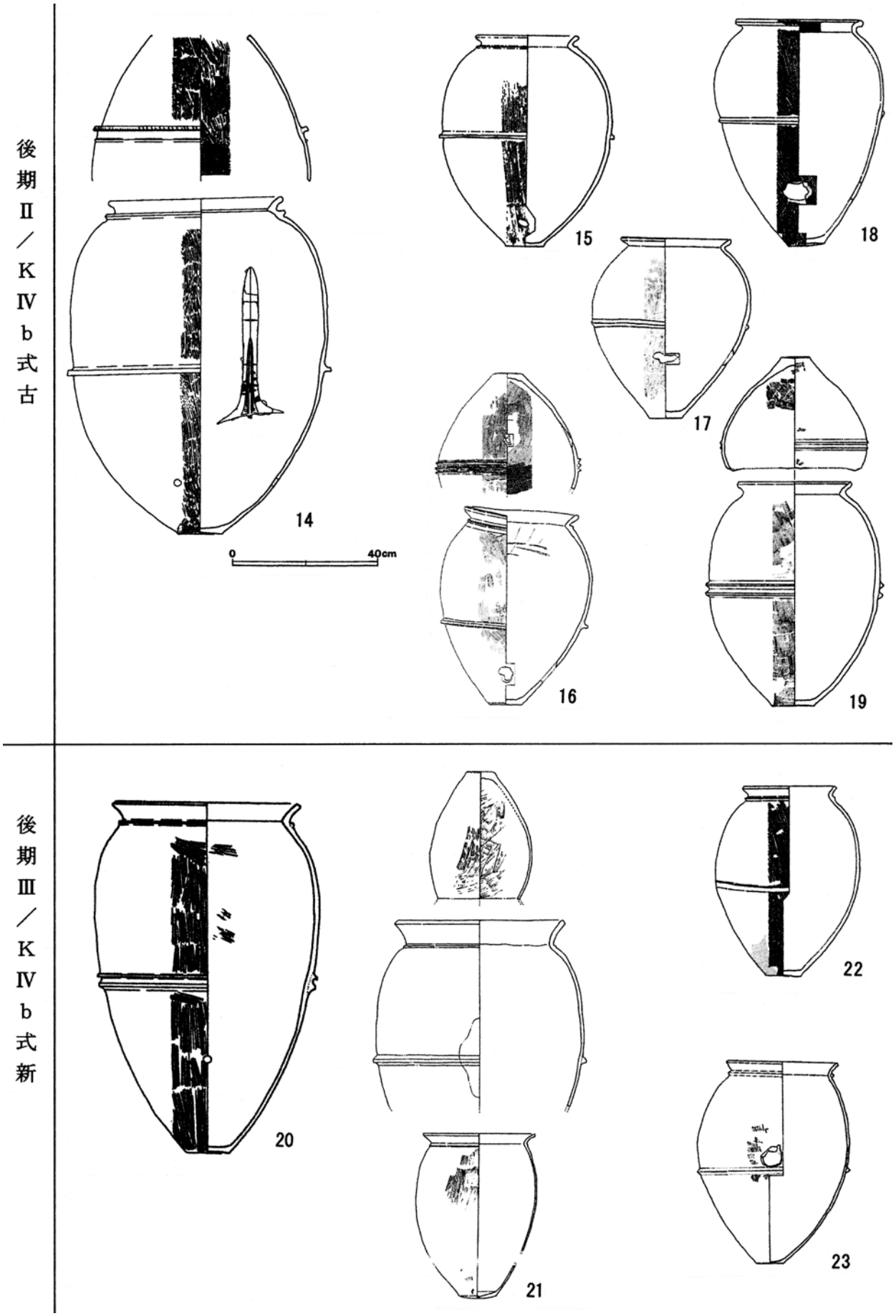



図 13　後期Ⅱ・Ⅲ期の甕棺墓（1／16）

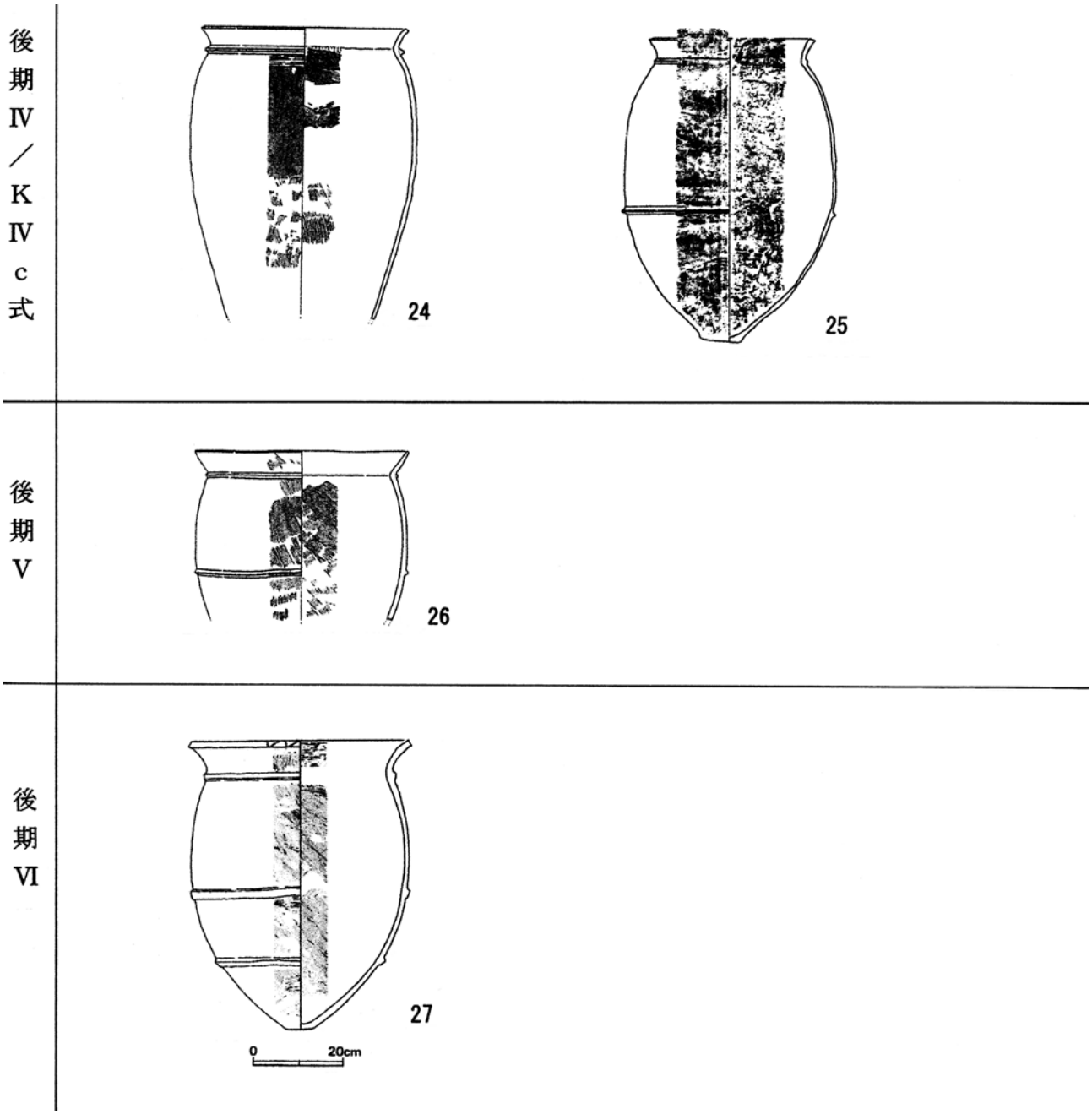



図 14　後期Ⅳ期～Ⅵ期の甕棺墓（１／16）

想定することができるようになった。後期初頭段階の富の原遺跡では、Ａ地点２号甕棺とＢ地点 20 号甕棺の族長クラスの墓があったことになる。短い期間で族長を交代した可能性と片方は族長を支える邑長であった可能性などが推測されよう。６は、富の原遺跡Ｂ地点 23 号甕棺墓である。体上半を欠出した甕棺を上ガメにして、器高 66 ㌢の中形棺を下ガメにした合口式甕棺である（大野・村井編 1995)。７は、富の原遺跡Ａ地点６号甕棺墓である。上ガメに台付甕を、下ガメに器高 50 ㌢の小形棺を組み合わせた合口式甕棺墓である。８は、川棚町麻生瀬（あそうぜ）遺跡の１号甕棺墓である（村川編 2010)。体上部から上を打ち欠いた甕棺を上ガメに、下ガメに「く」字形口縁部が外反し倒卵形胴部をもつ器高 84 ㌢の大形棺の合口式甕棺墓である。邑長クラスの墓であろうか。９は、竹松遺跡３区の「竹松Ⅳ」ＳＴ６で、上ガメに口縁を打ち欠いた大甕、下ガメに「く」字形に外反する倒卵形胴部をもつ器高 65 ㌢の「筑紫系大甕」の大形品を合口式カメ棺墓にしたものである。(中川編 2019)。10 は、雲仙市伊古（いこ）遺跡Ｊ区甕

棺墓である。上ガメに台付甕を、下ガメに器高 50 ㌢の小形棺を組み合わせた合口式甕棺墓である（辻田・村子他編 2010）。11 は、雲仙市佃遺跡 87 区ＳＢ１住居跡から出土した甕棺墓である（村子編 2013）。上ガメに「高杯Ｂ」の杯部を被せ、下ガメに器高 48 ㌢の小形棺を用いた合口式甕棺墓である 12 は佃遺跡 31 区１号甕棺で小形棺の単式甕棺墓である（村子編 2013）。13 は、島原市景華園遺跡の口縁部を欠失する器高 61 ㌢以上の中形棺の甕棺墓である（小田・上田 2004）。富の原遺跡には、この時期と推定されるＡ地点９号甕棺墓、Ｂ地点 19 号甕棺墓の大形棺の合口式甕棺墓がある。19 号甕棺墓からは、壮年女性の人骨が出土しており、20 号甕棺墓人骨と同様に縄文人的な形質をもつことが報告されている（松下・分部・中谷 1987）。島原半島北東部にある景華園遺跡は、甕棺墓に細型銅剣が副葬され、中細形銅矛２本青銅利器が集中して出土しており、弥生中期前半から後半頃まで優勢を誇っていたが弥生後期になると衰退する。一方で、富の原遺跡には、弥生中期末から鉄製武器などが大形甕棺墓に副葬されるようになっており、それには交易機構の変革などの要因によって大村湾の重要性が高まったことが影響していることが想定される。

図 13 は、後期Ⅱ期（後期前葉）と後期Ⅲ期（後期中葉）の甕棺墓である。後期Ⅱ期とⅢ期の甕棺墓は、蒲原宏行によって橋口編年のＫⅣｂ式が古相と新相に細分されているので、その分類にしたがって後期Ⅱ期と後期Ⅲ期に区分した。14 ～ 19 は、後期Ⅱ期の甕棺墓である。12 は、上ガメに体上部を打ち欠いた甕棺を被せ、下ガメに「く」字形に外反する口縁部で肩の張った倒卵形胴部をもつ器高 94 ㌢の大形棺を組み合わせた合口式甕棺墓である（稲富・橋本編 1987）。鉄戈が副葬されているおり、後期前葉段階の部族長クラスの墓と推測される。富の原遺跡はこの段階をもって衰退し、弥生後期中葉以降には墓域がなくなるようである。15 は、東彼杵町の白井川遺跡の器高 64 ㌢の丸みを帯びた倒卵形をなす中形棺の単式甕棺墓である（安楽編 1990）。16 は、竹松遺跡「竹松Ⅳ」２区ＳＴ２で上ガメに体上半を打ち欠いた甕棺を被せ、下ガメに口縁が「く」の字形に外反する倒卵形胴部をもつ器高 54 ㌢の小形棺をもちいた合口式甕棺墓である（中川編 2019）。17 は、竹松遺跡「竹松Ｖ」３区ＳＴ２で、口縁が「く」字形に外反してずんぐりした倒卵形胴部をもつ器高 50 ㌢の小形棺の単式甕棺墓である（杉原編 2020）。18 は、諫早市有喜上原遺跡の３号甕棺墓である（秀島・川瀬編 2007）。「く」の字形に外湾した口縁で肩の張った倒卵形胴部をもつ器高 64 ㌢の中形棺の単式甕棺墓である。19 は、今福遺跡Ｂ地区２号甕棺墓である（宮﨑編 1985）。上ガメに胴部に２条突帯をもつ壺胴部を被せ、下ガメに「く」字形に外反し倒卵形胴部の器高 64 ㌢の中形棺を用いた合口式甕棺墓である。

20 ～ 23 は、後期Ⅲ期の甕棺墓である。20 は、大村市岩名遺跡の口縁が「く」の字形に外反して長めの倒卵形胴部をもつ器高 98 ㌢の大形棺の単式甕棺墓である（稲富 1997）。邑長クラスの墓であろう。21 は、平戸市大島村の長畑馬場遺跡ＳＴ９である（本田編 2000）。胴下部を欠失した大形棺を中ガメにして、上と下に煮炊き用甕を用いた三連式甕棺で、成人甕棺墓の可能性がある。上下の煮炊き甕は上ガメが下ガメよりやや古相の様相をもつように思われる。「追葬」時期がずれたために生じた現象であると推測される。22 は、有喜上原遺跡２号甕棺墓である。「く」の字形に外反する口縁よりも胴部が張りをもつ倒卵形胴部をもつ器高 53 ㌢の小形棺の単式甕棺墓である（秀島・川瀬編 2007）。である。23 は、今福遺跡Ｃ地区１号甕棺である。上記した有喜上原２号棺に類似した形状をもつ器高 56 ㌢の小形棺の単式甕棺墓である（町田・宮﨑編 1986）。

図 14 は、後期Ⅳ期～Ⅵ期の甕棺である。この段階になると、大村湾地域以外においても石棺墓が主体となっており、小児用の甕棺墓の数も極端に少なくなっている。24 と 25 は、後期Ⅳ期（後期後葉１段階）の甕棺である。橋口編年ではＫⅣｃ式に相当し、蒲原宏行は三津式古相に位置づけている段階である。24 は、竹松遺跡「竹松Ⅲ」ＳＴ 36 で、「く」字形に外反する口縁で長めの胴部で底部付近を欠

失する残存長 65 ㌢以上の「筑紫系大甕」の大形品の単式カメ棺墓である（古門編 2018）。25 は、雲仙市陣ノ内（じんのうち）遺跡の「く」字形に外反する口縁で倒卵形胴部をもつ器高 68 ㌢の中形棺の単式甕棺墓である（正林他編 1998）。26 は、竹松遺跡「竹松Ⅲ」ＳＴ 37 である（古門編 2018）。後期Ⅴ期（後期後葉２段階）の甕棺で、蒲原宏行の三津式新相に位置づけられ、器高残存長 39 ㌢以上の小形棺の単式甕棺墓である。27 は、後期Ⅵ期（後期末１段階）に位置づけられる五島市一本木（いっぽんぎ）遺跡１号甕棺墓（寺田編 1993）で、器高 66 ㌢の中形棺を用いた、蒲原宏行のいう福井式古相の単式甕棺墓である。五島列島は弥生時代を通して北部九州系の平底甕地域であり、玄界灘沿岸の糸島地域から搬入された甕棺であろう。

（２）長崎県本土地域の墓制からみた甕棺墓の評価（図 15）

前項で長崎県本土地域の甕棺墓を取り上げてきたが、この地域で見られる成人用甕棺は主体的な墓制ではない。甕棺墓は、概説書などで九州地方の弥生時代の代表的な墓制として語られることが多いが、じつは北部九州以外の地域においては、甕棺墓は主体的な墓制ではないのである。

図 15 は、1995 年の「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化」において、西北九州地域の墓制組成のグラフを作成した（宮﨑 1995）が、これを 2000 年の長崎県考古学会の壱岐大会で発表した「西北九州から『一支国』へ－長崎県本土部地域からの視点－」で長崎県本土地域の墳墓遺跡の分布と墓制組成のグラフを重ねて作成した図面である（宮﨑 2000）。1995 年～ 2000 年段階の資料であるため、大村市竹松遺跡などの調査成果が盛りこまれていないが、構成は基本的に変わっていない。1995 年の論稿

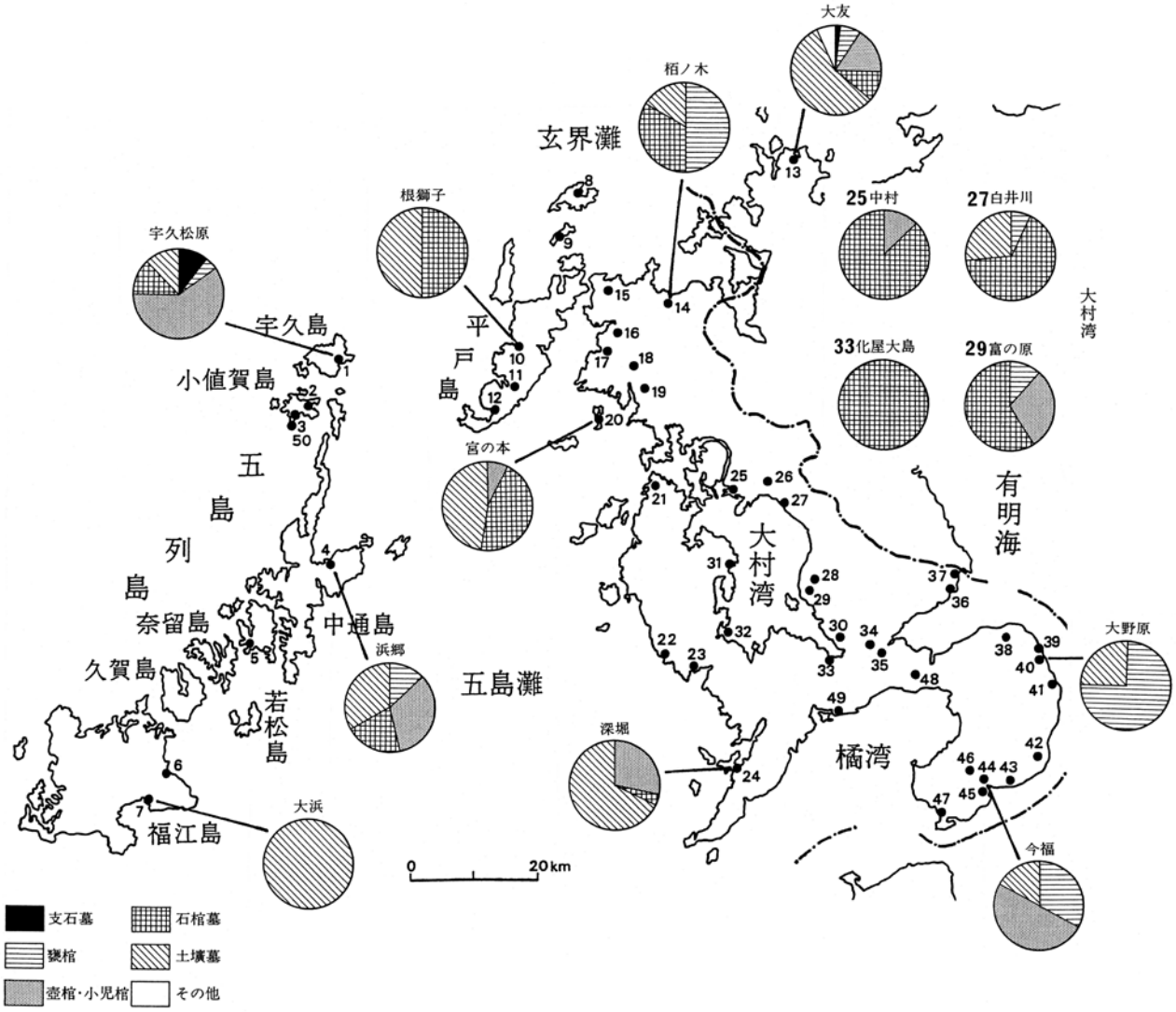



図 15　西北九州地域の弥生時代墓制（宮﨑 2000）

では、地域を区分して長崎県本土地域の墓制について評価している。五島列島（１・４・７）から五島灘（角力灘）沿岸（10・20・24）の地域は、土壙墓や石棺墓が主体で甕棺は客体的で特殊な存在である。大村沿岸（25・27・29・33）の地域は、石棺墓が主体的な墓制で、富の原遺跡などで一部甕棺が存在する。有明海沿岸（40・44）地域は、土壙墓（木棺墓）と甕棺墓が共存している。

富の原遺跡では、石棺墓が約６割を占めるのに対して、合口式の大形甕棺墓に鉄戈・鉄剣が集中して副葬されており、身分的な格差を示している。しかし、甕棺墓という埋葬形式の採用において本場の甕棺地帯である北部九州地域ではみられない「追葬」という特殊性をもっており、さらに甕棺に埋葬された人骨は縄文的形質をもった「西北九州弥生人」であったということである。富の原遺跡は、発掘担当者である稲富裕和によって水上交通の交流拠点として成立したとして評価がおこなわれている（稲富 2012)。Ｂ地点 20 号甕棺墓から出土した人骨は男女３体あって、縄文人的な形質をもっていることが指摘されている（松下・分部・中谷 1987)。それは、富の原の住民と集落を取り仕切っていたリーダーが縄文系弥生人（西北九州系弥生人）であったということを示しており、縄文系の海民集団が大村湾の航路を押さえ、交流拠点として富の原集落を建設したことが推測されてくる。

2019 年の「環有明海とその周辺をめぐる交流と変動」では、甕棺の地域間移動に注目した井上裕弘の研究（井上 2002・2011）の視点を参考にして富の原遺跡の大形甕棺の検討をおこない、Ｂ地点 16 号甕棺を「小郡・鳥栖地域系」Ａ地点２号甕棺とＢ地点 20 号甕棺を「南筑後系」、Ａ地点４号甕棺を「武雄系」のなどの可能性をあげた（宮﨑 2019)。これらの大形甕棺は威信財である鉄戈・鉄剣とともに、有明海沿岸から諫早地峡を越えて、五島灘さらに玄界灘へと至る重要な航路である大村湾を押さえていた富の原集落の族長に、安定的な海上航路の確保と維持を願って、筑紫平野や武雄地域の有力者から贈られた贈答品であった可能性が高い。甕棺の交流の問題については、大学の科学研究費による共同研究などで詳細な検討をおこなっていく必要があると考えている。

長崎県本土地域の弥生中期末～後期の甕棺は、筑紫平野や武雄地域から贈与された贈答品の可能性が高い富の原遺跡・麻生瀬遺跡・岩名遺跡の大形棺と小児甕棺に使われている中形棺・小形棺があるが、中形・小形棺については甕棺として使う目的で入手したものでなく、「米」などの物資の運搬具として一端使用されたものを、小児用カメ棺墓として使ったのではないかということが推測される。

（３）大村平野における富の原遺跡と竹松遺跡の関係

竹松遺跡は、縄文晩期初頭の天城式段階に大村湾に注ぐ郡川下流域の扇状地に出現し、弥生早期夜臼Ⅰ式まで存続する（宮﨑 2018・2019）が、それ以降はより郡川下流に立地する黒丸（くろまる）遺跡が出現し、弥生中期前半まで中心的な集落となる。いまも郡川下流域が大村平野の水田地帯であるが、黒丸遺跡は水田生産と畑作を併用した生産を基盤としていたことが推測される。

富の原遺跡は、弥生中期前葉段階には、石棺墓を主体とし小児カメ棺墓の墓域が形成され、集落が成立したことが考えられる。大村湾における弥生中期初頭～前葉期の海民の墓である諫早市化屋（けや）大島（おおしま）遺跡（井上編 1974）や諫早市滑川（なめりかわ）遺跡（秀島・川瀬編 2007）がこの段階に消滅することは、富の原集落の成立にあたって海民の再編成がおこなわれ、両者が富の原遺跡に吸収される契機となっていることが想定される。諫早地峡にある立石（たていし）遺跡（正林 1971・1989、諫早農業高校（いさはやのうぎょうこうこう）遺跡・註２）や小栗（おぐり）遺跡群（秀島編 1983 ほか）は、弥生中期初頭頃に形成されており、2019 年の「環有明海とその周辺をめぐる交流と変動」では「船越集落（ふなごししゅうらく）」としての評価をおこなった（宮﨑 2019)。稲富裕和が指摘する交流拠点集落としての富の原集落の成立は、諫早地峡の「船越（ふなごし）」ルートによる有明海から大村湾への海上航路が成立したことと連動した動きであったことが推測される。

竹松遺跡は、弥生中期中頃に再び集落が現れて古墳時代にわたって継続するが、片刃を主体とする

石庖丁が 31 点（註３）出土しており、富の原遺跡の５点に比べて６倍以上多いことから、郡川下流域の水田生産と畑作を併用した生産構造をもっていた集落であったことが推測される。

すなわち、長崎県本土地域において弥生時代中期末から後期前葉段階では、合口式大形甕棺と鉄戈・鉄剣をもつ富の原遺跡が突出した存在としてあり、大村平野においては竹松遺跡が共時的存在として並存していたことになる。竹松遺跡は石棺墓が主体であり、富の原遺跡のような大形甕棺墓は検出されていない。しかし、富の原集落が衰退した後期中葉以降になると竹松遺跡が大村平野における中心集落に成長して、富の原集落の交流拠点としての役割が竹松遺跡に移ったことも推測される。富の原遺跡では、弥生中期末に袋状口縁壺を中心とした糸島型祭祀用土器を用いた墓域祭祀がおこなわれており、玄界灘沿岸地域と有明海沿岸地域の境界域の交流拠点であったが、台付甕地域が拡大した弥生後期中頃には県北部の佐世保市門前（もんぜん）遺跡に境界域が移り、門前遺跡が両地域を結ぶ接点として交易機構の機能を担っていたことが推測される（宮﨑 2019）。そのことも含めて次節で検討してみたい。

## ４．遺跡から出土した甕棺と「筑紫系大甕」（図 16・17・18）

図 16 は、「筑紫系大甕」と「糸島系大壺」が関連する遺跡をドットで落としたものである。まず、「筑紫系大甕」に関連する遺跡を検討したい。

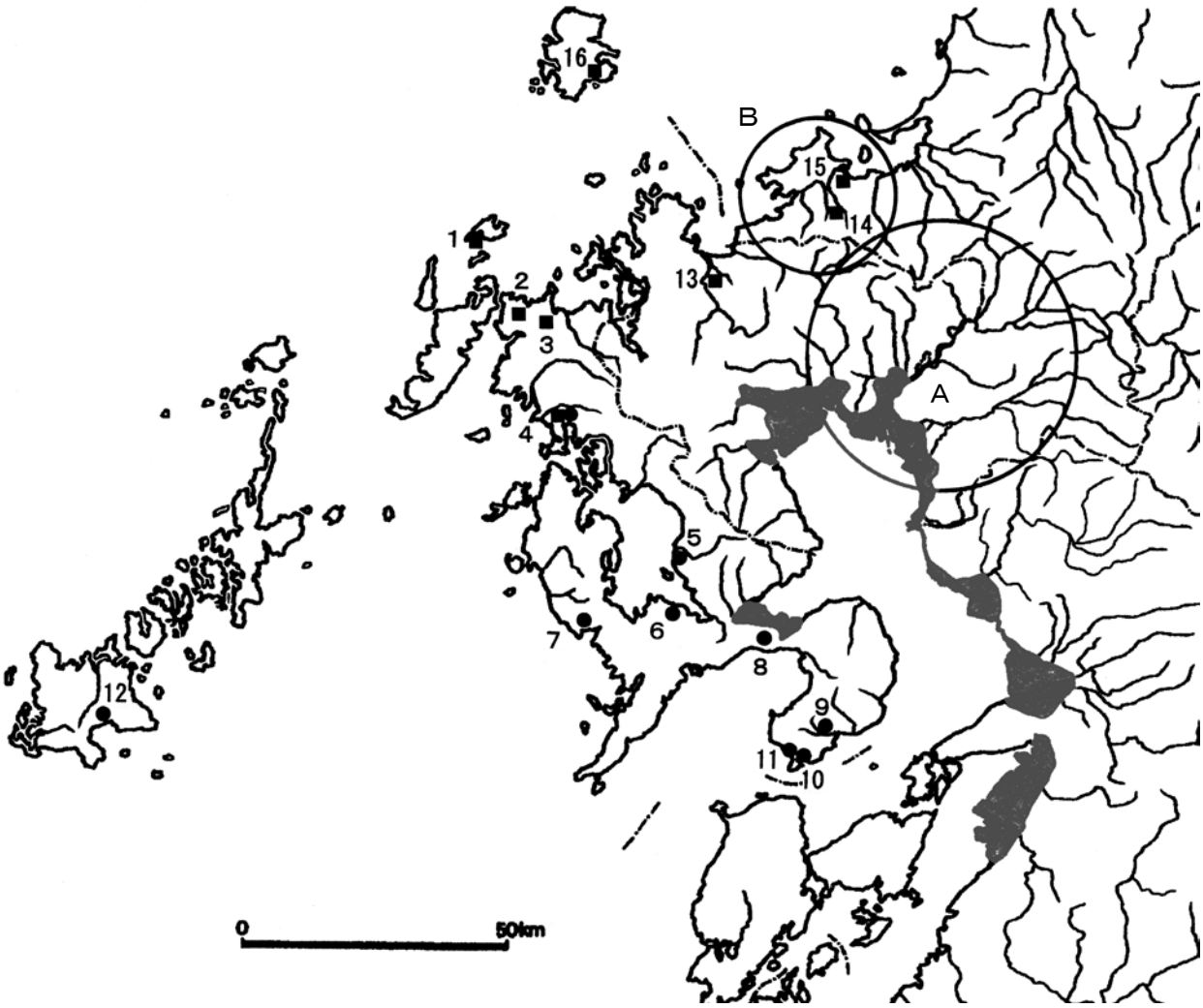



図 16 「筑紫系大甕」関連と「糸島系大壺」出土遺跡（●「筑紫系大甕」関連、■「糸島系大壺」）
（Ａは「筑紫系大甕」の製作地域、Ｂは「糸島系大壺」の製作地域）１長畑馬場、２里田原、３太田、４門前・竹辺Ｃ、５竹松、６伊木力、７東上、８西ノ角、９今福、10 口之津貝塚、11 永瀬貝塚・辻貝塚、12 大浜、13 中原、14 三雲、15 今宿五郎江、16 原の辻

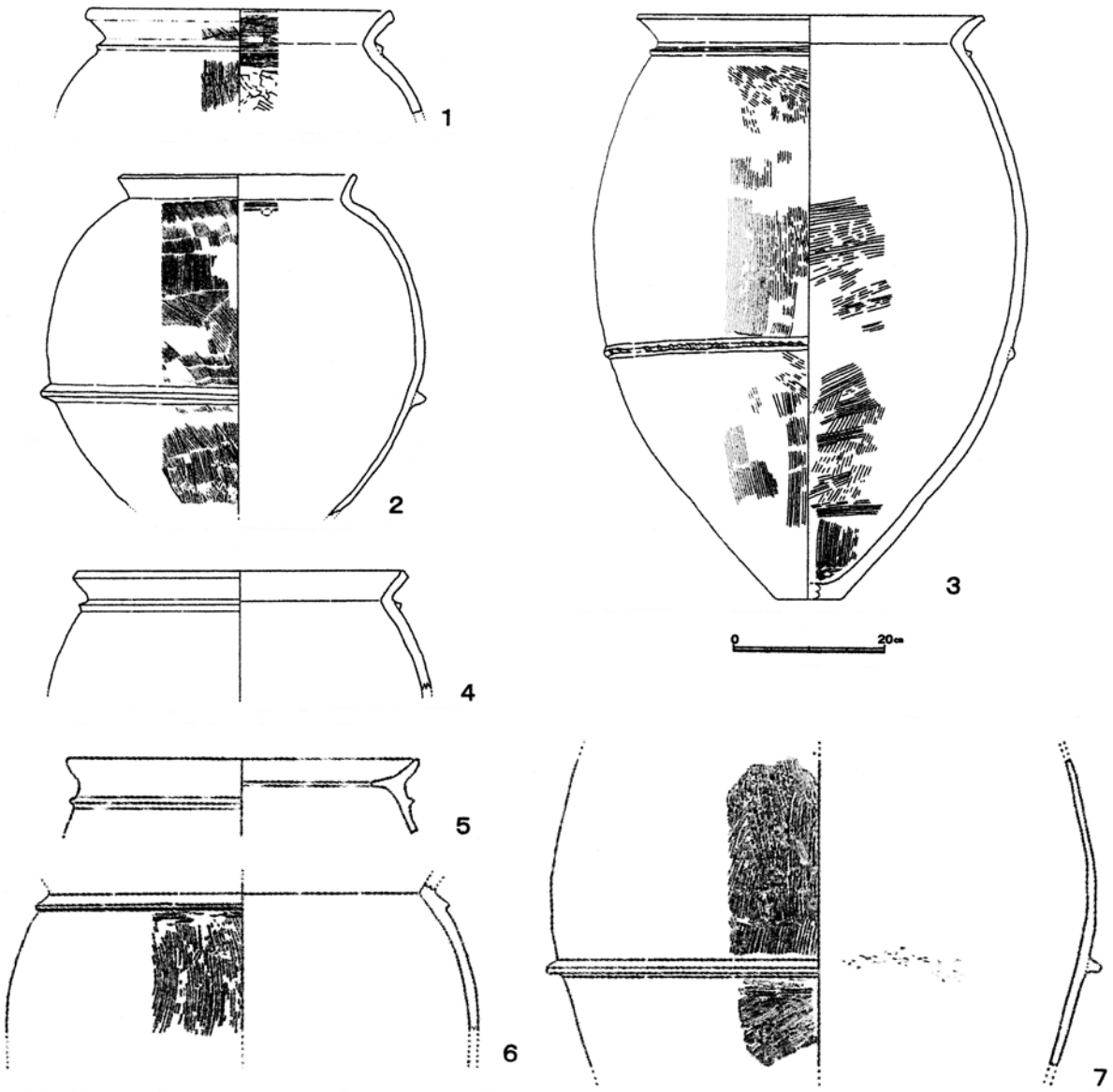



**図 17　長崎県本土地域の遺跡から出土した甕棺および大甕（１/10）**
**１・２門前弥生後期河川跡、３「竹松Ⅳ」ＳＸ３、４西ノ角、５～７東上**

（１）遺跡出土の甕棺および大甕について（図 17）

図 17 は、遺跡から出土した甕棺と甕棺の可能性がある大甕を取り上げたものである。３は、竹松遺跡Ｓ「竹松Ⅳ」ＳＸ３（不明遺構）の甕棺で、土器溜のような遺構から出土している（中川編 2019）。時期的には後期Ⅲ期で蒲原編年のＫⅣｂ式新相に相当し、器高 76 ㌢の中形棺である。竹松遺跡では、この甕棺が搬入されていたのにかかわらず甕棺墓として使われなかったことが注目される。２は、門前遺跡の弥生後期河川跡から出土した甕棺（副島編 2006）で、胴部が丸く張りをもつ形状をなし、残存長が 44 ㌢ほどであり、小形棺であろう。１は門前遺跡の弥生後期河川跡から出土した大形甕で体部が残っていないため胴部突帯の有無が明確でないが、口径 40 ㌢の中形棺の可能性がある。門前遺跡では、石棺墓が主体で成人の埋葬に甕棺専用棺を使用しなかったため、１・２ともに運搬具として小形棺が使用され廃棄されたものであろう。４は、諫早市西ノ角遺跡で出土した大甕である（高野編 1985）。胴部を欠失しているが、口径 43 ㌢の中形棺の可能性がある。遺物包含層から出土している。５～７は、長崎市の東上（ひがしあげ）遺跡（宮下 2013）で出土した甕棺（６・７）と大形甕（５）で、周辺から人骨が出土し

たといわれており、甕棺墓の可能性をもっている。６・７は、胴部径が 60 ～ 70 ㌢ほどあり、サイズ的には成人用の大形棺ということになる。全形を判別できないが、後期Ⅱ期の蒲原編年のＫⅣｂ式古相の可能性がある。東上遺跡の大形甕棺は、甕棺墓として使用された可能性をもっており、筑紫平野から五島灘沿岸にまで大形甕棺が運ばれたことを示しており、その評価とともに五島灘沿岸の航路上の遺跡として注目していかなければならない。甕棺の可能性がある東上遺跡以外の甕棺と大甕は、物資を運ぶ運搬具として使用されたものが、集落で廃棄された可能性が高いことが推察される。

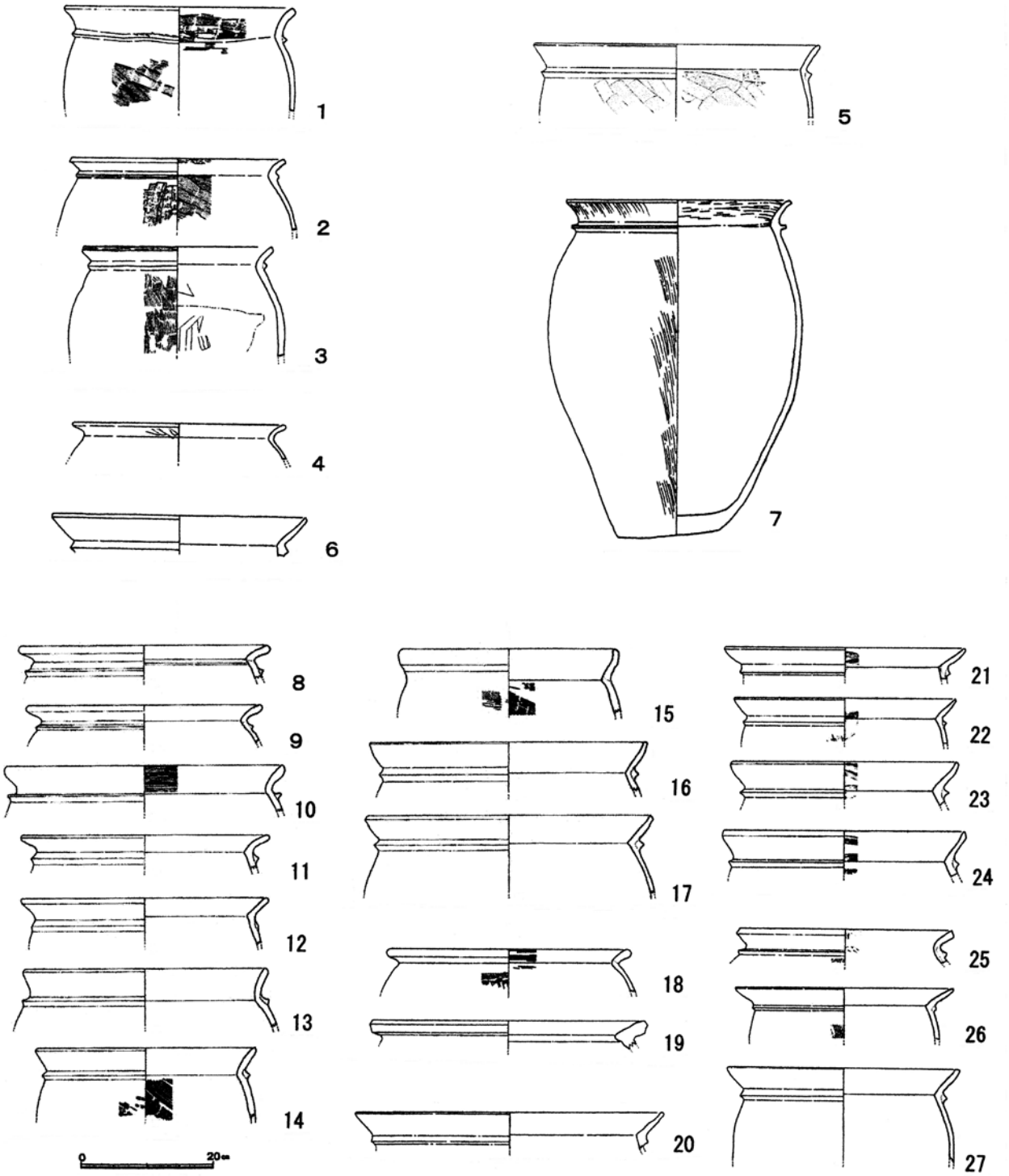



図 18　長崎県本土地域の「筑紫系大甕」（１／10）

１～３門前弥生後期河川跡、４竹辺Ｃ、５「竹松Ｖ」ＳＣ 15 住居跡、６伊木力、７大浜、８～ 17 今福Ａ地区土器溜、18・19 今福Ｂ地区２号溝、20 辻貝塚、21 ～ 24 永瀬貝塚、25 ～ 27 口之津貝塚

（２）「筑紫系大甕」について（図 18）

図 18 は、甕棺ではない「筑紫系大甕」としたものである。１～３は、門前遺跡の弥生後期河川跡から出土した資料である。４は、門前遺跡と連なった位置にある竹辺Ｃ遺跡から出土した資料である。５は、竹松遺跡「竹松Ｖ」ＳＣ 15（住居跡）から出土した資料である（杉原編 2020）。住居内で貯蔵具として使用されていた可能性をもつ。６は、大村湾に面した諫早市伊木力遺跡から出土した資料である（高原編 1996）。７は、五島列島の福江島（五島市）の大浜遺跡から出土した資料である（福田編 1998）。沼地との境の砂土から出土しており単棺として報告されているが、運搬具として使用され廃棄された可能性を推定したい。８～ 17 は今福遺跡Ａ地区土器溜から出土した資料（宮﨑編 1994）で、18・19 は今福遺跡Ｂ地区２号溝から出土した資料（宮﨑編 1995）である。20 は、南島原市加津佐町の辻貝塚の出土資料（藤田編 1998）である。21 ～ 24 は､南島原市加津佐町の永瀬貝塚の出土資料（松藤・古田ほか 1975）である。25 ～ 27 は、南島原市口之津町の口之津貝塚の出土資料である（前掲書）。

長崎県本土地域の「筑紫系大甕」は、今福遺跡、ロノ津貝塚、永瀬貝塚の島原半島南部地域で多く出土していることが注目される。島原半島の南端地域には、南島原市口之津貝塚、内野貝塚、千檀貝塚、辻貝塚、永瀬貝塚などの弥生時代の貝塚遺跡が集中して形成されている。松藤和人は、漁労を主体とした弥生海浜集落としての評価をおこなっている（松藤・古田ほか 1975）が、筆者は有明海の出入口である早崎瀬戸に面している立地から「瀬戸」を押さえ、干満の差が大きい有明海の水先案内をおこなっていた集団ではないかと想定したことがある（宮﨑 1997）。島原南部地域に「筑紫系大甕」が多く出土することは、今福遺跡の交流拠点的性格と島原半島南部の海民が有明海航路の海上輸送を主体的に担っていたことが推測されてくる。

## ５.「糸島系大壺」について（図 19 ～ 21）

「糸島系大壺」については、2000 年の長崎県考古学会の壱岐大会で「西北九州から『一支国』へ－長崎県本土部地域からの視点－」（宮﨑 2000）で、壱岐原の辻遺跡と長崎県本土地域で「糸島系土器壺」とした鋤先形口縁壺が出土していることを発表した。2015 年の九州考古学会との合同研究大会では、

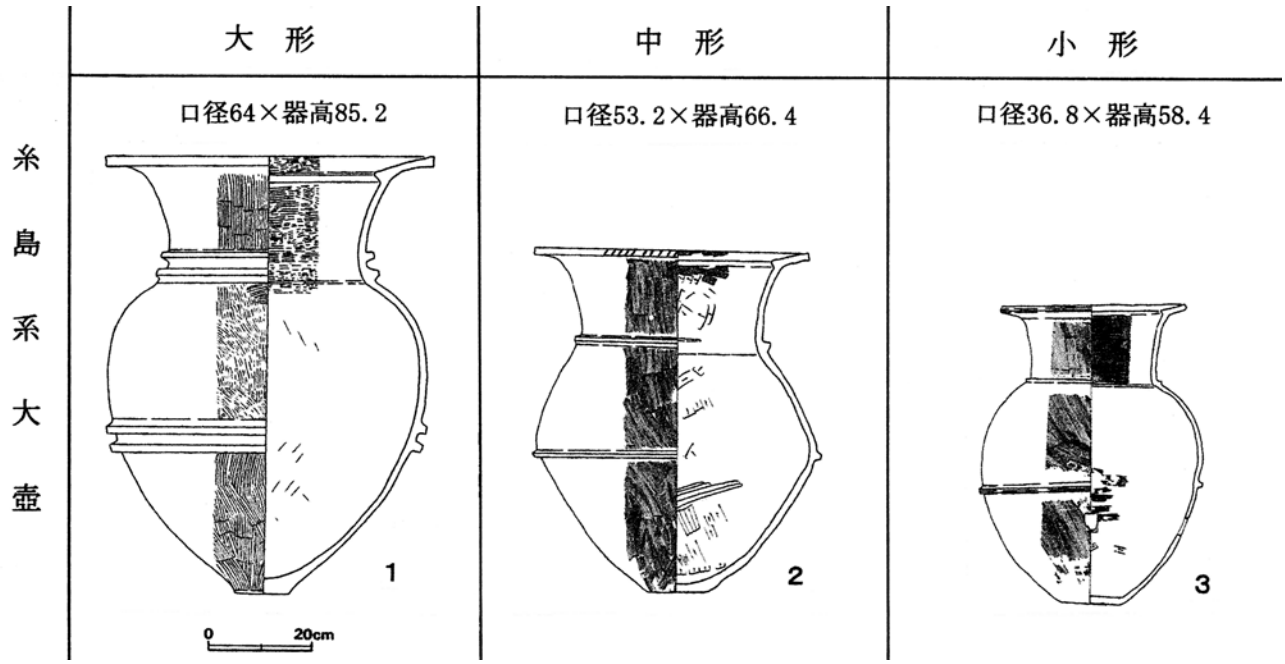



図 19 「糸島系大壺」の分類（１／16）（平尾編 2013 より作図）

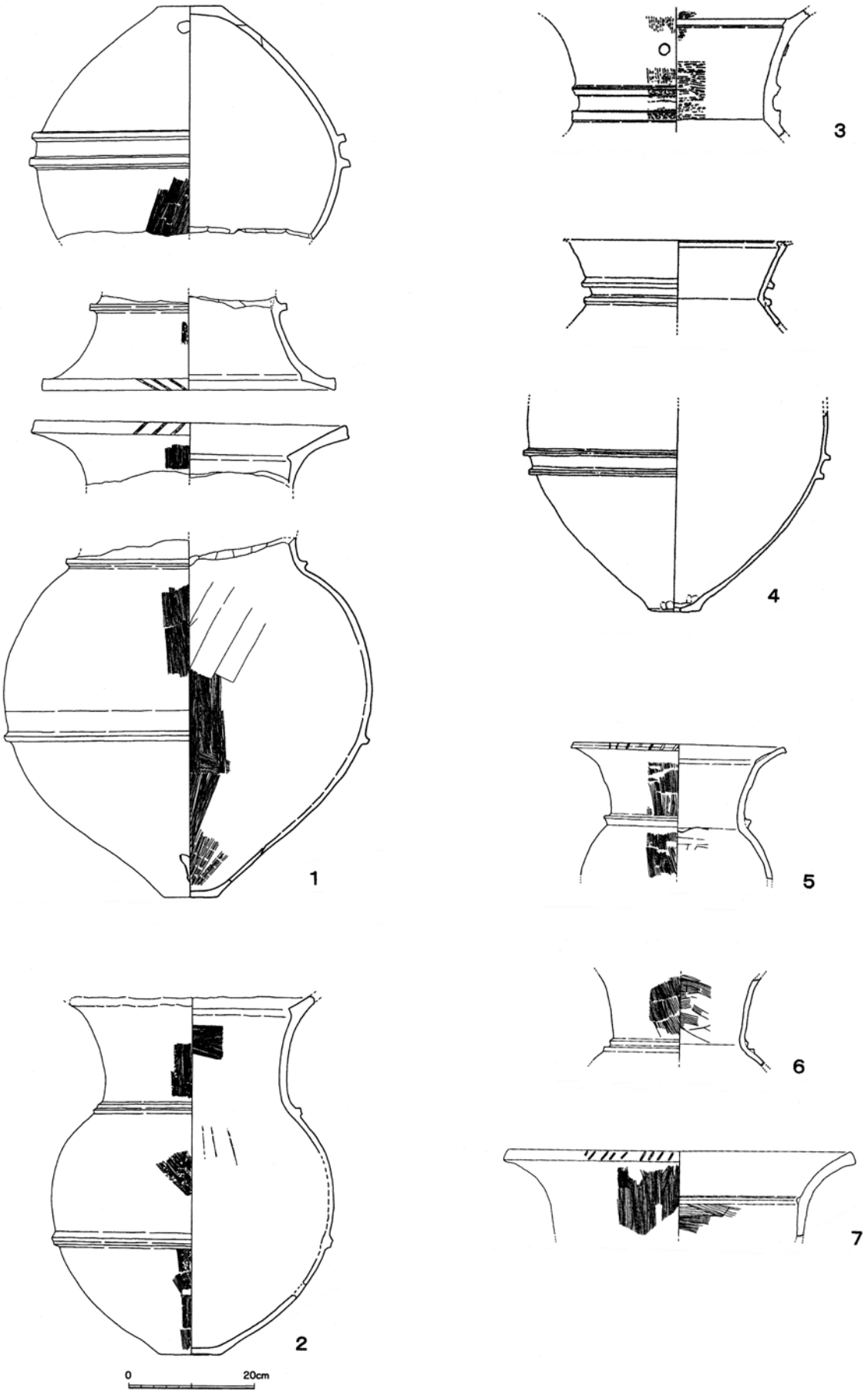



図 20　長崎県本土地域の「糸島系大壺」（１／10）

１里田原１号カメ棺、２里田原２号カメ棺、３太田、４長畑馬場ＳＴ 28、５～７門前弥生後期河川跡

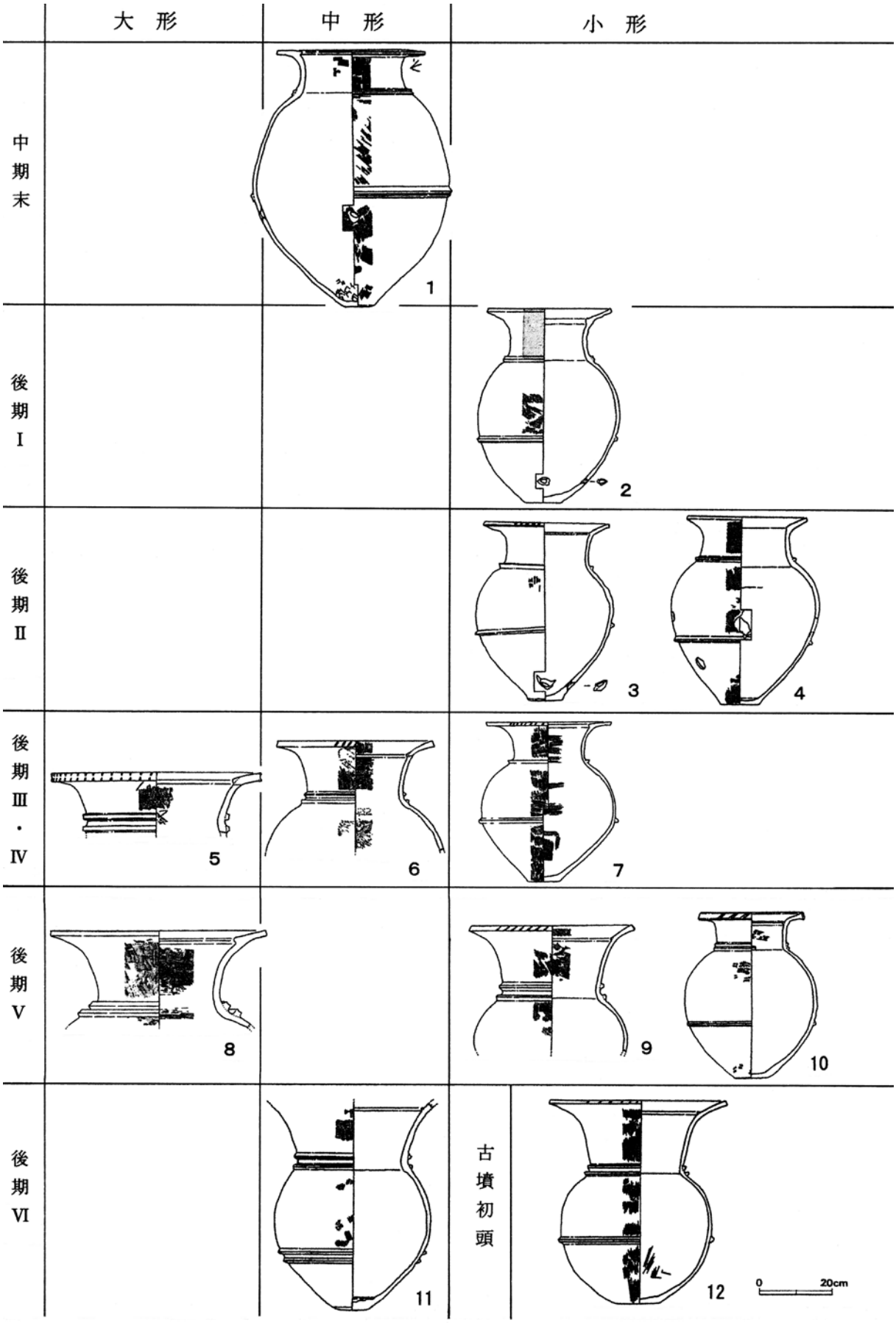



図 21　原の辻遺跡の「糸島系大壺」（１／16）

１原の久保Ｃ２号カメ棺、２大川４号カメ棺、３大川３号カメ棺、４八反ＳＤ５、５・６高元Ｆ区３層、７八反護岸、８～10 原Ａ区２号濠、11 原３号カメ棺、12 不條カメ棺

「糸島系大壺」の名称でスライド説明をおこなった（宮﨑 2015）。この糸島地域を中心とした鋤先形口縁をもつ大形壺を「糸島系大壺」と名づけて検討をおこないたい。

（１）「糸島系大壺」の分類（図 19）

図 19 は、糸島市教育委員会の江崎靖隆が、2013 年の『三雲・井原遺跡Ⅷ－総括編－』（平尾編 2013）で示した甕棺の編年表から抽出した「糸島系大壺」を大きさでもって分類をおこなったものである。器高 80 ㌢以上の大形（１）、器高 60 ㌢以上の中形（２）、器高 60 ㌢以下の小形（３）に分けられる。報告者の江崎靖隆は、大形を大型壺Ａと大型壺Ｂに分けて説明しているが、ここでは両者を大型品としておく。江崎によると糸島地域では、弥生中期末には突出した厚葬墓として三雲南小路（みぐもみなみしょうじ）遺跡の合口式大形甕棺墓があるが、これ以外では成人墓が木棺墓に主体が移っており、小形棺だけが甕棺として使用されている。弥生後期初頭になると、埋葬棺に大きな変化が現れ、大型壺が成人用の木棺墓に付随するかたちで出現する（江崎 2013）。

図９の甕棺のサイズと対応すれば、「糸島系大壺」の大形品（１）は成人棺、中形品（２）と小形品（３）が小児・幼児棺として使用されたことが推測できるが、小形品・中形品はもともとの壺のもつ機能である貯蔵形態として製作されて小児・幼児用のカメ棺に転用されたものであり、大形品だけが貯蔵用壺を拡大したかたちで、カメ棺専用棺として製作された可能性がある。

（２）長崎県本土地域の「糸島系大壺」（図 20）

2020 年に寺田正剛によって、松浦市太田（おおた）遺跡出土の「糸島系大壺」が紹介され、長崎県本土地域と、唐津、糸島、原の辻遺跡などの地域の資料が紹介された（寺田 2020）。長崎県本土地域と原の辻遺跡においてまだ資料があるので、寺田の成果と合わせてここで検討したい（図 20・21）。

長崎県本土地域では、県北部に４ヵ所の出土地が確認されている（図 16・17、図 20）。１と２は、平戸市里田原（さとたばる）遺跡の２基のカメ棺墓である（馬場・冨永編 2003）。１は、上ガメ、下ガメともに体上半部を打ち欠いて合口カメ棺墓としたもので器高 60 ～ 70 ㌢の中形品を組み合わせている。小児棺として使用されたものであろう。２は、口縁端部を欠失しているが、器高 60 ㌢ほどの中形品の単式カメ棺墓である。松浦市太田遺跡３は、寺田正剛は墓地や祭祀遺構などに伴う可能性をあげている（寺田 2020）。サイズ的には中形品である。４は、平戸市大島村の長畑馬場遺跡のカメ棺墓ＳＴ 28 である（本田編 2000）。体上半を打ち欠いて体上端から頸部付近を被せた単式カメ棺墓である。サイズ的には中形品であろう。５～７は、佐世保市門前遺跡の弥生後期河川跡から出土した資料である（副島編 2006）。７が中形品で、５・６が小形品である。以上の長崎県本土地域の「糸島系大壺」の時期については、平尾和久の編年表を参考にすれば、１～４が弥生後期後葉期の後期Ⅳ・Ⅴ期に相当する資料で、５～７の門前遺跡の資料が弥生後期前半の後期Ⅱ・Ⅲ期に相当する資料であろう。

以上の長崎県本土地域の「糸島系大壺」の出土状況からみると、県北の門前遺跡までで留まっており、「筑紫系大甕」がやはり五島灘にある門前遺跡で出土していることは、門前遺跡が玄界灘と有明海を結ぶ海上航路の境界にある交流拠点としての港湾集落とすることができるであろう（図 16）。

図 20 は、壱岐の原の辻遺跡で出土した「糸島系大壺」である。壱岐（一支国）はイト国（伊都国）との関係が深いといわれるが、「糸島系大壺」も多く出土している。原の辻遺跡では、「糸島系大壺」は大形・中形・小形が出土しており、カメ棺にも転用されている。玄界灘沿岸から「米」などの穀物を収納した運搬具として「糸島系大壺」が運ばれていたと理解したい。

## おわりに

以上、長崎県本土地域の在地系壺の地域性、甕棺墓と「筑紫系大甕」、「糸島系大壺」の様相につい

てみてきた。

有明海に面した筑紫平野では、嘉瀬川、筑後川、矢部川などの大河川の流域を動脈としてツリー状のネットワークで結びついた拠点集落と周辺集落からなる「流域共同体」が形成されていた。一方、有明海沿岸部では、海上航路で横並びにライン状のネットワークで「海村」や「港湾集落」が結ばれて「海域共同体」を形成していたことが推測される。「流域共同体」と「海域共同体」は大河川の河口付近の臨海に面した「港湾集落」を接点として交流をおこなっていたことが想定できる。

長崎県地域の「海域社会」は、広い平野に恵まれない風土で水田適地も乏しい地域である。「魏志倭人伝」に記されているように「食するに足らず」の世界であったことが想定できる（註４）。長崎県本土地域では、食糧として「米」を入手するため筑紫平野の「流域社会」と交流しなければならなかったことが推測される。また、農民らの共同体である「流域社会」では、水田地の「拡大再生産」をおこなっていくために、鉄器を製作するための鉄素材が希求されており、そのために「米」（註５）を交換財として運び、マツロ国（末盧国）、イト国（伊都国）、ナ国（奴国）の玄界灘沿岸の大集落から「鉄」（鉄素材）を入手する必要があった。その運搬のために、有明海沿岸の海民と連携していく必要があったものと推察される。

海民は、もともと婚姻などで結びついた「親族関係」を形成していたと思われるが、弥生中期の初め頃に生起した筑紫平野の大河川の「流域社会」での「鉄」入手の動きに対応して、海民同士の連携が深まり、「海村」（武末 2009）や「港湾集落」をネットワークで結んだ航路の整備がおこなわれ、「海域社会」の形成が促進されたことが推測される。有明海沿岸の「流域社会」と長崎県本土地域の「海域社会」は相互依存のかたちで共存していたことが推定され、大村湾における富の原集落の成立はそのような文脈のなかで理解することができるのであろう。

ここでもう一度、今回の主題となった長崎県本土地域における在地系壺、甕棺、大甕、大壺について整理しておきたい。

地元で製作された在地系壺については、Ａ：大村平野（富の原型壺・竹松型壺）、Ｂ：諫早から島原半島北部（西ノ角型壺）、Ｃ：島原半島南部（今福型壺）のエリアにおいて、弥生中期末から後期初頭期に出現し、後期に展開している。この壺は、機能的には貯蔵用の壺であって、また幼小児カメ棺に転用して使われている。西ノ角型壺は、Ｂ地域で製作された壺であるが、Ａエリアの大村平野で出土していることから運搬具として運ばれていることがわかる。在地系壺のＡ・Ｂ・Ｃのエリアについては、煮炊き具として同じ台付甕を共有している社会において、小地域のエリアがあることを物語っており、部族共同体の単位・領域を示している可能性が高いと推察される。

現地に搬入されている弥生後期の甕棺は、甕棺葬が続いていた筑紫平野からもたらされたものである。長崎県本土地域の成人墓は土壙墓（木棺墓）、石棺墓が主体であり、甕棺は数が少なく主体的な墓制ではない。大村平野では石棺墓が主体の墓制のなかで、富の原遺跡の合口大形甕棺は突出した大きさをもって甕棺と鉄戈・鉄剣が副葬されていることから、筑紫平野の有力者から富の原集落の族長へ贈与された贈答品の可能性を推測した。また、中形棺や小形棺については、最初から甕棺として使う目的で筑紫平野部から入手したものでなく、運搬具として使われたものを、壺棺と同様に小児カメ棺墓として使用したことを想定した。

2005 年に著した「捨てられた甕棺－壱岐・原の辻遺跡の場合－」では、遺構に廃棄された甕棺があることから、西北九州地域と同様に土壙墓（木棺墓）と石棺墓が主体の原の辻遺跡において、土器専用棺としての目的よりも、「南北市羅」で必要な食料や水などの貯蔵や物資を運ぶ容器（コンテナ）として利用されていた可能性を指摘したことがある（宮崎 2005）。

福岡県横隈狐塚遺跡でみられた「筑紫系大甕」のカメ棺墓としての使用は、長崎県本土地域では竹松遺跡の２例などが認められたが、本来主体的なものではない。それは、筑紫平野では貯蔵具として機能をもっていた「筑紫系大甕」が、有明海域の海民にとっては「鉄」と交換するための「米」を運ぶ運搬具として認識されていたことを類推させる。そして、「筑紫系大甕」や甕棺の中形棺・小形棺が沿岸部に点々と出土分布していることは、玄界灘沿岸の大集落への運搬経路である海上航路が反映されていることが考えられる。

県北部を中心として分布する「糸島系大壺」は、製作地である糸島地域から玄界灘沿岸を介して「米」などの物資を収納した運搬具として搬入されたことを推測させる。そして運ばれてきた「糸島系大壺」は小児カメ棺墓に転用されている。原の辻遺跡においても「糸島系大壺」が出土しており、小児カメ棺に転用されたものもある。原の辻遺跡の「糸島系大壺」は、「南北市羅」ルートでイト国（伊都国）の集落から壱岐・原の辻遺跡（一支国）へ「米」などの物資が運搬されていたことを表している。

「筑紫系大甕」と「糸島系大壺」は、両者ともに運搬具として利用されたが、「筑紫系大甕」は有明海沿岸を中心とした海民によって、「糸島系大壺」は玄界灘沿岸の海民によって運ばれた可能性が高い。門前遺跡は弥生後期中頃に北部九州系の平底甕地域と台付甕地域との境界になっており、門前遺跡で「筑紫系大甕」と「糸島系大壺」の双方が出土することは、海民の両者の活動海域が反映されていることが考えられる。しかし、この海民の活動の問題については単純に割り切れず、有明海沿岸の主力な製品である「肥前型器台」は、伊万里市宮ノ前（みやのまえ）遺跡、唐津市中原（なかばる）遺跡、糸島市三雲（みぐも）遺跡、福岡市今宿五郎江（いまじゅくごろうえ）遺跡などで出土しており（石橋 2014・2015、熊代 2014、上田 2015）、この「肥前型器台」の資料は有明海の海民たちが玄界灘沿岸域まで至った足跡を示していると想定できる。「海域社会」は、各集落・各集団の序列をもった内陸の世界とは違って、安全な交易活動の遂行と維持のために海民同士が連携し結びついた開かれた世界であったことを想像させる。

長崎県本土地域では、弥生中期末から弥生後期前葉にかけて富の原遺跡が交流拠点集落として繁栄したが、後期中頃には衰退して弥生後期後葉には環有明海域で特徴的な祭具である「肥前型器台」が出現してくる。弥生後期から古墳初頭期前後の社会については、瀬戸内地方からの影響や「倭国乱」などの社会的変動が関わっていることが推測されるが、そのような社会像・社会背景については、「肥前型器台」の研究成果も含めて、新たに稿を起こして考える機会をもちたいと思う。

**【謝　辞】**

今回も『西海考古』に拙稿二本の掲載を許された編集者の古門雅高氏、渡邊康行氏に深く感謝申し上げます。古門氏には竹松遺跡について教示をいただきました。報告書にまとめられた竹松遺跡の調査成果によって、長崎県本土地域の弥生像が新たに書き替えられることができました。長崎県考古学における開かれた場として、今後とも『西海考古』が一層発展し、継続されることを願います。

**【註】**

**註１**　「今福型壺」は、倒卵形胴部に「見かけ３条突帯」をもつ壷で、口縁が明確ではないが、C 地区２号カメ棺には単口縁部片が伴い、単口縁広口壷の可能性が高い。「西ノ角型」は倒卵形胴部に２条の刻目突帯を巡らし、頸部と胴部の境界に三角突帯１条を巡らす壷で、伊古遺跡出土資料によって複合口縁であることが判明した。「富の原型壷」は、倒卵形胴部に１条の刻目突帯をもつ単口縁の広口壷で、頸部と胴部の境界に区分をもたない特徴をもつ。「竹松型壷」は、球形状胴部に朝顔形に開く単口縁の広口壷で、胴部に２条の刻目突帯をもつ。

**註２**　正林護は、1989 年の『日本の古代遺跡 42 長崎』のなかで、「この銅剣の出土地について、筆者の紹介文献では（諫早市出土の銅剣）『九州考古学』41 － 44　1971」）では立石遺跡となっており、長崎県遺跡地図では『諫早農業高

校遺跡』になっているので注意をお願いしたい」と記している。筆者は、学史的な意味合いから「立石遺跡」を使用している。

**註 3**　長崎県本土地域の石庖丁については、2019 年の『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第９号と『長崎地域の考古学研究』のなかでまとめたが、竹松遺跡は 2017 年の『竹松遺跡』と『竹松遺跡Ⅱ』の４点としている。今回、『竹松遺跡Ⅲ』４点、『竹松遺跡Ⅳ』14 点、『竹松遺跡Ⅴ』９点の出土点数を加えると、計 31 点になっている。

**註 4**　2018 年までのデータであるが、長崎県本土地域では 150 点の磨製石庖丁の資料をおさえることができた（宮﨑 2019）。五島列島では小値賀島の１点、対馬市教育委員会の尾上博一によれば対馬島では３点であり、壱岐の原の辻遺跡では 200 点ほどの石庖丁が出土しているとしても、長崎県では 500 点に満たない数になる。石庖丁の出土量が少ないことは、水稲農耕の生産度合いを表していると考えられる。長崎県地域では、狭い水田地で水稲耕作をおこなってはいるが、平野に恵まれずに生産量が少なく、「魏志倭人伝」にいう「食するに足らず」の状態であったと思われる。本地域の弥生時代の住民たちは、このような状況を打開するために、広大な海域にのりだして交易活動をおこなうことに活路を見出したことが推察できよう。

**註 5**　北條芳隆は、弥生時代の貨幣として「稲束」あげている（北條 2014）。北條の見解を参考にすれば、有明海沿岸の「流域社会」の集落から「筑紫系大甕」に積み込まれて運輸され、玄界灘沿岸の大集落で「鉄」（鉄素材）と交換された「米」とは「稲束」であった可能性が高いことになる。

**【引用・参考文献】**


安楽勉編　1990『白井川遺跡（Ⅱ）』東彼杵町文化財調査報告書第４集　東彼杵町教育委員会

石橋新次　1992「糸島型祭祀用土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』 名著出版

石橋新次　2014「佐賀県における肥前型器台」『肥前型器台について』 肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会

石橋新次　2015「佐賀県における台付甕と透かしをもつ装飾器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』 長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

稲富裕和・橋本幸男編　1987『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書第 12 集　大村市教育委員会

稲富裕和　1995「鉄の武器」『長崎県の考古学』ろうきんブックレット２　長崎県労働金庫

稲富裕和　1997「岩名遺跡」『原始・古代の長崎県』資料篇Ⅱ　長崎県教育委員会

稲富裕和　2012「大村湾の水上交通と富の原遺跡の成立」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・ 肥後考古学会合同大会

井上和夫編　1974『化屋大島遺跡』多良見町文化財調査報告書第２集　多良見町教育委員会

井上裕弘　2000「北部九州の首長墓と甕棺」『大塚初重先生頌寿記念考古学記念論文集』 東京堂出版

井上裕弘　2011「北部九州の甕棺工人集団と葬送儀礼からみた背景」『弥生・古墳文化の研究』 梓書院

上田龍児　2015「福岡県下の状況」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』 長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

江上正高編　2008『竹辺Ｃ遺跡・竹辺Ｄ遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第３集　長崎県教育委員会

江崎靖隆　2013「2　甕棺の編年」『三雲・井原遺跡Ⅷ―総集編―』 糸島市文化財調査布告書第 10 集　糸島市教育委員会

大野安生・村井敏郎編　1995『富の原遺跡・小佐古石棺墓群Ｂ地点Ⅱ』大村市文化財調査報告書第 19 集　大村市教育委員会

大野安生編　2005『黒丸遺跡ほか発掘調査概報Ｖｏｌ．５』大村市文化財調査報告書第 28 集　大村市教育委員会

小田富士雄　1970『五島列島の弥生文化－総集編－』 長崎大学医学部解剖学第二教室　1970

小田富士雄　1983「西北九州」『三世紀の考古学』下巻　学生社

小田富士雄・上田龍児　2004『長崎県・景華園遺跡の研究、福岡県京都郡における二古墳の調査、佐賀県・東十郎古墳群の調査』 福岡大学人文学部考古学研究室

亀田　学他編　2001『梅ノ木遺跡Ⅱ』下巻　熊本県文化財調査報告書第 199 集　熊本県教育委員会

蒲原宏行　2009「桜馬場『宝器内蔵甕棺』の相対年代」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集

蒲原宏行　2019『弥生・古墳時代論叢』 六一書房

九州考古学会・長崎県考古学会　2015『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』 九州考古学会・長崎県考古学会合同研究大会

久住猛雄　1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式研究』ⅩⅨ　庄内式研究会

久住猛雄　2015「『奴国時代』の暦年代論」『新・奴国展』 福岡市博物館

熊代昌之　2014「福岡県下における装飾器台の分布について」『肥前型器台について』 肥後考古学会・長崎県考古学会

合同大会
正林　護 1971 「諫早市の銅剣」『九州考古学』41 － 44 号　九州考古学会
正林　護　1989『日本の古代遺跡 42 長崎』 保育社
正林　護他編　1998『陣ノ内遺跡』瑞穂町文化財調査報告書第３集　瑞穂町教育委員会
杉原敦史編　2020『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 12 集　長崎県教育委員会
副島和明編　2006『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書第 190 集　長崎県教育委員会
高野晋司編　1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第 73 集　長崎県教育委員会
武末純一　2009「三韓と倭の交流－海村の視点から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 151 集　国立歴史民俗博物館
竹中哲朗編　2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書第５集　国見町教育委員会
高橋浩二　2008「潟湖環境と地域間ネットワーク－弥生・古墳時代の日本海沿岸における地域間関係のモデル化－」『海域世界のネットワークと重層性』 桂書房
高原　愛編　1996『伊木力遺跡Ⅰ』長座危険文化財調査報告書第 126 集　長崎県教育委員会
田崎博之　1993「弥生時代の漢鏡」『「社会科」学研究』第 25 号 「社会科」学研究会
田中良之　2008『骨が語る古代の家族』 吉川弘文館
辻田直人・村子晴奈ほか編『伊古遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書第８集　雲仙市教育委員会
辻田直人・村子晴奈編 2017 『十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ』雲仙市文化財調査報告書第 16 集　雲仙市教育委員会
常松幹雄　1991「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢』Ⅲ　早稲田大学出版部
寺田正剛編　1993『一本木遺跡』福江市文化財調査報告書第７集　福江市教育委員会
寺田正剛　2020「松浦市太田遺跡の円形浮文のある大型壺について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第 10 号　長崎県埋蔵文化財センター
中川潤次編　2019『竹松遺跡Ⅳ』中巻弥生古墳編　新幹線文化財調査報告書第 11 集　長崎県教育委員会
長崎県考古学会・肥後考古学会　2012『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会
橋口達也　2005『甕棺と弥生時代年代論』 雄山閣
速水進也　1985「総括」『横隈狐塚遺跡Ⅱ』 小郡市教育委員会
原田範昭　1999「中九州における弥生時代後期土器の編年」『先史学・考古学論究』Ⅲ　龍田考古会
肥後考古学会・長崎県考古学会　2011『環有明海の交流－台付甕をめぐる諸問題』肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会
肥後考古学会・長崎県考古学会　2012『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会
馬場聖美・冨永百合子編『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第 19 集　田平町教育委員会
秀島貞康編　1983『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第４集　諫早市教育委員会
秀島貞康・川瀬雄一編　2007『諫早市文化財調査年報Ⅰ』 諫早市教育委員会
平尾和久編　2013『三雲・井原遺跡Ⅷ－総集編－』 糸島市文化財調査報告書第 10 集　糸島市教育委員会
福田一志編　1998『大浜遺跡』長崎県文化財調査報告書第 141 集　長崎県教育委員会
藤田和裕編　1998『辻貝塚』加津佐町文化財調査報告書第２集　加津佐町教育委員会
古門雅高編　2018『竹松遺跡Ⅲ』 新幹線文化財調査報告書第６集　長崎県教育委員会
北條芳隆　2014「稲束と水稲稲作民」『日本史の方法』第 11 号　奈良女子大学日本史の方法研究会
本田秀樹編　2000『長畑馬場遺跡』大島村文化財調査報告書第 13 集　大島村教育委員会
町田利幸・宮崎貴夫編 1986 『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第 84 集　長崎県教育委員会
松下孝幸・分部哲秋・中谷昭二　1987「大村市富の原遺跡出土の弥生時代人骨」『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書第 12 集　大村市教育委員会
松藤和人・古田正隆ほか　1975『口之津貝塚及び口之津烽火遺跡調査報告』百人委員会埋蔵文化財報告第５集　百人委員会
宮崎貴夫編　1983「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ』長崎県文化財調査報告書第 66 集　長崎県教育委員会
宮崎貴夫編　1984『今福遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第 68 集　長崎県教育委員会
宮崎貴夫編　1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第 77 集　長崎県教育委員会
宮崎貴夫　1985「Ⅳまとめ　１．西ノ角遺跡の土器について」『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第 73 集　長崎県教育委員会
宮崎貴夫　1995「五島列島の弥生・古墳時代の墓制と文化」『風土記の考古学』５　同成社

宮﨑貴夫　1997「原始・古代の島原半島」『原始・古代の長崎県』資料篇Ⅱ　長崎県教育委員会
宮﨑貴夫　2000「西北九州から『一支国』へ－長崎県本土部地域からの視点－」『西北九州から見た「一支国」』平成 22 年度大会発俵要旨　長崎県考古学会
宮﨑貴夫　2005「捨てられた甕棺－壱岐・原の辻遺跡の場合－」『西海考古』第６号　西海考古同人会
宮﨑貴夫　2008『原の辻遺跡』日本の遺跡 32　同成社
宮﨑貴夫　2012「今福遺跡にみる交流資料」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会合同大会
宮﨑貴夫　2018「長崎県本土地域の弥生文化形成期前後の初期支石墓」『海峡を通じた文化交流』九州考古学会・嶺南考古学会第 13 会合同考古学大会　九州考古学会・嶺南考古学会／「長崎県本土地域の弥生文化形成期前後の支石墓」と改題して加筆訂正し、『長崎地域の考古学研究』に所収
宮﨑貴夫　2019「長崎県本土地域の磨製石庖丁－片刃石庖丁を中心として－」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第９号　長崎県埋蔵文化財センター／同じ題名で加筆して、『長崎地域の考古学研究』に所収
宮﨑貴夫　2019『長崎地域の考古学研究』（自費出版）
宮﨑貴夫　2022「『肥前型器台』の再検討」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第 12 号　（掲載予定）
宮下雅史　2013「弥生時代の長崎」『新長崎市史』第１巻　自然編、先史・古代編、中世編　長崎市
村川逸朗編　2010『麻生瀬遺跡Ⅱ』川棚町文化財調査報告書第２集　川棚町教育委員会
村子晴奈編　2013『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第 12 集　雲仙市教育委員会

**追記**：脱稿後に、古門氏から「富の原型壷」のうち図 7-3 は胴部が張って頸胴界に突帯をもっているとの指摘を受けた。ここでは他系統の影響を受け変形した「富の原型壷Ｂ」として捉え、今後検討をおこなっていきたい。

# 古墳出現前夜における鉄製武器からみた地域間交流

## －西北九州と有明海沿岸地域を中心に－

立谷　聡明

## Ⅰ．はじめに

弥生時代の九州地方は、早くから北部九州・中九州地域を筆頭に、多数の鉄器が集落・墳墓から出土したこともあり、当該期の鉄器研究を牽引して来た。列島全体で鉄器の出土事例が大幅に増加した今日でも、弥生時代の日本列島内において、鉄器の量や普及率が、九州地方を西端として西高東低の様相を呈することは、変わらない周知の事実である。

一方で、佐賀県唐津市以西の、いわゆる西北九州地域は、広大な平野が発達せず、山がちな地理的背景から、拠点的な弥生時代の遺跡は限られる。このためか、墓群から出土する鉄器類の出土数も少ない状況にある。また、佐賀県南部に広がる佐賀平野では、当時の海岸線にほど近い背振山地の南部に広がる段丘上に遺跡が立地する傾向にあり、河川沿いを中心に弥生時代の拠点的集落や集団墓地は多々存在するものの、鉄製武器を多数保有する墓群は一部に限られている。そのため、西北九州・佐賀平野両地域は、福岡平野や周防灘沿岸（東北部九州）地域の資料を検討の中心に据えた上で、縁辺地域として扱われる傾向が強く（児玉 1982、大庭 1986 など）、資料的制約も相まって当該地域の鉄製武器に対して主体的な検討を行える素地が整わなかった。

この状況を変える契機となったのは、2000 年以降、西九州自動車や西九州新幹線などの大規模開発に際して行われた、佐世保市門前遺跡や唐津市中原遺跡などの調査である。両遺跡の墓群からは、素環刀や鉄剣を中心に、多数の副葬鉄器が出土し、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の西北九州地域でも大型鉄製武器を保有する集団が存在したことを証明することとなった（副島ほか編 2006、小松ほか編 2012）。また、中原遺跡では墓群とほぼ同時期の鍛冶工房群もみつかっており、自家消費量を大きく超える鉄器生産が行われていたことが指摘されている（小松 2014・土屋 2014）。

以上のような近年の調査成果や、鉄製武器研究の進展（杉山 2015･2017、ライアン 2017･2021）を受け、筆者は以前、弥生時代の鉄製武器（戈・刀剣・鏃）を対象に、弥生時代終末期前後における九州地方内の生産・流通について、私見をまとめる機会を頂いた（立谷 2020: 以下前稿）。その際、素環刀と大型透孔付鉄鏃（以下大孔鏃）の特定型式が、西北九州地域を含む肥前西部や有明海沿岸地域（佐賀平野・筑後川流域）に分布する傾向にあり、福岡平野・中九州地域産と考えられる鉄器類と排他的な分布傾向を示すことを指摘した。また同時に、弥生時代後半期における九州地方内での三つ目の大規模な鉄器製作候補地として、中原遺跡が重要な位置を占めていた可能性についても言及した。

以上のような調査成果の蓄積や近年の鉄製武器研究の進展を鑑み、改めて本稿では、西北九州地域と有明海沿岸地域を分析の主軸に据え、素環刀（註１）と大孔鏃の二器種を主に取り扱う鉄製武器として選択する。対象とする時期については、上記二種の鉄製武器の盛行期である、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭を中心に進める（註２）。

また、素環刀・大孔鏃と盛行期・衰退期をほぼ同じくし、西北九州地域から有明海沿岸、筑後川流域を分布域とするなど、共通点の多い、方形透かしを持つ装飾器台である「肥前型器台」を比較資料として用いることで、両地域間のつながりについて、整理・考察を深めることを目的としたい。

表１　素環刀型式分類

| 型式 | | 法量 | 環頭部 | 茎尻 | 茎平面 | 関 | 環断面 | 茎断面 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ型 | a1 類 | 大刀 | 対称 | 直線 | 直 | 無・微 | 円形 | 三角形・台形 |
| | | 小刀 | | | 直・微狭 | | | |
| | | 刀子 | | | 直・微狭 | | | |
| | a2 類 | 大刀 | | | 直 | 有 | 円形 | 台形・（矩形） |
| | | 小刀 | | | 直・広 | | 円形・（矩形） | |
| | | 刀子 | | | 直・広 | | 円形・矩形 | （台形）・矩形 |
| | b1 類 | 刀子 | | 湾曲 | 直・微広 | 無・微 | 円形 | 矩形 |
| | b2 類 | | | | 微広・広 | 有 | 矩形 | |
| | C2 類 | 刀子 | | | 微狭 | 有 | 矩形 | 矩形 |
| Ⅱ型 | a1 類 | 刀子・小刀 | 非対称 | 直線<br>斜線 | （直）・微広 | 無・微 | 矩形 | 台形・矩形 |
| | a2 類 | | | | （微広）・広 | 有 | | |
| | b1 類 | 刀子 | | 湾曲 | （直）・微広 | 無・微 | 矩形 | 矩形 |
| | b2 類 | 刀子・小刀 | | | （直）・広 | 有 | | |
| | C1 類 | 刀子 | | | 狭 | 無・微 | 矩形 | 矩形 |
| | C2 類 | | | | | 有 | | |

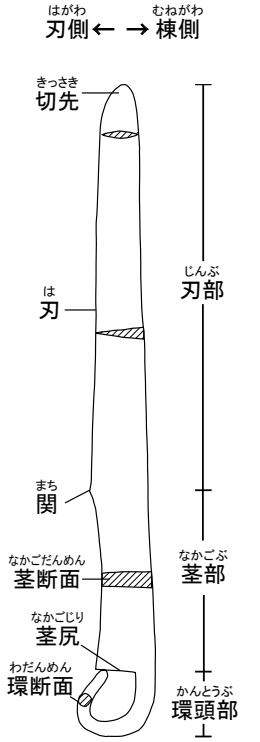



図１　素環刀各部名称

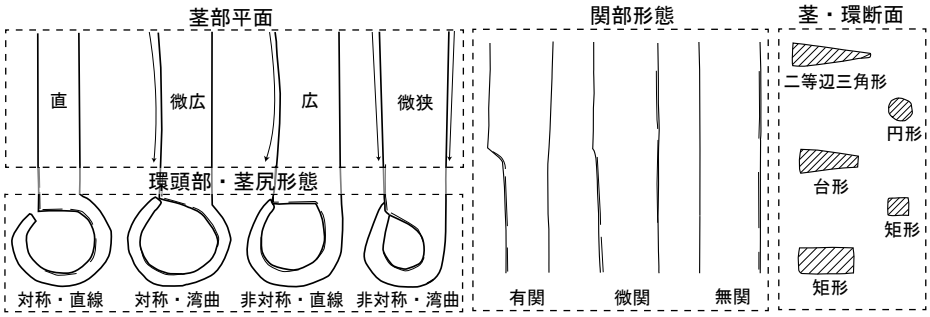



図２　素環刀分類属性模式図

## Ⅱ．素環刀と大型透孔付鉄鏃研究の現状

まずはじめに、素環刀（図１）と大孔鏃（図４）の研究略史と型式分類を確認しておきたい。

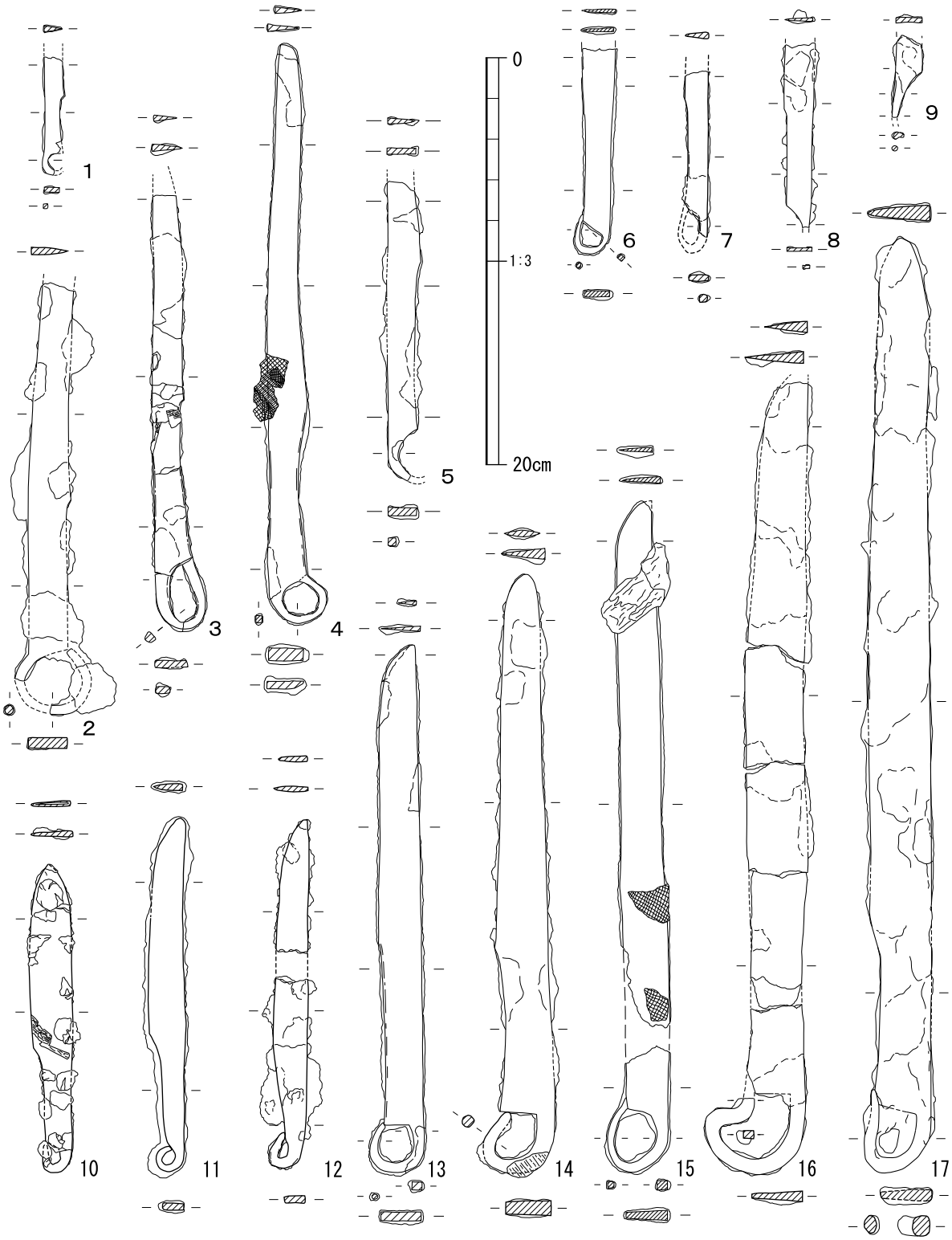
（１）素環刀

素環刀については、これまで法量や環・茎・関の平面形に注目した分類のもと、その製作地を大陸または列島産とみるかで議論されてきた（今尾 1982、児玉 1982、池淵 1993、川越 1993 など）。これに対し、近年では、新たに茎断面や環断面などの属性が導入され、より立体的に刀身形態・製作技法を把握することで、列島各地で特徴的な素環刀が製作されていたことが明らかになった（豊島 2005、立谷 2017）。

このような研究史の中で筆者は、鍛打による製作技法を反映する可能性の高い「環と茎尻の平面形」を最も重視し、環と刃部の造り出し方と連動する「茎部の平断面形」「関の深さ」「環の断面形」についても考慮した分類案を提示した（表１・図２）。なお、法量区分については、九州地方出土の素環刀の全長比較により、全長 35 ㌢と 56 ㌢付近に分布の変化が認められるため、これらを境に刀子・小刀・大刀に三区分している（立谷 2019・2020）。本稿では、各素環刀型式に対し、「Ⅱ型 a2 類」のように表示することとし、関の深度を特に重視しない場合は、英数字を割愛し、「Ⅱ型ｂ類」と示す（註３）。

筆者が分類した素環刀のうち、本稿内で重要になるのは、九州地方において弥生時代後期後半に出現・急増し、古墳時代前期前半頃に消滅するⅠ・Ⅱ型ｂ類である（註４）。前稿においては、各素環刀型式の分布を確認した上で、各地域の鉄器生産痕跡の有無や、その消費（廃棄）方法、大陸・半島の素環刀からの製作技法の改変・省力状況を加味して、その製作候補地を推定した（立谷 2020）。

その中で、本稿に関係する内容をまとめると、まずⅡ型ａ類（図３－ 13 ～ 17）については、茎尻を直線的、茎断面を台形に仕上げる点など、他の型式と比べ工程上の簡略化がみられず、その類例も朝鮮半島の北漢江流域に集中して確認されていることからも、舶載品と位置付けた。次のⅡ型ｂ類・Ⅰ




1. 汐井掛Ａ143木棺墓：Ⅰ型b2類
2. 中原SP13418木棺墓：Ⅰ型b2類
3. 宮ノ前A99号住居跡：Ⅱ型b2類
4. 門前2号箱式石棺墓：Ⅱ型b2類
5. 古子ＳＣ06木棺墓：Ⅱ型b2類
6. 門前1号土坑墓：Ⅱ型b1類
7. ヒルハタ205・6住居跡：Ⅱ型b2類
8. 中原SK13425土坑墓：Ⅱ型b1類
9. 中原SX12012周溝：未製品
10. 池部朝鍋41号住居跡：Ⅱ型c2類
11. 吉野ヶ里SH081住居跡：Ⅱ型c2類
12. 唐原SC－71：Ⅱ型c1類
13. 門前3号箱式石棺墓：Ⅱ型a1類
14. 高津尾南3号箱式石棺墓：Ⅱ型a2類
15. 門前4号箱式石棺墓：Ⅱ型a1類
16. みやこSP1001石棺墓：Ⅱ型a1類
17. 元宮29号土坑墓：Ⅱ型a2類

**図３　Ⅰ型ｂ類とⅡ型素環刀の諸例（S＝1/3）**

表２　大型透孔付鉄鏃型式分類

| 型式 | | 関形態 | 穿孔分類 | 刃範囲 | 備考 | 柳田分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 柳葉式 | ＡⅠ型 | 直 | １・２類 | 横刃 | 槍形鏃 | 柳葉形Ａ類 |
| | ＡⅡ型 | ナデ | １・２類 | 横刃 | | |
| | ＢⅠ型 | 無 | １～３類 | 先刃 | 圭頭鏃を包括 | 柳葉形Ｂ類・圭頭形 |
| | ＢⅡ型 | 無・微 | ２～４類 | 横刃 | | 柳葉形Ａ類 |
| | Ｃ型 | 無 | ２・３類 | 横刃 | 椿葉鏃 | 柳葉形Ｃ類 |

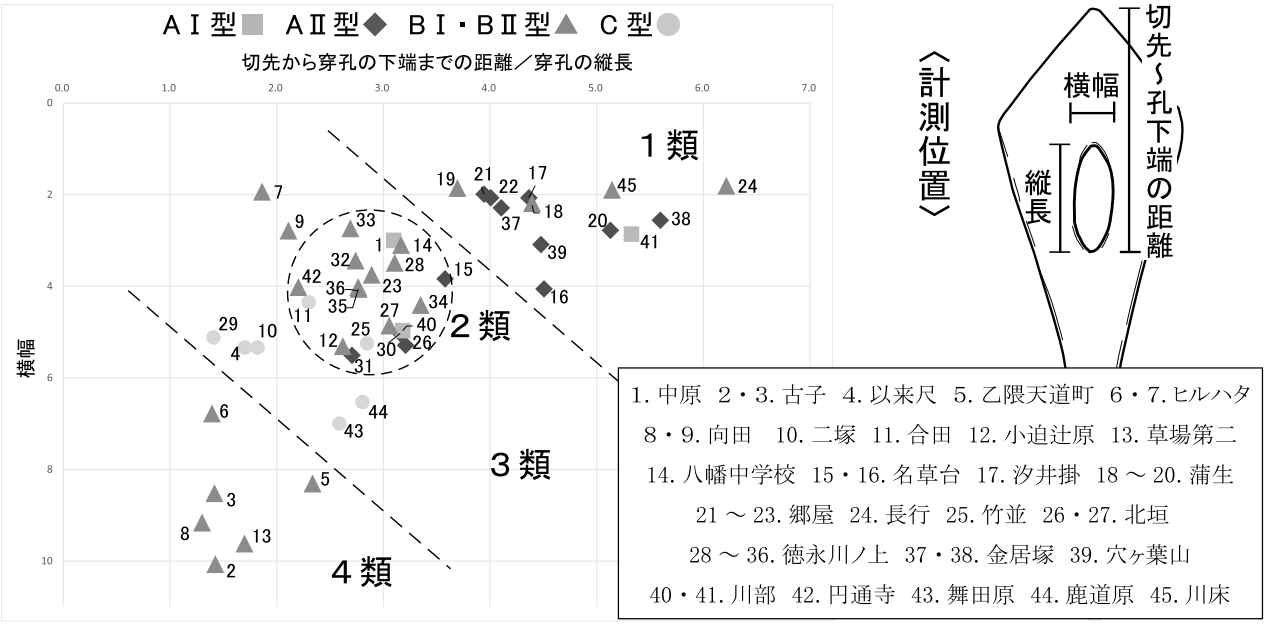



図４　大型透孔付鉄鏃の法量分布図（左）と計測位置（右）

型ｂ類（図３－１～８）については、環をわずかに棟側に曲げるか否かという点にしか形態差がないことにくわえ、中原遺跡において、棟側に環を曲げるⅠ型ｂ類の特徴を持ちながら、Ⅱ型ｂ類に酷似した未製品（図３－９）が出土していることから、両型式が唐津平野産である可能性を指摘した。

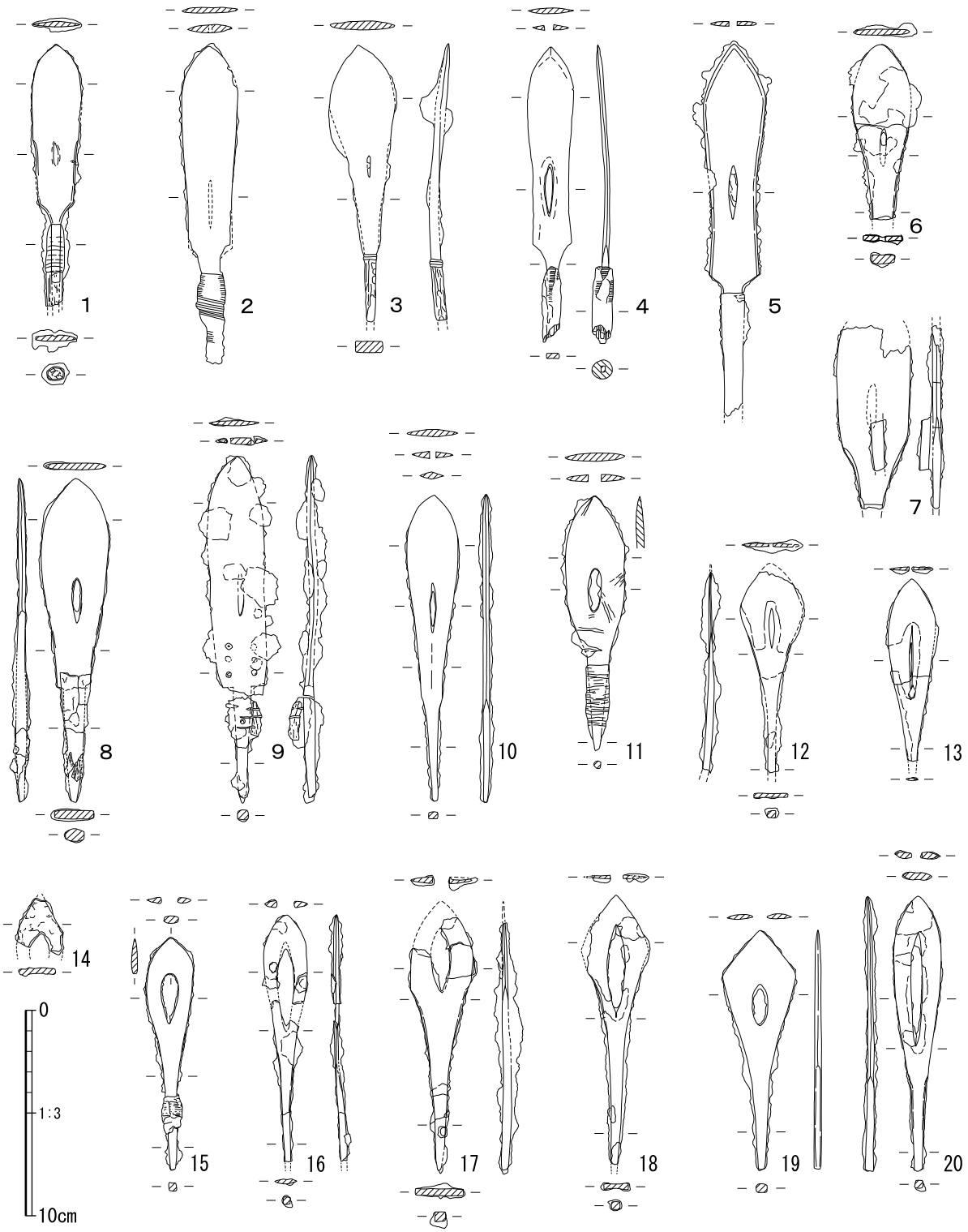
最後に、Ⅱ型 c1 類・c2 類（図３－ 10 ～ 12）は、それぞれ福岡平野・中九州地域に分布がまとまる。両型式は、関・茎・環を明瞭に区別しておらず、舶載品と比べ最も製作技法の簡略化・改変がみられる。このⅡ型ｃ類の分布がまとまる両地域では､当時活発な鉄器生産が行われていたと考えられることから、分布域の近隣で製作された在地生産品であると考えた。

（２）大型透孔付鉄鏃

次に、大孔鏃にかんしては、柳田康雄氏による四分類案（表２：右端）に基づく、弥生時代後期～古墳時代前期の編年案を土台とする (柳田 1997)。この他に大孔鏃を主体的に取り扱った論考としては、管見の限り大澤元裕氏のものがある程度である。大澤氏は、副葬品以外の集落出土例を含めて大孔鏃を再集成し、出土遺構によって鏃の取り扱いの差が認められることを明らかにした。また、大孔鏃の時期区分についても言及し、その主体が弥生時代終末期～古墳時代前期前半にあることを追認した。

しかし、鏃身形態や透孔については、十分検討が行われたとは言い難く、その流通経路については、概念的見解にとどまっている（大澤 2006)。そのため筆者は、前稿において、鏃身の再検討を念頭に置き、「穿孔の位置」「長さ」「幅」などの特徴を反映するため、切先から穿孔下端部までの距離と穿孔の縦長の割合・穿孔幅の比率を計測し、鏃身形態と穿孔がある程度対応関係にあることを示した（図４)。

また、鏃身形態の細分については、柳田氏の分類案をもとに、関の有無・形態を重視しつつ、細分困難な一部の圭頭鏃と柳葉鏃については、包括してＢ型とした上で、川畑純氏の古墳時代鉄鏃に対する刃部の分類視点を参考に（川畑 2009)、鏃身部の先端に刃を持つものを「先刃」（ＢⅠ型)、鏃身部の




1. 蒲生76号石蓋土坑墓：ＡⅡ型1類
2. 金居塚13号墓：ＡⅡ型1類
3. 長行２号石棺墓：ＢⅠ型1類
4. 徳永川ノ上E4-3号棺：ＡⅡ型2類
5. 北垣８号石棺墓：ＡⅡ型2類
6. 八幡中学校17号墓：ＢⅠ型2類
7. 竹並A－15号墓南Ⅳ01土坑：Ｃ型2類
8. 川部Ｓ２号墓：ＡⅠ型2類
9. 中原SP13230木棺：ＡⅠ型2類
10. 徳永川ノ上CⅦ－44号墓：ＢⅡ型2類
11. 舞田原７号住居跡：Ｃ型3類
12. 向田８号石棺墓：ＢⅠ型3類
13. ヒルハタ77号住居跡：ＢⅠ型3類
14. 門前４号集石遺構：Ｂ型4類？
15. 草場第二33号石棺墓：ＢⅡ型4類
16. 古子墳丘盛土中：ＢⅡ型4類
17. 古子02号木棺墓外？：ＢⅠ型4類
18. 向田８号石棺墓：ＢⅠ型4類
19. 乙隈天道町B53号住居跡：ＢⅡ型4類
20. ヒルハタ64号住居跡：ＢⅡ型4類

**図５　大型透孔付鉄鏃の諸例（S ＝ 1/3）**

側面部にまで刃を持つものを「横刃」（ＢⅡ型）として細分を行った（註５）。これによって、大孔鏃分類は、鏃身五分類に穿孔四区分を組み合わせた形で、「ＡⅡ型３類」のように示すこととする。

さて、前稿の検討によって得られた大孔鏃についての見解の中で、本稿内で最も重要なのは各鏃身型式が特定地域に集中して分布することにくわえ、鏃身に組み合わさる透孔にも偏在性が確認できることである。大孔鏃の詳細な分布状況については次章にゆずるが、関を持たない一群（Ｂ・Ｃ型）と、関を持つ一群（Ａ型）は、それぞれ有明海沿岸・筑後川上流域と周防灘沿岸地域に偏在し、明らかに異なった分布を示す。また、本稿では取り扱わないが、大孔鏃の空白域である福岡平野･中九州地域は、無茎三角鏃の鏃身に多数の小孔を穿つ「多孔鉄鏃」の集中域であることも示唆的である（立谷 2020）。

## Ⅲ．素環刀と大型透孔付鉄鏃の分布状況

素環刀と大孔鏃にかんする研究略史と、前稿の検討結果の概要をまとめたところで、両器種の弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭における九州地方内での分布を改めて確認しておきたい。

（１）素環刀の分布（図６）

Ⅱ型ｃ類素環刀は、福岡平野・中九州地域内にまとまり、地域外の分布は両地域の中間地点である筑紫平野の中部に限られる。また両地域は、多孔鉄鏃が卓越する地域であることも、特筆すべき事項である。その一方で、唐津平野（中原遺跡）で製作されたと考えられるⅠ・Ⅱ型ｂ類素環刀は、朝鮮半島中西部に類例を持つ舶載品とみるⅡ型ａ類と分布域・出土遺跡を共有しつつ、より広範囲に点在する傾向にある。これは、自家消費量を圧倒的に超える生産量が指摘されながら（土屋 2014）、その供給先が唐津平野内にみえない、中原遺跡産鉄器の流通先を示す可能性が考えられる。また同時に、Ⅱ型ａ類とⅠ・Ⅱ型ｂ類素環刀が同様の流通経路で運ばれていた可能性も示唆する。

（２）大型透孔付鉄鏃の分布（図７）

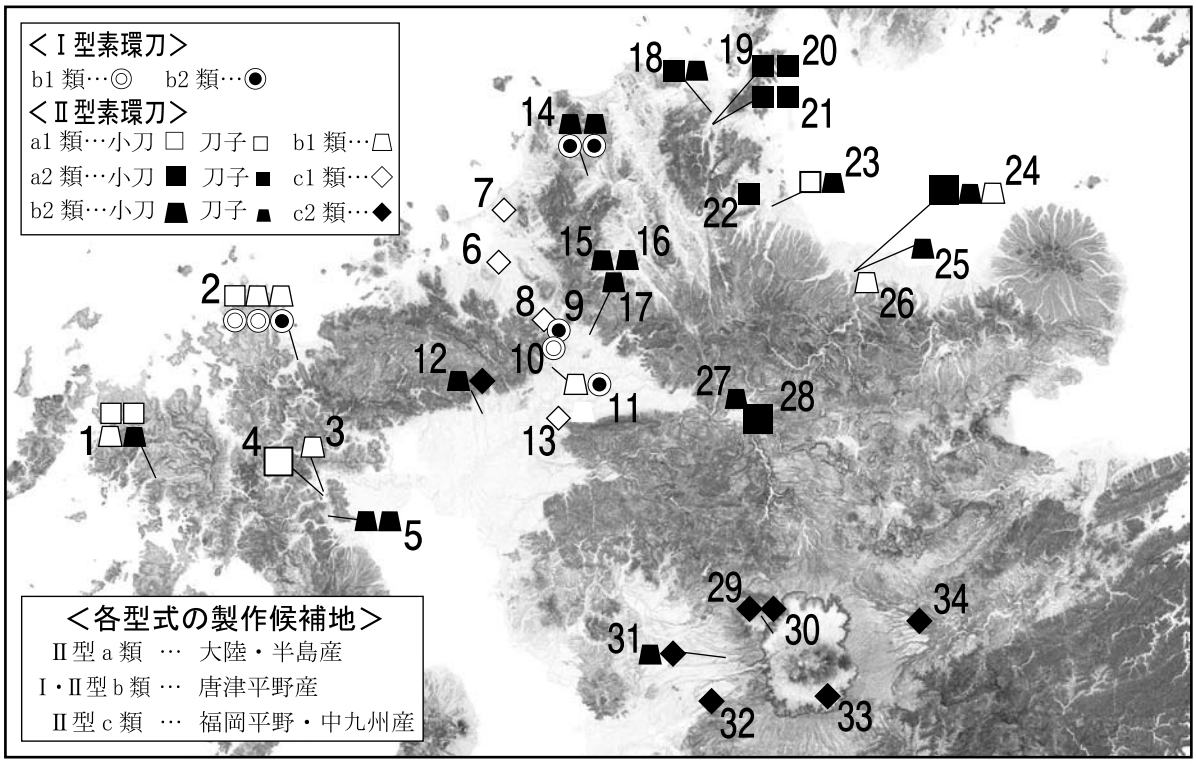
九州地方内において、鉄鏃の身部に大小の穿孔を施す資料に地域性が存在することについては、前稿においてすでに言及している。具体的には、関の無いＢ・Ｃ型の鏃身を持ち、３・４類に区分される超大型の透孔を穿つものが、有明海沿岸から筑後川上流域に分布しており、門前遺跡の破片資料（図５－14）をくわえるならば、西北九州地域にまで分布域を広げることになる。大孔鏃の類例が多い周防灘沿岸地域では、関の有無にかかわらず、徳永川ノ上遺跡が位置する京都郡一帯に２類の分布が多く、その周辺に１類が分布している状況がみて取れる。

（３）両器種の分布状況からみた肥前西部

多数のⅡ型素環刀や大孔鏃を保有する周防灘沿岸地域は、今回取り扱わないⅠ型素環刀や多孔鉄鏃も加味すると、九州地方内で突出して副葬鉄器量が多い。しかしながら、①鍛冶関連遺物や遺構の出土がみられない点、②九州各地で製作されたと考えられる資料の分布がモザイク状に混ざる点、③集落からの出土がほとんどない点などから、鉄製武器の消費地域としての様相が強いことをすでに指摘している（立谷 2017・2020）。西北九州地域と佐賀平野西部を含めた肥前西部でも、上記の三点が当てはまることから、消費地域としての様相が強いことは確かである（註６）。一方で、台付甕を主体とする地域の長崎県内の北端とされる門前遺跡において（宮崎 2012）、唐津平野産とみられるⅡ型ｂ類素環刀と、有明海沿岸地域に分布するＢ型４類大孔鏃の両者が出土している事実は注目される。また、有明海沿岸地域でも両鉄器の分布域は近似しており、同じ遺跡から出土する事例も複数確認できる。

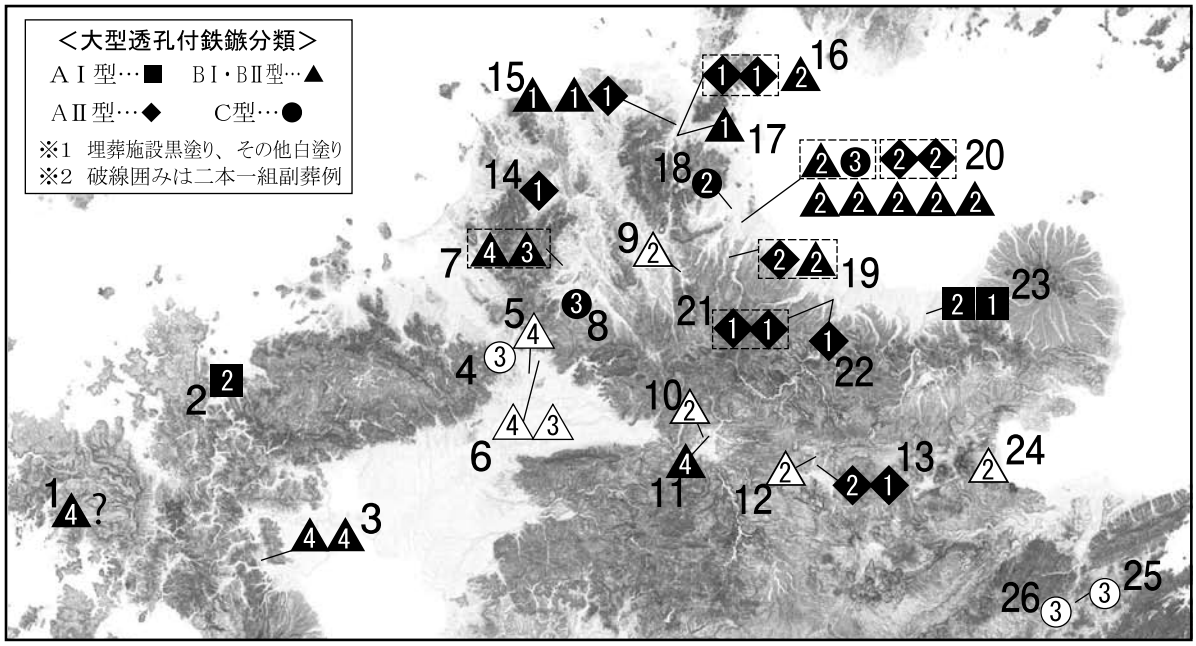
## Ⅳ．肥前型器台からみた九州地方諸地域の関連性

前章で整理した分布状況から、唐津平野と西北九州地域、そして有明海沿岸地域において、Ⅱ型ｂ




1. 門前　2. 中原　3. 茂手　4. みやこ　5. 古子　6. 博多　7. 唐原　8. 貝元　9. 以来尺　10. 三沢栗原　11. 内精　12. 吉野ヶ里　13. ヘボノ木　14. 汐井掛　15. 宮ノ前A　16. ヒルハタ　17. 琴ノ宮　18. 蒲生　19. 長行　20. 郷屋　21. 高津尾　22. 下稗田　23. 徳永川ノ上　24. 穴ヶ葉山　25. 鏡迫　26. 佐知　27. 朝日宮ノ原　28. 元宮　29. 狩尾・方無田　30. 狩尾・湯ノ口　31. 西弥護免　32. 塔平　33. 幅・津留　34. 池部朝鍋

**図６　本稿で取り扱う素環刀（Ⅰ型ｂ類・Ⅱ型）の分布**




1. 門前　2. 中原　3. 古子　4. 以来尺　5. 乙隈天道町　6. ヒルハタ　7. 向田　8. 二塚　9. 合田　10. 小迫辻原　11. 草場第二　12. 八幡中学校　13. 名草台　14. 汐井掛　15. 蒲生　16. 郷屋　17. 長行　18. 竹並　19. 北垣　20. 徳永川ノ上　21. 金居塚　22. 穴ヶ葉山　23. 川部　24. 円通寺　25. 舞田原　26. 鹿道原

**図７　大型透孔付鉄鏃の分布**

類素環刀とＢ型４類大孔鏃という共通した鉄製武器が分布している事実が確認できた。

これにより、唐津平野と西北九州地域、筑後川上流域を含む有明海沿岸地域の関連性が想定可能となった。また、この中でもⅡ型ｂ類素環刀は、周防灘沿岸地域に多く分布するほか、九州地方外では、山口県朝田墳墓群や広島県大町七九谷遺跡など、西部瀬戸内地域にまで分布が確認できる。

鉄製武器以外の遺物の中で、唐津平野、西北九州・有明海沿岸地域にまたがって分布し、尚且つ弥生時代後期後半～終末期に盛行期を持つものとして、「肥前型器台」の存在が挙げられる。肥前型器台は、後述する研究史上でも、その系譜が瀬戸内地域にあることが指摘されており、上述したⅡ型ｂ類素環刀の存続時期や分布とも重なる点があり興味深い。

以上のことから、ここではまず、肥前型器台の研究略史を確認し、分布状況の整理を試みる。

（１）肥前型器台の研究略史

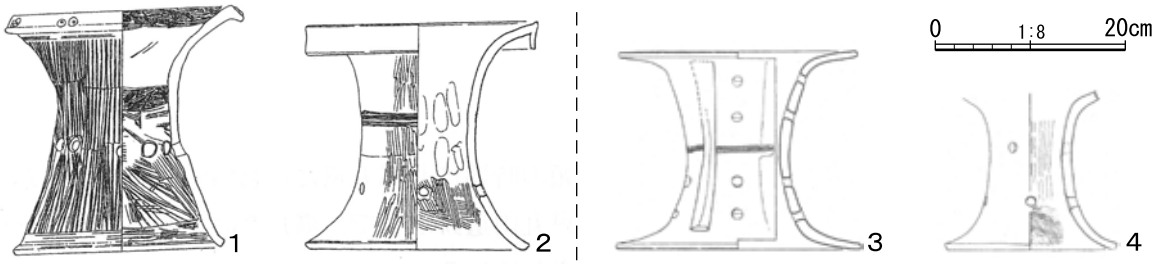
肥前型器台の研究史については、すでに宮崎貴夫氏によって詳細にまとめられているため（宮崎 2014）、ここでは、宮崎氏の論考を参考にし、本稿に関連する内容をまとめる。現在、「肥前型器台」と呼称される「透かしある器台」について最初に言及したのは、小田富士雄氏とされる。小田氏は、1967 年刊行の長崎市深堀遺跡の報告書内で、透かしのある器台が北九州には類例がなく、瀬戸内系土器に由来を求める必要があると、この時すでに核心を付いた推定を行っている（小田 1967）。この後、肥前型器台は、長崎･佐賀両県の発掘調査によって類例を増やしていく。特に、南島原市口之津貝塚や、武雄市茂手遺跡の調査報告の際には、改めて西部瀬戸内地域との関連が指摘されつつも、この時点では有明海沿岸地域と瀬戸内地域を結ぶ中間地帯（北部九州）での類例に乏しく、その系譜の解明には至らなかった（松藤ほか 1975、原田 1986）。

2000 年代前半には、これまでの出土資料や宮崎氏による分類・変遷案（宮崎 1986）を踏まえた上で、上田龍児氏による研究がなされた（上田 2004）。上田氏の研究は、口縁部形態・筒部文様に基づく分類とその組み合わせの時期的消長の指摘、その用途や系譜についてなど多岐にわたる。本稿内で特に重要なのは、東北部九州（本稿でいう周防灘沿岸）地域において、弥生時代後期前半には、筒部に円形透かしを施し、口縁部に瀬戸内地域の影響がみられる器台（図８－１・２）が出現していることに触れ、瀬戸内地域に出自があると考えられてきた肥前型器台は、直接的には東北部九州地域の影響を受け、成立したものであると指摘したことである。また、上田氏が示した分類・変遷案（図９）では、古い特徴を持つ肥前型器台は、「円形透かし＋方形透かし」または「円形透かし」のみを持ち、型式的に新しいものは、「方形透かし」だけのものが多い特徴にあるとされる（註７）。

近年では、肥前型器台に対して、九州地方各地の類例が再集成され、現在の到達点というべき様々な指摘がなされた（肥後考古学会編 2014、長崎県考古学会編 2015）。特に、熊代昌之氏・上田氏により、福岡県域の肥前型器台が再集成されたことによって、かねてからの課題であった、有明海沿岸地域と瀬戸内地域の中間地点の様相が明らかになったことは大きい（熊代 2014､上田 2015）。これにより、福岡県内において、周防灘沿岸地域に分布する器台は円形透かしが主体となる中で、筑後川流域の一部にも、円形透かしが確認される状況が明らかになった（図８－３・４）。くわえて、佐賀県域の資料を対象にした石橋新次氏の検討により、佐賀平野西部（武雄地域）に古い時期のものが多い傾向が指摘され、武雄地域を起点に、佐賀平野東側の他地域への展開・伝播が想定されている（石橋 2014）。

実際、武雄地域に位置する茂手遺跡や東宮裾遺跡、みやこ遺跡の資料（図９－２・３）をみても、円形透かしを伴っていることが多く、瀬戸内・周防灘沿岸地域からの影響や、有明海沿岸地域内での波及を推定する場合には、円形透かしを持つ器台の流入状況の把握が重要であると考えられる。

以上をまとめると、現段階において、九州地方全体の資料をもとにした、肥前型器台研究の素地は




1. 長野小西田遺跡　2. 赤幡森ヶ坪遺跡　　3. 宮の前 A 遺跡　4. 小田道遺跡

図８　周防灘沿岸地域（左）と筑後川流域（右）の円形透かしを持つ装飾器台（S＝1/8）

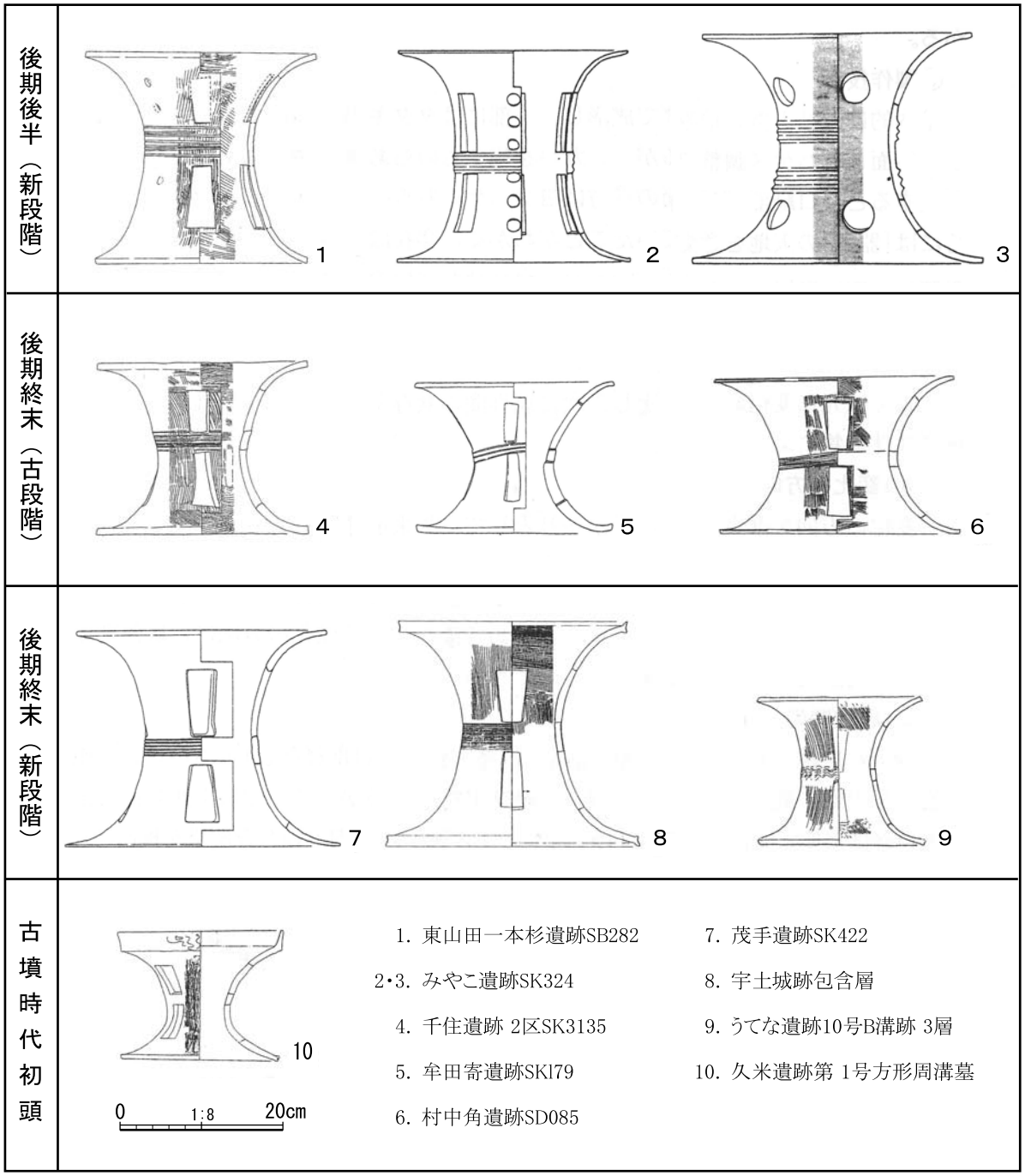



図９　有明海沿岸地域の肥前型器台の変遷（S＝1/8）

整いつつあり、円形透かしや口縁部の特徴など、瀬戸内地域の土器の影響を加味し、周防灘沿岸地域からの伝播状況を整理することが課題として考えられる。

しかし、本稿の紙幅や筆者の力量から、これ以上の肥前型器台へ考察を深めることは難しい。そこで今回は、有明海沿岸地域への周防灘沿岸地域からの影響を考えるために、九州地方北半部における透かしを持つ器台の出土遺跡を整理しておき、今後の検討に備えることとしたい。

（２）九州地方北半における肥前型器台とⅡ型ｂ類素環刀の分布

肥前型器台の分布図の作成にあたっては、安定した器種として肥前型器台が成立するとされる（上田 2004)、弥生時代後期後半以降の資料を対象に、2014・15 年に集成された各地の資料を参考にして古墳時代前期初頭以前までの時期幅で整理を行った。なお、上田氏が 2015 年に福岡県の資料の再検討を行った際には、方形透かしを主体とする肥前型器台と、肥前型器台と共伴することの多い、円形透かしを持つ装飾器台を区分していることから、方形透かし・円形透かしのみの出土遺跡と両者が出土した遺跡、または二種類の透かしを持つ器台の出土遺跡を区別して表示した（図 10)。

透かしを持つ器台の分布に着目すると、すでに各先行研究で触れられていることとも重なるが、瀬戸内地域の影響を受けた円形透かしを施す器台が周防灘沿岸地域と福岡平野に分布していることがわかる。西北九州地域と有明海沿岸地域では、方形透かしを持つ肥前型器台が卓越する一方で、佐賀平野西部と筑後川流域北半の両地域に、円形と方形透かしの両者を伴う遺跡が分布している状況がみてとれる。ここで注目したいのは、佐賀平野西部と筑後川流域北半に共通する状況として、前章の図６・７で示したように、Ⅱ型ａ・ｂ類素環刀やＢ・Ｃ型４類大孔鏃の集積がみられる点である。

このほかにも、大村湾沿岸・島原半島を除いた有明海沿岸地域・西北九州地域では、同一または近接する遺跡から、肥前型器台、Ⅱ型ａ・ｂ類素環刀、大孔鏃Ｂ型３・４類が出土している場合が多い。このことは、これら三つの遺物の伝播・流通ルートに深い関連があったことをうかがわせる。

## Ⅴ．九州地方北半部における伝播ルートと地域間交流

さて、Ⅲ・Ⅳ章において、素環刀・大孔鏃・肥前型器台の分布を確認した上で、冒頭で述べた各遺物出土遺跡の重複･近接状況を改めて示した。この章では、これらの出土遺跡の傾向から、当時の伝播･流通ルートについて、いくつかの想定を試みたい。この内、素環刀・大孔鏃については、前稿において流通ルートを想定したことがあるため、本稿では両鉄器と肥前型器台の比較を中心に進める。

（１）肥前型器台の有明海沿岸地域への伝播ルートについて

有明海沿岸地域における肥前型器台の伝播・成立については、瀬戸内・東北部九州地域がその故地として指摘されていたことはすでに述べた。しかし、有明海沿岸地域と両地域の中間資料が乏しいこともあり、近年でも瀬戸内系の「装飾器台」に排他的であった北部九州地域を経ずに、瀬戸内から九州東廻りで有明海へ入ってきた可能性が指摘されている状況にある（宮崎 2019)。

九州東廻りルートは、鉄器からはあまり様相がうかがえないが、南島原市今福遺跡では、群を抜いて肥前型器台が出土しており、弥生時代後期前半代において円形透かしを持つ器台が出土していることと合わせて、肥前型器台が「創作」された遺跡候補の一つと考えられている（宮崎 2019)。また、南九州地域でも、円形透かしを伴う装飾器台が存在することが指摘されている（上田 2004、中村・吉本 2015、河野・栗畑 2015)。このため、すでに宮崎氏によって述べられていることではあるが（宮崎 2015)、南九州地域から有明海沿岸への器台の流入・伝播ルートの有無の検証が求められるであろう。

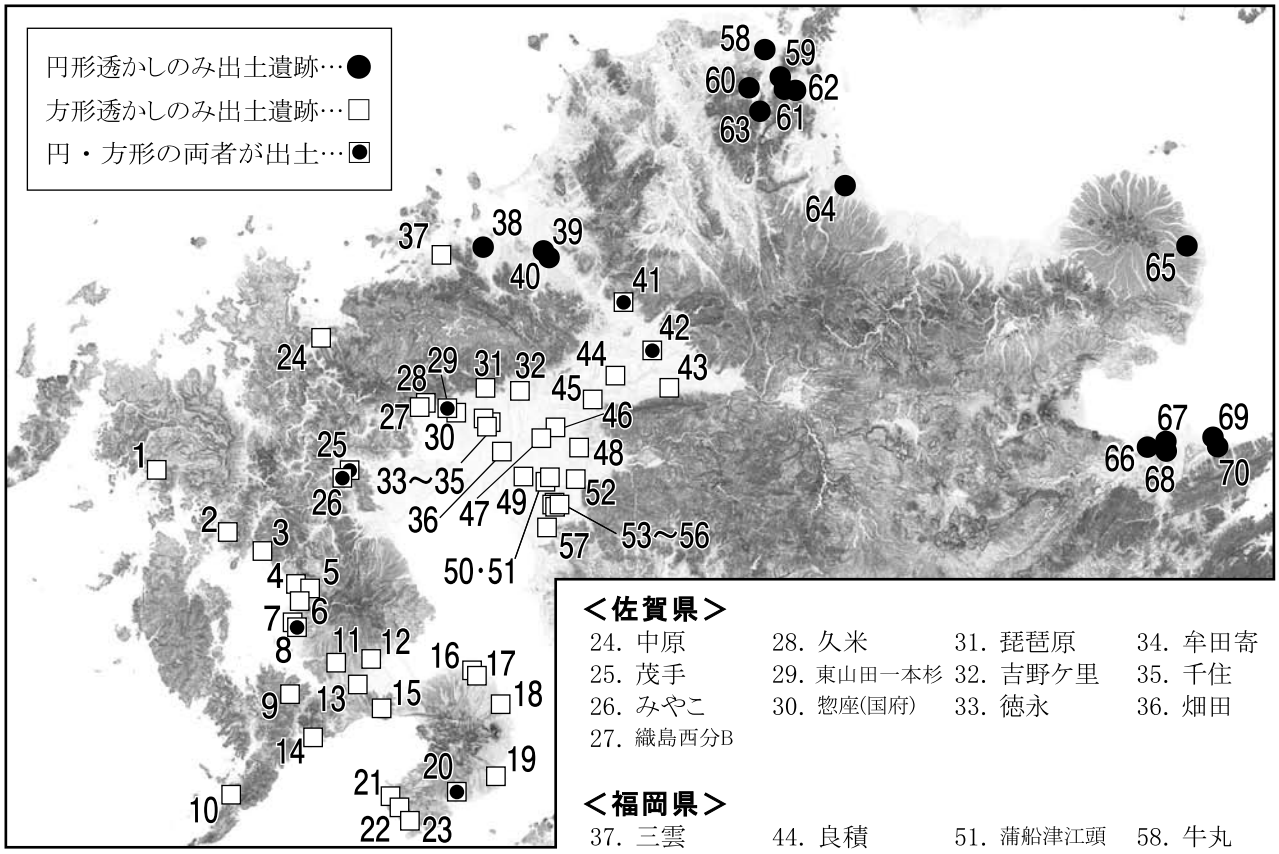
この一方で、今回確認した、素環刀・大孔鏃の分布に再度目を向ければ、肥前型器台が現状分布しない筑後川上流域と周防灘沿岸地域南部にもⅡ型ａ・ｂ類素環刀の集積が確認できる（図６)。またこ

の両地域は、地理的にも周防灘沿岸地域と有明海沿岸地域の中間地点でもあり、両地域で盛行する大孔鏃Ｂ型３・４類とＡ型１・２類の両者が混在して出土する地域でもある。さらには、墓域から出土することの多い大孔鏃が、集落から出土する事例が認められるのも、この中間地点付近や大野川流域などの別府湾岸の遺跡に限定されることも示唆的である（図７）。

つまり、現在大分県域である筑後川上流域（日田盆地周辺）が、周防灘沿岸地域と有明海沿岸地域の地理的中間地点であると同時に、鉄器の保有状況や消費習俗においても、両地域の要素が混在している地域であることが指摘できる。今後、土器などによる視点から筑後川上流域が、円形透かし器台が卓越する周防灘沿岸地域と方形透かし器台が卓越する有明海沿岸地域との結節点となっているかどうかを、九州東周りルートの詳細検討と合わせて検証することが必要である。

（２）有明海沿岸地域内での交易ルートについて

有明海沿岸地域内の交易ルートについては、石橋氏による研究成果を参考にする（石橋 2012・2014）。石橋氏は、肥前型器台の佐賀平野内への展開・伝播が、西部（武雄地域）を起点に東側へ進行したことを想定しているほか、肥前型器台と素環頭刀子の分布・保持を象徴として、武雄盆地と島原半島が有明海内の海上交流ネットワークの核として強く結びついていたことをすでに指摘している。




**＜長崎県＞**

1. 門前
2. 五反田
3. 白井川
4. 冷泉
5. 帯取
6. 稗田
7. 竹松
8. 平野
9. 伊木力
10. 深堀
11. 本明
12. 溝口
13. 小野曽屋
14. 有喜･上原
15. 西ノ角
16. 竜王
17. 松尾
18. 三会西川
19. 布津木場原
20. 今福
21. 口之津
22. 永瀬
23. 辻

**＜佐賀県＞**

24. 中原
25. 茂手
26. みやこ
27. 織島西分B
28. 久米
29. 東山田一本杉
30. 惣座(国府)
31. 琵琶原
32. 吉野ケ里
33. 徳永
34. 牟田寄
35. 千住
36. 畑田

**＜福岡県＞**

37. 三雲
38. 太田
39. 門田
40. 辻田
41. 宮ノ前A
42. 小田道
43. 水分
44. 良積
45. 大林(国府)
46. 道蔵
47. 上青木北大門
48. 森ノ木
49. 西蒲池池淵
50. 蒲船津水町
51. 蒲船津江頭
52. 津島九反坪
53. 小川柳ノ内
54. 藤の尾垣添
55. 山門北池
56. 山門ガラン
57. 七ツ家
58. 牛丸
59. 上清水
60. 上徳力
61. 長野フンデ
62. 長野小西田
63. 高津尾
64. 赤幡森ヶ坪

**＜大分県＞**

65. 安国寺
66. 下郡
67. 猪野新土居
68. 多武尾
69. 浜
70. 丹生川坂ノ市条理跡

**図 10　九州地方北半部における肥前型器台出土遺跡の分布**

今福遺跡や雲仙市竜王遺跡に代表される島原半島は、素環刀や大孔鏃の分布が確認できない地域である 。一方で、弥生時代後期後半以降、「島原半島系土器」が有明海沿岸地域を主体に広がることが明らかになっており（石橋 2015、宮崎 2015 など）、広域的有明海交流ルートを島原半島の人々が担っていたとする考えもある。また、筑後川流域から佐賀平野西部、そして諫早地峡（船越）を抜けて大村湾へ入る航路の存在も指摘されている（宮崎 2015）。

以上のような土器類を主体とした有明海沿岸地域の交易に関する先行研究の結果は、本稿でも前述した鉄製武器の集積状況と重なる部分が多い。つまり、佐賀平野西部地域や筑後川流域北半に素環刀や大孔鏃の特定型式が集積している現象がみられることは、両地域が当時の主要航路による交易に寄与する役割が大きかったことを示すと言えよう。一方で、同様に交易に関与していたと考えられる島原半島において、鉄製武器の様相が不透明である要因については、今後検証していく必要がある。

島原半島の人々の交易への関与についての一つの考えとして、宮崎氏の説を挙げておきたい。宮崎氏は、今福遺跡に多数搬入されている北部九州系の平底大甕が、米などを運ぶコンテナである可能性を推測しており、弥生時代後期以降に有明海沿岸平野部で需要が高まった「鉄」の対価物として、佐賀・筑後地方から大甕に入れた「米」を船に積み、北部九州へと運ぶ輸送を、島原半島の人々が担っていた可能性について言及している（宮崎 2012）。地理的に水田耕作地に恵まれなかった唐津平野以西の西北九州地域が交易の対価として「何」を求めていたのかいう問いに対し、宮崎氏の説は非常に魅力的であり、現状では筆者も同意しておきたい。

（３）「九州島西廻りルート」について

次に、有明海沿岸地域と唐津平野を繋ぐ、西北九州地域について目を向けたい。九州地方西部の海域（西海）は、古くは縄文時代晩期から南海産の貝の交易ルート、いわゆる「貝の道」とされ、北部九州地域への貝の運搬を西北九州の人々が担っていたとされるが、弥生時代中期後半頃になると、貝の運搬に対して西北九州の人々の関与が減少する代わりに有明海沿岸地域の影響が強くなり、貝の道は有明海を通るルートに変化したことが指摘されている（木下 1996）。ところが、この貝の道の変化は、西北九州地域を通るルートを完全に衰退させたわけではないようである。

中原遺跡の発掘成果をまとめた小松譲氏は、遺跡内から出土した肥後系・島原半島系土器の存在に着目し、その流入経路を九州沿岸の西廻りルートと想定した（小松 2013）。また、中原遺跡内の鍛冶工房において、肥前型器台や肥後系高杯が出土すること、中九州地域と類似する有茎鉄鏃の製作が行われていることから、当該ルートの活発化の要因は、朝鮮半島から中九州地域への鉄素材の流通に伴う唐津平野・西北九州地域と島原半島・肥後地域の首長間交流によるという卓見した指摘を行った。

この小松氏の指摘は、弥生時代後期以降、有明海沿岸地域において「鉄」の需要が高まったとする先の宮崎氏の説と重なる点がある。また、中九州地域に分布する素環刀が、舶載品や唐津平野産と目されるものよりも技法の改変・省力化が進んでいることはすでに述べた。この点から、舶載品や唐津平野産の素環刀の模倣製作が中九州地域で行われた可能性が考えられる。さらには、前述した中原遺跡の鍛冶工房から肥前型器台や肥後系高杯が出土することは、鉄器から想定可能な技術伝播が中原遺跡において行われたことをうかがわせる一つの要素となりえる。なお、祖型から離れていく形での鉄器の形態変化は、九州地方内の鉄鏃が、西北九州地域からの距離が遠くなるにつれ、その変化の度合いを増すという秦憲二氏の指摘とも共通するものである（秦 2014）。

以上の点から、中原遺跡や中九州地域で鉄器生産が活発となる弥生時代後期後半以降、西北九州地域西方の海域は、新たに「鉄の道」として機能していた可能性が考えられる。この西北九州地域の中でも、門前遺跡は、台付甕を主体とする地域の北限でありつつ、糸島系大甕の南限ともされ、北部九

州地域と有明海沿岸地域の交流の拠点として重要な役割を担っていたことが指摘されている（宮崎2012・2015）。くわえて、唐津平野産と目される素環刀と有明海沿岸地域に分布する大孔鏃の両者が出土している可能性があることも、門前遺跡の果たした役割を追認する要素と言える。

（４）玄界灘沿岸東進ルートについて

さて、これまで素環刀・大孔鏃・肥前型器台の分布や集積状況の整理を行ったことで、唐津平野から西北九州地域を通り、諫早地峡を越えて有明海へ入ったのち、筑後川を遡って日田盆地へ至り、さらには周防灘沿岸地域へ抜けるというルートの存在が推定可能となった。

この一方で、唐津平野から玄界灘沿岸を東進し、周防灘沿岸地域へ向かうルートの存在を想定することも必要である。この想定に重要なのが、宮若市汐井掛遺跡と宇佐市川部遺跡である。

まず、汐井掛遺跡の鉄製武器に目を向けると、唐津平野産の素環刀の集積が確認できるほか（図６）、福岡平野の関与が想定できるＩ型ａ類素環刀も三本出土しており、玄界灘沿岸の交易において重要な位置を占める遺跡だったことがわかる。また、汐井掛遺跡では、類例が限られるヒスイ製の鞆型勾玉

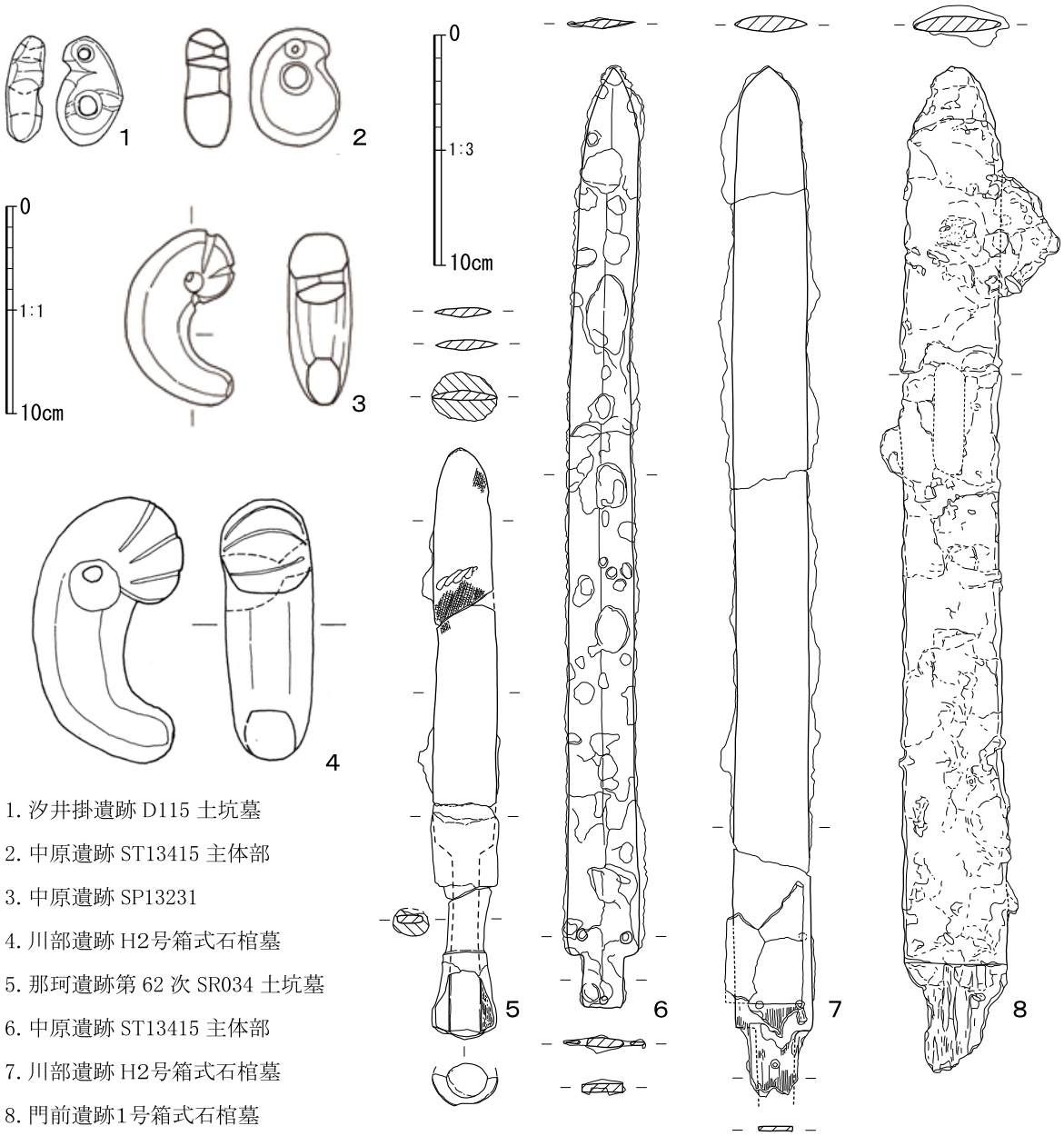



**図 11　鉄剣・ヒスイ製勾玉の図面（玉類：S＝1/1・鉄剣 S＝1/3）**

（図 11 －１）も出土しており、中原遺跡との密接な関係がうかがわれる。一方、川部遺跡では、素環刀の出土はみられないものの、中原遺跡出土例（図５－９）に類似した、ＡⅡ型２類大孔鏃（図５－８）が出土しているほか、この時期としては、非常に大型のヒスイ製勾玉（図 11 －４）が出土しており、ガラス製玉類が卓越する弥生時代終末期頃の九州地方内で特筆すべき事項である。

このように、中原遺跡出土鉄器との関係が推定できる遺跡において、ヒスイ製玉類が出土していることは、弥生時代の間、継続してヒスイ製玉類に固執し続けた唐津平野とのつながりを想定する上で非常に重要である（小松 2012・2020、米田 2017）。ヒスイ製玉類の副葬は、有明海沿岸地域では低調であることから、有明海沿岸を経由せずに、玄界灘沿岸を直接東進し、周防灘沿岸地域へと至る交易ルートが存在したことが推測できよう。

また、近年の鉄剣研究では、剣身を立体的に把握する観察視点のもと、全国的な資料の再検討が行われている（杉山 2015・2017、ライアン 2017・2021）。中でも、ライアン・ジョセフ氏によれば、中原遺跡出土鉄剣（図 11 －６）群は､いずれも鉄剣の身部断面が鎬を持った薄い菱形であり（薄菱鉄剣）、形態的に強い共通性を持ち、同様な背景化で生産された可能性があるとされている（ライアン 2021）。

ライアン氏は、弥生時代終末期以降に列島内で主体となる鉄剣は、刃部断面が薄いレンズ型を呈する（薄丸鉄剣） 特徴を持つことを指摘している（図 11 －５）。よって、弥生時代終末期において、少数派の鉄剣が中原遺跡に集中するという特異な状況が起こっていることとなる。

以上の点から、想像をたくましくすれば、弥生時代終末期前後の列島内において少数派をなす薄菱鉄剣の製作に、中原遺跡の関与が想定できよう。実際、ライアン氏によって提示された薄菱鉄剣の出土遺跡をみれば、汐井掛遺跡や飯塚市向田遺跡、久留米市祇園山古墳など、弥生時代終末期～古墳時代前期前葉の遺跡からの出土が確認でき、特に前二者は、Ⅰ・Ⅱ型ｂ類素環刀（図３－１）やＢⅠ型４類（図５－18）の大孔鏃の出土遺跡でもある。また、祇園山古墳も筑後川流域沿いに立地していることから、古墳時代前期初頭頃まで、玄界灘沿岸東進ルートや西廻りルートなどの弥生時代終末期の流通ルートが残存しており、中原遺跡の関与が推測される鉄器類が流通していた可能性が考えられる。

このような視点から想定すると、現状判断が保留されている資料の重要性や再検討の可能性も浮かび上がってくる。具体的には、先に触れた川部遺跡から出土している鉄剣（図 11 －７）は、錆で不明瞭なため位置付け困難とされているが（ライアン 2021）、大孔鏃・ヒスイ製勾玉からみた遺跡間の共通点や法量・平面形の類似から中原遺跡との関与を推定したい資料である。さらには、多量のⅡ型ａ・ｂ類素環刀が出土している門前遺跡でも鉄剣（図 11 －８）が出土している。報告書掲載図面からは、厚い凸レンズ状の身部断面と確認でき、厚手鉄剣かと判断できるが、同時に錆が分厚く覆っているようにもみえることから、その身部断面形状には再検討の余地があると考えられる（註８）。

（５）古墳時代開始における交易ルートの動揺

これまでみてきたようにこの章では、鉄製武器や特徴的な出土品から、古墳時代開始前後の流通・伝播ルートを想定し、交易に関わったとみられる各地域の交流の様相に迫った。現時点での推定ルートを、土器の動きを元にした宮崎氏の想定案（宮崎 2019）を参考にしつつ、図 12 に示す。

肥前型器台は、有明海沿岸沿岸の台付甕を主体とする地域を中心に、何らかの行為の際に使用されたと推定されている。また、器台出土地の在来系土器の胎土との違いが無いことから、方形の透かし孔をあけるという施文が、有明海沿岸の各地域で共有されていたと考えられている（檀 2015）。

この一方で、肥前型器台を共有しつつも、大孔鏃や多孔鏃、素環刀の偏在性からみて、有明海沿岸各地域ごとに特色の違いが認められる。この偏在性は、鉄器などの交易品に対する各地域の取捨選択・独自性の表れとも考えられ､台付甕･肥前型器台を使用する社会的つながり､いわゆる「肥「ヒ」連合体」

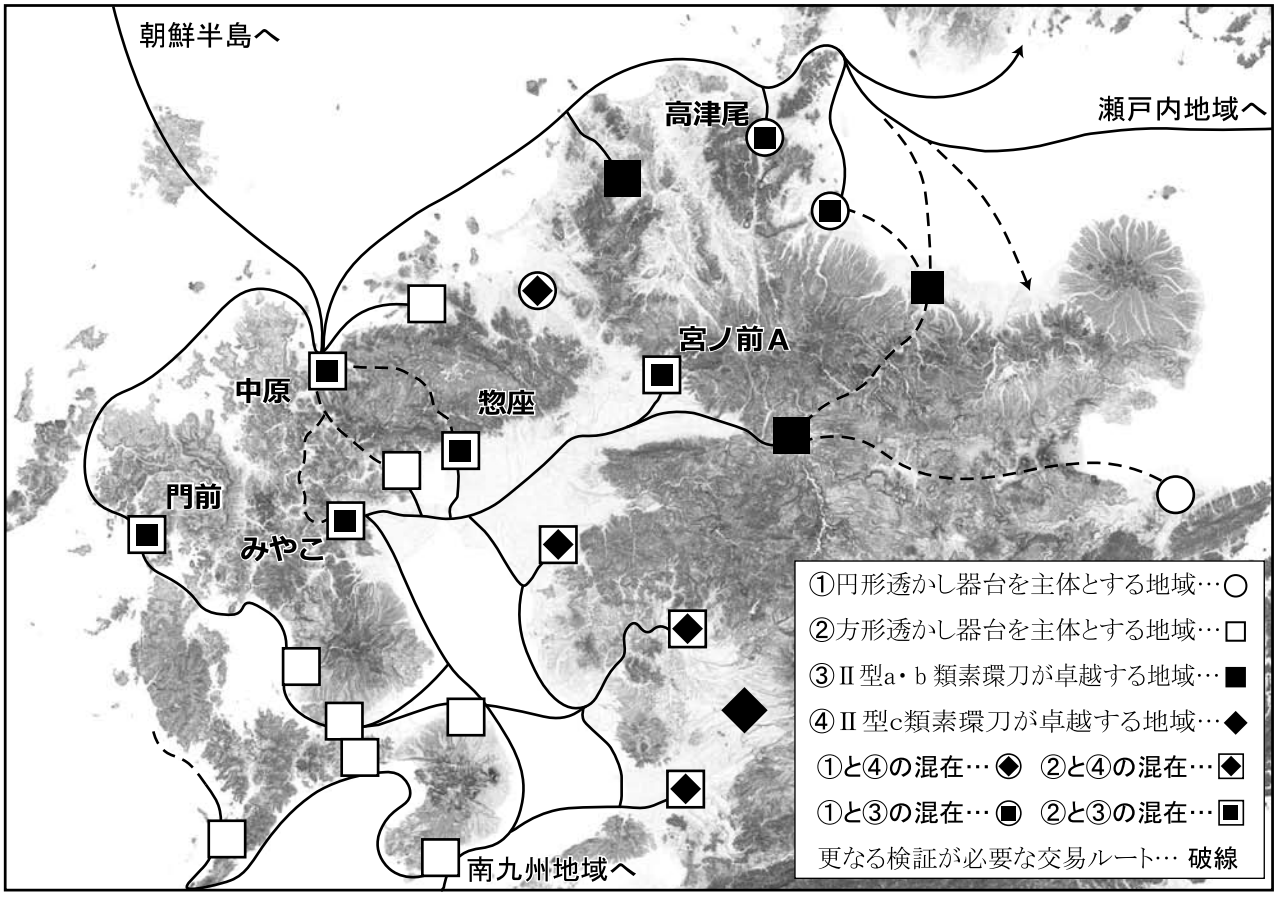



**図 12　Ⅱ型素環刀と透かしを持つ装飾器台をもとにした推定伝播ルート**

（宮崎 2019）の緩やかな結合状況を反映しているとも捉えられよう。

近年の合同研究会の成果により、弥生時代終末期前後、有明海沿岸地域で盛行した台付甕・肥前型器台は、庄内式・布留式系土器の流入によって、古墳時代前期前半には消滅することが指摘されている（長崎県考古学会編 2015）。この現象に並行して、古墳時代前期初頭以降、中九州地域や唐津平野（中原遺跡）で行われていた鉄器生産も、集落自体の衰退によって古墳時代前期後半以降に継続した可能性は低い（小松 2012、杉井 2018、美浦 2018）。さらには、この両地域で製作されていたと考えられるⅡ型 b・c 類素環刀も、肥前型器台と同様に、古墳時代前期前半には姿を消す。

この要因としては、古墳時代前期初頭（久住編年ⅡＡ期）にはじまるとされる博多遺跡群の鉄器生産との関係が推定できる（久住 2019、次山 2020）。博多遺跡群では、鞴羽口や粒状滓、多量の鍛造剝片が出土しており、精錬鍛冶や低温・高温鍛冶といった一連の工程が行われていたとされ、古墳時代開始期の鍛冶技術の革新と示す遺跡と評価されている（村上 2013）。また、久住猛雄氏によれば、弥生時代終末期後半～古墳時代前期初頭（ＩＢ～ⅡＡ期）の福岡平野において、楽浪系土器・馬韓土器の出土量が糸島半島を凌ぐようになり、対楽浪・帯方郡交易の中心が福岡平野へ移動し、「博多湾貿易」の成立に至ったことが指摘されている（久住 2007）。

したがって、北部九州における交易の窓口が糸島半島から福岡平野へと移り、福岡平野を核として、九州地方以東の各地域へ鉄素材・鉄器を含む品々が流通していく交易ルートが活発化した一方で、九州島西廻りルートをはじめとする九州地方内の弥生時代後期後半以来の鉄素材・鉄器の流通構造は変化を余儀なくされたとみられる。

古墳時代前期初頭以降、西北九州地域で大型鉄製武器が確認できなくなることはこの動揺を反映し

たものと考えられ、唐津平野と有明海沿岸地域を繋ぐ「鉄の道」は、この時期衰退の一途をたどったことが考えられるのである。

## Ⅵ. おわりに

本稿では、鉄製武器から推測される九州地方内の交易ルートに対し、土器から検討されてきた有明海沿岸地域の地域間交流にかんする成果との比較・検証を試みた。その結果、これまで整理されてきた土器の動きと連動するように、西北九州地域･佐賀平野西部･筑後川流域北半において、鉄製武器（Ⅱ型素環刀・大孔鏃）の注目すべき偏在性が明確になった。

一方で、島原半島や筑後川上流域（日田盆地）など、肥前型器台・鉄製武器のどちらか一方のみが多数出土する地域をどのように評価するのかという課題も浮き彫りになった。この点については、肥前型器台の主体・客体の傾向や、保有する鉄器の形態を含めて、より詳細に検討を行う必要がある。

また今回は、唐津平野を含む西北九州地域と有明海沿岸地域の関係性を検証することを重視したため、鉄製武器をⅡ型素環刀・大孔鏃に絞って検討を行ったが、本来はⅠ型素環刀・多孔鏃などの他地域産の鉄器の流通状況も考慮する必要がある。具体例としては、平戸市里田原遺跡や佐賀市琵琶原遺跡から出土した薄丸鉄剣や、大村市冷泉遺跡出土のⅠ型ａ２類素環刀は、唐津平野以外の北部九州地域で製作された可能性を考えておくべきであろう（杉山 2017・立谷 2020・ライアン 2021）。

本稿の目的とした、西北九州地域から有明海沿岸、筑後川流域の地域間交流の様相については、土器からの研究成果、指摘内容に依拠した点も多い。また、本稿中で触れることが出来なかった、唐津平野から背振山地を越えて佐賀平野へ至るルートや、日田盆地から周防灘沿岸地域へ抜けるルートなど、十分に検証出来ていない交流ルートも多数存在する。今後、鉄器類からより詳細な技術伝播・流通ルートを検証するには、武器以外の農工具なども含めたより多くの器種を対象として、資料集成などのの基礎的研究に今一度力を入れていくことが求められよう。

以上、現状では検証不足な点も多いが、本稿の整理・検討結果が、弥生時代後半期の鉄器類や、地域間交流の研究について何らかの契機となれば幸いである。

**【謝　辞】**

本稿の執筆にあたっては、唐津市末盧館主催の企画展『末盧国をたどる』（平成 30 年度）や『末盧より「西」を望む～西九州航路の盛衰と鉄をめぐる動静～』（令和２年度）の準備のための基礎調査や検討内容がもとになっている部分が多い。くわえて、令和元年に発表の機会を与えていただいた、第 16 回古代武器研究会での発表資料の作成や、翌年の論文執筆の際の成果が本稿を執筆する契機となったことは間違いない。また、日頃から意見を交換させていただいている唐津市教育委員会の面々や、資料確認・調査時に多大なるご協力を賜った関係機関ならびに協力者の方々へも改めて感謝の意を表したい。

また今回、『西海考古』第 12 号への投稿を快諾していただいた、古門雅高氏をはじめとする西海考古同人会の方々に末筆ながら感謝申し上げます。

**【註】**

**註 1**　本稿において、素環刀は素環頭（刀子・小刀・大刀）を包括する名称として用いる。ただし、法量区分によって別に説明が必要な場合は、この限りではない。

**註 2**　本稿で取り扱う資料の時期については、各鉄製武器研究者の時期比定（荒田 2019・杉山 2015、2017、ライアン

2021）を参照しつつ、蒲原氏・久住氏らをはじめとする九州各地の弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器編年に準拠する（蒲原 2017・久住 2015、2019 など）。また、肥前型器台については、長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会（長崎県考古学会編 2015）の資料集成を参考とした。

**註 3**　１類・２類の分類に関わる関の深さについては、関直上の刃部幅と関下部の茎部幅の比によって区分しており、茎部幅 / 刃部幅＝ 0.9 以上を１類、未満をと２類とする。なお、Ⅱ型 a 類･b 類に共通して、他の型式資料に比べ、刃部の研ぎ減りが確認できる資料が多いことから、両型式に限っては、関の深さを元にした細分はあまり意味をなさない可能性が高い。

**註 4**　Ⅰ型 b 類・Ⅱ型素環刀は弥生時代後期後半以降に後出し古墳時代前期前半に消滅する一方で、Ⅰ型 a 類素環刀は、最も早く弥生時代中期後半から後期前半に出現し、古墳時代前期以降も主体的に継続して存在する違いがある。

**註 5**　刃部範囲が図化されていない資料が多い現状では、弥生時代の鉄鏃にこの視点が十分生かされているとは言い難い。鏃身側面や、刃部範囲を示した実測図の蓄積が急務として挙げられる。

**註 6**　近年、大村市帯取遺跡でも弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の鍛冶関連遺構・遺物がみつかっている（柴田編 2021）。帯取遺跡の鍛冶炉は、床面を若干掘り下げたのちに、粘土を貼ることで炉床を構築しているとされ、砂丘上にあるがゆえに炉跡が検出されなかった中原遺跡の鍛冶炉を想定する上でも興味深い。また、後述する唐津平野から中九州地域へのルート上に位置する帯取遺跡での今回の発見は重要であり、大村湾周辺域でのさらなる事例の増加を期待したい。

**註 7**　この点に関連しては、宮崎氏も円形透かしを持つ茂手遺跡や吉野ヶ里遺跡出土器台が、肥前型器台成立以前の過渡的な様相を示している可能性について言及している（宮崎 2014）。

**註 8**　門前遺跡では、舶載品とみられるⅡ型 a 類素環刀も複数出土していることから、厚手鉄剣が舶載されていた可能性も十分考えられる。また、非常に困難なことではあるが、先述した鏃の刃部範囲と同様に、「鉄剣には鎬があるはず／べき」などといった先入観を排した上で、鉄製武器全般に対し、報告書掲載図面の再点検作業が求められる。

**【参考・引用文献】**


東 潮 1986「鉄・銅の武器―A 鉄剣 , B 鉄刀 , C 鉄戈 , D 鉄矛」『弥生時代の研究』９ 雄山閣

荒田敬介 2019「鉄製武器からみた弥生時代における西日本の地域間交流」『弥生時代における東西交流の実態―広域的な連動性を問う―』西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会合同シンポジウム実行委員会

石橋新次 2012「六角川流域の弥生時代集落」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』肥後考古学会・長崎県考古学会

石橋新次 2014「佐賀県における肥前型器台」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会

石橋新次 2015「佐賀県における台付嚢と透かしをもつ装飾器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察―古墳時代前半期の刀剣類を中心として―」『古代文化研究』第１号 島根県古代文化センター

池淵俊一 2003「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観』 第７巻 小学館

今尾文昭 1982「素環頭鉄刀考」『考古論攷』第８冊 奈良県橿原考古学研究所

上田龍児 2004「（１）器台形土器について」『長崎県･景華園遺跡の研究、福岡県京都郡における二古墳の調査、佐賀県･東十郎古墳群の調査』福岡大学考古学研究室調査報告第３冊　福岡大学人文学部考古学研究室

上田龍児 2015「福岡県の状況」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会

禹 在柄 1991「素環刀の型式学的研究」『待兼山論叢』史学編第 25 号 大阪大学文学部

会下和宏 2007「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」『日本考古学』第 23 号 日本考古学協会

大澤元裕 2006「杏仁形透孔付鉄鏃の特徴と展開」『古文化談叢』第 55 集 九州古文化研究会

大庭泰時 1986「弥生時代鉄製武器に関する試論―北部九州出土の鉄剣・鉄刀を中心に―」『考古学研究』第 33 巻第３号 考古学研究会

小田富士雄 1967「弥生土器」『深堀遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告書第５集　長崎県教育委員会

小田富士雄 1977「鉄器」『立岩遺蹟』福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会・河出書房新社

大庭康時 1991「北部九州における弥生時代の鉄鏃」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集

大村 直 1983「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第 30 巻第３号 考古学研究会

勝部明生 1981「弥生時代の鉄製武器」『三世紀の考古学』中巻 学生社

蒲原宏行 1991「古墳初頭前後の土器編年―佐賀平野の場合―」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』

第 16 集 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
蒲原宏行 2017「佐賀・唐津平野」『九州島における古式土師器』九州前方後円墳研究会
蒲原宏行 2019『弥生・古墳時代論叢』六一書房
川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
河野裕次・案畑光博 2015「宮崎県地域の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』
長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
川畑 純 2009「前・中期古墳副葬鏃の変遷とその意義」『史林』 第 92 巻 第２号 史学研究会
木下尚子 1996『南島貝文化の研究 - 貝の道の考古学』法政大学出版局
金 武重 2012a「原三国～百済漢城期鉄器および鉄生産集落の動向」『日韓集落の研究』日韓集落研究会
金 武重 2012b「原三国時代の鉄器生産と流通」『一般社団法人日本考古学協会 2012 度福岡大会研究発表資料集』
日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会
金 武重 2018「韓半島中部地域初期鉄器～原三国時代鉄器生産―北漢江流域を中心に－」
『土器・金属器の日韓交渉』「新・日韓交渉の考古学－弥生時代－」研究会
久住猛雄 2007「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』第 53 巻第４号 考古学研究会
久住猛雄 2015「「奴国の時代」の歴年代」『新・奴国展』特別展「新・奴国展」実行委員会
久住猛雄 2019「二・三・四世紀の土器と鏡―土器の併行関係と出土鏡からみた歴年代を中心として―」
『銅鏡から読み解く２～４世紀の東アジア』勉誠出版
熊代昌之 2014「福岡県における装飾器台の分布について」」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会
児玉真一 1982「鉄製素環刀―集団墓出土資料を中心に―」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上巻
森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
小松 譲 2012「３，中原遺跡出土石製勾玉類について」『中原遺跡Ⅵ』佐賀県教育委員会
小松 譲ほか編 2012『中原遺跡Ⅵ』佐賀県文化財調査報告書第 193 集 佐賀県教育委員会
小松 譲 2013「２，唐津地域出土の肥後系・島原半島系土器群」『中原遺跡Ⅶ』佐賀県教育委員会
小松 譲ほか編 2013『中原遺跡Ⅶ』佐賀県文化財調査報告書第 199 集 佐賀県教育委員会
小松 譲 2014「２，中原遺跡出土の弥生時代終末～古墳時代前期の鍛冶関連遺物」『中原遺跡Ⅷ』佐賀県教育委員会
小松 譲ほか編 2014『中原遺跡Ⅷ』佐賀県文化財調査報告書第 203 集 佐賀県教育委員会
小松 譲 2020「唐津地域における古墳時代初頭前後の社会変革と地域間交渉」
『「再考・末盧国」～知られざる鉄の邑～』 唐津市末盧館
柴田 亮編 2021『大村市 市内遺跡発掘調査概報』大村市文化財調査報告書第 45 集 大村市教育委員会
杉井 健 2018「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期有力首長墓系譜出現の背景」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第 211 集 国立歴史民俗博物館
杉山和徳 2015「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」『考古学研究』第 61 巻第４号 考古学研究会
杉山和徳 2017「弥生鉄剣論」『日本考古学』第 43 号 日本考古学協会
高倉洋彰ほか編 2012『一般社団法人日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』
日本考古学協会 2012 年度福岡大会実行委員会
立谷聡明 2017「弥生時代素環刀の地域性とその背景」『古文化談叢』第 79 集 九州古文化研究会
立谷聡明 2019「九州地方における鉄製武器の普及―刀剣・戈・有孔鏃を中心として―」第 16 回古代武器研究会発表資料集
立谷聡明 2020「弥生時代の九州地方における鉄製武器の普及～武器の消費傾向からみた生産と流通にかんする予察～」
『古代武器研究』Vol.16　古代武器研究会
檀 佳克 2006「有明海沿岸地域における前期古墳の動向」『前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
檀 佳克 2015「甕形土器と器台からみた熊本と周辺地域との交流」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』
長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
次山 淳 2020「倭王権の形成過程と博多遺跡群の鉄素材・鉄器生産－時間的な関係を中心に－」
『柳本照男さん古希記念論集－忘年之交の考古学－』柳本照男さん古希記念論集刊行会
土屋了介 2014「３，中原遺跡出土鉄製品・鉄片に関するまとめ」『中原遺跡Ⅷ』佐賀県文化財調査報告書
第 203 集 佐賀県教育委員会
坪根伸也 2015「大分県の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会
合同研究大会

豊島直博 2005「弥生時代における素環刀の地域性」『待兼山考古学論集―都出比呂志先生退任記念―』大阪大学考古学研究室
豊島直博 2010「第３節　韓国の鉄製刀剣と装具」『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
中村直子・吉本美咲 2015「鹿児島県域の台付甕と器台」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
長崎県考古学会編 2015『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
野島 永 1993『弥生時代鉄器の地域性―鉄鏃・鉇を中心として』『考古論集』潮見浩先生退官記念事業会
秦 憲二 2014「九州における弥生時代から古墳時代初頭の鉄鏃地域差の形成過程」『先史学・考古学論究Ⅵ』龍田考古会
原田保則 1986『茂手遺跡』武雄市文化財調査報告書第 15 集 武雄市教育委員会
肥後考古学会編 2014『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会
福島和明ほか編 2006『門前遺跡』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第４集 長崎県教育委員会
松藤和人ほか 1975『口之津貝塚及び口之津蜂火台遺跡調査報告』百人委員会文化財調査報告第５集 百人委員会
宮崎貴夫 1986「弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第 84 集 長崎県教育委員会
宮崎貴夫 2011「長崎県地域の状況について」『環有明海の交流―台付甕をめぐる諸問題―』肥後考古学会・長崎県考古学会
宮崎貴夫 2012「有明海をめぐる弥生時代研究の現状と課題」『有明海をめぐる弥生時代集落と交流』肥後考古学会・長崎県考古学会
宮崎貴夫 2014「肥前型器台および長崎県の状況について」『肥前型器台について』肥後考古学会・長崎県考古学会
宮崎貴夫 2015「長崎県の状況について」『有明海とその周辺をめぐる弥生時代の交流』長崎県考古学会・九州考古学会合同研究大会
宮崎貴夫 2019『長崎地域の考古学研究』昭和堂
美浦雄二 2018「唐津平野周辺地域の集落と古墳の動態について」『集落と古墳の動態Ⅰ－弥生時代終末期～古墳時代前期－』九州前方後円墳研究会
村上恭通 2007『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
村上恭通 2013「古墳時代前期における鉄器生産の諸問題」『東アジアの古代文化』114 号 大和書房
柳田康雄 1997「(2) 大型透孔付鉄鏃について」『徳永川ノ上遺跡Ⅲ』一般国道 10 号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第９集 福岡県教育委員会
米田克彦 2017「玉類の副葬からみた楯築墳丘墓の性格」『シンポジウム記録 11 楯築墓成立の意義』考古学研究会
ライアン・ジョセフ 2017「長茎鉄剣の成立過程」『古代学研究』第 212 号 古代学研究会
ライアン・ジョセフ 2021「弥生時代の北部九州における鉄器生産の再検討」『考古学研究』第 68 巻第１号 考古学研究会

**【遺跡報告書出典】**（発行年順、報告書は巻数省略、参考文献との重複分や表分布図に表示のみは割愛。）

池辺元明編 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅧ』福岡県教育委員会
池辺元明編 1980『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告書２』福岡県教育委員会
清水宗昭編 1985『舞田原』犬飼町教育委員会
原田保則編 1986『みやこ遺跡』武雄市教育委員会
小林義彦編 1987『唐原遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会
児玉眞一編 1989『乙隈天道町遺跡』福岡県教育委員会
高橋 徹編 1989『草場第二遺跡』大分県教育委員会
峯崎幸清編 1990『古子遺跡』塩田町教育委員会
柴尾俊介編 1991『高津尾遺跡４』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
七田忠昭ほか編 1992『吉野ヶ里遺跡』佐賀県教育委員会
毛利哲久編 1992『穂波地区遺跡群第４集』穂波町教育委員会
草場啓一編 1993『隅・西小田遺跡群』筑紫野市教育委員会
末永弥義編 1995『北垣古墳群』豊津町教育委員会
柳田康雄編 1996『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会

飛野博文ほか編 1997『金居塚遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会
長家 伸・榎本義嗣編 1999『那珂２２』福岡市教育委員会
野口典良ほか編 2005『八幡中学校遺跡』玖珠町教育委員会
真田博幸編 2006『菅生台地と周辺の遺跡ⅩⅦ』竹田市教育委員会
江藤和幸編 2010『川部遺跡南西地区墳墓群』宇佐市教育委員会
佐藤正義編 2011『ヒルハタ遺跡』筑前町教育委員会
石橋新次ほか編 2014『宮ノ前Ａ遺跡・柏木宮ノ元遺跡』筑前町教育委員会
幸時桂子・渡邉隆行編 2017『元宮遺跡５次』日田市教育委員会

**【挿図・表出典】**

図１・２：筆者作成。
表１：筆者作成。
図３－１～９、13 ～ 17 は筆者実測。10 ～ 12 は各文献より再トレース。
表２：筆者作成。
図４：筆者作成。
図５－６・８・９・12・13・16 ～ 18・20 は筆者実測。１～５、７、10、11、14、15、19 は各文献より再トレース。
図６・７：筆者作成。
図８・９：上田 2004 掲載図面を一部転載し、レイアウトを変更。
図 10 長崎県考古学会編 2015 掲載の各論考を参照し、筆者作成。
図 11 －１～４は各文献より一部転載。５～８は各文献より再トレース。
図 12：宮崎 2019 を参考に筆者作成。

※１　図６・７・10・12 の分布図 には、国土地理院電子地図を使用した。
※２　各再トレース資料については、原図から断面の配置などをレイアウトの統一のため変更している。
　　また、再トレース時の事実誤認による実際の資料との相違がある場合、すべて筆者に責がある。

# 前方後円墳分布周縁地域の社会

## －長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に－

古門　雅高

### はじめに

日本の西端に位置する長崎県の約３分の１弱は、前方後円墳の空白地帯である。同地帯を現在の行政区で示すと西海市、五島市、新上五島町、長崎市の一部となる。このような前方後円墳空白地帯および前方後円墳分布周縁地域の社会がどのようにして現れたのか。また具体的にはどのような社会であったのか。このことは筆者が長年、関心を寄せてきたテーマであった（註 1)。そのような折り、2011 年（平成 23）から始まった九州新幹線西九州ルート建設に伴う大村市竹松遺跡の緊急発掘調査で古墳時代の集落や墳墓が発見・調査されたことを契機に、筆者は可能な限り本県本土部の古墳時代前期および中期の墓制や社会の一端を明らかにしようと考えるに至った。

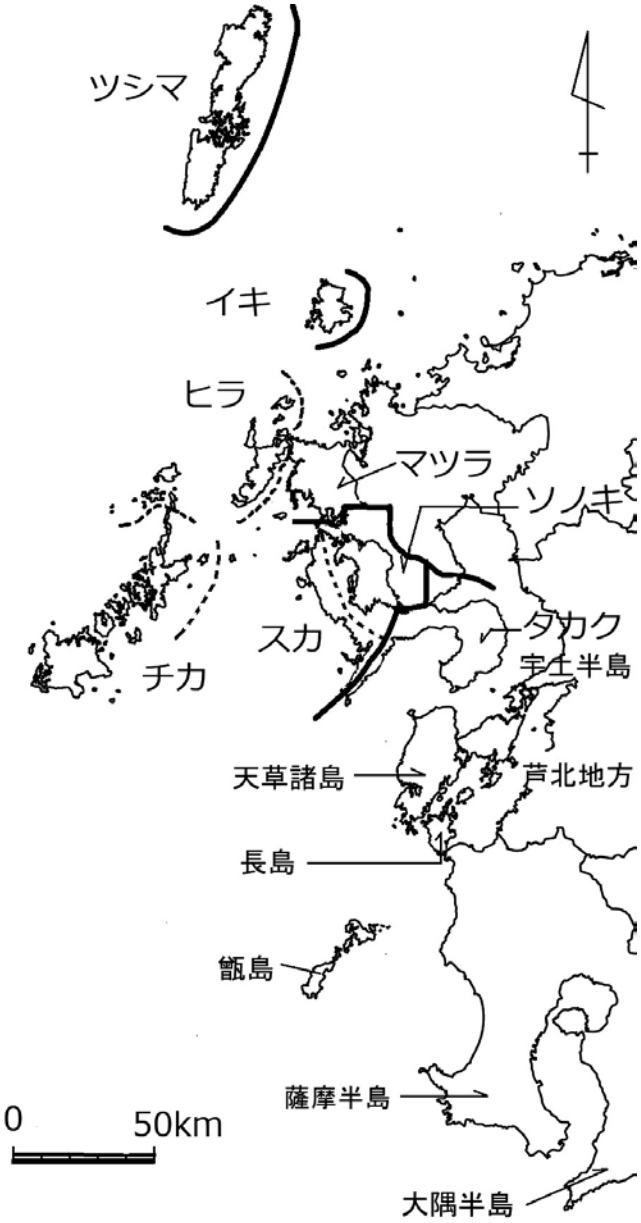
本稿を執筆するにあたっては土師器編年に基づく時間軸を設定し、墳墓や集落などの変遷を追うことによって社会の動きを考察するようにした。

また当時の社会復元にあたっては、我が国の古墳時代に共通して出土する遺構や遺物あるいは習俗が、本県本土部ではどのような出土状況や分布状況を示すのかを把握し、今後の本県の古墳時代社会研究の基礎資料を提供することに努めた。

さらに九州西岸に位置し、同じく前方後円墳分布周縁地域である熊本県天草地方・同県芦北地方、鹿児島県薩摩半島の古墳研究の成果を援用しながら、本県本土部の古墳時代の社会を評価した。

### １　長崎県の地域区分（第１図）

本県の古墳時代社会の考察を行う前に、本稿で扱う長崎県の地域区分に触れる。区分の基礎となるのは律令時代の国郡制である。離島を含めた長崎県の県域は、九州島がそのまま入る広さでありながら、律令時代の本県本土部には松浦（まつら)･彼杵（そのき)･高来（たかく）の、




第１図　本稿で用いる地域区分と地域呼称

わずか3郡しか設置されなかった。隣県の佐賀県が9郡、熊本県が15郡、鹿児島県が2国22郡を数えることから、いかに本県が少ないか理解できる。本稿では上記3郡をマツラ、ソノキ、タカクとカタカナ表記にしたうえで、律令時代の松浦郡内の郷で、平戸島（平戸市）を中心とした「庇羅郷」から引用したヒラ（註2）と、イキ（壱岐島）、ツシマ（対馬島）、チカ（五島列島）の島嶼部を加えた地域区分を用いる（註3）。本県本土部の律令時代の３郡は隣接する海域によって地域的なまとまりを見せており、このような区分は地域史においても近世まで通底しているため、古墳時代に遡らせても有効であろうと仮定したうえで、論を進めていく。

なお本稿ではチカ（五島列島）を本土部として整理した。また、ソノキの西部地域（西彼半島および長崎（野母崎）半島それぞれの西部）は、チカと五島灘を介して対岸の地にあり、両地域は縄文前期より土器および石器、さらには埋葬などに共通点が多いため、律令時代の当地の郷の名称「周賀」より引用し、「スカ」とする。

## ２　九州の古墳時代前期・中期の土師器編年研究史抄

九州の弥生時代終末から古墳時代中期の土師器編年の研究史は、2011年（平成23）に檀佳克によって整理されている（檀2011）。その際、壇は「九州における古式土師器は、単純に在来系→庄内式系→布留式系と変化するのではなく、各系統が混在する中で徐々に布留式系の土器群へと収斂していく。」と指摘し、古式土師器の変遷が従来考えられていたよりも複雑であることを示した（壇前掲：p.59）。

現在の研究状況は、1990年代末以降、久住猛雄が推し進めてきた系統論による研究が大きな潮流となり、九州各地の土師器研究に影響を与えていると言えよう。久住は従来の編年に見られる在来系と外来系という２系統の土器の共存という認識からの立論では不十分と指摘し、甕形土器のみならず他の形式も複数の系統の存在を考えるべきであると主張した。すなわち「畿内系」には「伝統的第Ⅴ様式系」と「庄内式系」が存在し、さらに「庄内式」系の進化形である「布留式系」があり、結果的には「布留式系」が他を駆逐していくことを示した。久住はその過程は地域間においても集落内においても複雑で、一様ではないと強調し、このことを「跛行（はこう）性」が存在すると表現した（久住1999）。

久住とともに九州の当該期の土師器研究を牽引しているのが蒲原宏行である。蒲原は主に佐賀平野ならびに唐津平野の資料を検討し、「在地系土器群が主体の惣座様式→畿内系・山陰系を中心とする外来系に急激に展開していく夕ヶ里式→北部九州的布留系土器様式が確立する土師本村１式→（中略）典型的布留系土師器群に転換し、在地系土器群がほとんど消滅する土師本村２式→中期へ向けて壺類を中心に器種・類型が著しく減少し、様式組成の単純化と土器自体の粗製化が進行する土師本村３式という順で推移する」と総括した（蒲原2017:p354、同2019:p172）。

以上のような久住や蒲原が説く九州における古式土師器の変遷は、本県本土部においても同様であったと推定されるものの、今日まで十分な検討はされていない。

一方、古墳時代中期以降の土師器研究は、柳田康雄の広域編年が唯一であったが（柳田2002）、2009年と2010年（平成22）に重藤輝行が北部九州を中心とした土師器編年を公にし、その中で研究史も整理している（重藤2009）。檀も指摘するように九州では当該期の土師器が「未検討のままである地域も存在して」いる現状であり（檀前掲：p.58）、まさに本県の状況と言えよう。重藤の論攷はそのような九州の研究状況にあって、今後の研究の指標となるものであった。

なお、本県の古式土師器研究史は松尾尚哉の論攷に詳しい（松尾2004）。

## ３　長崎県の古墳時代前期・中期の土師器編年

（１）本県の古墳時代前期・中期の土師器研究の現状

前述のように近年の本県本土部の古式土師器のまとまった研究には松尾尚哉の論攷がある（松尾前掲)。松尾は、筆者が 1999 年に発表した論攷を批評・論評しつつ、主に土器製作技術を中心に久住の系統論も視野に入れながら検討しており、本県では今日においてもこれを越える研究はないと言えよう。この論攷で松尾は、当地の古式土師器の形式ごとの型式組列まで提示しているが、近年調査された雲仙市の龍王（りゅうおう）遺跡や同市佃（つくだ）遺跡などの遺構一括資料の調査成果公表前であったため、当時は良好な資料に乏しく、編年や様式の設定までには至っていない。今後の本県の課題としなければならない。

最近の編年研究では、古墳時代前期の土師器編年を馬場晶平が試みており（馬場 2017)、中期は、かつて竹中（野澤）哲朗が行っている（竹中 2001・2003 ｂ)。雲仙市上篠原遺跡の調査を行った柚木亜貴子も、同遺跡の未公表資料を加えながら中期の資料を整理している（柚木 2005)

筆者も前述のように 20 年ほど前に古式土師器を検討したが、その時の結果を馬場編年や、特に近年の蒲原宏行の古式土師器編年(蒲原 1991, 2017)に照らした場合、下記のように整理することができよう。

筆者は 1997 年の時点で、島原市稗田原（ひえだばる）遺跡住居跡出土土器をⅣ期（柳田編年Ⅲａ）と認定し（古門 1997)、後の 1999 年時点ではそれをⅢ期とし、その中で大村市の黄金山（こがねやま）古墳から出土したと伝わる土師器を「Ⅲａ期」に、前述の稗田原遺跡住居跡出土土師器を「Ⅲｂ期」と修正した（古門 1999)。この修正を十分な説明を経ないままに行ったため、後に松尾尚哉に指摘を受けることになる(註 4)。

伝黄金山古墳出土の高坏は脚柱部が極めて特徴的で、円筒形でかつエンタシス状をなし、近年の蒲原編年では「土師本村 3 式古相」に該当する資料と思われる。蒲原は当期に 4 世紀末の実年代を与えている。一方の稗田原遺跡住居跡の資料は蒲原編年の「土師本村 3 式新相」以降に該当するようで、蒲原は当期を 5 世紀初頭以降としている（註 5)。

なお、筆者が過去に示した様式とその後の竹中、馬場各氏の様式の関係は表 1 に整理した。

第 2 図　本県本土部の古墳時代前期・中期の古墳と墳墓及び関連遺跡

表１　各氏編年の整合と本稿の時期区分

<table>
<tr><th>古門 1997</th><th>古門 1999</th><th>竹中 2001</th><th>竹中 2003</th><th>馬場 2017</th><th>本稿</th></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅰ期</td><td rowspan="2">Ⅰ期</td><td rowspan="2">Ⅰ期</td><td rowspan="6"></td><td>０期</td><td rowspan="2">Ⅰ期</td></tr>
<tr><td>Ⅰ期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Ⅱ期</td><td rowspan="2">Ⅱ期</td><td rowspan="2">Ⅱ期</td><td>Ⅱ期</td><td>Ⅱ期</td></tr>
<tr><td>Ⅲ期</td><td>Ⅲ期</td></tr>
<tr><td>Ⅲ期</td><td>Ⅲａ期</td><td>Ⅲａ期</td><td rowspan="2">Ⅳ期</td><td rowspan="2">Ⅳ期</td></tr>
<tr><td>Ⅳ期</td><td>Ⅲｂ期</td><td>Ⅲｂ期</td><td>稗田原段階</td></tr>
<tr><td>Ⅴ期</td><td>Ⅳ期</td><td>Ⅳ期</td><td>上篠原段階</td><td>Ⅴ期</td><td>Ⅴ期</td></tr>
<tr><td>Ⅵ期</td><td></td><td>Ⅴ期</td><td>矢房段階</td><td></td><td>Ⅵ期</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>重藤 2010</th></tr>
<tr><td rowspan="4"></td></tr>
<tr><td>Ⅲａ期</td></tr>
<tr><td>Ⅲｂ期</td></tr>
<tr><td>Ⅳ期</td></tr>
<tr><td>Ⅴ期</td></tr>
<tr><td>Ⅵ期</td></tr>
<tr><td>Ⅶ期</td></tr>
</table>

## ４　本稿で用いる土器様式

本稿の目的は古式土師器の編年ではなく、古墳時代前期・中期社会の復元であるため、既存の編年を援用しながらも、当該期の本県本土部の古墳の動向を把握するため、やや幅広の時間軸を用いる。前期は久住、蒲原の学説を参考に馬場編年を用い、中期は重藤編年を参考に、馬場と竹中の編年を用いて土器様式を設定する（第３図～第７図）（註６）。

なお本稿の土器様式は、資料不足により、遺構ごとの各型式の共時性や共伴関係などが未検討であるため、大まかな土器の変遷は追えるが、様式としては不安定であることをあらかじめ断っておく。

（１）古墳時代前期・中期の時間軸

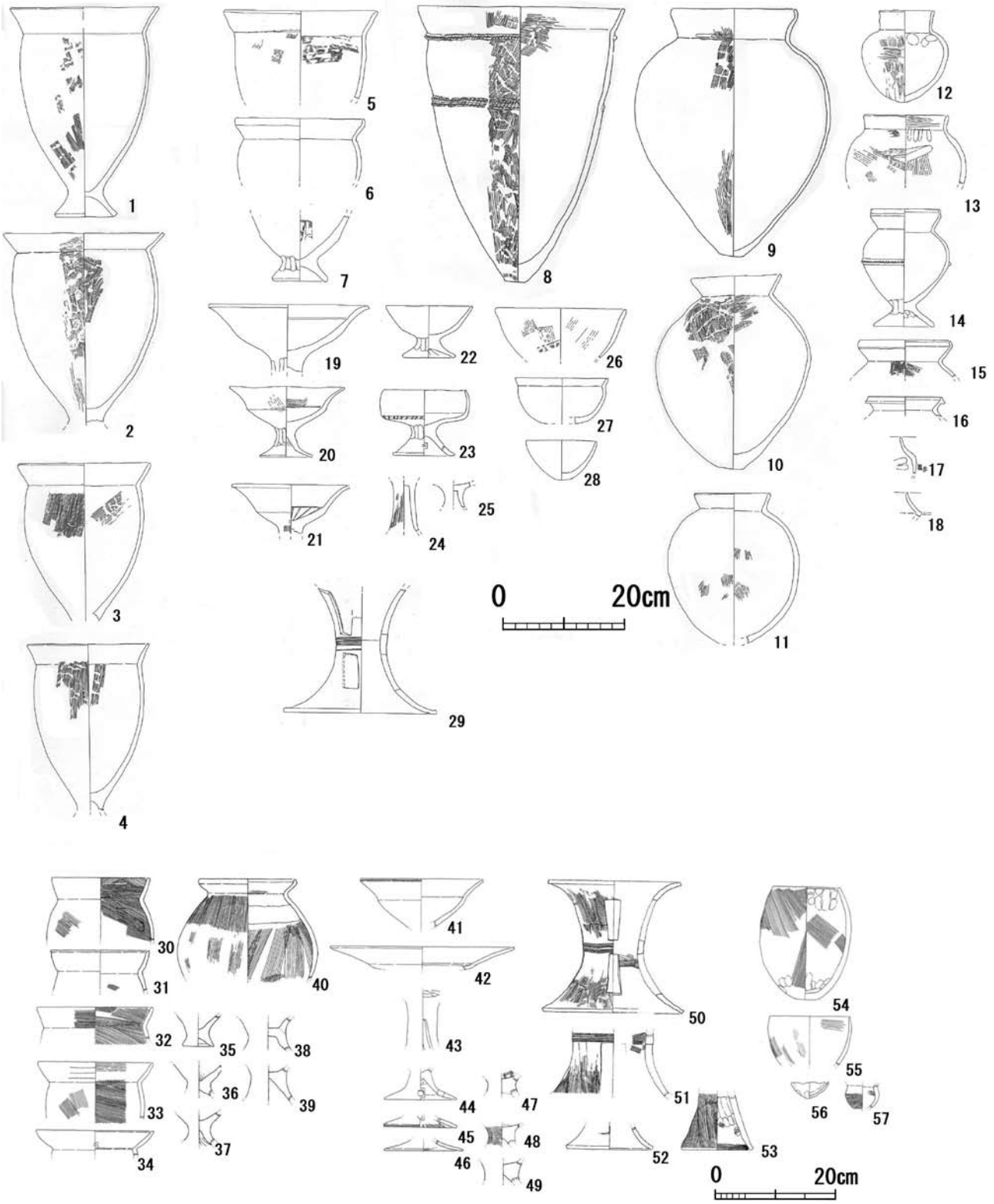
前述のように本県本土部の古墳時代社会を考察するにあたり、下記のような時間軸を用いて検討する。編年の基準となる遺跡は、共時性が高い遺構一括遺物が出土した遺跡のみをとりあげている。

また土器の認定には、蒲原や久住が提唱する系統別の分類を用いる。具体的には在地系土器（久住のＡ系統）、庄内式以降の伝統的第Ⅴ様式系土器（久住のＢ系統）、庄内式系土器（久住のＣ系統）、布留式系土器（久住のＤ系統）、山陰系土器（久住のＥ系統）と呼称する。久住の研究はさらに、これらの系統の土器が相互に影響しあう様相を明らかにしているが、そのような分析・検討は本稿の趣旨ではなく、筆者の知識の及ぶところでもないので、上記のような基本的な分類の適用に留める。なお、筆者が認定できないものは系統不明とする。さらに各地の土器様式との併行関係は、2017 年（平成 29）に本県で開催された第 19 回九州前方後円墳研究会長崎大会の研究成果などを参考にはしているが、あくまでも私見であり、オーソライズされたものではない。

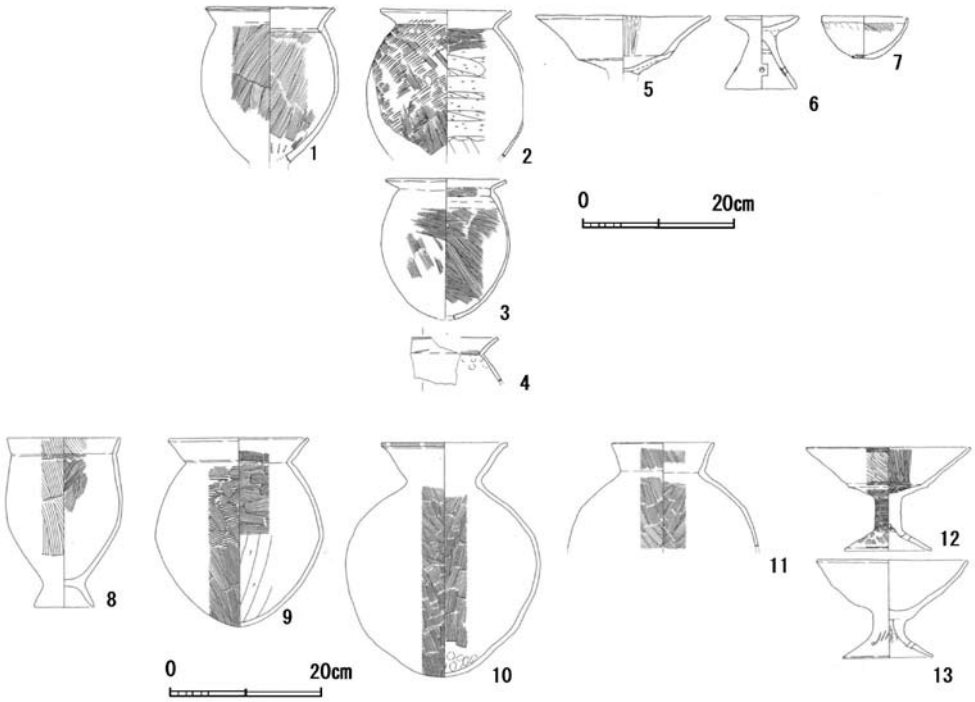
①第Ⅰ期（第 3、4 図）

馬場編年０期と同Ⅰ期を併せて第Ⅰ期とする。前半は馬場編年０期で、標式となる遺跡と指標となる土器は、冷泉遺跡６号住居（大村市教委編 2003）、龍王遺跡 13 区・14 区 SB6（雲仙市教委編 2008a）出土資料である（第３図）。冷泉遺跡出土土器は松尾直哉によって「当地域での古式土師器を伴う土器群の中で、一括資料では最も古い段階」の土器と位置付けられた（松尾 2004:p. 268）。後に、第 19 回九州前方後円墳研究会では、在地の台付甕（1 ～ 7）と伝統的第Ⅴ様式系土器の影響を受けて小型化した高坏（19 ～ 21）や、同じく伝統的第Ⅴ様式系土器の影響を受けた壺（10）、同小型壺（12）などの存在から蒲原編年の夕ヶ里式古相併行の土器群と評価された。

龍王遺跡 13 区・14 区 SB-6 の土器は、住居の床面と考えられる部分の直上から出土しており、住居廃絶時の一括廃棄の状態と考えられる。在地の台付甕（30 ～ 39）と、伝統的第Ⅴ様式系土器の影響を受けた甕（40）、同高坏（44）、北部九州の在地系の高坏（42）、冷泉遺跡と同じく伝統的第Ⅴ様式系土器の影響を受けた高坏（41）などで構成され、前述の冷泉遺跡の土器群と類似する。このように第Ⅰ期前半は、在地の土器と北部九州の在地系土器、さらには伝統的第Ⅴ様式系土器の影響を受けた土器




第３図　第Ⅰ期前半の土器（S=1/10）
冷泉遺跡６号住居跡：1 ～ 29、龍王遺跡 13・14 区 SB6:30 ～ 57




**第 4 図　第Ⅰ期後半の土器（S=1/10）　龍王遺跡 22 区 SB5:1 ～ 7、佃遺跡 84 区 SK1:8 ～ 13**

群から構成される時期と考えられる。

なお、龍王遺跡 14 区 SB-1 出土土器は、馬場編年では当該期とされているが、様式に加えるには形式不足であることや、在地の土器がほとんどを占めることを考慮し、本稿では対象としていない。

第Ⅰ期の後半は馬場編年Ⅰ期を充てる（第 4 図）。標式遺跡と指標となる土器は、龍王遺跡 22 区 SB-5 出土土器（雲仙市教委編 2006）、さらに佃遺跡 84 区 SK1（雲仙市教委編 2008b）出土資料もこの時期とした。前者は焼失住居で、床面直上の遺物と覆土の遺物が報告されているが、ここでは床面直上の土器のみ検討する。在地の台付甕（1）と系統不明の甕（2 ～ 4）、伝統的第Ⅴ様式系の高坏（5）、同器台（6）などから構成される。後者の佃遺跡の遺構は土坑であるが、土坑中の他の遺物が細片であるのに対し、これらの遺物は残存率がいずれも 50%以上で、局所的に集中して出土したため、一括廃棄の資料と考えられる。在地系の台付甕（8）、庄内系の甕（9）、伝統的第Ⅴ様式系の壺（10, 11）、同高坏（12）などで構成される。馬場編年では後続するⅡ期とされたが、庄内式系の影響を受けた土器の存在から、筆者は当該期に属すと判断した（註 7）。

したがって本稿第Ⅰ期後半の土器群は、在地の土器に加えて、伝統的第Ⅴ様式系の土器と庄内式系土器の影響を受けた土器群からなり、他地域との併行関係は、蒲原宏行の夕ヶ里式新相、久住猛雄のⅡB 期にほぼ併行すると考える。

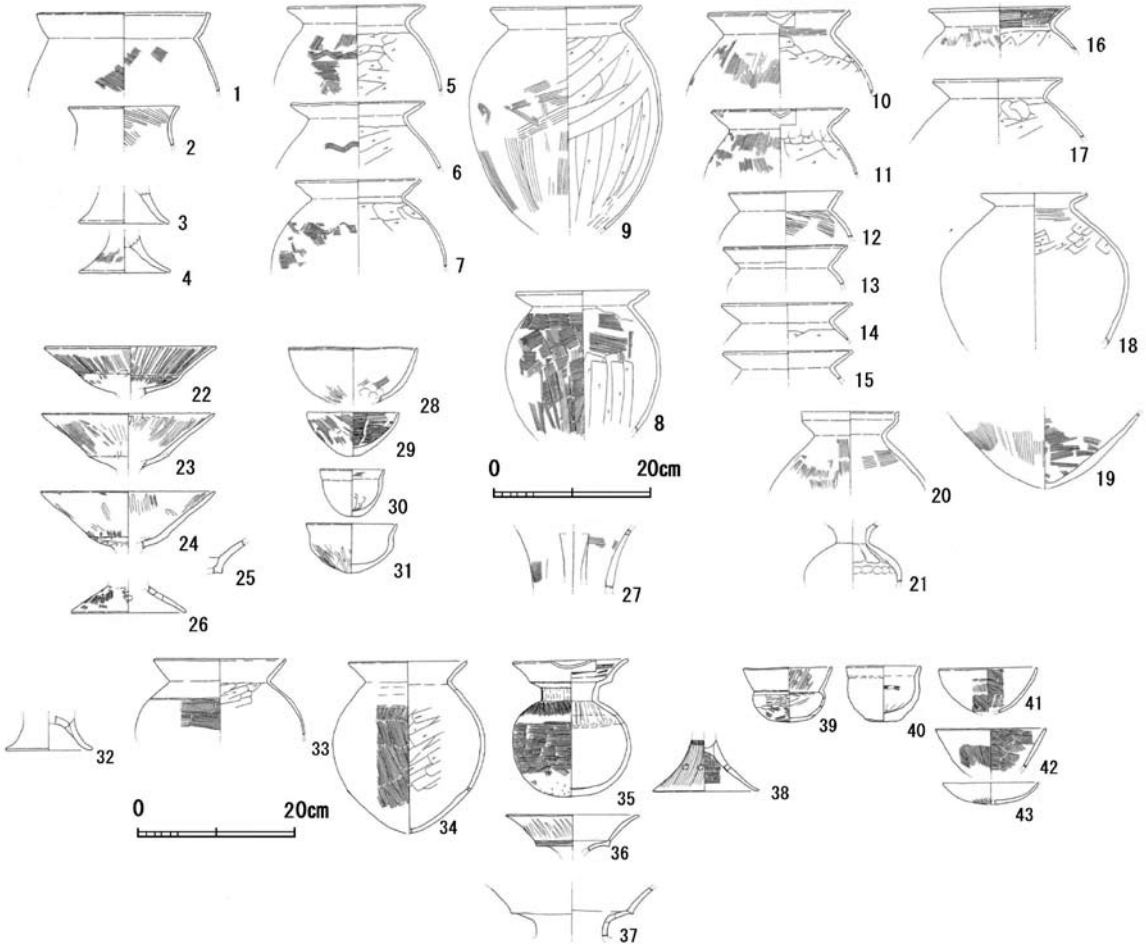
以上のような前半、後半を併せた本稿第Ⅰ期の土器は、寺澤薫による布留 0 式にほぼ併行すると考える。

なお､馬場編年Ⅰ期（本稿第Ⅰ期後半）とされた龍王遺跡 14 区 SB-2 出土土器（雲仙市教委編 2008b）は、鉢形土器（蒲原の屈折口縁鉢、久住の「く」字口縁鉢）や、山陰系の二重口縁壺とそれ以外の土器に時期差が認められ、発掘調査報告書によっても床面直上の遺物と住居廃絶時の埋土の遺物が存在することが示唆されているため、本稿では検討対象外とした。

②第Ⅱ期（第 5 図）

馬場編年Ⅱ期を充てる。標式となる遺跡と指標となる土器は、龍王遺跡 12 区 SB1（雲仙市教委編

2008a）と同遺跡 31 区 SB01（雲仙市教委編 2006）出土の土器群である（註 8）。12 区 SB1 出土土器で床面直上の遺物は 19 と 31 のみで、他の土器は覆土からの出土である。ただし、出土量が多く、住居廃絶時に礫とともに不用な土器を投げ入れたものと報告されているので、共時性・一括性が高いと判断した。在地の台付甕（1 ～ 4）、布留式系の甕で波状沈線をもつもの（5 ～ 7）、およびその他の布留式系の甕（9 ～ 15）、器形は布留式系に似るが、外面にタタキがあるもの（8）、布留式系の高坏（22 ～ 24）、同有段高坏（25）、系統不明の甕（16 ～ 18）、在地の二重口縁の壺（20）などからなる。一方の 31 区 SB01 出土土器は、調査対象地以外の工事計画地での不時発見により、一部が調査された竪穴住居の資料である。報告書では出土状況の詳細は窺えないが、床面を確認していることや多数の土器片と炭化材が出土しているところから、筆者は一括遺物と判断した。在地の台付甕（32）、布留式系の甕（33）、同壺（35 ～ 37）、および器形は庄内式系に似ている伝統的第Ⅴ様式系の甕（34）などからなる。



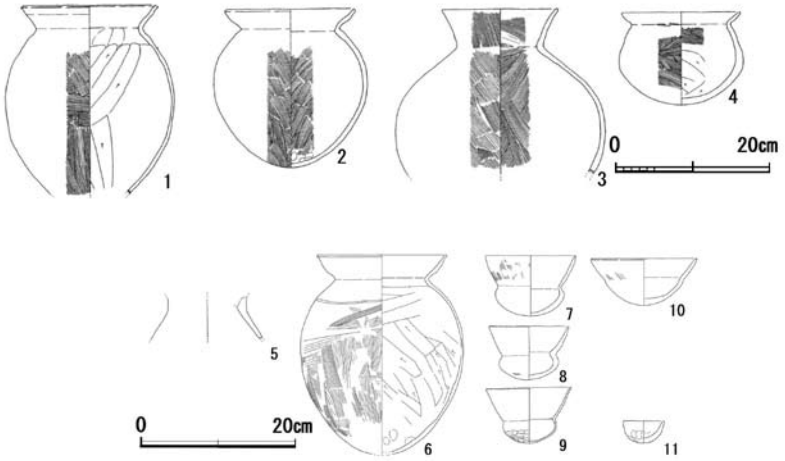

**第 5 図　第Ⅱ期の土器（S=1/10）龍王遺跡 12 区 SB1:1 ～ 31、龍王遺跡 31 区 SB01:32 ～ 43**

以上、両遺跡の遺構では在地の土器に加えて、伝統的第Ⅴ様式系の土器と布留式系土器が主体となっており、布留式系土器が浸透していることが見て取れる。したがって本稿第Ⅱ期は蒲原編年の土師本村１式、久住編年のⅡ C 期に併行し、寺澤編年の布留１式にほぼ併行すると考える。

③第Ⅲ期（第 6 図）

馬場編年Ⅲ期を充てる。標式となる遺跡と指標となる土器は佃遺跡 86 区（2）SB-01（雲仙市教委編 2008b）、龍王遺跡 5 区 SB-1（雲仙市教委編 2008a）である。前者の土器群は住居床面からの出土ではないが、住居廃絶時の投げ込みと報告されているため、ほぼ同時期と判断した。布留式系であるが成形が異なる系統不明の甕（2）と伝統的第Ⅴ様式系の壺（3）、同甕（4）からなる。一方の龍王遺跡 5

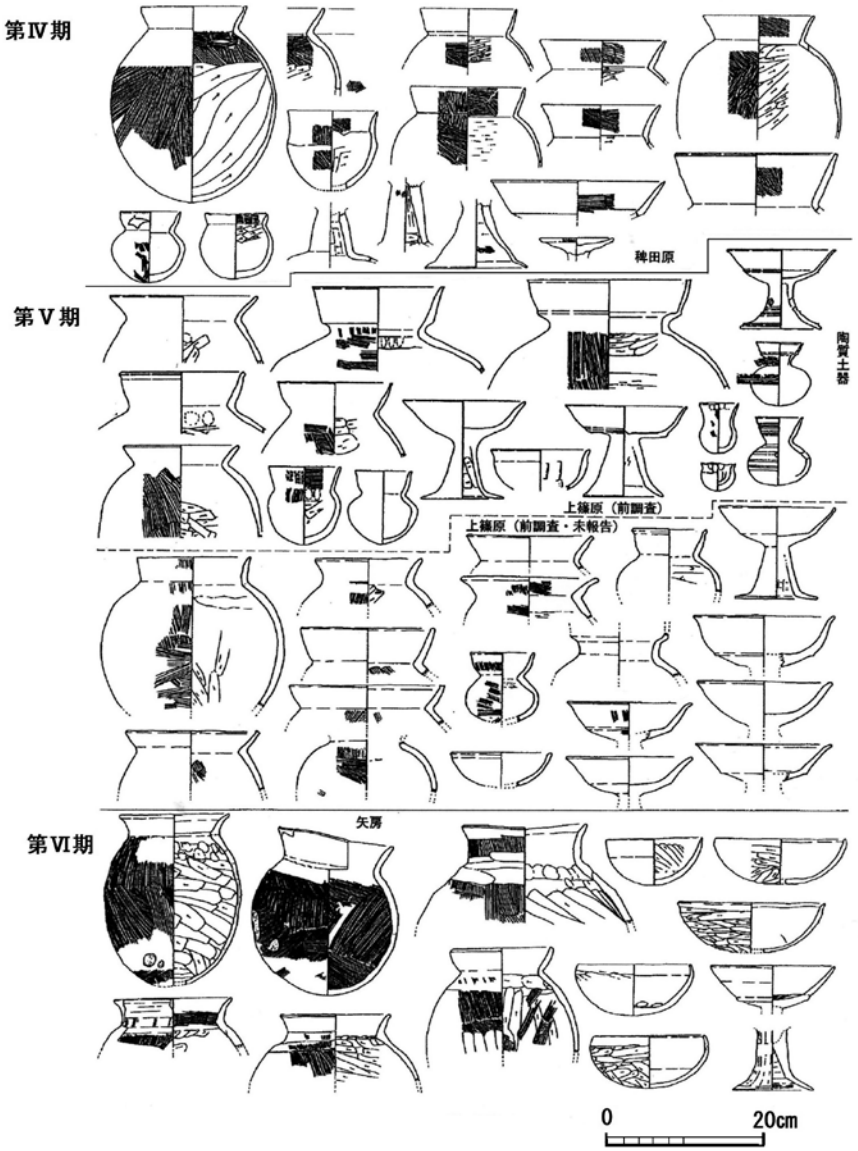
区 SB-1 出土土器は床面直上の出土と報告されている資料である。在地の台付甕（5)、布留式系の甕（6)、布留式の小型丸底壺（鉢）からなる。両遺跡とも布留式系の土器が主体で、他地域との併行関係は、蒲原編年の土師本村 2 式、同 3 式古相、久住編年のⅢ A 期に併行すると考える。したがって本稿第Ⅲ期は寺澤編年の布留 2 式にほぼ併行すると考える。




第 6 図　第Ⅲ期の土器（S=1/10）
佃遺跡 86 区 SB01:1 ～ 4、龍王遺跡 5 区 SB1:5 ～ 11

④第Ⅳ期（第 7 図）

当該期以降は、古墳時代中期の土器である。研究史の項でも触れたが、本県では野澤（竹中）哲朗や柚木亜貴子の検討がある。筆者には、これら先行する編年に代わる新たな編年観を持ち合わせていないため、先行編年に準じることにする。




第 7 図　第Ⅳ期から第Ⅵ期の土器（S=1/10）柚木 2005 に加筆

第Ⅳ期の資料として馬場編年Ⅳ期の土器を充てる。標式遺跡と指標となる土器は稗田原遺跡住居（長崎県教委編 1997)、岩名遺跡住居（大村市教委編 2000）（註 9）出土土器で、他地域との併行関係は、蒲原編年の土師本村 3 式新相、重藤編年のⅢ A 期、Ⅲ b 期にほぼ併行すると考える（註 10)。

⑤第Ⅴ期（第 7 図）

馬場編年Ⅴ期を充てる。標式遺跡と指標となる土器は、上篠原遺跡住居出土土器である（長崎県教委編 2005)。さらには、野澤（竹中）哲朗による一野古墳編年Ⅳ期とほぼ同時期である（竹中 2001)。他地域との併行関係は重藤編年Ⅳ期とほぼ併行すると考える。

⑥第Ⅵ期（第 7 図）

野澤哲朗による矢房段階を充てる。標式遺跡と指標となる土器は矢房遺跡住居（国見町教委編 2003)、竹松遺跡の TAK201407 区第 2 小区の SC17（長崎県教委編 2019）出土土器である。一野古墳編年Ⅴ期とほぼ同時期である。他地域との併行関係は重藤Ⅴ期とほぼ併行と考える。以上の第Ⅰ期～Ⅵ期を本稿の土器様式とする。

## ５　長崎県の古墳時代前期・中期社会の研究史

次に、本県の古墳時代前期・中期社会の研究史を概観する。

（１）野澤哲朗の研究

野澤（旧姓　竹中）哲朗は、2003 年（平成 15）に、「大村湾・橘湾沿岸の古墳・箱式石棺の検討」を著している（竹中 2003 a )。その中で野澤は、本県で古墳時代に見られる箱式石棺墓は「この時期まで伝統的な墓制として肥前地域西部の地域にあるのではなく、大和政権の埋葬施設の一つとして確立していたと考えておきたい。」と述べて、当地の古墳時代の箱式石棺墓を単に伝統的墓制の踏襲とするのではなく、背景に倭王権の影響があるという新たな視点を加えている（竹中 2003 a :p. 19)。この視点は後の『新長崎市史』でも踏襲されており、注目される（野澤 2013）（註 11)。

さらに、野澤は古墳時代の高塚墳と箱式石棺墓の埋葬の在り方や副葬品の相違から、高塚墳＝厚葬、箱式石棺＝薄葬とし、両者は盟主とその従属者であるとみなした。

（２）尾上博一の研究

尾上博一は 2005 年（平成 17）に「前方後円墳築造周縁地域としての対馬」と題した論攷を発表している（尾上 2005)。尾上は、まず対馬の弥生時代の墳墓を検討し、西谷正や阿比留伴次の先行学説に学びながら、被葬者を西谷の言う「津々浦々の集落の有力者」、阿比留が唱える「浦主」であると結論付けた。続く古墳時代は安楽勉、永留久恵、藤田和裕の見解を引き、対馬での高塚古墳の出現の契機を「畿内王朝、中央政権の支配に入ったか、結びついた、あるいは直結したため」と整理した。さらに尾上は以下のような疑問を提示し、追及していく。①畿内と対馬の関係はどのようなものであったのか。②そして、いかなる経緯で対馬は畿内型の本格古墳を採用することになったのか。③いかなる意図を持って対馬は畿内型の本格古墳を採用したのか。④畿内型の本格古墳を採用するということは対馬にとってどのような意味があったのかという 4 つの問いである。

尾上は、これら 4 つの自問に、以下のように自答しているので、質問の番号と対応させて列記する。①対馬は、古墳時代にあって、なお在地系の石棺墓を使用し、特有の葬送儀礼を維持していた地域であった。それに対し、畿内は前方後円墳という祖霊祭祀を行うための優れた装置を有する地域であった。②当初、対馬は前方後円墳の存在を知っていたが、意図的に前方後円墳を採用しなかった。しかし後に前方後円墳が優れた装置であることを認め、自分たちの生活・文化様式に合致する形に時間をかけて変容させた。そのために一定の時間を要した。③対馬が 4 世紀に入ってからの国際情勢の下で、半

ば強引に体制を整えようとした。④対馬などの首長が自らの位置づけ、定位化のために採用した。一方、対馬などの集団の構成員も葬送儀礼のために、その手段として前方後円墳という墓制を採用した。

以上のように、尾上は対馬での前方後円墳の受け入れは、地域の主体性によってなされたとの立場をとる。

また、「対馬地域において古墳時代を通じて造営された各石棺墓を主体とする墓地から出土した副葬品は、出居塚古墳や根曽古墳群から出土した遺物と比較して決して劣るものではなく、むしろ内容的には遥かに豊富な品々を揃える場合があることは注意しなければならない」と主張し（尾上2005:p. 180)、前方後円墳被葬者と石棺墓被葬者とでは副葬品に差異はないとしている。尾上の見解は前方後円墳を受容する地方の立場からのものであり、ひとつの仮説として傾聴に値すると考える。

（３）宮﨑貴夫の研究

宮﨑貴夫は1992年（平成4）に『前方後円墳集成　九州編』において「肥前西部（長崎県)」を執筆し、県内の前方後円墳の編年を行った（宮﨑1992)。

続いて1995年（平成7）には、『風土記の考古学』5の中で、本土部の古墳時代前期・中期の墳墓には、「伝統的な石棺墓や石棺系石室」が用いられていること、首長墓にもこれらの主体部が見られることを指摘した。併せて本県本土部の古墳時代の特色として、前方後円墳はおろか、6世紀末まで、いわゆる高塚墳もない無古墳地帯が平戸諸島に属す小値賀島を除く五島列島に存在することを明らかにした（宮﨑1995)。古墳に象徴される時代に古墳が築かれなかった地域が本県に存在することを初めて指摘した論攷である。なお、無古墳地帯については後述する。

最近の宮﨑は、2019年（令和元）に『長崎地域の考古学研究』を上梓し、本県の前期から終末期までの古墳を概観した後に、「本土地域では、4世紀末から7世紀にかけて、中央政権の要請に応じて北部九州地域や有明海沿岸地域の有力豪族と共に、朝鮮半島や筑紫へと出仕・出兵していった海人とその統率者の豪族という被葬者像が見えてきたように思える。」と総括した（宮﨑2019:p. 270)。

（４）宇野愼敏の研究

宇野愼敏は本県本土部を中心とする肥前西部の前期・中期古墳を積極的にとりあげ、歴史的評価を加えている。宇野は「マツラ」地域に存在する笠松天神社古墳および岳崎古墳の２基の前方後円墳は、近接する平戸市里田原遺跡を根拠地とし、「玄界灘沿岸、壱岐水道を臨む沿岸部において、福岡市西区の鋤崎古墳、丸隈山古墳、唐津市の谷口古墳、伊万里市の杢路寺古墳などと同様に、4世紀後半～5世紀初頭前後における朝鮮半島との関わりを推察することができる」とした（宇野2013 a :p. 3-4)。

また、「ヒラ」地域の平戸市勝負田（しょうぶた）古墳や同市の田助（たすけ）墳墓群は「海上交通などに携わる中小首長層」と位置付け、彼らの役割は「有明海から東シナ海を北上して平戸を通過し、壱岐水道を北上するコースをとる（中略）有明海沿岸部の首長層がひきいる船団を壱岐水道に先導する役割」であったと推定した（宇野2013 a :p. 4)。さらに長崎半島や西彼杵半島沿岸を南北に航海する場合には、「マツラ」の古田遺跡（佐世保市)、「スカ」の宮田古墳群（長崎市)、深堀遺跡（同市）の住人たちの先導によって安全性を確保したと推測した（宇野2013 b)。

続いて、大村湾沿岸の前方後円墳や円墳を検討し、「4、5世紀の有力首長墓として4基余りの前方後円墳と2，3基の円墳が集中する」ことと「これ以降の5世紀後半から6世紀前半にかけての首長墓は、現在見られない」ことを指摘している（宇野2014:p. 4)。

また、これらの古墳に採用されている石棺系横口式石室は、玄界灘沿岸部の初期横穴式石室から伝播した技術によるものであることを示唆し、３つのタイプに類型化して、被葬者の階層性が反映されたものと理解した。さらに「(初期横穴式石室は、: 筆者註）玄界灘沿岸部の初期横穴式石室から肥前

西部や八代海沿岸部に各々伝播するが、初期横穴室石室そのものが伝播したものではなく、各々在地の墓制の延長上に横口部を設けるという形で各々の地域で変容し（中略）、このため北部九州では竪穴系横口式石室、肥前西部では石棺系横口式石室、肥後では石障をもつ肥後型石室が、各々の地域で独自の在地墓制として発達したものと想定される」とした（宇野 2014:p.4）。この指摘は当地の 5 世紀における墓制を類型化し、北部・中部九州の墓制との差別化を図ったものであり、極めて注目される。

宇野は、これら石棺系横口式石室の被葬者について「前方後円墳や円墳といった墳丘形態にヤマト政権による葬送儀礼が表象されているにもかかわらず、遺体を埋納する石室の形態に新式の横口式石室を受容していながら在地の墓制を確立している点は、大村湾東沿岸部の有力首長層たちはヤマト政権との密接な関係を持ちつつも在地の有力首長層として自立していたことが窺える」（宇野 2014:p.7）とも評価した。このような宇野の一連の考察は、それまで学術的に未整理であった本県本土部の前期・中期古墳を石室構築の技術や系譜さらには階層性の視点を用いて検討したもので、本県の古墳研究において重要な研究成果となっている。

なお石室構築の系譜や技術については「大村市・黄金山古墳の再検討」（宇野 2013c）に詳しい。

（5）佐田茂の研究

佐田茂は 2008 年に「肥前西部の古墳時代の動向」を著し、先の尾上や宮﨑の研究を紹介しつつ、本県本土部の古墳に言及している（佐田 2008）。その中で、ソノキ、タカクの首長墓が散発的であることから、倭王権との関係が希薄であったと指摘している。

また本県を含む肥前西部は、倭王権による「まだら模様」の支配形態があったこと、さらには前方後円墳体制と称される秩序におさまりきれないところが特徴であると主張している。佐田の論攷が当地の古墳の通史的な概観を目的にしているという性格上、具体的な事象や根拠が詳述されているわけではないが、冒頭の土蜘蛛の考察も併せ、示唆に富むものである。

（6）本県の古墳時代前期・中期社会の研究史にみる論点

以上のような本県の古墳時代前期・中期社会の研究史を見ていくと、資料的制約から墳墓中心の研究であることが理解される。その際、新来の前方後円墳などの高塚墳と弥生時代から存在した箱式石棺などの墓制の共存をどのように評価するかという議論があることが分かる。さらにもうひとつの論点は、本県で前方後円墳が受け入れられた経緯の評価における見解の相違である。

前半の弥生時代の在地墓制が古墳時代に残存することの論点は、野澤が主張するように棺自体は弥生時代の形式であるが、実態は畿内政権で確立された墓制であるという見方と、尾上・宮﨑のように伝統的な前代の墓制の踏襲と見る見解の違いである。また高塚古墳との関係においては、盟主と従属者との関係があるとする野澤と、両者の違いは装置としての埋葬形態の差でしかないとする尾上との見解の相違もある。後半の前方後円墳受容の経緯の論点は、尾上のように前方後円墳の採用を受容者の主体性として評価するか、宮﨑や野澤のように倭王権の伸長・主導によって採用されたと評価するかという違いである。

一方、宇野は、墳形は倭王権のものを採用しながら、内部主体には地域の独自性があることから、両者ともに倭王権とは親密でありながら、それぞれ自立した地域首長で、墳形や規模の違いは当地の階層性が反映されたものと見なした。宇野が示す当地の古墳被葬者と倭王権との関係は、尾上の見解に近いのではないかと筆者は理解する。

また被葬者の具体像については、宇野が大村湾沿岸の古墳被葬者の武人的な特徴を指摘しており、特に 5 世紀における倭王権の朝鮮半島への軍事進出に積極的に関与した人物と推定している（宇野 2014）。宇野が本県本土部の前期・中期古墳の被葬者は、中九州の有力者が玄界灘沿岸や朝鮮半島へ航

| 前方後円墳集成編年 | 地域・墳形／年代 | 土器様式 | チカ | | スカ | | ヒラ | | マツラ | | ソノキ | | タカク | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 前方後円墳 | その他 | 前方後円墳 | その他 | 前方後円墳 | その他 | 前方後円墳 | その他 | 前方後円墳 | その他 | 前方後円墳 | その他 |
| 1期 | 250 | 第Ⅰ期 | | | | | | 田助古墳 | | | | 冷泉2, 3, 4号墳<br>冷泉1, 5, 6号墳<br>竹松古墳 | | 中江遺跡2, 3, 4号有力集団墓 |
| 2期 | 300 | 第Ⅱ期 | | | | | | | | | | 小佐古石棺有力集団墓 | Ω 守山大塚古墳 | 丸塚古墳 |
| 3期 | | 第Ⅲ期 | | | | | | | Ω 笠松天神社古墳 | | | | | |
| 4期 | | 第Ⅳ期 | | | | | | 勝負田古墳 | Ω 岳崎古墳 | 竹辺C遺跡1, 2, 3号周溝墓 | Ω 琴平神社古墳 | 黄金山古墳 | | |
| 5期 | 400 | 第Ⅴ期 | | | | 宮田古墳C地区有力集団墓<br>宮田地区C地区1号墳 | | | | | Ω ひさご塚古墳 | 久津A地点石棺<br>小佐古石棺1号<br>妙法塚遺跡1号<br>鬼塚古墳（長頸鏃） | | 中江1号墳<br>一野6号墳<br>一野4号, 5号, 7号, 8号墳<br>遠目塚遺跡 |
| 6期 | | | | | | | | | | | | | | |
| 7期 | | | | | | | | | | | | 前島古墳6号（TK216-208）<br>前島古墳7号（TK216-208）<br>三島山古墳（TK208） | | 一野2号墳（長頸鏃）<br>中江18号墳 |
| 8期 | 500 | 第Ⅵ期 | | 神ノ崎27号（TK208-23）<br>神崎31号（TK47） | | | | | | | | 松ヶ崎古墳<br>江崎古墳（TK47） | | 一野1号墳（TK23）<br>一野3号墳（TK23）<br>小野古墳<br>曲崎10号（TK47） |

Ω ワレ権現古墳　鹿の島古墳群　門山石棺
Ω 重棺古墳　懸場（いけば）遺跡　龍王遺跡方形周溝墓
Ω 石走古墳　小佐古石棺10号　下釜石棺1号
下釜石棺2号
曲崎22号（竪穴式石室）
曲崎101号（竪穴式石室）

凡例　共同墓地の継続期間
この間のある時点で出現

【註1】　前方後円墳集成編年の実年代は広瀬2003、重藤2018、辻田2019を参考にした。本稿の土器様式の実年代に援用する場合はあくまでも参考値である。
【註2】　前方後円墳の編年は重藤2012、秀島2017、宮崎2019を参考にした。
【註3】　同時期内の墳墓の掲載順は必ずしも時期差を反映してはいない。
【註4】「墳墓名（TK番号）」の（　　）内は陶邑須恵器編年型式である。
【註5】　欄外の墳墓は時期決定の根拠に欠けるものである。
【註6】　長頸鏃は中期の前半と後半を分かつ指標となるので一覧表内に記載した。

第８図　本県本土部前期・中期古墳一覧

海する場合の水先案内人の役割を果たしたと評価する点は、当地の地形・地理を念頭に、宇野自身の大王の棺の航海の体験にも裏打ちされており、筆者も支持するところである。前述の宮﨑の総括も宇野の被葬者像を支持していると見る。

## ６　墳墓

（１）本県本土部の古墳時代前期から中期の古墳について

本県本土部の古墳時代前期および中期の社会を検討するにあたり、第８図に当該期の墳墓を本稿の土器様式で整理した。土器を共伴しない墳墓は、従来の編年観に本稿の時間軸を反映させて位置づけている。なお、発掘調査などが行われていないか、行われても古い時代の調査で情報が少なく、近年の調査であっても出土遺物がないため、詳しい時期が分からない墳墓は欄外に記載した。

（２）前方後円墳の検討

本県本土部で前方後円墳が分布するのは､｢ヒラ｣を除く「マツラ」および「ソノキ｣､｢タカク」である。「ソノキ」の西部の「スカ」（西彼杵半島西部および長崎半島西部）には分布しない。

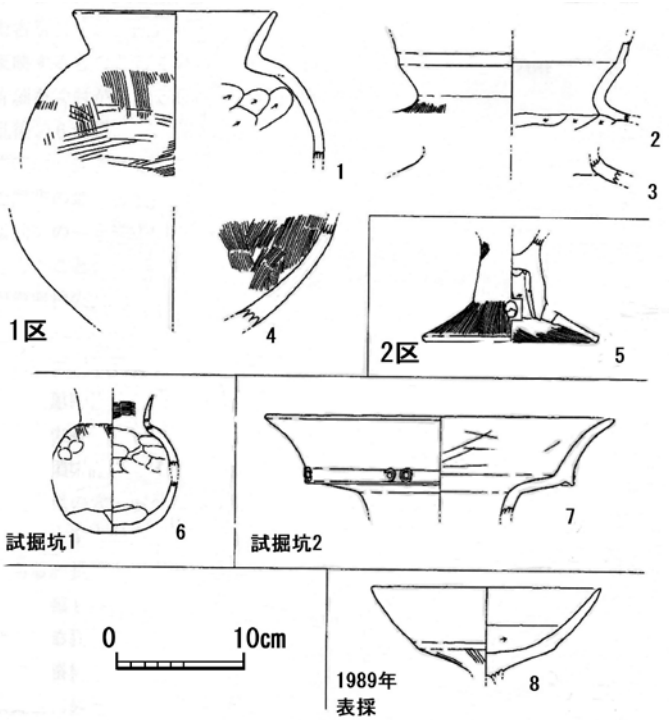
「スカ｣は五島灘を介して縄文時代から五島列島（チカ）と共通する遺構や遺物を出土する地域であり、その五島列島（チカ）も同じく前方後円墳空白地帯である。広く九州西岸に目を転じれば、熊本県の天草諸島および同県芦北地方、さらには鹿児島県の長島地方、同県の北薩地方と薩摩半島にある中薩地方と南薩地方も前方後円墳空白地帯であり、本県の「チカ｣･｢スカ｣･｢ヒラ」とともに東シナ海という海域を共有する地域と言えよう（第 20 図)。

本県本土部で最も古い前方後円墳はタカクの守山大塚古墳（雲仙市）で、出土土器から本稿の第Ⅱ期（第８図）の築造と思われる。次項では、この守山大塚古墳出土土器を検討する。

①守山大塚古墳出土土器（第９図）

公表されている土器は、集石遺構から出土した５以外は、崩落した葺石中ないし、その直下から出土しており、いずれも原位置を動いている（雲仙市教委編 2010)。その中で試掘坑２から出土した７の二重口縁壺形土器の口縁部が注目される。畿内系二重口縁壺は蒲原宏行の先行研究がある。蒲原分類の３期（布留１式併行）で（蒲原 1989)、口径が 26 ｾﾝﾁ未満のため同氏分類のＧⅢにあたり、その中でも b1 であろうか。ＧⅢｂ１は夕ヶ里式から土師本村１式まで存在する型式の土器である（蒲原 1991)。二重口縁壺は、久住猛雄も伝統的Ｖ様式系と庄内式系および山陰系・布留式系に分けて検討している。同氏の変遷図を見る限り、氏のⅡＢ期の伝統的Ｖ様式系に守山大塚古墳出土例と類似する資料が見られる（久住 1999：p69)。

また、原位置を保って出土した５の高坏も蒲原分類の「在地系のＡⅡ類」で二重口縁壺と同時期であろう（蒲原前掲)。上記２点以外の土器群ならびに表採資料はそれらより後出




第９図　守山大塚古墳出土土器（S=1/6）
（雲仙市教委編 2010 加筆）

する土器である。したがって、守山大塚古墳出土土器は、蒲原の夕ヶ里式から土師本村１式、久住のⅡＢ期の土器の一群と、それ以降の土器群からなると判断した。ここでは前者を築造時、後者を追葬時ないし、追善供養時と理解し、守山大塚古墳の築造を本稿第Ⅱ期とする（第８図）。

別稿で検討したように、「タカク」の弥生時代終末期には舶載鏡など上位の威信財を保有する有力集団の存在は窺えないため（古門 2020）、守山大塚古墳の唐突な出現が際立っている。しかも後続する前方後円墳は現れず、まさに孤立した存在である点が注目される。

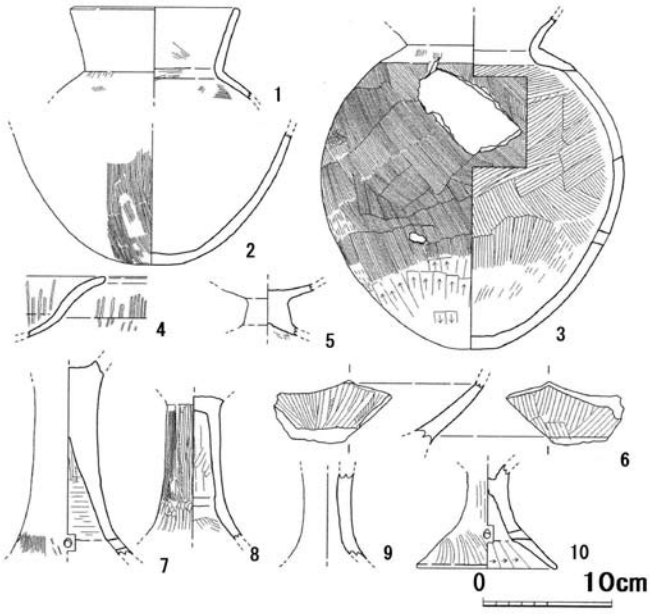
②守山大塚古墳以後の前方後円墳

守山大塚古墳以降の前方後円墳として、本稿第Ⅲ期ないし第Ⅳ期にマツラ地域に笠松天神社古墳が出現する（田平町教委編 1989）。この「マツラ」には、「ヒラ」も含めて弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、松浦市の栢ノ木（かやのき）遺跡２号石棺や後述する平戸市の田助（たすけ）古墳、同市の勝負田（しょうぶた）古墳など後漢鏡を副葬する箱式石棺墓などが系譜をたどるように存在し、有力集団や有力者の存在が窺える。したがって「タカク」の守山大塚古墳の出現と比較すると、唐突に出現するという感はない。

続く本稿第Ⅳ期の「マツラ」には岳崎古墳（平戸市）が現われ、先の笠松天神社古墳（同市）と系譜的に繋がっていく。宇野愼敏は同じくⅣ期のソノキに琴平神社古墳が出現するとする（宇野 2014）。宇野によると同墳は墳形から見て、「笠松天神社古墳と相似しており、4 世紀後半から 5 世紀前半におさまるものと思われる」という（宇野 2014:P. 4）。したがって本稿第８図も宇野の見解を反映させている。

続く本稿第Ⅴ期には、ひさご塚古墳（東彼杵町）が現れる。過去には、ひさご塚古墳の前方部の墳形が撥型になるのではないかと想定されたため、前期に遡らせる向きもあったが、発掘調査によって内部主体が石棺系竪穴式石室と石棺系横口式石室であることが判明したため、当該期に位置付けることが妥当であろう（註 12）。

なお、ソノキとマツラの地域はタカクと比較すると、前方後円墳の出現が少なくとも 50 年ほど遅れる訳で、この考古学的事実をいかに理解するかが重要であると考える。



第 10 図　竹松古墳周溝出土土器（S=1/6）
（長崎県教委編 2019 加筆）

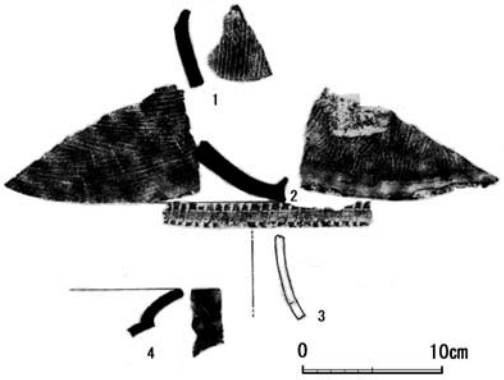
（３）前方後円墳以外の高塚墳の検討

本県本土部に前方後円墳以外の高塚墳が確実に出現するのは本稿第Ⅰ期後半で、「ソノキ」に出現する竹松古墳（大村市）が最初である（長崎県教委編 2019）。竹松古墳の周溝より出土した土器は、伝統的第Ⅴ様式系土器の影響を受けて製作されたような内外面ハケ調整の土器（第 10 図 3）（註 13）や、同壺（同 1）、同高坏（同 9, 10）、北部九州の在地系の高坏（同 7、8）、蒲原分類による畿内系低脚高坏（同 5）、冷泉遺跡出土品に似た高坏（同 4）が出土し、前述のように本稿第Ⅰ期後半に位置付けられる（第８図）。

また、「タカク」には守山大塚古墳に隣接する丸塚古墳がある。古田正隆の報告によると丸塚古墳は昭和 41（1966）年に島原史学会が試掘調査を実施している（古田 1983）。しかし狭小な範囲の調査であったため、成果も乏しく、そのためか、丸塚古墳の築造時期は研究者によって見解の相違がある。

秀島貞康は丸塚古墳を守山大塚古墳に先行させ、前方後円墳集成編年１期に位置づけている（秀島 2013）。一方で、蒲原宏行、重藤輝行、宮﨑貴夫は守山大塚古墳に後続するものと考えている（蒲原 1995、重藤 2012、宮﨑 2019）。

実は、丸塚古墳からは土器が出土している（第 11 図）。公表されている土器は島原史学会の試掘調査の折に墳丘中央部の封土より出土したものである（古田前掲）。形式が判別できるものは２点である。**2** は肥前型器台であろう（註 14）。裾部先端が肥厚しており、上田龍児によると弥生終末期の型式であるが（上田 2004）、前述した本稿の土器様式の検討では、肥前型器台が第Ⅱ期まで残る（第５図）。**4** は二重口縁の壺形土器のようである。細片のため十分な検討ができないが、蒲原の３期相当、久住のⅡＢ期と推定され、蒲原の土師本村１式併行であろうか。（蒲原 1989、久住 1999）。土師本村１式併行とした本稿第Ⅱ期の土器群にも類似したものが存在する（第５図 35、37）。



**第 11 図　丸塚古墳出土土器（S=1/6）**
**（藤田・吉田編 1978）**

上記の土器は、古墳の年代決定の根拠とするには、甚だ心許ない資料ではあるが、以上の検討から、ここでは丸塚古墳を守山大塚古墳と同時期の本稿第Ⅱ期に位置付けておく。同期における両古墳の前後関係は、肥前型器台の存在から、強いて言えば丸塚古墳が古いのではないかと想定しておきたい。

③黄金山古墳と鬼塚古墳

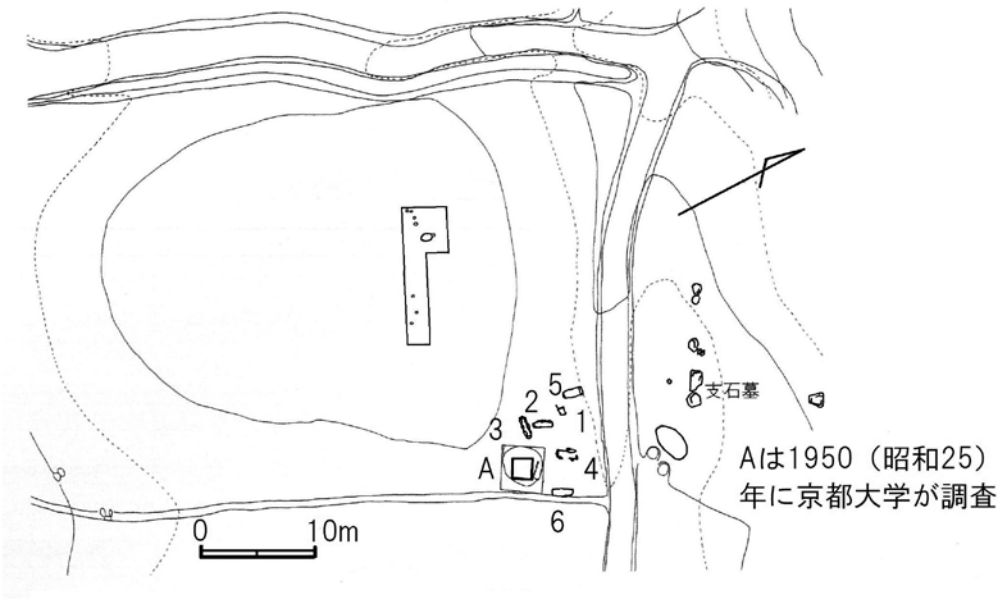
続く本稿第Ⅲ期には、円墳などの高塚墳は確認できないが、次の本稿第Ⅳ期には、「ソノキ」に黄金山古墳が出現する。同古墳の築造時期も研究者によって異なっており、重藤輝行は前方後円墳集成編年の４期と５期の間に位置付ける（重藤 2018）。一方、宇野愼敏は熊本県八代市の「大鼠蔵尾張宮古墳と前後する時期に構築されたといえ、５世紀前半頃に比定し得る」（宇野 2013c：p. 141）としている。重藤と宇野では、築造時期に見解の相違はあるものの、両者ともに黄金山古墳と前述の大鼠蔵尾張宮（おおそぞうおわりのみや）古墳の石室との関係に注目しており、黄金山古墳の築造に当たっては、北部九州および八代海沿岸地域との関係が窺われる。いずれにしても黄金山古墳は、後に本県本土部の中期古墳に多く採用される石棺系石室の先駆けともいうべき竪穴系横口式石室ないし、石棺系横口式石室が採用されている（註 15）。

黄金山古墳に続いて本稿第Ⅴ期前半には鬼塚古墳が出現する。鬼塚古墳の石室は初期横穴式石室で（註 16）、玄室内に仕切り石を立てているところは、黄金山古墳と類似する。鬼塚古墳の築造時期は本県本土部で初めて出土した鉄製甲冑などの出土遺物から見て、「少なくとも５世紀第２四半紀」と報告されている（佐世保市教委編 2019）。

次に両古墳の被葬者象であるが、柳沢一男は黄金山古墳の被葬者を倭と朝鮮諸国との交渉に参画した首長と評価しており（柳沢 2002）、橋本達也は鬼塚古墳と朝鮮半島西南部の倭系古墳との類似性に触れている（橋本 2018a）。宇野愼敏は黄金山古墳のみならず、当該期の大村湾沿岸の前方後円墳被葬者も含めて、彼らが北部九州の有力首長層と朝鮮半島への出兵に関わり、その際に新しい墓制（石棺系横口式石室：筆者註）を取り入れたのではないだろうかと推測している。三氏の考察から、両古墳の被葬者が当時の朝鮮半島との国際関係に何らかの形で関わっていた人物であろうと推察できる。

④田助古墳と勝負田古墳の評価

「ヒラ」にも、本稿第Ⅰ期から第Ⅳ期の墳墓に編年できる平戸市の田助古墳および勝負田古墳がある。田助古墳は平戸本島にあるが、勝負田古墳は平戸本島から離れた的山（あづち）大島に存在する。両




**第 12 図　田助遺跡遺構配置図（平戸市史編さん委員会編 1995　加筆）**

古墳は本県本土部の古墳時代に極めて重要な位置を占める古墳でありながら、発見が昭和前期であったため詳細が不明で、歴史的評価が定まらないまま今日に至っている。本稿では、改めて両古墳を検討し、評価を行う。

田助古墳は 1928 年（昭和 3 年）に発見された箱式石棺墓で、勝負田古墳は昭和 16 年（1941）から同 17 年（1942）に発見されながら未調査のまま消滅した墳墓である。いずれも後漢鏡が出土している。田助古墳は第 12 図の京都大学の調査区 A に隣接する墳墓で、「古墳」と呼称されているが、遺跡自体は遺構配置図からみて共同墓地である。一方の勝負田古墳は単独墳の可能性があるものの、未調査のため情報が乏しい。したがって、両遺跡の所属時期も研究者間で一致していない。藤田和裕の長崎県内出土銅鏡の集成では、田助古墳は古墳時代、勝負田古墳は古墳時代後期としている（藤田 1994）。この年代観は最近の下垣仁志の集成でも継承されている（下垣 2016）。一方、正林護と尾上博一は勝負田古墳を 5 世紀に比定し（長崎県教委編 1997、尾上 2005）、宮﨑貴夫は両墳墓から出土した後漢鏡を破砕鏡と考え、勝負田古墳を弥生時代終末期に、田助古墳を古墳時代開始期以降としている（宮﨑 2019: p. 250）。また、宇野愼敏は田助古墳を含む田助墳墓群を弥生時代終末期から古墳時代前期の 4 世紀頃に比定し、勝負田古墳を 4 世紀後半～末頃に比定している（宇野 2013 a :p. 3）。

ここからは筆者なりに両古墳の時期を考察していく。両古墳の発見の顛末を記録した京都大学の『平戸学術調査報告』によると田助古墳は「発見者岡氏の語るところでは、それは新発見の箱式石棺（第 12 図 A 石棺：筆者註）の西方 1 米位離れた位置に同じく東西を主軸として存し」と記述しているところから（京都大学平戸学術調査団 1951:p70）、京都大学が 1950 年（昭和 25）に調査した箱式石棺に隣接していたことは確実であろう。田助古墳から出土した鏡は、内行花文鏡と上方作系浮彫式獣帯鏡（じょうほうさくけい　うきぼりしき　じゅうたいきょう）の 2 面である。内行花文鏡は破片で、宮﨑貴夫は岡村秀典分類の蝙蝠座Ⅱ式（漢鏡 6 期）としている（宮﨑 2019）。一方の上方作系浮彫式獣帯鏡は、完形鏡であったのか破砕鏡であったのか判断がつきかねるが（註 17）、そもそも上方作系浮彫式獣帯鏡とは、岡村秀典の命名によるもので、岡村は田助古墳出土の鏡を六像Ａ式として細分している（岡村 1992）。さらに同鏡は漢鏡 7 期に位置づけられ、その製作年代は２世紀後半とされる（岡村 1993）。

宮﨑は、隣接する田助 5 号墳から出土したガラス製勾玉が壱岐市の原の辻遺跡原ノ久保 A 地区の 9

号土坑出土遺物と類似することから田助 5 号墳を弥生終末期と認識している（宮﨑 2019）。このように上方作系浮彫式獣帯鏡の製作時期とガラス製勾玉から、田助遺跡の共同墓地の存続時期に弥生終末期が含まれることは確実であろう。上方作系浮彫式獣帯鏡が破砕鏡であれば、田助古墳は宮﨑が指摘する古墳時代開始期に属する可能性が高い。

しかし、山田俊輔の集成では、同鏡を副葬した墳墓は庄内式（新）期から前方後円墳集成編年 4 期まであり（山田 2005）、そのため同鏡の所属時期は、中国での製造時期である 2 世紀後半から、我が国の古墳副葬時期の 4 世紀までと、かなりの時間幅がある。したがって筆者は田助古墳の時期を上方作系浮彫式獣帯鏡から判断する限り、宇野が指摘するように弥生時代終末期から古墳時代前期とすることが、現状では正しい認識ではないかと考える。そのため本稿では、第Ⅰ期から第Ⅳ期と幅広に編年する（第 8 図）。

次に勝負田古墳を検討する。同古墳では、後漢鏡の長宜子孫銘内行花文鏡と翡翠（硬玉）製の丁字頭勾玉が共伴している。宮﨑貴夫は同鏡を岡村編年の四葉座Ⅴ式としている（宮﨑 2019）。岡村編年の漢鏡 6 期である（岡村 1993）。したがって勝負田古墳の上限は弥生時代後期後半となる。九州の弥生後期遺跡において翡翠製の丁字頭勾玉と後漢鏡を出土した遺跡には、佐賀県唐津市の中原遺跡がある。同遺跡の SP13231 は木棺墓で、上方作系浮彫式獣帯鏡を伴っており、丁字頭勾玉は勝負田古墳と同型式といってよい。中原遺跡の鏡は破砕鏡で、木棺墓の時期は弥生終末から古墳初頭と考えられている（佐賀県教委編 2012）。したがって勝負田古墳から出土した後漢鏡が破砕鏡であったとすれば、宮﨑が言うように弥生終末期の可能性がある。しかし、先の京都大学の報告書には以下のような記載がある。「発見者村井伊三郎氏の談によると、昭和 16 ～ 7 年（1941 ～ 2：筆者註）頃の出土にかかり、4 枚の板石を長方の箱形に組合せ、長辺は 4 ～ 5 尺（121 ～ 151 ㌢:筆者註）位あり、天井も床も一枚石でつくられ、棺の内部が同様な板石の壁で 4 区分されていた」という（京都大学平戸学術調査団 1951:p72）。この内部主体が「4 区分されていた」という発見者の証言が京都大学はじめ、後世の研究者を悩ませているが、仮に仕切り石とすれば、石棺というよりも初期横穴式石室をもつ大村市黄金山（こがねやま）古墳や佐世保市鬼塚古墳に見られる古墳時代前期末から中期にかけての当地に多い石棺系石室内の仕切り石のような形態ではないかと想像する。箱式石棺であれば、大村市の小佐古石棺群 B 遺跡の 2 号墳が仕切石を持つ。だとすれば勝負田古墳は古墳時代の所産である可能性が高く、宇野が主張するように 4 世紀後半から末か、正林や尾上が言うように 5 世紀の前半ではないかと考える。よって、本稿第Ⅳ期から第Ⅴ期に位置づけておく（第 8 図）。

以上のように本稿では、田助古墳を弥生終末から古墳時代前期、勝負田古墳を 4 世紀後半から 5 世紀初頭に位置づけた。先述したように両古墳はヒラを含むマツラの地にあって弥生後期の栢ノ木遺跡 2 号石棺と同様に後漢鏡を副葬する墳墓の系列に連なる。その背景には弥生後期から当地に有力集団が存在し、後漢鏡などの威信財を自ら獲得したか、外部勢力より供与を受けていたことが推定できる。実際、破鏡以外の後漢鏡を副葬した墳墓は、弥生時代に遡っても本県本土部では「ヒラ」を含む「マツラ」の地域のみであり、「タカク」や「ソノキ」には皆無であることは強調しておきたい（註 18）。さらに言えば、田助古墳や勝負田古墳の帰属時期いかんによっては、本県本土部に前方後円墳が造られていた同じ時期に、箱式石棺など旧来の墳墓に埋葬されながらも威信財の後漢鏡を所有していた有力者がヒラの地域に存在したということになる。このような新来の前方後円墳に葬られた人物を凌ぐ副葬品を持った者が、前方後円墳被葬者と併存していた事実は、尾上博一が対馬の墳墓において既に指摘しているところである（尾上 2005）。

しかしながら、田助古墳や勝負田古墳の背後に有力集団の存在を窺わせた「ヒラ」を含む「マツラ」

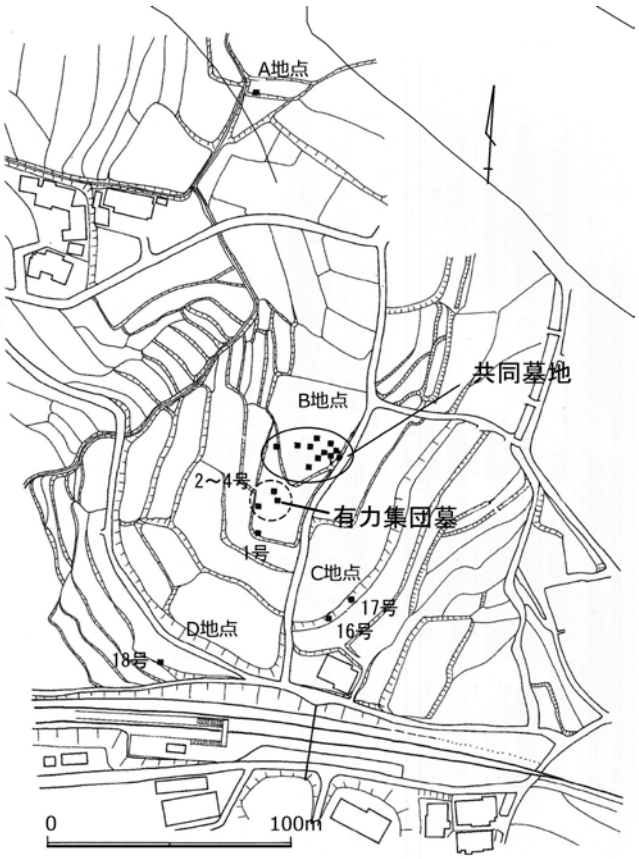
の地域は、本稿第Ⅴ期後半以降は顕著な古墳が存在しなくなる。かたや「ソノキ」や「タカク」の地域は前方後円墳こそ築造されなくなるものの、本稿第Ⅴ期後半以降も中小の古墳は造営されており、「ヒラ」を含む「マツラ」との違いが見られる。「ヒラ」を含む「マツラ」に顕著な古墳が存在しなくなる理由は、今後検討されなければならない問題である。

（４）低墳丘の小規模古墳の存在

本県本土部の古墳時代の墳墓には、前述のように明らかな墳丘を持つ高塚墳が存在する一方で、そもそも低墳丘で、その後に封土が流出して主体部のみが確認された小規模な古墳が存在する。本稿では、古墳の主体部を中心にして半径 10 ㍍内外に、隣接する他の墳墓が無いか、あっても、その墳墓と 10 m内外の距離が保たれている墳墓を「低墳丘の小規模古墳」と定義する。墳墓間の距離のことは既に竹中哲朗や秀島貞康が指摘している（竹中 2003 a 、秀島 2013）。ここからは、「低墳丘の小規模古墳」を検討していくが、その前に古墳時代においても本県本土部には弥生時代の特定集団墓に類似した共同墓地が営まれていることを指摘しておきたい。以下に具体的な事例を示す。

①中江遺跡（高来町教委編 1993）（第 13 図）

諫早市（旧高来町）にあり、有明海の西岸に位置する。標高 10 ～ 30 ㍍ほどの丘陵の傾斜に沿って、墓域が拡張されながら営まれている（第 13 図）。丘陵頂部はＢ地点と呼ばれ、共同墓地を構成している。共同墓地から南西へ 12 ㍍ほど離れて 2、3、4 号石棺があり、周辺より蒲原分類の畿内系の低脚高坏が出土している。筆者はこれらの墳墓を有力集団の墓と考え、弥生時代の特定集団墓に類似していると見る。畿内系の低脚高坏は蒲原宏行によると夕ヶ里式から土師本村 2 式まで存続しており（蒲原 1991）、本稿の第Ⅰ期から第Ⅲ期に該当する。この 2、3、4 号石棺から南に下ったところはＣ地点とされ、16、17 号墳が存在する。墳丘などは確認されていないが互いに 10 ㍍ほどの距離があり、有力者の「低墳丘の小規模古墳」の群集と考えられる。



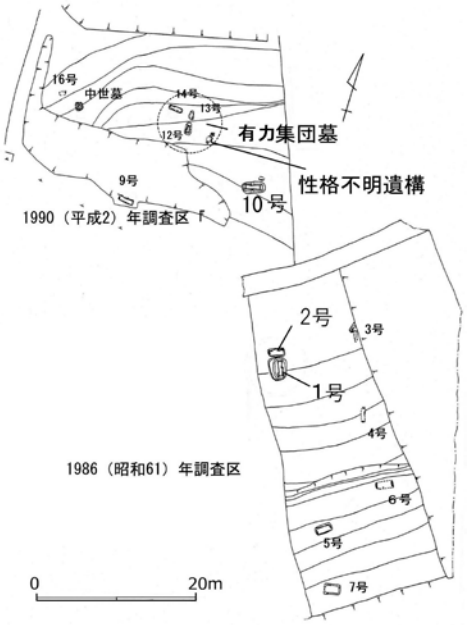

第 13 図　中江遺跡遺構配置図
（高来町教委編 1993　加筆）

さらに標高を下げたところがＤ地点と呼ばれ、石棺系石室を持った 18 号墳が存在する。墳丘は確認されていないが、有力者の単独墳と思われ、周辺には他の墳墓が存在しない。野澤（竹中）哲朗によると大村湾沿岸から島原半島にかけて、定型化した須恵器出現後に石室の幅と長さの比率が 0.5 以下の平面プランを持った石室が採用されており、中江遺跡 18 号墳も同じタイプである（竹中 2003 a ）。したがって同墳を本稿第Ⅴ期後半に位置づける（第 8 図）。

⑤小佐古石棺墓群Ｂ遺跡（大村市教委編 1988、同 1995）（第 14 図）

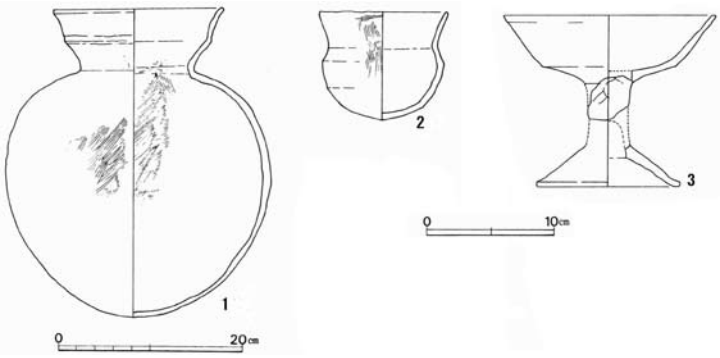
大村湾に近い標高 50 ㍍ほどの丘陵に位置する（第 14 図）。丘陵の傾斜に沿って、墓地が拡張されたことが窺える。平成 2 年度（1990）に調査された調査区は標高が最も高い場所に営まれた有力集団墓

であろう。このことは既に野澤哲朗が「弥生時代によくみる石棺墓的な群集形態をとっており」と指摘している（竹中 2003:p12)。この有力集団墓に隣接して性格不明遺構がある。この性格不明遺構をこの有力集団墓の墓前祭祀遺構と考える。この遺構から出土した土器（第 15 図）を検討すると、山陰系の二重口縁の壺形土器（1）が蒲原分類のHⅡd1 で土師本村 2 式に属し、本稿の第Ⅲ期である。高坏(3)は古相を示すので本稿の第Ⅱ期に属すと理解し、小型壺（2）は本稿第Ⅳ期と判断した。したがってこの祭祀遺構は追善供養も含め、長期にわたって利用されたと思われ、小佐古石棺墓群 B 遺跡の有力集団墓の時期を本稿第Ⅱ期から第Ⅳ期とする。




第 14 図　小佐古石棺墓群 B 遺跡遺構配置図
（大村市教委編 1988,1995 加筆）

有力集団の墓から標高を下げ、10 ㍍ほど離れて 10 号石棺があり、さらに下ったところに 1 号石棺がある。両古墳について野澤は「(有力集団の墓から：筆者註）南に広がる密集しないグループは直径 10 ㍍ほどのマウンドがあってもおかしくないほどの間隔で密集して」、「古墳群としての性格が色濃い」と指摘しており（竹中 2003 a :p12)、筆者も同じ意見である。したがって両古墳はいずれも「低墳丘の小規模古墳」の群集と考える。10 号箱式石棺内からは 3 体の埋葬人骨が出土した。有力集団の中の有力者達であろう。1 号石棺も 10 号石棺と同様に 3 体の合葬で、鉄剣が副葬され、厚葬である。1 号石棺の時期は本稿第Ⅴ期と考える。

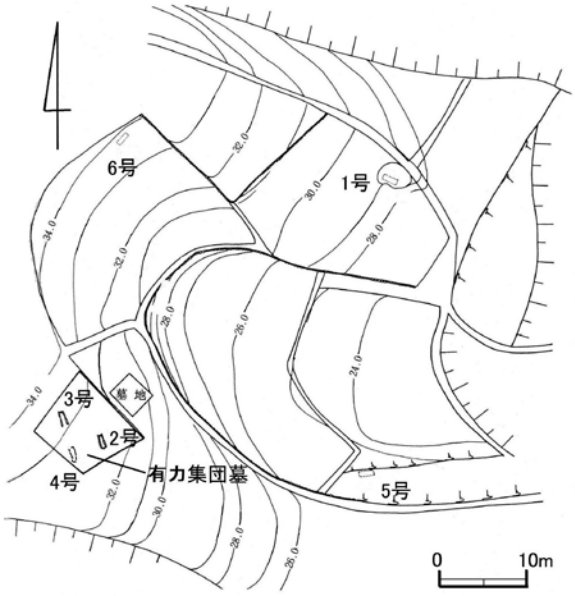



第 15 図　小佐古石棺墓群 B 遺跡祭祀遺構出土土器
1 は S=1/8、2,3 は S=1/6（大村市教委編 1988）

②宮田古墳群（外海町教委編 1985）

宮田古墳群は長崎市外海町の黒崎川の河口左岸にある丘陵より延びる舌状台地に立地し、標高は 20 ～ 30 ㍍ほどである。遺跡は 3 か所からなり、北から B 地点、A 地点、C 地点と名付けられた。各地点から黒崎地区一帯を見渡すことができる。ここでは C 地点をとりあげる（第 16 図)。

C 地点では、北側の丘陵先端部に小円墳状の盛土を持つ 1 号墳があり、5 号墳、6 号墳も周りに他の墳墓はなく、単独の古墳と考えられる。さらに谷を隔てて南東 50 ㍍ほど離れた場所に共同墓地があり、有力集団の墓と考えられる。




第 16 図　宮田古墳群 C 地点遺構配置図
（外海町教委編 1985　加筆）

宮田古墳群自体は有力集団墓とみられる A 地点

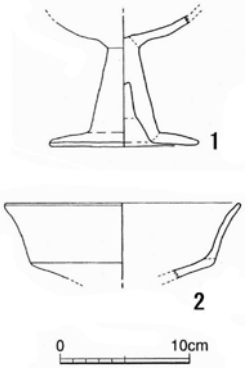
1 号墳から出土した珠文鏡、石枕、石製模造品などの出土から 5 世紀前半から中頃とされている。C 地点の有力集団墓も同時期と考え、本稿第Ⅴ期に編年した。

以上のように、本県本土部の第Ⅰ期～Ⅳ期（古墳時代初頭から同中期初頭）には、弥生時代後期の特定集団墓と類似した有力集団の墓が形成され、第Ⅴ期（古墳時代中期中頃）以降は、有力者（複数の場合がある）が抜け出して「低墳丘の小規模古墳」を造営し、結果としてそれらが群集する様相が窺える。さらに厚葬化および孤高化し、単独墳として他の墳墓を排除していく状況も見て取れる。これは本県本土部で弥生時代後期から続く社会集団の階層分化の進展が古墳時代に入っても、引き続き生じていた結果ではないかと考える（註 19）。

⑥方形周溝墓

また、本県本土部の小規模な墳墓として、検出例は少ないが、佐世保市の竹辺 C 遺跡（長崎県教委編 2008）（註 20）、雲仙市の倉地川古墳（雲仙市教委編 2006）などで発見されている方形周溝墓がある。竹辺 C 遺跡の方形周溝墓の周溝から出土した土師器は、1 号墳から出土した高坏や同 2 号墳出土の高坏の坏部の型式から本稿第Ⅳ期に属すと考える（第 17 図）。

九州の方形周溝墓は古くは弥生時代後期の福岡県平原遺跡のものが著名であるが、盛期は古墳時代前期から中期であり、熊本県の塚原古墳群などに代表される。本県本土部の方形周溝墓も、そのような九州の方形周溝墓の趨勢の中で整理されるべき墓制と考える。しかしながら、出現の契機や、その系譜などは検出事例が少なく、今後の課題とせざるをえない。




**第 17 図　竹辺 C 遺跡周溝墓出土土器**
**1 は 1 号墳、**
**2 は 2 号墳出土（S=1/6）**
**（長崎県教委編 2008）**

## ７．本県本土部の前期・中期古墳の類型

ここでは、本県本土部の古墳時代前期と中期の墳墓を類型に分け、その在り方を検討する。

（１）類型

当該期の墳墓や古墳の在り方は下記のように①～④の類型に分けることが可能であろう。

①単独墳

前方後円墳や円墳などの高塚墳で、具体的にはひさご塚古墳などの前方後円墳および黄金山古墳や鬼塚古墳などの円形の高塚墳が範疇に入る。基本的には 6 世紀および 7 世紀前半まで継続しており、被葬者は各地域の首長や有力者が考えられる。

②有力集団の墓

弥生時代の特定集団墓に似た墳墓群である。前代から続く箱式石棺などを内部主体とする墳墓群で、具体的には中江遺跡、小佐古石棺墓群 B 遺跡、宮田古墳群 C 地点などに類例がある。田助古墳を含む田助遺跡もこの範疇に含まれよう。長期にわたって墳墓が営まれている。

③「低墳丘の小規模古墳」とその群集

上記の有力集団の墓に隣接して造られる小規模な古墳の群集である。具体例には中江遺跡 16、17 号墳、小佐古石棺墓群 B 遺跡 1 号墳・10 号墳、宮田古墳群 A 地点 3 号墳、同 B 地点 3 号墳，4 号墳などが含まれる。主体部間の距離が 10 ㍍ほどあり、有力者の墓と思われる。これらの「低墳丘の小規模古墳」が集合して、古墳群を形成するという外観をなしている。後述する古式群集墳（初期群集墳）と一見似ているが、両者の異なる点は、前者が 6 世紀まで継続しないのに対し、後者は 6 世紀以降の古墳が存在する点である。

「低墳丘の小規模古墳」の群集に遅れて中江遺跡 18 号墳や宮田古墳群 C 地点 1 号墳、5 号墳、6 号墳

など周囲に墳墓が存在しないか距離がある「低墳丘の小規模古墳」が出現するようである。これらの「低墳丘の小規模古墳」およびその群集は、いずれの被葬者も上記①の単独墳被葬者より下位の在地有力者が考えられる。

④古式群集墳（初期群集墳）

通常、群集墳というと横穴式石室を採用した6世紀、7世紀の古墳群を指すが、5世紀後半には全国的に古式群集墳（初期群集墳）と呼ばれる墳墓群が出現する。本県本土部では一野古墳群、前島古墳群、曲崎古墳群などである（第8図）。本県本土部の古式群集墳の特徴は、後期の群集墳の内部主体に共通して採用される横穴式石室ではなく、石棺系竪穴式石室、石棺系横口式石室、箱式石棺など地域性に富み、これら前代の埋葬施設を内部主体として採用し、初期須恵器が供献、副葬される場合があることで、さらに墳墓群が6世紀以降も継続することが特徴である。筆者はこれらの古墳群の立地に注目したい。すなわち、③で示した前代の中江遺跡や、小佐古石棺群、宮田古墳群などは、標高30～50ほどの丘陵上に立地し、出自である集落から仰ぎ見られる場所、被葬者からすれば出自の集落を見下ろし、それを睥睨するような場所に立地している。一方、一野古墳群、前島古墳群、曲崎古墳群は海に近接する標高15ｍ以下の低地に営まれ、あたかも海を意識したかのような立地をしている点が前者と際立って異なっており注目される。

## ８．本県本土部の古墳時代前期・中期の墳墓および墳墓群について

ここまで述べてきたことは、以下のようにまとめることができる。本県本土部では古墳時代を象徴する前方後円墳が、チカ（五島列島）、スカ（西彼杵半島西岸、長崎半島西岸）およびヒラ（平戸諸島）を除いた地域に分布するものの、5世紀後半から6世紀中頃まで一時的に途絶える。

古墳時代前期の当地に最初に出現する前方後円墳は本稿第Ⅱ期の守山大塚古墳である。同古墳はタカクに存在するが、この地は威信財の検討からは弥生時代後期に有力集団の存在が窺えない地域で、その出現は突然であり、さらに後続する前方後円墳も存在しない。

次の前方後円墳は本稿第Ⅲ期ないしⅣ期のマツラに出現する笠松天神社古墳である。このマツラの地は対岸のヒラも含めて弥生時代後期より後漢鏡などの威信財を副葬した墳墓が分布し、有力集団の存在が窺える地域である。しかも、これら後漢鏡を副葬する田助古墳や勝負田古墳の在地系墳墓の所属時期いかんによっては、新来の前方後円墳の被葬者と在地の墳墓被葬者が同時期に存在し、副葬品としては後者のものが上位の威信財であった可能性がある。想像をたくましくすれば、彼らは、前方後円墳を採用せず、旧来の対外交渉の結果独自に得た後漢鏡などの威信財とともに、当地の伝統的な葬送儀礼によって埋葬されたと言えよう。

中期になると、新来の前方後円墳と併行して、黄金山古墳や鬼塚古墳など円形の高塚墳が単独で築造される。これらの古墳は初期横穴式石室を採用しており、当時の朝鮮半島との国際関係に何らかの関与をしていた人物の墓と考えられる。

このような単独の高塚墳が存在する一方で、当地には内部主体に弥生時代と同様に箱式石棺や石棺系石室を用いた「低墳丘の小規模古墳」が存在する。これらは当初、弥生時代後期の特定集団墓に類似した形をとりつつ、次第に一定距離を保ちながら集合する形で造営され、「低墳丘の小規模古墳」群を形成し、最終的には孤立した単独墳となるようである。また、合葬例も多い。

さらに5世紀後半には古式群集墳（初期群集墳）が出現する。これらの古式群集墳（初期群集墳）の被葬者は、6世紀以降に盛んとなる横穴式石室を内部主体とした群集墳の被葬者に系譜的に繋がっていくものと推定されるが、海に近接する墳墓の占地や立地からすると、海との関りが強い集団の出自

であることが推測される。

このように少ないながらも本県本土部にも前方後円墳が分布するが、前述のように本稿Ⅴ期後半（5世紀後半）以降、一時的に途絶えてしまう。再び本県本土部に前方後円墳が現れるのは前方後円墳集成編年9期の倉地川古墳（雲仙市）まで待たなければならない（重藤2012、秀島2013）。

## ９．無古墳地帯の存在

本県本土部の古墳を上記のように整理したが、当地には、そもそも古墳が存在しない地域がある。研究史の項でも触れたが、宮崎貴夫が指摘したように、五島列島は、いわゆる高塚墳が存在しない無古墳地帯である。近接する平戸諸島の小値賀島に築造された高塚墳も6世紀末から7世紀初頭の神方（かみがた）古墳と7世紀代の同島水ノ下（みずのした）古墳のわずか２基のみで、五島列島には、古墳時代を通じて古墳が築造されることはなかったのである。実は、無古墳地帯の存在は五島列島のみに見られるのではなく、鹿児島県の甑島、屋久島、種子島といった本土部から離れた九州西岸の島嶼部に共通した歴史的事象である（第20図）。したがって、逆に古墳が築かれた小値賀島の特異性が際立つと言えよう（第21図）。では、五島列島では当時どのような墓制が存在したのか、その具体的な姿を前述の神方、水ノ下両古墳が築かれた小値賀島の神ノ崎墳墓群にみることができる（小値賀町教委編1984）。

神ノ崎墳墓群は小値賀島の属島である黒島に位置する岬に立地し、弥生時代前期末から古墳時代後期の6世紀中頃まで継続した共同墓地である。調査された墳墓は7基のみで、墳墓の種類は箱式石棺墓、板石積石棺墓などである。中には大陸由来の鉄器や、初期須恵器を副葬する墳墓もあり、集団の中で有力者が存在したことが推定できる。このような共同墓地において威信財的な副葬品を有する墳墓が存在するという状況は、弥生時代の前期から中期にかけての本県本土部の共同墓地に見られる様相であり（古門2020）、小値賀島では、そのような墓制が古墳時代後期まで継続していたことを示している。本稿において筆者は、本県本土部では、弥生時代に見られるような共同墓地が第Ⅳ期（古墳時代中期初め頃）まで存在することを先に指摘したが、平戸諸島の小値賀島では、古墳時代後期まで継続していたことが理解される。このように在地の墓制が、共同墓地の形をとって古墳時代まで存在することは、薩摩半島を例に橋本達也が既に指摘しており（橋本2009）、階級分化が不明瞭な前方後円墳周縁地域の社会構造を反映したものと考えられている。

## １０．集落

本県本土部の古墳時代前期・中期の社会の復元にあたって、次に集落を検討する。当地はこれまで古墳時代前期および中期の集落調査が極めて少なく、大村市の冷泉（れいせん）遺跡、島原市の稗田原遺跡、雲仙市の十園（じゅうぞの）遺跡、同市佃遺跡、松浦市宮ノ下り（みやのさがり）遺跡、諫早市の上原（うえはら）遺跡の調査など数えるほどで、調査面積も狭小なものであった。しかし、九州新幹線西九州ルートの建設に先立って行われた大村市竹松遺跡の緊急発掘調査で、少ないながらも、この時期の集落遺構を検出することができたので、概要を整理し検討する。

同遺跡の古墳時代前期および中期の住居跡はTAK201302、TAK201303、TAK201403、TAK201405、TAK201406、TAK201407の各調査区で検出した（TAKは遺跡略号、2013などは調査年、02や03は大調査区を表す。また、住居跡の遺構略号はSCで示す）。

なお竹松遺跡では、この時期の古式土師器を中心とした遺物集積遺構（遺構略号はSU）がTAK201405調査区とTAK201407調査区で発見されている。

いずれも古代・中世の遺構と重複することから、古代・中世に削平された古墳時代前期及び中期の竪穴建物跡ではないかと推定する。したがって、この遺物集積遺構も竪穴建物跡と仮定して、以下の記述を進めていく（註 21）。

（1）竹松遺跡の古墳時代の竪穴建物跡について

表 2 に竹松遺跡から検出した古墳時代の竪穴建物跡および遺物集積遺構を本稿の土器様式に従って一覧表に整理した。その結果、竹松遺跡の古墳時代の住居は第Ⅰ期には 5 棟、第Ⅱ期に 4 棟、第Ⅲ期には 2 棟、第Ⅳ期で 9 棟、Ⅴ期に 1 棟、Ⅵ期には 3 棟と復元できた。

竹松遺跡の調査面積は 10 万平方㍍に及び、東京ドームのグラウンド約 8 個分の広さがあるにも関わらず、同遺跡の古墳時代前期・中期の住居が、極めて少ないことが分かる。

なお、第 18 図、19 図には竹松遺跡における古墳時代前期から中期の住居跡の遺構配置図を示した。竹松遺跡では本稿第Ⅰ期に遺跡中央部に住居が 2 ヶ所で営まれ始め、同期後半には竹松古墳が造られる。続く第Ⅱ期には、住居が第Ⅰ期の集落の場所から旧河川を越えて北へ移っていくが、第Ⅲ期には一旦、集落が減少する。その後の第Ⅳ期には復活し、9 棟に拡大するものの、第Ⅴ期には再び 1 棟に減じている。しかし第Ⅵ期には 3 棟となり、再び住居数が増加に転じている。

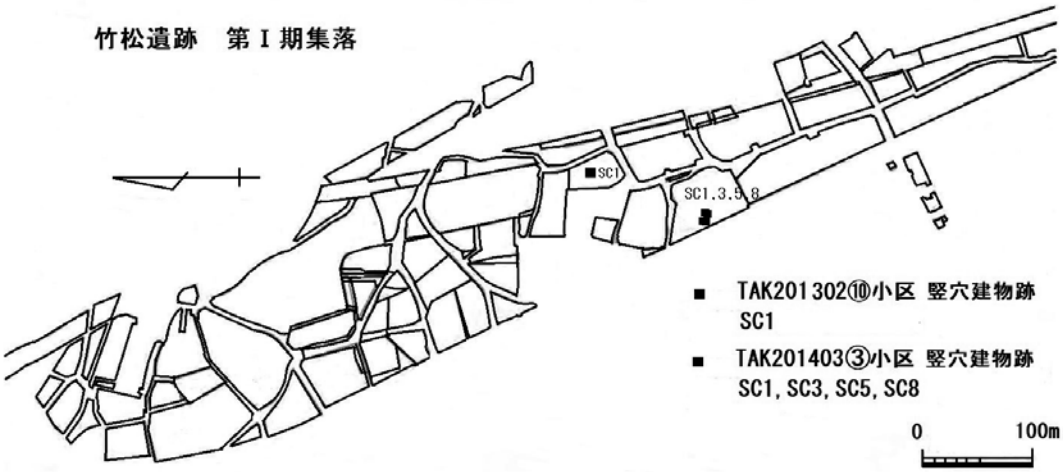
**表 2　竹松遺跡の竪穴建物跡（SC）と遺物集積遺構（SU）**

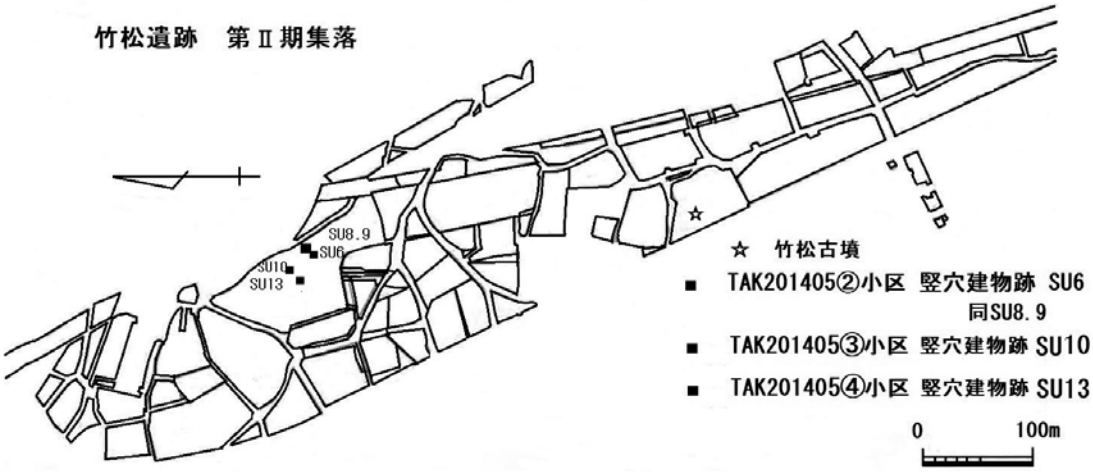
| No | 土器様式 | 調査区 | 小調査区 | 遺構 | 報告書 | 頁 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Ⅰ期 | TAK201302 | 10 | SC1 | Ⅲ | 299 |
| 2 | | TAK201403 | 3 | SC1 | Ⅳ | 14 |
| 3 | | TAK201403 | 3 | SC3 | Ⅳ | 21 |
| 4 | | TAK201403 | 3 | SC5 | Ⅳ | 22 |
| 5 | | TAK201403 | 3 | SC8 | Ⅳ | 23 |
| 6 | Ⅱ期 | TAK201405 | 2 | SU6 | Ⅳ | 265 |
| 7 | | TAK201405 | 3 | SU10 | Ⅳ | 270 |
| 8 | | TAK201405 | 4 | SU13 | Ⅳ | 275 |
| 9 | | TAK201405 | 2 | SU8 | Ⅳ | 267 |
| 10 | | TAK201405 | 2 | SU9 | Ⅳ | 269 |
| 11 | Ⅲ期 | TAK201405 | 4 | SU14 | Ⅳ | 277 |
| 12 | | TAK201407 | 2 | SC18 | Ⅳ | 243 |
| 13 | Ⅳ期 | TAK201303 | A1 | SC114 | Ⅲ | 299 |
| 14 | | TAK201406 | 2 | SC5 | Ⅳ | 192 |
| 15 | | TAK201407 | 2 | SC15 | Ⅳ | 233 |
| 16 | | TAK201407 | 2 | SC16 | Ⅳ | 238 |
| 17 | | TAK201405 | 2 | SU7 | Ⅳ | 267 |
| 18 | | TAK201405 | 5 | SU12 | Ⅳ | 272 |
| 19 | | TAK201407 | 4 | SU2 | Ⅳ | 281 |
| 20 | | TAK201405 | 1 | SU2 | Ⅳ | 261 |
| 21 | | TAK201405 | 1 | SU3 | Ⅳ | 262 |
| 22 | | TAK201405 | 1 | SU4 | Ⅳ | 263 |
| 23 | | TAK201405 | 1 | SU5 | Ⅳ | 264 |
| 13 | Ⅴ期 | TAK201405 | 6 | SC5 | Ⅳ | 178 |
| 24 | Ⅵ期 | TAK201405 | 4 | SC6 | Ⅳ | 179 |
| 25 | | TAK201406 | 2 | SC4 | Ⅳ | 190 |
| 26 | | TAK201407 | 2 | SC17 | Ⅳ | 240 |

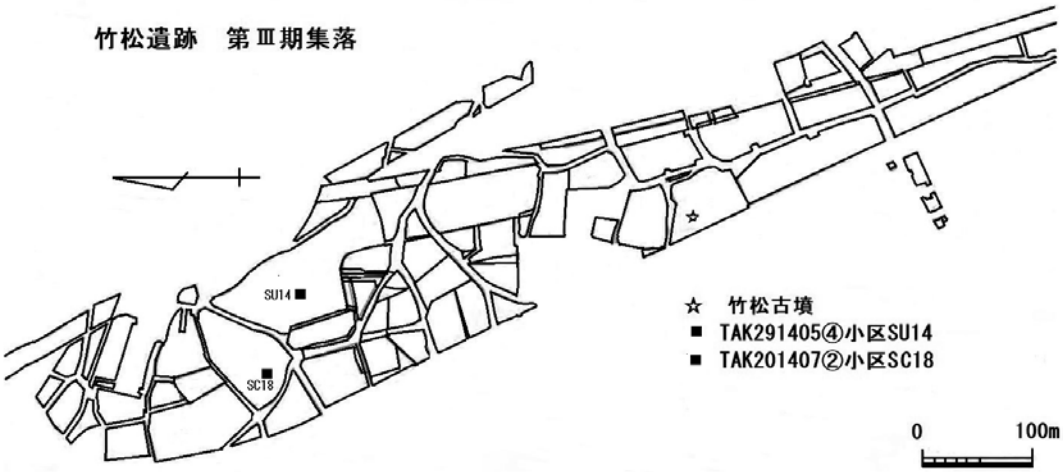
□ 近距離に位置する遺物集積

（2）本県本土部の古墳時代前期・中期の集落について

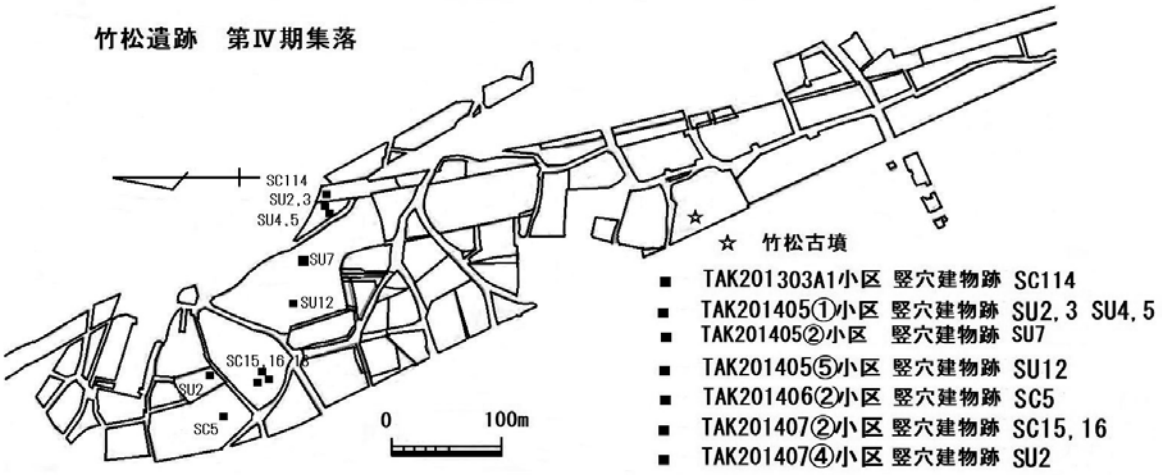
前述のように、遺物集積遺構を竪穴建物跡と見なした資料も含めて、竹松遺跡の古墳時代前期・中期の集落を検討したが、総じて集落を構成する竪穴住居の数は少なく、基本的に 1 ～ 4 棟前後で集落を構成しているようで、時には第Ⅳ期のように近隣に同規模の集落が複数散在する時期があったと想定できる。これは別稿で筆者が指摘した本県本土部の弥生時代集落とほとんど変わらない姿と言えよう（古門 2020）。すなわち、本県本土部では、古墳時代前期・中期の集落においても住居の密度は低く、散村的であったと言える。

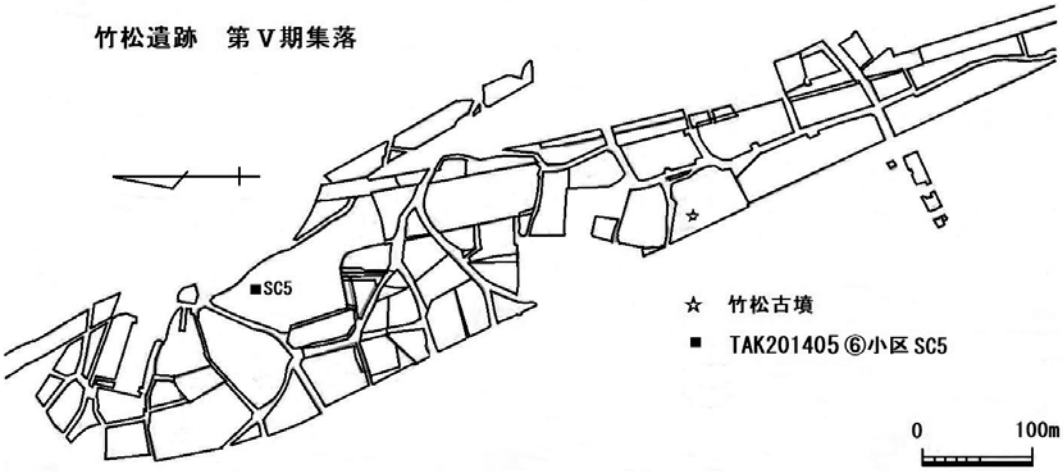


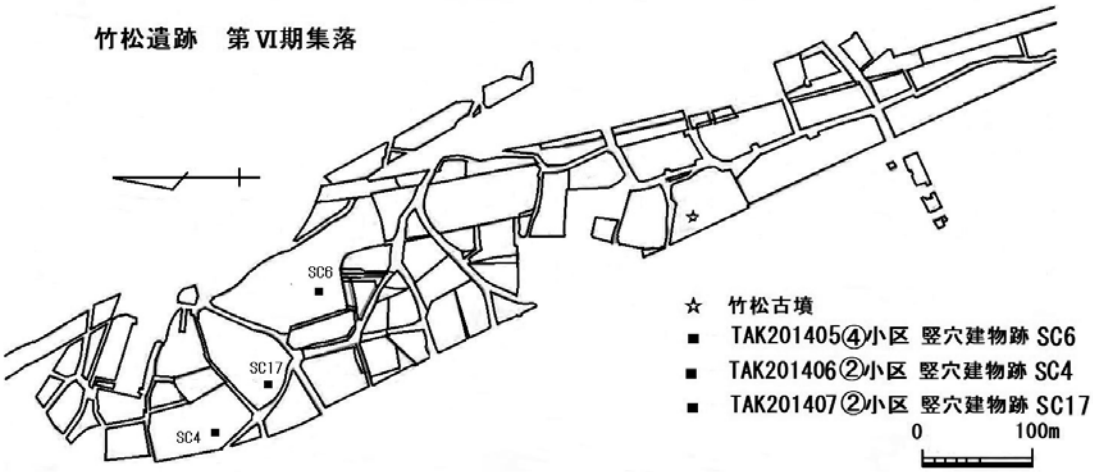




第 18 図　古墳時代前期・中期の竹松遺跡の集落の変遷①




第 19 図　古墳時代前期・中期の竹松遺跡の集落の変遷②

## １１．本県本土部の古墳時代前期・中期社会の考察にあたって

本県本土部の古墳時代前期・中期社会の考察にあたって前項までは、墳墓と集落を検討したが、ここからは、冒頭にも記したように我が国の古墳時代に共通して存在した遺構や遺物・習俗などの出土状況・分布状況を把握することを優先し、基礎的資料の集成・提示を行いたい。

（１）我が国の古墳時代社会の共通性

我が国の古墳時代の共通性に関しては、1993 年（平成 5）に都出比呂志が「前方後円墳体制と民族形成」を上梓し、氏が提唱する「前方後円墳体制」が我が国の民族形成期にあたり、同体制下では言語・文化の共通性があることを指摘している。さらに都出は、この共通性を考古学で扱いにくい言語や民族意識の領域を除いた「生業や衣食住などの生活様式、および農耕祭祀や葬送儀礼など精神面の習俗における共通性」であると説明している（都出 1993:p. 1)。また、その共通性の具体例として、前方後円墳の分布範囲・必需物資の流通圏・威信財の流通圏・生活様式の共通圏・精神的習俗の共通圏をあげ、それぞれの構成要素を整理・検討している。本稿では、前方後円墳体制そのものを議論することが目的ではなく、あくまでも都出が提唱する前方後円墳体制の構成要素を本県本土部の当該期の考古学的事象に照らして整理したいと考えている。具体的には都出が検討した「共通性」の諸要素が本県本土部の古墳時代に見られるのか、あるいは、分布しているのかといった悉皆的な事実確認を行い、基礎資料を提示することを優先する。その上で、本県本土部の古墳時代社会の一端を明らかにすることができればと思う（註 22)。

（２）必需物資の生産と流通

都出が指摘する古墳時代の共通した文化事象のうち前方後円墳の分布については既に記述したので、生活必需物資から検討する。

都出は生活必需品を生活必需物資と呼び、鉄器・須恵器・塩をあげた上で、古墳時代に生活必需物資の広域的な生産と流通が現れることを指摘している。以下、順を追って本県本土部の状況を簡潔に記す。

鉄器の素材としての鉄鋌は、本県では未発見で、鉄素材の流通圏外にあったと言える。また、須恵器の窯跡も本県では未発見である。須恵器自体は定型化した須恵器から流通しているが、その出現時期や型式さらに生産地との関係は未だ検討されたことがない。

製塩遺跡も未発見である。当地では古墳時代から古代の製塩土器として天草式製塩土器が知られ、長崎半島の野母崎（のもざき）遺跡、西彼杵半島の串島（くしじま）遺跡で同製塩土器が発見されている。しかし古墳時代のものであるとは断定できない。

以上のように、本県本土部では古墳時代の代表的な生活必需物資が流通はしているものの鉄器以外は、それらの製造遺構が未発見で、生産体制には関わっていない可能性が高いことが推測される。

（３）威信財の流通

次に全国的に共通して分布する古墳時代の威信財の当地での在り方を検討する。都出は古墳時代前期の威信財の代表として三角縁神獣鏡と腕輪形石製品をあげる。また中期の画文帯同向式神獣鏡、さらに威信財と同等の扱いを受けた後期の装飾大刀、終末期の銅鋺も併せて提示している。

三角縁神獣鏡は古墳時代前期を象徴する威信財であるが、本県はその分布の空白地である。腕輪形石製品は、石釧が壱岐市の片苗イシロ遺跡と原の辻遺跡で出土しているが、本土部では未発見である。古墳時代中期の画文帯同向式神獣鏡も未発見である。

また、本県で装飾大刀の出土が確認されているのは、壱岐市の双六（そうろく）古墳出土の金銅製単鳳環頭大刀柄頭（こんどうせい　たんほう　かんとうたち　つかがしら）と、平戸市の山田（富永）古墳

出土の三累環頭柄頭（さんるい　かんとう　つかがしら）、大村市茶屋の辻古墳出土と言われる獅噛環頭柄頭（しがみ　かんとう　つかがしら）である。双六古墳、山田（富永）古墳は6世紀後半、茶屋の辻古墳は詳細不明であるが、古墳時代後期の可能性があるとされている（穴沢・馬目1979、宮﨑2019）。

また、銅鋺は本県では矢立山（やたてやま）古墳、豊（とよ）古墳、保床山（ほとこやま）古墳といったいずれも対馬市の古墳と、壱岐市の釜蓋古墳群から出土している。すべて島嶼部から出土したもので、本県本土部では、これまた未発見である。

このように本県本土部では、古墳時代の代表的な威信財のうち、前期・中期のそれは皆無で、後期になってようやく古墳時代に共通した威信財が出現している状況である。

（４）生活様式の変化

都出は古墳時代に生業や衣食住などの日常的な生活様式に大きな革新があったとする。その中で顕著なものとして「古墳時代開始直前の時期における石器の消滅と鉄器の普及、上位階層における平地式住居の普及と竪穴式住居の平面形の方形化、土器における小型の鉢や高坏など個人別食器の定着」を指摘する（都出1993:p10）。さらに古墳時代中期での須恵器の使用開始に伴う土師器の器種構成の変容、後期のカマドの採用をあげる。以下、本県本土部の状況を概観する。

石器の消滅は、別稿でも示したように北部九州の弥生中期前半には遅れるものの、弥生後期終末には、砥石や紡錘車などを除いて消滅しており、全国的な趨勢に遅れることはないと筆者は考えている。また鉄器の普及もしかりで、弥生後期に生活用具の鉄器化が進み、古墳時代の初頭にはほぼ完了したと認識している（古門2020）。事実、最近、大村市帯取（おびとり）遺跡で弥生時代終末から古墳時代初頭の鍛冶遺構が発見、調査されており、この頃には鉄器の生産供給体制が整ってきた状況が窺える（大村市教委編2021）。

なお、本県本土部では平地式住居の検討が進んでいない。今後の課題である。

また、竪穴住居のプランは宮﨑貴夫や中川潤次の研究によって弥生時代終末期まで円形住居が残ることが明らかになっているので、古墳時代初頭には方形化したとみられる。

個人別食器の定着は小型の鉢や高坏の出現に関しては、具体的な検討を行ったわけではないが、弥生後期土器を概観する限り、弥生終末から古墳初頭の時期には小型の鉢や高坏が存在するようである。

一方、当地における須恵器の使用開始およびその使用に伴う土師器の器種構成の変容時期は、本稿の第Ⅵ期（5世紀末頃から6世紀初め）と推定する。

また、竪穴住居に付設されるカマドは、大村市竹松遺跡の発掘調査で検出されるまで、本県では未発見であった。竹松遺跡では確実に5世紀とされる竪穴建物跡からは発見されていないが（註23）、6世紀中頃から後半（陶邑編年TK10～MT85型式併行）には確実に出現する。しかし、同遺跡では後続する竪穴建物跡の検出に恵まれなかったため、当地にカマドが定着したかどうかは不明である。次に同遺跡にカマドを持つ竪穴建物跡が出現したのは9世紀であった。

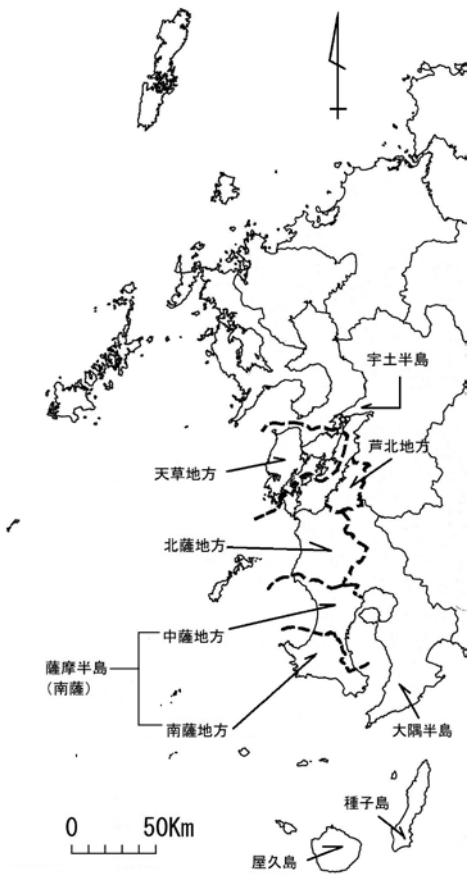
（５）精神的習俗

都出は精神的習俗として①長大な竪穴式石室②長持形石棺③横穴式石室④埴輪⑤石製祭器をあげている。本県本土部では、③⑤以外の考古学的事象が欠落している（註24）。

特に埴輪の欠如は特筆される。本県は壱岐・対馬・五島の島嶼部を含めて全県的に埴輪が分布しない。全国的には秋田県・青森県が無埴輪地域である。近隣では熊本県天草諸島の天草上島のカミノハナ1号墳（上天草市）で円筒埴輪が確認されているが、天草下島には分布しない。さらに南の薩摩半島にも埴輪は分布しない。しかし、そもそも天草や薩摩半島は前方後円墳が分布しない地域であり、秋田・青森の各県も同様である。本県ほど広範囲に前方後円墳が分布する地域がそのまま無埴輪地帯という

所は全国的にも例がない。具体的内容は不明であるが、本県本土部では埴輪を用いない古墳祭祀が行われていた可能性が高い。

いずれにしても本県は前方後円墳が築造されながら埴輪祭祀を欠いていたわけで、定型的な古墳祭祀をそのまま受容したのではなく、その一部を選択して採用し、変容させている。このような文化受容の在り方は弥生時代早期以来の当地の特徴であり、古墳時代においても同様であったと言えよう。




第 20 図　本県本土部に隣接する地域

## １２．本県本土部における古墳時代の文化

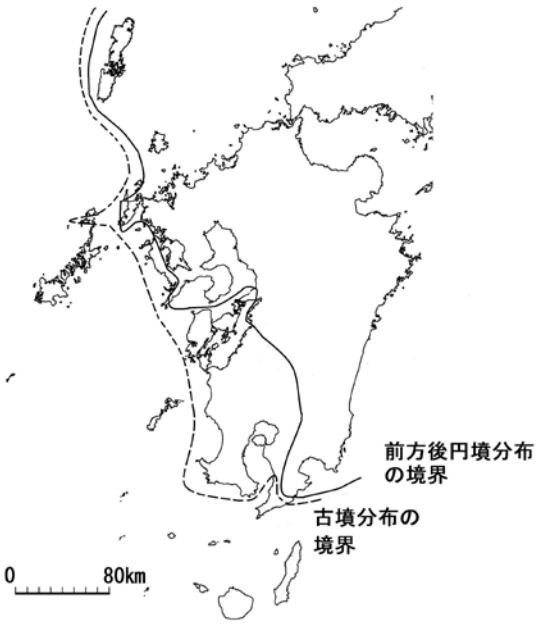
以上のような本県本土部の古墳時代の共通性を検討した結果、古墳時代前期・中期の当地では、当時の倭国でみられる共通した考古学的事象のうち、前方後円墳の採用を除いては、石器の消滅・鉄器の普及、個人別食器の定着、須恵器の使用に伴う土師器の変容と竪穴住居の方形化および横穴式石室の採用が見られるのみである。すなわち、生活様式のうちの「食」「住」に関わるものと、精神習俗に関わる「葬」の範疇のものに限られており、それ以外の威信財や精神的習俗の共通性は皆無に近い状況と言える。このような本県本土部の古墳時代の文化の在り様を、「古墳文化」と呼んで良いのかと思わせるほどの共通性の欠如である。

## １３．前方後円墳分布周縁地域の社会

ここまで述べてきたことを整理しつつ、当地の古墳時代前期・中期の社会を以下のように復元する。本県では「チカ」および「スカ」さらに「ヒラ」には前方後円墳は築造されず、ヒラを除く「マツラ」、「ソノキ」、「タカク」においても古墳時代中期後半以降、一時的にせよ前方後円墳空白地帯となる。

さらに五島列島は、古墳時代を通じて無古墳地帯であり、近接する平戸諸島小値賀島で 6 世紀末以降に横穴式石室墳が 2 基築造されたのみである。

また、本県は、古墳こそ分布するものの、壱岐・対馬の島嶼部を含めて全県的に無埴輪地帯であることが特徴である。前方後円墳を受容しながら、埴輪による祭祀を採用しない、あるいは採用できなかったという考古学的事実は特筆される。




第21図　九州西岸の前方後円墳分布の境界と、その他の古墳の分布境界

一方で、弥生時代以来の箱式石棺を用いた有力集団墓が古墳時代中期初め頃まで造られ続け、その後「低墳丘

の小規模古墳」が群集して造られるようになり、孤立した「低墳丘の小規模古墳」も出現する。あたかも弥生時代後期の特定集団墓から特定個人墓へ展開していく様子と類似した状況が窺える。さらに在地系の墳墓に威信財である後漢鏡が副葬される場合もあり、併存したかもしれない前方後円墳被葬者の副葬品を質的に凌駕していた可能性がある。

また、五島列島では古墳時代後期前半まで弥生時代以来の箱式石棺などを用いた共同墓地や有力集団墓が作られており、古墳時代初め頃まで前代の墳墓形態が残存した本土部よりさらに長きに渡って前代の墓制が残ったことが分かる。

次に、集落は竹松遺跡のそれを検討した。わずかな資料に基づく結論であるが、本県本土部の古墳時代前期から中期の集落は、弥生時代と同様に１～４棟ほどの集落が基本で、時期によっては、複数の集落が散村的に集落周辺に存在したと復元した。

続いて、本県本土部で我が国の古墳時代に共通する遺構や遺物あるいは習俗の出土や分布状況を概観したが、生活に必要な物資や道具などに共通した考古学的事象が見られるものの、威信財や精神的習俗の多くが欠落していることが明らかであった。共通する文化事象が分布する場合も点状、斑状であり、このような文化事象の分布の在り方は、文化の周辺地域には共通してよく見られ、かねてより都出などが指摘している（都出 1993）。本県本土部もまた例外ではなかったと言えよう。

さらに筆者は別稿にて、本県本土部の弥生時代の社会を概観し、新来の文化受容にあたっては受容者である本県本土部の弥生人の「選択」が働き、当地の社会に「選択的変化」が生じることを強調した。受容した場合でも本来の姿ではなく、「変容」させて受け入れる場合が多いことも指摘した（古門 2020）。古墳時代前期・中期においても日常の実用的なものは受容されるが、精神的・習俗的なものは見事に欠落している。このことは一見、前代のような「選択的変化」に似た様相を見せるが、弥生時代と古墳時代では時代状況が異なるわけで、当地の古墳時代の人々が受け入れを拒否したものか、逆に受け入れを希望しながら倭王権に拒否されたものか、あるいは他の原因があるのか、にわかには決しがたい。前述したように宇野愼敏や尾上博一は在地の墓制の検討から、地域の独自性や独立性、自立性さらには受容した文化要素の変容に注目する。筆者も南九州の特徴的な墓制の展開などを見ると、古墳時代中期までは弥生時代ほどではないが、当地では文化受容者の「選択」と「変容」の余地が依然としてあったと考える。このことは倭王権との関係を見るうえで、きわめて重要な要素ではないかと思われる。

また、都出は古墳時代の文化中枢周辺地域の特色として「習俗の二重構造」が見られることを説き、具体例として「鹿児島県では首長墓は前方後円墳を採用したが、一般墓制は地下式横穴や地下式板石積石塚であり、カマドは採用されず、習俗の二重構造を有する」と述べている（都出 1993:p22）。本県本土部でも前方後円墳は採用しているが、弥生時代以来の箱式石棺や箱式石棺に由来する石棺系石室を用いた「有力集団墓」や「低墳丘の小規模古墳」が併存しており、6 世紀中頃にならないとカマドも出現しない。当地の古墳時代前期・中期社会の特徴は、まさに前方後円墳周縁地域である鹿児島県の薩摩半島などと極めて類似していると言えよう。

## １４．前方後円墳が分布しない理由

最後に、本県本土部の一部で前方後円墳が分布しない要因を文化的、経済的側面から検討する。

（１）文化的、経済的理由

九州西岸にあって、本県本土部以外の前方後円墳分布周縁地域では、このような前方後円墳の空白をどのように評価しているのか、以下、隣接する熊本県、鹿児島県の状況を見ていく（第 20 図）。対

象地域は熊本県天草地方、同県芦北地方（註 25)、鹿児島県長島地方を含む同県北薩地方、および薩摩半島（中薩地方、南薩地方）である。

熊本県では杉井健が前方後円墳空白地帯である天草地方に接する宇土半島基部に築造された前期首長墓を検討している（杉井 2018)。熊本県地域でもっとも早く前方後円墳が築造されたのは、この宇土半島基部地域であるが、この地域は「弥生時代後期にはけっして優位とはいえない」地域であったという。杉井はこの地域が地理的には有明海の南端であり、文化的には北部九州地域の弥生文化がおよぶ南端でもあり、こうした前代の地域的特性がいち早く前方後円墳が造られた要因であると指摘した（杉井前掲：ｐ．380)。さらに「宇土半島基部地域は、中央政権側からみた内なる世界の最前線の位置にあたる。そのため、外なる世界に対する内なる世界の共同性を象徴する場所として、内外の境界域に相当する宇土半島基部地域がとくに重視され、そこに大規模な前方後円墳がいちはやく築造されるに至ったと考えることができよう。」と主張した（杉井前掲：p380)。このことは、言い換えると、倭王権と「共同性」を共有できなかった地域で、かつ弥生時代に北部九州の弥生文化が及ばなかった地域が前方後円墳空白地域となったということになる。この杉井の見解を参考にすると、弥生文化の問題は別にして、少なくとも本県本土部の古墳文化には同文化に共通した文化事象の多くが欠落していることは既に明らかにした通りであり、文化の境界域であったことは明白である。したがって本県本土部でいち早く出現した守山大塚古墳は有明海を介して宇土半島の隣接地でもあり、杉井が記す文脈の中で整理できるかも知れない（註 26)。

次に鹿児島県では橋本達也が前方後円墳空白地帯である薩摩地域を評して「この地域は弥生時代以来、南島へ繋がる九州西岸ルートの交流拠点としての役割を担ったが、 古墳時代には瀬戸内～近畿へ連なる九州東岸ルートの主流化が進行し、前期～中期へと時間を経るに従って、より副次的な交流ルートへ移行して行くものと考える」とし、シンポジウムにおいても「九州南部の西側で古墳をほとんど造らないのは、ネットワークが非常に微弱な地域というか、交流ルートに乗ってこなかったことが背景にある」と発言している（橋本 2018 ｂ：p. 102)。

このことは、前述した本県の前方後円墳空白地帯の背景としても適用できるのではないかと考える。すなわち「チカ」「ヒラ」および「スカ」の地域は、木下尚子が説くように弥生時代中期後半からいわゆる「貝の道」の交易ルートが内湾である有明海に移ったことから（木下 1996)、外海に面する五島列島および本県本土部西岸ルートが副次的なものになり、古墳時代に入ってもその状況に変化がなかったがゆえに前方後円墳が築造されなかったと解釈できる。一方、「ヒラ」を除く「マツラ」および「ソノキ」・「タカク」の地域は古墳時代前期および中期前半までは前方後円墳が築造されたが、中期後半からは一時的に途絶える。このことは橋本が指摘する九州西岸の交流ルートならびにネットワークが、九州東岸ルートに取って代わられる中で微弱化し、交流ルートの拠点から副次的な位置に移行したと考えることによって、一時的にせよ、前方後円墳空白地帯となったと考えることできる。すなわち、「マツラ」「ソノキ」「タカク」は、まさに衰退する古墳時代の九州西岸の交流ルート上に位置していたのである。よって、本県本土部の前期・中期の前方後円墳の分布の在り方は、木下・橋本の学説を根拠にすると、西日本における交流ルートの時代ごとの変化が如実に反映された結果と理解することができる。先に述べた杉井の考察を併せれば、本県本土部の一部に前方後円墳がつくられなかった文化的・経済的理由としては、倭王権側からみて古墳文化の共通性が希薄で、かつ西日本規模の広域交流ルートからはずれていたためと整理することができよう。

本稿は九州新幹線西九州ルート建設に伴う大村市竹松遺跡の緊急掘調査の成果に負うところが大き

い。末筆ながら調査にご支援、ご協力いただいた方々に、心よりお礼申し上げる。

また、執筆にあたっては、尾上博一、柴田 亮、辻田直人、中野真澄、野澤哲朗、秀島貞康、宮﨑貴夫、渡邊康行の各氏にお世話になった。芳名を記し、感謝申し上げる。

**【註】**

**註 1** 尾上博一は早くから、このような問題意識をもって本県対馬の古墳時代を検討した（尾上 2005）。

**註 2** 「ヒラ」は宇久、小値賀、野崎の各島と平戸本島を中心とする平戸諸島を想定している。旧郡名であれば「マツラ」であるが、「マツラ」は郡域が佐賀県にも及ぶことや、弥生・古墳時代にこの地域に遺跡が集中することを反映させた。

**註 3** 本県の古墳時代の地域区分に律令時代の国郡制を遡及させて、最初に適用したのは尾上博一である（尾上 2005）。

**註 4** 松尾は同論攷の研究史の中で、筆者の報告書（古門 1997）と論攷（古門 1999）では様式区分に変更が見られるものの、十分な説明が無いと指摘している（松尾 2004：p253）。遅ればせながら、本稿表 1 をもってその説明としたい。

**註 5** 筆者はかつて黄金山古墳から出土したといわれている土師器を検討し、これらの土師器の実年代を「4 世紀後葉から 5 世紀初頭」とした（古門 1999）。その後、野澤哲朗が一野古墳の 5 号墳出土の広口壺の検討から、黄金山古墳出土土器を「4 世紀後半」とし（竹中 2001）、併せて柳沢一男の初期横穴式石室の研究を参考に、黄金山古墳に「4 世紀後半」の実年代を与えた（竹中 2003 a）。一方で、宇野慎敏は筆者が検討した土師器は「黄金山古墳から出土したと伝えられているだけで、確証はない」とし、石室構造の検討から「5 世紀前半」とした（宇野 2013 c：p. 140）。宇野の指摘のとおり、問題の土師器群は、筆者が土器発見者の開正和氏から「副葬されていた壺類は墳丘上にしつらえた祠に神主によって置かれていた」と聞き取りしたもので伝聞情報である。そのため黄金山古墳に伴うという確証はなく、考古学の基本からすれば、２次資料という扱いにならざるを得ない。したがって馬場編年でも用いられていない。

**註 6** 第 3 図～ 7 図の土器群は型式ごとの共時性や一括性が担保されている訳ではない。したがって編年図ではなく変遷図である。なお、竹中の編年は、自ら調査した一野古墳の編年に用いるために作成したものであり、本来は追葬が想定される墳墓出土資料を本稿の広域編年として用いるのは慎重であるべきことを承知のうえで用いる。ただし、一野 2 号古墳出土土器は高坏形土器の型式差は前代のそれと比較した場合、わずかであるところから、一野Ⅳ期（本稿Ⅴ期）に位置づける修正を行った。

**註 7** 馬場編年では龍王遺跡の方形環溝出土Ⅰ期の土器が当該期に位置付けられている。同遺構から出土した土器群は一括廃棄ではなく、一定期間中の堆積を経て、一気に埋められた状況と報告されている。したがって、分層による遺物の取り上げではなく、報告者が型式学的に新旧土器相に分類して報告している。本稿では、この報告に対し型式学的に検証を加えるに至らなかったため、当該期資料より除外した。

**註 8** 馬場編年では龍王遺跡の方形環溝出土Ⅱ期の土器が当該時期に位置付けられている。しかし、註 7 と同様の理由により、当該期資料より除外した。

**註 9** 岩名遺跡から出土した土師器のうち、住居跡から出土したものは、松尾尚哉によると本人の論攷の図 4-4, 5, 7, 14, 15 であるという（松尾 2004）。馬場晶平論攷では第 2 図 4, 5, 7, 14, 15 となる（馬場 2017）。松尾は岩名遺跡の住居から出土した高坏を伝黄金山古墳出土高坏に後続する型式とみて、稗田原遺跡住居跡出土土器と同時期に位置づけており、筆者も同意見である。さらに松尾によると「住居跡以外の出土分はさらに時期が下がると思われる」ということであり（松尾 2004:p265）、本稿では馬場編年でⅣ期とされた住居外出土土器を同Ⅴ期に降らせる修正を加える。

**註 10** 蒲原は土師本村 3 式新相を重藤のⅢＡ期とⅢＢ期の間に位置付けている（蒲原 2017、同 2019）

**註 11** 熊本県内の古墳時代の箱式石棺を検討した島津屋寛は、箱式石棺墓が「熊本では強い統制や制限を受けずに、小規模ながら、比較的自由に営まれたと考えられるのである。」と総括している（島津屋 2009:p. 141）。野澤が主張するように箱式石棺墓が倭王権の下で確立された墓制であるならば、このような地域における自由度をいかに説明するかが問われる所である。

**註 12** 宇野慎敏はひさご塚古墳 1 号石室を石棺系横口式石室と見ている（宇野 2014）。なお、ひさご塚古墳に隣接する

カサンガン（重棺）古墳は詳細が不明であるが、重藤輝行は、ひさご塚古墳に先行する前方後円墳集成編年5期に編年している（重藤2012）。筆者がその根拠を確認できなかったため、本稿第8図には反映させていない。

註13　2017年（平成29年）10月7日に開催された九州前方後円墳研究会の土器見学会において、参加者からは、（この土器は）「甕に近い壺。完全な丸底ではない。口縁端部を少し上げるのは庄内甕を意識か？頸部直下の胴部に段があり、粘土帯が狭いことが分かる。胴部下半はミガキ。内面のハケメの向きはB系統とは逆になるが、B系統の変容形態か。」といった感想が聞かれた。

註14　丸塚古墳出土土器は藤田・吉田編1976と古田1983では、同一土器であっても実測による形状や復元が異なっているので注意を要する。本稿では前者を用いた。

註15　黄金山古墳の主体部は、野澤哲朗によると竪穴系横口式石室（竹中2001）、宇野愼敏によるとは「石棺系横口式石室」となる（宇野2018）。

註16　本稿では5世紀の横穴式石室を「初期横穴式石室」と呼称する。

註17　藤田和裕の集成では「半肉彫式獣帯鏡（はんにくぼりしきじゅうたいきょう）」と分類されている。半肉彫獣帯鏡は樋口隆康の分類であるが、岡村秀典の検討により改められ、岡村が提唱した「浮彫式獣帯鏡」が近年用いられている（岡村1993）。さらに当該鏡は「上方作系浮彫式獣帯鏡」とされており（岡村1992）、本稿もそれに拠った。

註18　タカクの景華園遺跡（島原市）では甕棺墓から銅鏡の出土が伝えられており、舶載鏡の可能性もあろうが、詳細が不明であるため検討できない（岡崎1974、藤田1994）。

註19　本稿で「マツラ」と仮称した地域に隣接して、弥生時代には佐賀県唐津平野を中心とした末蘆国があったとされている。唐津平野では弥生後期前半に、桜馬場遺跡で既に特定個人墓（王墓）が出現しており、弥生終末期には中原遺跡で墳丘墓3基や土坑墓・木棺墓・石棺墓群が出現している。これらは破砕鏡や鉄剣、玉類を副葬した厚葬墓である。墳丘墓3基は溝で区画された個人墓で、土坑墓・木棺墓・石棺墓群は墳丘墓のあとに造営された集団墓であった。さらに古墳時代初頭には前方後円墳と周溝墓がつくられている（佐賀県教委編2012）。墳墓を比較する限り、改めて本県本土部の集団の階層分化の進展速度が緩やかで、特定個人墓の出現も遅れ、古墳時代初頭まで待たねばならなかったことが分かる。

註20　竹辺C遺跡は「マツラ」に所在する遺跡として本稿では整理した。近年、杉原敦史によって律令時代の松浦郡と彼杵郡の郡境を相浦川に求める学説が提示されており（杉原2012）、それに従えば同遺跡は「ソノキ」の所在となるが、今の筆者には杉原説の是非が判断できないため、従来の佐世保湾背後の山稜を郡境とする説に拠った（木本2013）。

註21　遺物集積遺構（SU）にはTAK201302調査区 12小区SU6（長崎県教委編2018　p304）もあるが、現在の用水路下を調査したもので、そこから検出した旧水路跡に隣接して発見された。本稿第Ⅵ期の遺物がまとまって出土しているが、旧水路に隣接するため、竪穴建物跡の痕跡と仮定することを避けた。

註22　本県において早くからこのような問題意識を持っていたのが井上和夫である。井上は化屋大島遺跡の調査報告書で、本県では「畿内を中心に分布する割竹形石棺，舟形石棺等や，九州にも一大分布圏をもつ家形石棺もみられない。舟形石棺は唐津市島田塚古墳、長持形石棺は東松浦郡谷口古墳、割竹形石棺は竹田市七ツ森A号古墳、家形石棺は佐賀市西隈古墳をそれぞれ西限としていることは古墳時代に入ると現在の県境付近で肥前地方を分けることも可能になってくる。このことは石棺に限らず三角縁神獣鏡、埴輪、装飾古墳等の分布についても同様なことがいえる。」と記述している（井上1974:p.23）。

註23　竹松遺跡の発掘調査報告書では5世紀後半以降のカマドをもつ竪穴建物跡としてTAK201403調査区第3小区のSC9とTAK201405調査区第2小区のSC1が報告されているが（長崎県教委編2019）、前者は出土遺物がなく、後者も出土遺物の時期に幅があり、竪穴建物跡の時期を確定できる出土資料に乏しい。したがって本県本土部で5世紀にカマドが存在したか否かという問題は、現状では結論を保留しなければならない。

なお林田和人によると、肥後地域では「県央の宇城地域では、早い段階（5世紀中頃:筆者註）に竈の出現を見る。一方県北の地域では、6世紀前半に竈が普及する」という（林田2002:p.120）。

註24　本県本土部で石製祭器としての石製模造品が出土した古墳は、5世紀のスカの宮田石棺群A-1号石棺とソノキの

7 世紀のテボ神古墳のみである。前者は石枕の傍から石製刀子が、後者は横穴式石室側壁の掘方から石製鏡が出土した。

**註 25** 杉井健によると同じ前方後円墳空白地帯である芦北地方と天草地方でも、古墳時代前期・中期の様相は異なっており、倭王権との関連という点では、前者の地域が「有力」であるという（杉井 2009:pp.231-232）

**註 26** 考古学の論攷に安易に文献資料を引くのは本意ではないが、倭王権と親和的ではない勢力、あるいは親和的ではあるが倭王権と政治的関係が希薄な勢力として「土蜘蛛」の存在が『肥前国風土記』に伝えられている。本県関係の土蜘蛛伝承地域のすべてが、反乱伝承の有無に関わらず、前方後円墳空白地域の「ヒラ」「チカ」および前方後円墳の出現時期が遅れた「ソノキ」であることは極めて示唆的である。

**【引用・参考文献】**


穴沢和光・馬目順一 1987「獅噛環刀試考（改訂稿）」『日本考古学論集 8』武器・馬具と城柵　斎藤 忠編　吉川弘文館

井上和夫 1974「Ｖ後論」『化屋大島遺跡』多良見町文化財調査報告書第 2 集　多良見町教育委員会

岩本　崇 2014「北近畿・山陰における古墳の出現」『博古研究』第 48 号　博古研究会

上田龍児　2004「5. 考察」『長崎県・景華園遺跡の研究　福岡県京都郡における二古墳の調査－箕田丸山古墳及び庄屋塚古墳－　佐賀県東十郎古墳群の研究－補遺篇－』福岡大学考古学研究室研究報告第 3 冊

上野祥史 2014「日本列島における中国鏡の分配システムの変革と画期」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 185 集 国立歴史民俗博物館

宇野愼敏 2013 a「九州島における 4・5 世紀の一様相 (1) －肥前 (1)-」『つどい』301 号　豊中歴史同好会 http://toyoreki.way-nifty.com/blog/2013/03/451--1--075e.html

宇野愼敏 2013 b「九州島における 4・5 世紀の一様相 (2) －肥前 (2)-」『つどい』305 号　豊中歴史同好会 http://toyoreki.way-nifty.com/blog/2013/07/68-59b1.html

宇野愼敏 2013c「大村市黄金山古墳の再検討」『福岡大学考古学論集』考古学研究室開設 25 周年記念　福岡大学考古学研究室

宇野愼敏 2014「九州島における 4・5 世紀の一様相 (3) －肥前 (3)-」『つどい』315 号　豊中歴史同好会 http://toyoreki.way-nifty.com/photos/uncategorized/2014/04/28/tudoi3156.jpg

宇野愼敏 2018「肥前西部における横穴式石室の展開とその背景－彼杵郡の軍事集団の出現について－」『西海考古』第 10 号西海考古同人会

雲仙市教委編 2006『龍王遺跡（倉地川古墳）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第 1 集　雲仙市教育委員会

雲仙市教委編 2008a『龍王遺跡Ⅲ』雲仙市文化財調査報告書　第 3 集　雲仙市教育委員会

雲仙市教委編 2008b『佃遺跡』雲仙市文化財調査報告書　第 4 集　雲仙市教育委員会

雲仙市教育委員会編 2010『守山大塚古墳』雲仙市文化財調査報告書 第 7 集　雲仙市教育委員会 .

大村市教委編 1988『小佐古石棺墓群』大村市文化財調査報告書第 13 集　大村市教育委員会

大村市教委編 1995『富の原遺跡・小佐古石棺墓群Ｂ地点 II　発掘調査報告書』大村市文化財調査報告書　第 19 集

大村市教委編 2000『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 2』大村市文化財調査報告書第 24 集

大村市教委編 2003『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 Vol.3』大村市文化財調査報告書　第 25 集　大村市教育委員会

大村市教委編 2021『大村市市内遺跡発掘調査概報 10』大村市文化財調査報告書第 45 集　大村市教育委員会

岡崎　敬編 1974「長崎県、佐賀県、熊本県における「古鏡」発見地名表稿」『九州文化史研究所紀要』第 19 号　九州大学文化史研究施設

岡村秀典 1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る　－松本古墳群シンポジウムの記録－』出雲考古学研究会

岡村秀典 1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集

岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66　吉川弘文館

小値賀町教委編 1984『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書第 4 集　小値賀町教育委員会

尾上博一 2005「前方後円墳築造周縁域としての対馬」『西海考古』第 6 号　正林護先生喜寿記念号　西海考古同人会

蒲原宏行 1989「北部九州出土の畿内系二重口縁壷一その編年と系譜をめぐって一」『古文化談叢』20 発刊記念論集（中）後に蒲原 2019 所収
蒲原宏行 1991「古墳時代初頭前後の土器編年－佐賀平野の場合－」『佐賀県立博物館･美術館調査研究書』佐賀県立博物館･佐賀県立美術館
蒲原宏行 1995「肥前」『全国古墳編年集成』石野博信編　雄山閣出版
蒲原宏行 2017「九州島における古式土師器－佐賀・唐津平野」『第 19 回九州前方後円墳研究会　長崎大会　発表要旨・基本資料集』九州前方後円墳研究会
蒲原宏行 2019「古墳時代初頭前後の土器様相－佐賀・唐津平野の場合－」『弥生・古墳時代論叢』六一書房
木下尚子 1996『南島貝文化の研究』貝の道の考古学　法政大学出版局
木村龍生 2009「陶邑編年と九州の古墳時代須恵器について」『考古学研究』第 56 巻第 1 号通巻 221 号
肝付町教育委員会他 2007『古墳に眠る肝属の王　－塚崎古墳群の時代－』肝付町教育委員会他
木本雅康 2013「第三節　律令国家の空間支配」『新編大村市史』第 1 巻自然・原始・古代編　新大村市史編纂委員会
京都大学平戸学術調査団編 1951『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団
久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ　庄内式土器研究会
国見町教委編 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書第 3 集　国見町教育委員会
小佐々町教委編 1985「古田遺跡」小佐々町文化財調査報告書第 1 集　小佐々町教育委員会
佐賀県教委編 2012『中原遺跡Ⅵ』12 区・13 区の古墳時代初頭前後の墳墓群の調査－西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（11）　佐賀県教育委員会
佐世保市教委編 2019『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第 17 集　佐世保市教育委員会
佐田　茂 2008「肥前西部の古墳時代の動向」『 佐賀大学地域歴史文化研究センター研究紀要』2　佐賀大学地域歴史文化研究センター
重藤輝行 2009「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考古学』佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集　佐田茂先生退任記念論文集刊行会
重藤輝行 2010「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化談叢』第 63 集　九州古文化研究会
重藤輝行 2012「3. 地域の展開②九州北部」『古墳時代の考古学』第 1 巻　同成社
重藤輝行 2018「おじょか古墳の横穴式石室と九州」おじょか古墳発掘 50 周年記念シンポジウム『おじょか古墳と 5 世紀の倭』記録集　三重県志摩市教育委員会
島津屋　寛 2009「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本大学
下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
杉井　健 2009「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」『『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』熊本大学
杉井　健 2018「弥生時代後期集落の消長よりみた古墳時代前期　有力首長墓系譜出現の背景」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 211 集　国立歴史民俗博物館
杉原敦史 2012「古代における彼杵郡と松浦郡の郡境について－考古学的成果に基づく歴史学　資料の再検討－」『西海考古』第 8 号 故 福田一志氏追悼論文集　西海考古同人会
外海町教委編 1985『宮田古墳群』外海町文化財調査報告書第 3 集　外海町教育委員会
高来町教委編 1993『中江遺跡・上田井原遺跡』小江地区県営圃場整備事業にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　高来町文化財調査報告書第 1 集
髙木恭二 2012「菊池川流域の古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 173 集　国立歴史民俗博物館
竹中哲朗 2001「一野古墳群出土土器の編年」『西海考古』第 4 号　西海考古同人会
竹中哲朗 2003a「大村湾・橘湾沿岸の古墳・箱式石棺の検討」『西海考古』第 5 号　西海考古同人会
竹中哲朗 2003b「第 3 節　島原半島の古墳時代住居跡出土土師器」」『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第 3 集　国見町教育委員会

田平町教委編 1989『笠松天神社古墳』田平町文化財調査報告書第 4 集　田平町教育委員会
檀　佳克 2011「土師器の編年　①九州」『古墳時代の考古学 1　古墳時代史の枠組み』 同成社
辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』KADOKAWA
都出比呂志 1993「前方後円墳体制と民族形成」『待兼山論叢』史学篇
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/48054/mrh_027_001.pdf
都出比呂志 2010「古墳と東アジア」『京都府埋蔵文化財論集　第 6 集　－創立 30 周年記念誌―』京都府埋蔵文化財調査研究センター
寺田正剛 2005「長崎県地域における箱式石棺墓の様相について」『西海考古』第 6 号正林先生喜寿記念号　西海考古同人会
長崎県教委編 1997a『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第 136 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 1997b『長崎県の原始古代』資料編Ⅱ
長崎県教委編 2005『地域拠点遺跡発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第 185 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 2008『竹辺 C 遺跡・竹辺 D 遺跡』長崎県教育庁佐世保文化財調査事務所調査報告書第 3 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 2018『竹松遺跡Ⅲ』長崎県教育庁新幹線文化財調査報告書第 6 集　長崎県教育委員会
長崎県教委編 2019『竹松遺跡Ⅳ』中巻　弥生・古墳時代編　長崎県教育庁新幹線文化財調査報告書第 11 集　長崎県教委
長崎市教委編 2002『曲崎遺跡Ⅱ』長崎市教育委員会
長崎市埋蔵文化財調査協議会編 1996『万才町遺跡』朝日生命ビル建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　長崎市埋蔵文化財調査協議会
野澤哲朗 2013「古墳時代の長崎」『新長崎市史』第一巻自然編、先史・古代編、中世編　長崎市史編纂委員会
橋本達也 2009「第 3 部考察　第 3 章薩摩地域の古墳時代墓制と地域間交流」『薩摩加世田奥山古墳の研究』鹿児島大学総合研究博物館
橋本達也 2010「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』2006（平成 18）年度～ 2009（平成 21）年度科学研究費補助金（ 基盤研究 B）研究成果報告書
橋本達也 2018a「おじょか古墳の横穴式石室と九州」おじょか古墳発掘 50 周年記念シンポジウム『おじょか古墳と 5 世紀の倭』記録集　三重県志摩市教育委員会
橋本達也 2018b「古墳時代の九州南部社会と交流」『東シナ海と弥生文化』環太平洋文明叢書 6　雄山閣
林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『第 5 回前方後円墳研究会古墳時代中・後期の土師器』九州前方後円墳研究会
馬場晶平 2017「九州島内における古式土師器－肥前西部」『第 19 回九州前方後円墳研究会　長崎大会　発表要旨・基本資料集』九州前方後円墳研究会　後に『西海考古』第 10 号　再掲
樋口隆康・釣田正哉 1951「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団
秀島貞康 2013「第 4 章　古墳時代」『新編　大村市史』第 1 巻　自然・原始・古代編　大村市史編さん委員会
平戸市史編纂委員会 1995『平戸市史』自然・考古編
広瀬和雄 2003『前方後円墳国家』角川書店　のちに文庫化（2017 年　中公文庫）
藤田和裕 1994「長崎県」『共同研究「日本出土鏡データ集成」』2　国立歴史民俗博物館研究報告第 56 集国立歴史民俗博物館
藤田徹・吉田安弘編 1978『杉山古墳調査報告書－消失し古墳の図上復元の研究－』吾妻町教育委員会
古門雅高 1997「稗田原遺跡住居跡出土の古式土師器について」『稗田原遺跡』長崎県文化財調査報告書 第 136 集長崎県教委
古門雅高 1999「黄金山古墳出土土師器の検討」『西海考古』創刊号　西海考古同人会
古門雅高 2020「大形成人用甕棺墓分布周縁地域の社会－長崎県本土部の弥生時代社会－」『西海考古』第 11 号　西海考古同人会
古田正隆 1983「第 4 章　吾妻町の古墳文化」『吾妻町史』吾妻町

松浦市教委編 2015『松浦市内遺跡確認調査 (4)』松浦市文化財調査報告書第 6 集　松浦市教育委員会
松尾尚哉 2004「長崎県本土部の古式土師器－主に大村湾・有明海沿岸部地域を中心に－」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念』小田富士雄先生退職記念事業会
宮﨑貴夫 1992「肥前西部（長崎県)」『前方後円墳集成　九州編』山川出版社
宮﨑貴夫 1995「五島列島の弥生･古墳時代の墓制と文化―西北九州地域との比較を中心として―」『風土記の考古学』⑤『肥前国風土記』の巻』同成社
宮﨑貴夫 2019「日本列島最西端の古墳の様相－長崎県本土地域における古墳の諸問題－」『長崎地域の考古学研究』
柚木亜貴子 2005「第 4 章まとめ」」『地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ上篠原遺跡（国見町・カラカミ遺跡（壱岐市）・橘遺跡（五島市）』長崎県文化財調査報告書　第 185 集
柳沢一男 2002「4 横穴式石室の検討」『鋤崎古墳』福岡市文化財調査報告書第 730 集　福岡市教育委員会
柳田康雄 2002「第 2 章　九州土師器の編年」『九州弥生文化の研究』学生社
山田俊輔 2005「上方作系浮彫式獣帯鏡の基礎的研究」『早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要』2005 年度　早稲田大学會津八一記念博物館

# いま磁器を使っているのは波佐見のおかげ

## －日本の生活文化のなかの波佐見焼－

宮﨑　貴夫

### はじめに－波佐見焼とのかかわり－

戦国時代末期の日本を統一した秀吉は、朝鮮半島に目を向け 1592 年から 1598 年にかけて朝鮮王朝に侵略戦争をおこなった。この文禄・慶長の役とよばれるその戦役は成功することはなかったが、肥前の鍋島軍などの諸大名は多くの陶工を連れ帰った。その陶工らが佐賀鍋島領の有田で泉山陶石場を発見したことによって、いまから 400 年ほど前、日本初の磁器が有田で誕生した（大橋・坂井 1994)。まもなく､大村領にあった波佐見でも陶工らによって磁器の焼成がおこなわれるようになった。それが、磁器生産地としていまにつながる「波佐見焼（はさみやき）」である。

筆者は、福岡県大牟田市で生まれ、そこで小学５年まで暮らした。小学何年の時か定かでないが、母親から聞いたのは「ハサミヤキ」という価格の安い焼き物があって、町内の婦人会で買い出しに出かけるということであった。その時に、紙や布を切る鋏（はさみ）と焼き物の茶碗や皿のイメージが重なって、子供心ながらに「ハサミヤキ」という変わった名の焼き物があるということを知った。

波佐見町には「波佐見焼」の窯跡が 30 数基存在している。町教育委員会が、1990 年から３箇年の窯跡の調査計画を立てたことで、筆者らは調査担当者として関係をもつようになった。調査では、年の１ヶ月ほど町に滞在することになったので、波佐見焼の歴史、町の様子･状況などについて、地元の方々に見聞する機会をもつことができた。現地で聞いた話のなかで一番印象に残っているのは、「波佐見焼」が「有田焼（ありたやき）」というレッテルが貼られ､「有田焼」の製品として販売されているということで､「波佐見焼」が「有田焼」という大きなブランドの影に隠れているという現状を知った。

その調査から 30 年余たったが、最近の波佐見町においては、「波佐見焼」がもっているイメージを変えていこうとする新しい動きが認められる。それは、伝統ある焼き物としての「波佐見焼」ブランドの構築、焼き物デザインの革新にとどまらず、おしゃれな紙箱の製作や雑貨、カフェなど、若い人たちを中心として「波佐見」地域のブランド力を高めるための取り組みがおこなわれている。

筆者は、この波佐見の窯跡調査に関わることによって、「波佐見焼」が磁器の大衆化に大きく貢献をしたことを知った。この小稿では、近世の「波佐見焼」が日本の生活文化に果たした役割などについて論じてみたい。

### １．波佐見の町と産業

長崎県本土のほぼ中央に位置する波佐見町は、海域に囲まれた長崎県において、平成の大合併後には海を臨まない唯一の町となった。地勢的には 100 ㍍～ 500 ㍍の山並みによって囲まれた小さな盆地で、波佐見から川棚町を経て大村湾に注ぐ川棚川（波佐見川）とその支流が開析した谷間が入りこみ、水田を潤す平野が形成されている。波佐見地域は､天正年間（1573 年～ 1591 年）頃に大村領に定まり、江戸時代には佐賀鍋島藩、平戸松浦藩と領界を接する「波佐見一万石」と呼ばれた大村藩では数少ない穀倉地であった。町域北西隅の山頂には三藩を分ける三領石があり、それを藩境として有田（佐賀鍋島藩)、波佐見（大村藩)、三川内（平戸松浦藩）の肥前を代表する窯業地帯が展開している。この

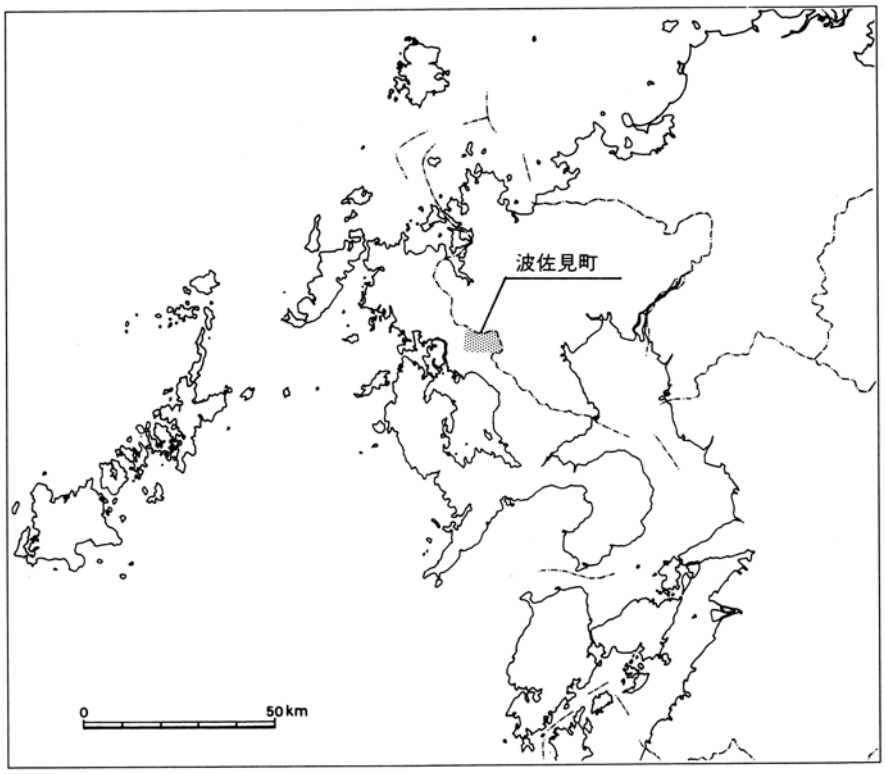



図１　波佐見町の位置（宮崎・村川編 1993）

肥前地域で誕生した「伊万里（いまり）」と呼ばれた磁器が、東アジアからヨーロッパに運ばれていった。

波佐見町では、町の中央に広がる平野を中心とした農業が盛んであるが、町の産業を最も特色づけるのは窯業であろう。町外からの通勤も含め 6000 人ほどの従業者をかかえ、基幹産業として町のほとんどの人が窯業に何らかの関わりをもっているといってもよい。佐世保市の三川内地区とともに長崎県内の窯業の中心地であり、波佐見では国内使用の日用食器 15%が生産されている。

町内には、17 紀初頭の陶器から磁器創製にかかる窯跡として著名な畑ノ原窯跡（はたのはらかまあと）（佐々木 1988）をはじめ、海外輸出向けの青磁や染付磁器、国内向けに生産された「くらわんか」茶碗・皿などを焼成した古窯跡が 30 数ヵ所存在し、いまも畑地や山林の中に窯壁や焼物の破片や窯の壁土などを廃棄した物原をみることができる。1990 年から３箇年実施した調査以前には、畑ノ原窯跡など、二、三の窯跡を除けば、窯跡の調査はなされておらず、窯跡の実態や内容のほとんどが明らかでなかった。

波佐見町では、これらの古窯跡について、盗掘や自然崩壊、開発の波から保護し、文化財の保存を図るための基礎資料を得る目的で、国庫補助事業として 1990 ～ 1992 年度の３箇年にわたる範囲確認調査を計画し、実施することになった。以上は、1993 年に刊行した調査報告書の「波佐見町の環境と調査経緯」を基本に記した。したがって、ここで示した数値等には若干の変動があると思われる。

## ２．波佐見古窯跡調査の経緯

波佐見町内には 30 数基の窯跡が散在しており、地元で窯跡の保護に熱心に取り組まれていたのは、当時、町教育委員会の文化財を担当されていた一瀬信雄氏（のち、教育次長）である。この窯跡群の調査についても、一瀬氏が尽力されたことで開始されたといっても過言ではない。当時町には発掘を担当する埋蔵文化財職員が配置されておらず、調査を開始するにあたって町教育委員会は、長崎県文化課へ調査の依頼をおこない、そこでたまたま筆者らが調査担当者なったのである。

筆者は、それまでさまざまな遺跡の発掘を体験していたが、窯跡の調査は未経験であった。地方公共団体の文化財行政の担当者は、研究する専門領域にかかわらず、旧石器時代から近代までのさまざまな遺跡の発掘調査を職務として担っている。そこで初めて、窯跡の調査に臨むことになったのだが、調査にあたって、経験、知識・技術面において心配がなかったといえば嘘になる。

しかし、この調査を始めるにあたって町教育委員会では、近世陶磁研究の第一人者である佐賀県立九州歴史陶磁文化館の大橋康二氏（当時学芸課長・のち館長）に調査指導の了承をいただいていた。そのことで、その懸念はすぐに払拭することができた。調査期間中には、大橋氏に現場に出向いていただき、窯跡の発掘方法、留意点など、直接に数々の指導・助言をいただき、７基の窯跡の範囲確認調査と２基の窯跡の測量調査、計９基の窯跡の確認調査をやりとげることができた。

窯跡から出土した陶磁器についても、長崎市にあった県文化課立山分室へ、大橋氏に陶磁器の鑑定指導をいただいたことで、調査報告書をまとめることができた（宮﨑・村川編 1993)。

この波佐見古窯跡群の調査と報告書を作成するという経験は、筆者にとって、近世陶磁器について学び、近世考古学研究へ踏みだすという、またとない機会となった。

## ３．波佐見古窯跡群調査の成果

この調査での第一の成果にあげられるのは、波佐見の窯跡の変遷と陶磁器編年の骨格が捉えられたことである。そして最も重要なのは、1991 年度に実施した中尾皿山地区（図２）の中尾上登窯跡（なかおのうわのぼりかまあと）の調査である。調査では、階段状に連なる段々畑に、焚口（たきぐち）、窯尻（かまじり）と推測される場所と中程に調査区を設定し発掘をおこなうことで、登り窯の窯体の長さが 160 ㍍あることを確認できた（図３)。

中尾上登窯跡の調査では、九州歴史陶磁文化館の大橋氏と鈴田由起夫氏に現地指導を受けた。その現場で、鈴田氏から中尾上登窯の 160 ㍍という長さは、これまでに確認された窯跡の中では一番長いのではないかとの指摘があった。そこで大橋氏が、これまで最大とされたのは鍋島藩窯（なべしまはんよう）（伊万里市）であり、その長さは 135 ㍍である。これまでの知見では鍋島藩窯より大きな規模をもつ窯は日本以外にも存在していないことから、中尾上登窯跡が世界で最大級の規模をもつことが判明したのである。

改めて、大村藩でまとめられた『郷村記』(藤野編 1982) を見てみると、江戸時代末期の文政３年 (1856) 頃に波佐見村には窯室が 20 軒を超える８箇所の登り窯が記録されており、波佐見の巨大窯跡が注目されることになった（表１)。

３箇年の調査によって、中尾上登窯跡 160 ㍍（釜室数 33 軒)、永尾本登窯跡（ながおほんのぼりかまあと） 155 ㍍（釜室数 29 軒)、中尾下登窯跡（なかおしものぼりかまあと） 120 ㍍（釜室数 26 軒)、三股新登窯跡（みつのまたしんのぼりかまあと） 100 ㍍（釜室数 21 軒）が確認され、『郷村記』に記載された窯の規模の内容に照応していることが検証できた（表１)。

また、中尾上登窯跡の西側には、直交するかたちで対峙する大新登窯跡（おおしんのぼりかまあと）がある（図２)。1990 年から３箇年の調査では調査対象から外れていたが、『郷村記』の記録では釜室数が 39 軒と記されていることから、調査された中尾上登窯よりもさらに巨大な窯になることが予想されていた。

この大新登窯跡については、新たに町教育委員会の文化財担当となった中野雄二氏が 2005 年に調査をおこない、窯体の長さが 170 ㍍あることを確認したことで、大新登窯が世界最大級の登り窯であることが判明した（中野編 2006)。

このように、1990 年～ 1992 年の３箇年の調査と 2005 年の調査の成果によって、『郷村記』の記録に記されているように、江戸後期から末期の 18 世紀後半から 19 世紀前半の波佐見地域では、大新登窯跡 170 ㍍、中尾上登窯跡 160 ㍍、永尾本登窯跡 155 ㍍など、100 ㍍を超える巨大な登り窯が８基築かれ、磁器を大量に製造する一大生産地になっていたことが明らかになったのである（表１)。

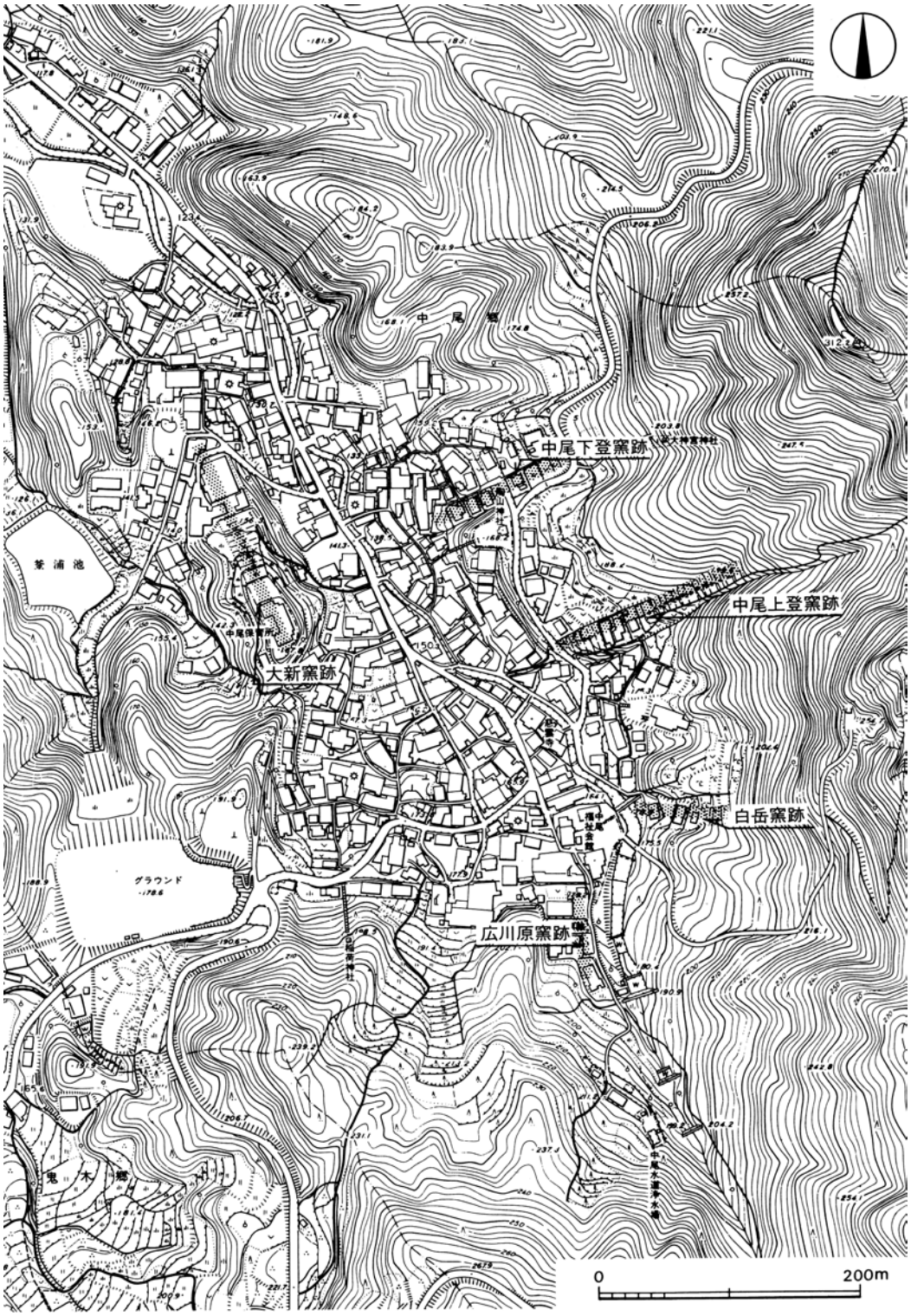



図２　中尾皿山地区の窯跡群（宮崎・村川編 1993）

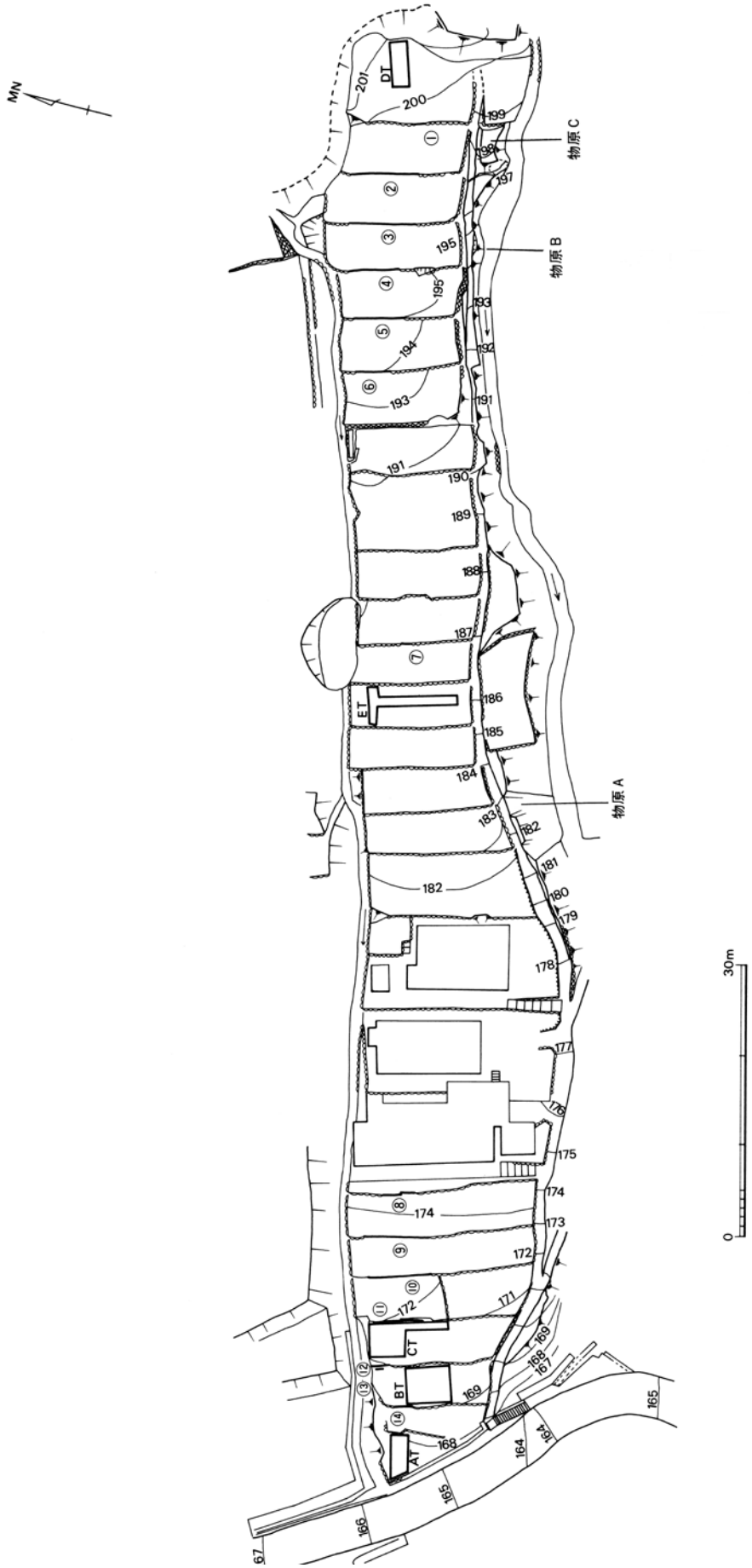



図３　世界二番目の規模の窯（中尾上登窯跡、宮﨑・村川編 1993）

表１　「郷村記」（1844 年頃）における窯の規模（宮崎・村川編 1993）

| | 釜　数 | 本　釜 | 安光釜 | 灰安光釜 |
|---|---|---|---|---|
| 三股皿山 | 68　軒 | | | |
| 上　登　釜 | 23軒 | 17軒 | 2 軒 | 4 軒 |
| 下　登　釜 | 24軒 | 17軒 | 4 軒 | 3 軒 |
| 新　登　釜 | 21軒 | 12軒 | 6 軒 | 3 軒 |
| 永尾皿山 | 29　軒 | 23軒 | 4 軒 | 2 軒 |
| 中尾皿山 | 98　軒 | | | |
| 上　登　釜 | 33軒 | 25軒 | 4 軒 | 4 軒 |
| 下　登　釜 | 26軒 | 20軒 | 4 軒 | 2 軒 |
| 大 新 登 釜 | 39軒 | 32軒 | 4 軒 | 3 軒 |
| 稗木場皿山 | 20　軒 | 14軒 | 3 軒 | 3 軒 |

・三股皿山　①三股上登窯 23 室 115 m、②三股本登窯 24 室 120 m、③三股新登窯 21 室 105 m
・永尾皿山　④永尾本登窯 29 室 155 m
・中尾皿山　⑤中尾上登窯 33 室 160 m、⑥中尾下登窯 26 室 120 m、⑦大新登窯 39 室 170 m
・稗木場皿山　⑧皿山本登窯 20 室 100 m

## ４．海外輸出された肥前磁器

世界的な窯業の中心地であった中国の景徳鎮窯（江西省）や漳州窯（福建省）などの窯場は、明朝から清朝への政権交替にともなう内乱によって衰退し、明朝が滅んだ 1644 年以降、事実上中国の磁器輸出は停止状態となった。1610 年代～ 1630 年代に磁器の生産が始まっていた肥前では、中国国内の破局的な事態によって磁器の海外輸出する市場がもたらされることになった。日本は中国磁器の輸入国から一転して、磁器を輸出国となったのである（大橋 2004 ｂ）。肥前陶磁の「伊万里」の海外輸出については、通説では、染付、青磁などの磁器を生産し始めた肥前に目を付けたオランダ人によって、1650 年頃に始まったということであった。だが、山脇悌二郎氏はその説に対して、1988 年の『有田町史商業編Ｉ』のなかで、1647 年にシャム（タイ）経由カンボジア行きの中国船に積まれていた粗製の磁器は「伊万里焼」であると看破して、これを肥前磁器輸出の初見とみなした（大橋・坂井 1994）。

山脇氏のこの見解を受けて、『アジアの海と伊万里』のなかで大橋康二・坂井隆氏は、長崎から東南アジアにむけて最初に伊万里焼の海外輸出をおこなったのは明の遺臣鄭氏一派であり、インドネシアなどの考古学的調査にもとづいて、東南アジアの遺跡で 1640 年代の「初期伊万里」の製品が出土していることを指摘している（大橋・坂井 1994）。

1639 年にはポルトガル人が追放されており、当時鎖国下の長崎で海外貿易できたのは唐人とオランダ人に限られていた。大橋氏は『海を渡った陶磁器』のなかで、オランダは台湾商館に中国磁器の在庫があり、肥前磁器の技術の水準を確かめながら、1650 年から東南アジアに向けて肥前磁器を輸出しはじめ、1659 年以降にヨーロッパへ向けて本格的な肥前陶磁の輸出をおこなったとする（大橋 2004 ｂ）。17 世紀後半代に海外輸出された肥前陶磁の主力製品は染付である（図５）。波佐見でも咽口窯跡ほかの窯で染付を焼成しているが、波佐見として最も特徴的なのは輸出の主力製品として青磁を製造したということであろう。波佐見の青磁は、2000 年に九州近世陶磁学会でまとめられた『九州陶磁の編年』のなかで、中野雄二氏の調査研究によって 1630 年代～ 50 年代の三股古窯跡、三股青磁窯跡、1650 年代～ 80 年代の木場山窯跡、1680 年代～ 1740 年代の長田山窯跡の製品へと変遷したことが解明されており、18 世紀中頃には海外向けの青磁の生産が衰退したことが知られている（中野 2000）。すなわち、

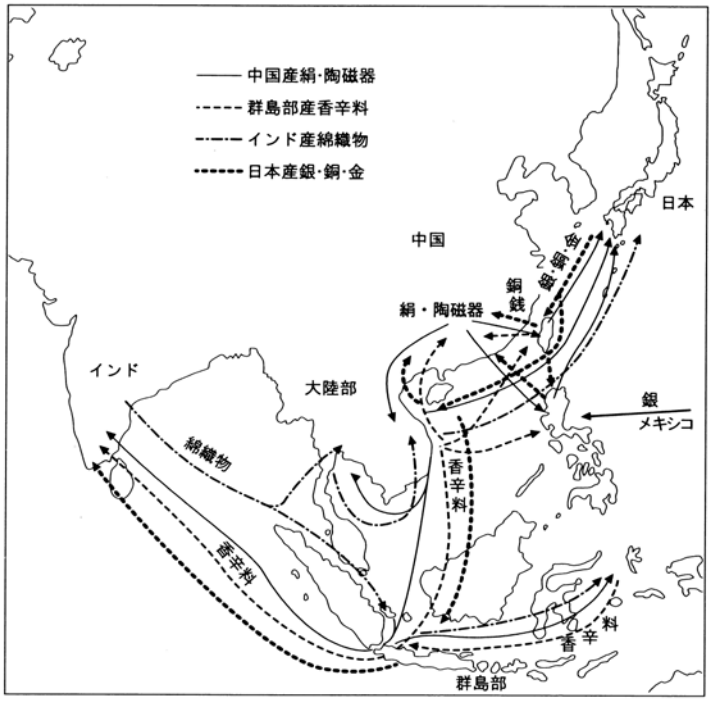



図４　17 世紀アジア東部の貿易（大橋・坂井 1994）

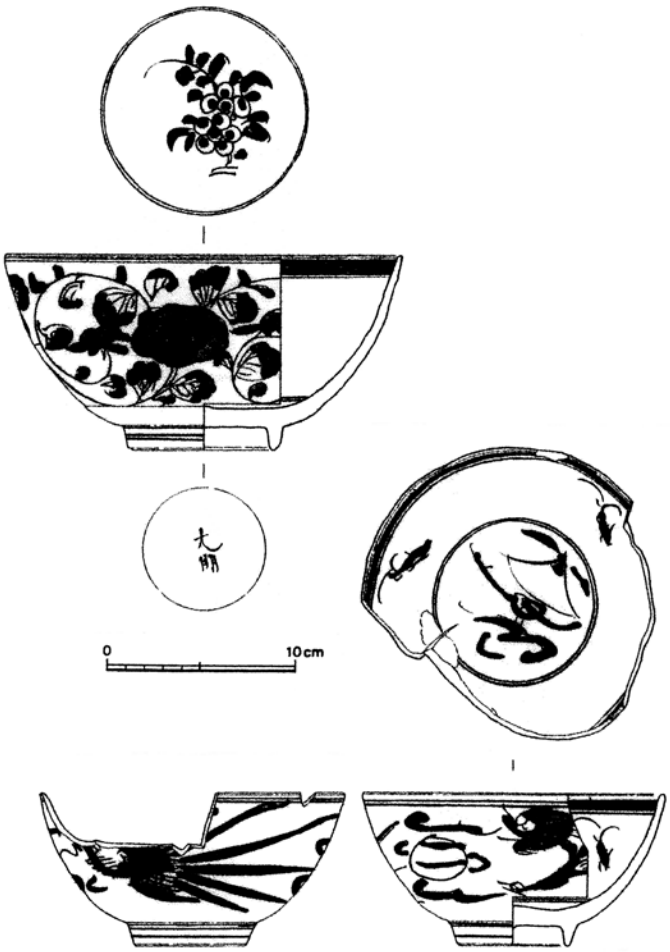



図５　海外輸出期の染付磁器（咽口窯跡、宮崎・村川編 1993）

17 世紀後半に海外輸出された肥前磁器では、有田では染付生産が主体であったが、波佐見では青磁を主力に専業として焼成していた窯があったということになる。

## ５．波佐見で青磁が選ばれた理由（わけ）〈馬場強氏の話から〉

筆者が波佐見窯跡の調査に関わる前、1980 年代後半頃であったと思う。確実な年月は記憶していないが、旧長崎美術博物館の敷地内にあった長崎県文化課の立山分室の整理室で、当時長崎県美術博物館の学芸課長だった馬場強氏からうかがった話を記しておきたい。

馬場氏は、有田と波佐見は染付と青磁を生産しているが、有田が染付を、波佐見が青磁を主力的に生産した理由について、それは有田の泉山と波佐見の三股の陶石の違いにあるとした。波佐見の三股陶石の素地土（きじつち）で焼いた製品はネズミ色の灰色を帯びる。白いと清白磁になってしまうが、灰色の方が青磁釉の色が映えて見える。それで、波佐見は青磁を選んだのだと説明された。さらに、有田、波佐見、天草陶石も含めて日本の陶石からつくられる素地土は、景徳鎮の陶石に比べて粘りがないので、焼成すると熱で垂れ下がって（へたって）しまう。日本では、それを防ぐために器を厚手に仕上げ、皿では高台内に「ハリ支え」をおこなう技術が発明されたのだ、と話をされた。

馬場氏の論理的な説明をうかがって、波佐見では染付より青磁を主力に生産していたことの理由が、筆者自身の腑に落ちた。波佐見の三股陶石の素地土からできる製品は染付磁器には不向きであるが、そのことを逆に青磁の素地土として活用したということである。まさに、逆転の発想であろう。

図６　オランダのフロニンゲン博物館蔵の波佐見花彫文大皿（佐賀県立九州陶磁文化館編 2000）
「木場山青磁」とよばれる波佐見青磁で、主に東南アジア向けに輸出されたが、これはオランダに運ばれた資料である。右の高台は、丸く蛇の目状に釉薬を剥いで鉄錆が塗られている。

また、江戸時代後期から末期に日本全国を席巻した「波佐見くらわんか」の茶碗・皿は、やや分厚いつくりで、素地（きじ）が灰色味をおびており、波佐見系の製品として見分ける特徴にもなっている。

## ６．中国から技術移入された青磁〈「木場山青磁」〉

波佐見で研究を進めている中野雄二氏によれば、1630 年代には水色に近い透明釉をもち、草花文を彫り出した「三股青磁（みつのまたせいじ）」とよばれる青磁が三股古窯、三股青磁窯などで製作されていたが、各藩の大名屋敷などで出土が確認されているように高級品として一部階層に流通していたに過ぎなかった（中野編 1999)。馬場強氏が指摘しているように、三股の陶石が青磁に適しているという認識があって、波佐見で磁器生産が始まってまもない 1630 年代には三股皿山で日本国内の上層階層を対象とした高級品の「三股青磁」が製造されていたことがわかっている（中野 2012)。

17 世紀後半になると、中国の「龍泉窯青磁（りゅうせんようせいじ）」によく似た「木場山青磁（こばやませいじ）」と呼ばれる製品が東南アジアへ向けて海外輸出されていたことを、大橋康二・坂井隆氏が東南アジア考古学の調査研究によって

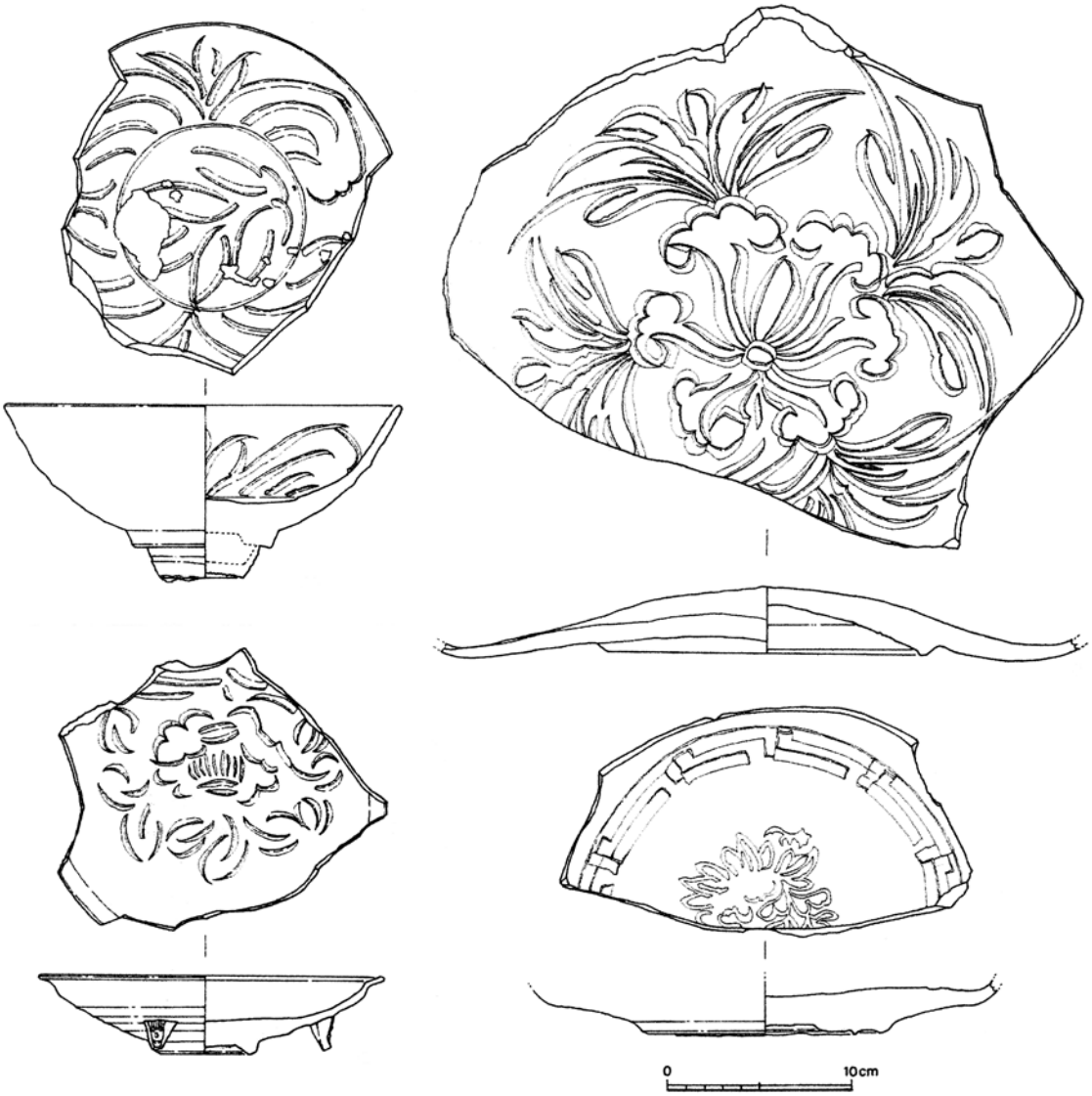



図７　木場山窯跡出土の青磁（１／４）（宮﨑・村川編 1993）
左上の碗の底にはチャツが付着。右上の大皿は焼成時に垂れ下がっている。

確認している（大橋編 1990、大橋・坂井 1994 ほか）。その「木場山青磁」と呼ばれる青磁を製造した波佐見の木場山窯跡では、篦彫りした文様の意匠をもつ大皿、丼のような碗、香炉などの青磁が出土している。青磁皿・碗の高台内は、丸く蛇ノ目状に釉薬を剥いで鉄錆を塗布（図６）して、チャツと呼ばれる皿形の窯道具を当て、製品を浮かして接着を防ぎ、重ね焼きしていたことが判る（図７）。

肥前地域の青磁を「伊万里青磁」としてまとめた佐賀県立九州陶磁文化館の鈴田由起夫氏は、『伊万里青磁』のなかで、肥前の青磁にみられる蛇ノ目に釉を剥いで鉄錆を塗布する方法は、中国の龍泉窯青磁の影響であると指摘する（鈴田 1991）。そして、大橋康二氏も『アジアの海と伊万里』のなかで、「同様な技術は中国・明時代の龍泉窯（浙江省）で一般的にみられた。皿状の道具も龍泉窯のそれに類似しており、明末に衰退した龍泉窯と密接な関係のある技術である。中国の内乱で龍泉窯の技術者が肥前に流出した可能性がある」としている（大橋・坂井 1994）。

このように、「木場山青磁」は、牡丹文などの草花文や算木文などの幾何学文を篦で片彫りしたオリーブ色の青磁釉がかかる大皿や大形の碗があり、大皿の高台に赤茶色の鉄錆を塗るやり方や、チャツとよばれる皿状の窯道具など、龍泉窯青磁の文様意匠や作風や窯道具までがよく似ている。このような「木場山青磁」の製品は見様見真似で作れるようなものではなく、鈴田氏･大橋氏が指摘するように、本場中国の陶工から直接に技術指導を受けて製作したことがわかる。

また中野雄二氏は窯の構造変化に注目して、波佐見では 17 世紀後半からトンバイと呼ばれる耐火レンガを使って堅固な構造をもつ大形の登り窯を築き始めると指摘する。この耐火レンガを使った窯の構造は､18 世紀中葉以降に長大化して巨大窯へと飛躍していくための､技術的基盤となるものである（中野 2004・2012）。このように波佐見では、青磁製品や窯道具および窯の構造などに中国窯業の技術移入が認められ、17 世紀後半の段階に変革が起こったのである。

中国では、青磁の時代から青花（染付）の時代へと移行していた明朝中頃になると龍泉窯青磁は急速に衰微して明末には廃窯状況に追い込まれていた（小山 1978）。それに加えて明末の内乱があったことで、大橋氏が指摘するように龍泉窯の陶工・技術者が海外に流出して、波佐見・有田にやって来た可能性が推測される（大橋・坂井 1994・大橋 2004 ｂ）。

龍泉窯青磁の陶工・技術者が、中国船で長崎の港に向かったことは推測されるとはいえ、問題はどのような背景と経緯があって、長崎から大村藩の波佐見の窯場に到ったのであろうか。

波佐見の窯業については、1716 年に記された記録として『皿山旧記』があり、その文書史料と発掘調査の成果を併せてみていくと､中尾上登窯（1644 年創窯）､中尾下登窯（1665 年創窯）､辺後ノ谷窯（1663 年創窯）、永尾本登窯（1666 年創窯）、木場山窯（1667 年創窯）、咽口窯（創窯時期不明／ 17 世紀後半）など、これらの窯は 17 世紀後半に創窯されている。1665 年には三股皿山地区に皿山役所が設置されており、17 世紀後半に創窯されたこれらの窯と密接な関係があったことが推測される。

これら 17 世紀後半に創業された波佐見の窯は、大村藩の産業新興の方針を受けた藩役人の指導のもとで次々に窯が築かれ、皿山役所も窯業に絡む業務一切をスムーズに推進するために設立されたことが考えられる。貿易都市長崎を介して海外輸出が盛んにおこなわれた 17 世紀後半の時期は、波佐見窯業が飛躍的に発展する画期となっている。

長崎の郷土史家相川淳氏は､『大村史談』第 52 号のなかで､「1623（元和九）年に大村に渡来し､1636（寛永十三）年に長崎に移住した福州出身の林一官公琰とその子道栄が、大村藩波佐見窯での青磁生産に関係したのではないかと推測している」と坂井隆氏が指摘する（大橋・坂井 1994）。

相川淳氏が波佐見で青磁生産に関わったとするのは、長崎住宅唐人の林一官（公琰）とその子林道栄であり、長崎の本古川町に本宅をもち林一族の名門として唐船差宿を営む貿易商人であった。また

領主大村氏から道栄が長崎近郊の雄浦（大浦）を茶屋地として賜るなど、長崎貿易を介して大村氏と深い関係があったことを指摘している（相川 1994・2001a・2001b）。

## ７．貿易都市長崎と肥前陶磁との関係

染付に使用される酸化コバルトの青色顔料である「呉須」は、日本国内には産出しないことから、貿易都市長崎を介して中国からの輸入に頼らざるをえない宿命的な事情があった。すなわち、海外貿易港の長崎の存在がなければ、肥前地域での染付磁器の成立と発展はありえなかったのである。

坂井隆氏は、『「伊万里」からアジアが見える』のなかで、長崎の唐人は、「17 世紀始めから唐人屋敷に隔離される 1688（元禄元）年までの長い市中雑居時代の前期に、定住・帰化した者（「住宅唐人」）が少なくない」として、市中に来泊した唐人とは別に、17 世紀後半の長崎では「最も多い時には、全人口の二割が定住唐人であった」という国際貿易港長崎の特殊な状況を説明する（坂井 1998）。

李献璋氏は、『長崎唐人の研究』のなかで、「一足先に、長崎に居を構えた住宅唐人は概ね船宿を設けて、小なるものでは、明商の取引の中に立って高率の口銭を稼ぎ、大なるものになると、自ら貿易商として積荷を独占的に買取って賣り捌き、また彼らの必要とする返り荷の調達をも引き受けて二重三重の利益を挙げた」という、長崎に居住していた唐人の実態を描いている（李 1991）。

長崎奉行は、1633 年にそのような定住唐人が経営する船宿に手を着け宿の口銭を削減した。1635 年には日本各所に渡航していた唐船が長崎一港に限定され、1637 年には住宅唐人たちが来航唐人のために経営する船宿の「差宿制」がはじまった。しかし、1663 年の寛文の大火によって船宿が消え失せたことで、1666 年に「差宿制」が廃止され、「内町（旧市街二十三町）と外町（四十三町）の各町が輪番で宿を引き受ける」町営の「宿町・附町制」になった。だがそののちも、1689 年に唐人屋敷が完成するまで、長崎に来航した唐人たちは市中に来泊していた（李 1991）。

李献璋氏は、長崎市中にいた住宅唐人が、「一官」「三官」「四官」「五官」「六官」「八官」「九官」などの名をもっていたことを、檀家寺の過去帳や墓碑銘をたどり明らかにされている（李 1991）。

長崎市内でおこなわれている発掘調査では、興善町遺跡から関連資料２点が出土している。長崎の有力町人であった八尾家の屋敷跡から「三官」と染付した磁器片（大橋・坂井 1994）、長州藩蔵屋敷跡から「四官」と墨書された磁器片（田中 2018）が出土している。

坂井隆氏は、『アジアの海と伊万里』のなかで、色絵磁器として著名な「柿右衛門」様式の始まりについて書かれた『酒井田柿右衛門家文書』の記事をとりあげる。

> 色絵磁器は、中国人「志いくわん」（四官）より伊万里の商人東嶋徳左衛門が、長崎でその製法を教わった。初代酒井田柿右衛門は「こす（呉須）権兵衛」といっしょに努力を重ねて製法を取得した。そして 1647（正保四）年に、ようやく出来上がった製品を持って、長崎の麹屋町「八観」（八官）という中国人の家に泊まって、加賀藩の買い物師に初めて売った。その後、中国人とオランダ人に売り始めた。

坂井氏は、「『酒井田柿右衛門家文書』に記された日本あるいは肥前での色絵の誕生は、そのように語られている。つまり、1647 年以前に中国人から技術伝達されたことが出発点となっている」として、「染付とは異なる色絵が出現したこと、そのデザインが明のものに似ていること、そして素地も初期伊万里様式の染付大皿とは全く異なった景徳鎮様式になったことなど、色絵の誕生に中国人陶工が参加した可能性が、そこに見られ」、色絵の技術は長崎にいた中国人（「志いくわん」・四官）から伝達され、製品を売る定住唐人（「八観」・八官）もいたことを明らかにしている（大橋・坂井 1994）。

また大橋氏は、「肥前磁器は 1650 年代にめざましい技術発展を遂げて、朝鮮的技術から中国・景徳

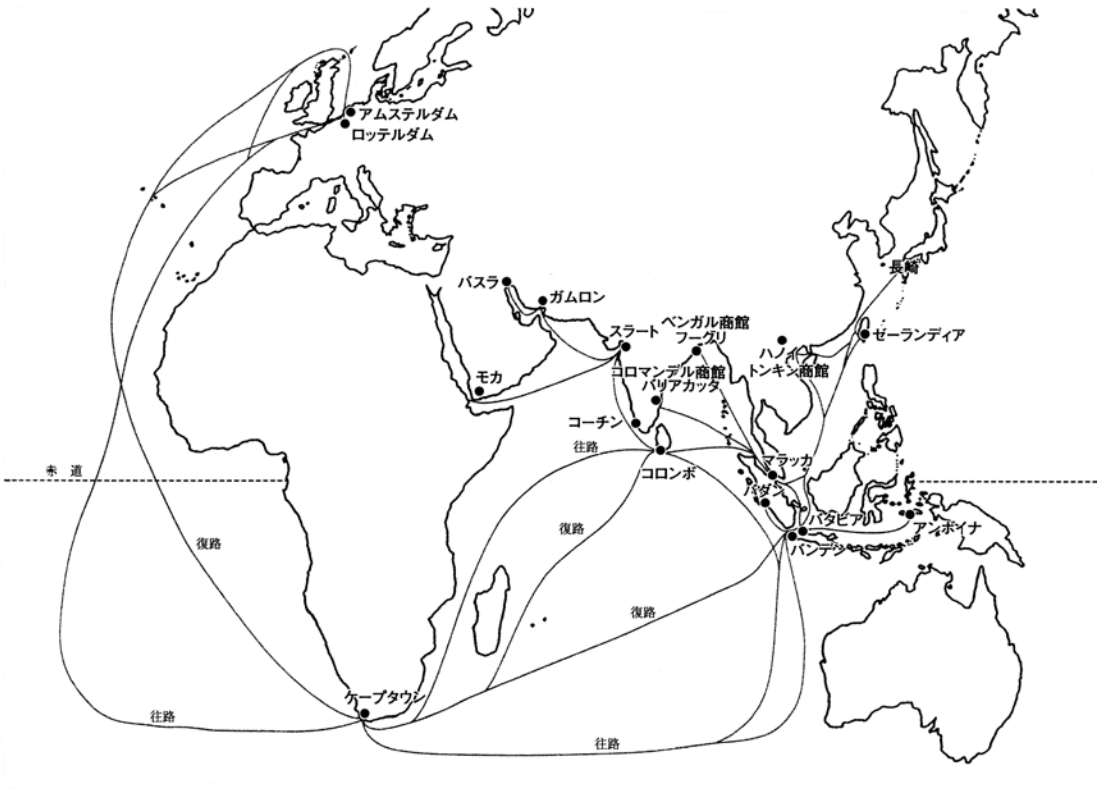



図８　17 ～ 18 世紀のオランダ連合東インド会社の海上交通路（大橋 2004）

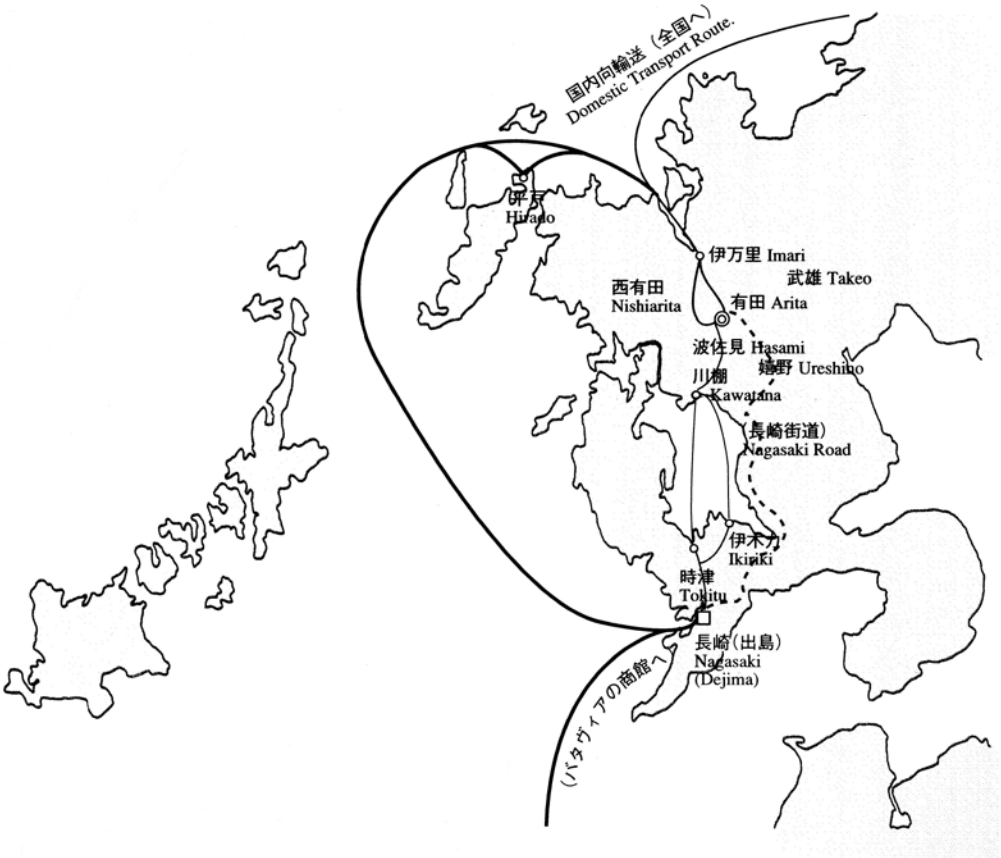



図９　肥前陶磁の海上輸送ルート（佐賀県立九州陶磁文化館編 2000）

鎮窯（江西省）のような技術に転換する」として、碗・鉢に荒磯文を描いた染付や芙蓉手意匠の染付大皿などが、中国写しの製品として、肥前で生産され海外輸出されていることを指摘する（大橋・坂井 1994）。

大橋康二氏は、『海を渡った陶磁器』のなかで、中国からの「技術流出は赤絵だけでなく、糸切細工と呼ぶ成形技法、墨弾きと呼ぶ装飾法、青磁の窯詰め法、ハリ支えという窯詰め法などの製品自体に現れる革新のほか、窯業技術のもっとも基本的部分の一つである窯詰めの道具までがそれまでの朝鮮的技術から 1650 年代までの一気に中国的技術に変わっていくのである。こうした現象は中国の技術者が肥前に直接指導したとしか考えられないものであり、1644 年以降の内乱期間中でしかそうした技術流出は考えられない」とされ、「いいかえれば 1644 年以降の内乱だからこそ中国陶業者の技術流出があり、肥前の技術が中国的に大革新を遂げたのである」と結論された（大橋 2004 b）。

そして坂井隆氏は「唐人貿易」の実態について、『アジアの海と伊万里』のなかで「1630 年代から日本に来航した中国船のほとんどが、福建・漳州・泉州を本拠とする鄭芝竜・成功父子の鄭氏集団の直接もしくはその影響下に」あり、「輸出販売の元締めも中国人が関係していた」ことを指摘する（大橋・坂井 1994）。さらに坂井氏は、『「伊万里」からアジアが見える』のなかで、「伊万里」輸出は鄭氏の船で運ばれたと結論づけている（坂井 1998）。

## ８．貿易都市長崎と有田・波佐見との関係

坂井隆氏がいうように 17 世紀後半の長崎は、出島に 20 人ほどの少数のオランダ人がいたが、人口の二割を定住唐人が占めており、貿易のために来航した唐人は比較的自由に市中を徘徊できた（坂井 1998）。当時の長崎の街は、中国商人が市中を散策している姿を日頃見かけるような異国の貿易港という雰囲気をもっていた。

有田では、佐賀鍋島藩が 1637 年に窯場整理を断行して磁器生産に切り替え、1647 年に皿山代官所が設けられた（大橋 2004 b）。一方、大村藩の波佐見では、1665 年に皿山役所が設置された。皿山代官所や皿山役所は、焼き物生産による運上金の増収のため設置されたので、皿山の窯場の指導・監督や陶商、問屋などとの調整だけでなく、「呉須」を入手するために長崎の町年寄などの有力町人や貿易商の定住唐人などと交渉していたことが想定される。

近世史家の山本博文氏は、長崎地誌の『長崎古事集』を引いて、1647 年に長崎港にポルトガル船が通商再開を求めて来航し退去させるという事件があって、西国各藩は長崎の蔵屋敷に常詰の「長崎聞役」を置き、長崎奉行や地役人、御用商人との調整、貿易品の調達などをおこなったとされる（山本 1999）。

この「長崎聞役」が置かれた 1647（正徳四）年は、有田に皿山代官所が設置され、粗製の「伊万里」の輸出が東南アジアに向けて開始されているなど、長崎貿易に絡んで連動していた事象が重なり合ったエポックになっているといえよう。長崎市内の蔵屋敷跡の考古学研究については、田中学氏の嚆矢となる研究がある（田中 2019）。長崎蔵屋敷については、今後の調査研究の進展が期待される。

そのような長崎の蔵屋敷を藩庁の出先機関を拠点として、佐賀鍋島藩、大村藩の役人らが、長崎の有力町人・定住唐人らと関係をもち、来航唐人とも接触していたことが推測される。

波佐見の場合は、前述したように、海外輸出された青磁について注目すべきであろう。すなわち、大村藩の皿山に関係する役人らは、長崎貿易に絡んだ有力町人や定住唐人と結びついて、中国龍泉窯の窯業技術者を招聘する「波佐見青磁・改革プロジェクト」のような計画が立てられ、長崎の市中で潜行して進められた可能性が浮上してくる。その中国龍泉窯の技術者を長崎に渡来させることができ

たのは、大橋・坂井両氏が指摘するように、17 世紀前半～後半にかけて「唐人貿易」を取り仕切っていた鄭氏一族であり、そのプロジェクトに鄭氏関係者も絡んでいた可能性も推測される。

17 世紀後半の波佐見で認められる、登り窯の構造変革や「木場山青磁」の作風や窯道具にいたる考古学的な物証は、中国龍泉窯からの技術移入があったことを物語っている。だが、そのことを具体的に記した史料が残っていないことは、大村藩が軸となったプロジェクトが内密に遂行され、記録として残されなかったことが想像されてくる。

このように「木場山青磁」という考古学的物証と貿易都市長崎の状況について検証することによって、文書には記録されずに史料として残らなかった歴史が、垣間見えてきたようである。今後も、考古学的資料の積み重ねと文献史料の検討をおこない、さらに検証を進めていくべきであろう。

清王朝は、中国海域を支配していた鄭氏一族を 1683 年に打倒し、国内の政情が安定したことで、1684 年に「展海令」を発布して海禁政策を転換し、磁器の輸出を再開した。有田・波佐見などの肥前陶磁は、輸出がストップしていた中国「景徳鎮磁器」の代替品として、日本から肥前磁器が輸出されていたという事情もあって、景徳鎮窯などの磁器輸出が再開されると、たちまちのうちに有田や波佐見などの肥前磁器は海外市場から閉め出されることになった（大橋 2001・大橋 2004b・野上 2018）。

肥前窯業は、海外市場から閉め出された直接の打撃を受け、生き残りを模索することになった。市場の開発や生産の転換などの対策は、35 万７千石の大藩である佐賀鍋島藩が抱える「有田」と、２万７千石の小藩である大村藩が抱える「波佐見」とでは、それぞれ事情によって対応の違いが認められる。「有田」では、国内向けの磁器生産もおこなうが、ヨーロッパ向けの「金襴手（きんらんで）」磁器や献上手（けんじょうで）

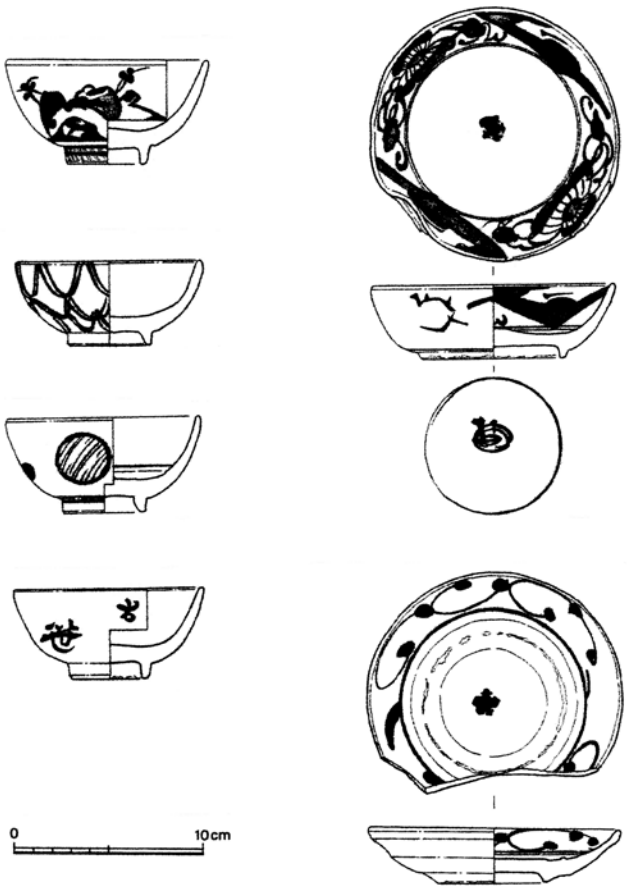



図 10　くらわんか手の茶碗と小皿（１／４）（永尾本登窯跡、宮﨑・村川編 1993）

の「色鍋島（いろなべしま）」を製造するなどの高級路線を維持した（図８）。だが「波佐見」では、「くらわんか手」の素朴な染付磁器（図 10）を国内の民衆に向けて販売する大衆路線へと全面的に転換していくのである（大橋 2004b・野上 2018）。

## ９．波佐見焼イノベーション

波佐見では、海外市場を失った情況からの脱却のために、18 世紀になると国内市場に向けた製品の開発と生産に切り替え方向転換を図った。17 世紀後半に導入されていた耐火レンガを使った構築技術で登り窯が 18 世紀中頃以降さらに長大化し、18 世紀末から 19 世紀前半には四つの皿山に築かれた世界最大級の 100㍍を超える巨大登り窯で大衆向け食器を生産した（宮﨑・村川編 1993、中野 2004）。

この巨大な登り窯は、複数の窯元による共同窯（もやいかま）として経営されている。窯元がどの窯室を使えるのかは、公平性を保つためにくじで決めていた。そのような巨大な登り窯がある皿山集落では、陶土･燃料の薪の調達から、陶磁器の生産にかかる工程（陶土作り、ろくろ引き、素焼（すやき）、絵付、窯入れ、窯炊きなど）を、窯元・陶工たちが役割を分担し、共同分業のかたちで関わることで、陶磁器生産工場のような巨大な登り窯を支えてきたのである。

江戸時代初期の 1610 年代～ 1630 年代に国産磁器の生産が始まって、17 世紀前半から 18 世紀前半の段階に「初期伊万里（しょきいまり）」「古伊万里（こいまり）」と呼ばれる染付の碗・皿や大形の青磁の器を使用していたのは、城下町や都市部の上級武士や富裕な町人層など一部の階層に限られており、磁器は庶民にはまだ手の届かない高級品であった。

波佐見では、17 世紀後半の中尾上登窯跡などで、染付や青磁の小皿などの製品の見込みを蛇ノ目状に釉剥ぎして製品の重ね焼きをおこなう量産化の工夫が試みられていた。だが、18 世紀になると生産する器種を日常食器の茶碗と小皿に絞り、簡素な染付文様を器に施すなど、作業の手間を省いてスピード化を図り、価格を下げた製品を巨大な登り窯で大量生産するようになった（中野 2004）。

『海を渡った陶磁器』のなかで大橋氏は、「波佐見窯には 18 世紀前半に江戸商人が資本投入したとされるが、これらもより安い磁器開発へのてこ入れがあったのかもしれない」と推測しているが、「18 世紀中ごろは波佐見の特徴となるいわゆる“くらわんか碗”ができあがる」とされる（大橋 2004 b）。

中野雄二氏は、波佐見の稗木場皿山の高尾（たかお）窯跡などの調査で、庶民向けの簡素な文様を描いた磁器が、元禄年間（1688 年～ 1704 年）頃に出現していることを確認している（中野 2012）。このことから、波佐見では、海外市場から閉め出されて間も置かずに生産の転換に着手していたことがわかる。

このように波佐見では、海外輸出の高級路線から大衆路線へと方向転換をおこない、国内市場向けの安価な磁器販売に活路を見出した。海外市場を中国に奪回された逆境から「波佐見焼イノベーション」を起こしたのである。そして 18 世紀中葉～ 19 世紀前半段階には、波佐見では巨大な登り窯が築かれ、国内向けの磁器を大量に製造する工場地帯のような一大生産地となったのである。

17 世紀後半に発見された天草陶石が供給されるようになると、窯場が陶石産地に縛られなくなり、1712 年には波佐見陶工太郎兵衛が長与皿山窯跡（長与町）を築窯するなど、肥前地域に「くらわんか」を生産する窯が築かれた。長与皿山窯跡は 18 世紀末頃には長さ 115㍍の巨大窯になり、長崎を主な市場としており、長与皿山窯跡で製作された製品が長崎市内から出土している（宮﨑 2013・2019）。

18 世紀末～ 19 世紀前半には、有田や波佐見の陶工が移動することによって、日本各地に磁器窯が築かれるようになった（永竹 1981、中野 2013）。だが、前述したように巨大窯を設けて大量生産体制を構築していた波佐見は、「くらわんか」生産においてリードし国内を席巻していた。

江戸時代後期には、日本各地へ船で運ばれる航路や供給する商業体制が確立された。波佐見が中心

となって大量に生産された「くらわんか」とよばれた茶碗や小皿は、佐賀藩の伊万里港や大村藩の川棚にある三越浦（みごしうら）の港で船積みされ、長崎や大坂・江戸などの大都市、全国の津々浦々に向けて運ばれていった（中野 2012 ほか・図９）。

下手物（げてもの）と称された「くらわんか」製品が、国内市場に大量に出回って普及したことによって、一般庶民が食器として磁器を使用できるという、日本の生活における食器のあり方に変革をもたらした。この日本の新しい生活文化は、江戸時代後期の波佐見にみられた革新的なイノベーションの創造よってできあがったといっても過言ではない。そのような歴史の恩恵を受けて、私たちは当たり前のように、日常のふだん使いの器として磁器を使っているのである。

## 10. 世界最大規模の窯の整備と公開

2000 年に、波佐見古窯跡群は、畑ノ原窯跡、三股青磁窯跡、長田山窯跡、中尾上登窯跡、永尾本登窯跡の五つの窯跡と皿山役所跡、三股砥石川陶石採石場（みつのまたといしがかわとうせきさいせきば）が、「肥前波佐見磁器窯跡」として国の史跡に指定された（中野 2001 ｂ）。その指定の理由は、《波佐見焼が磁器の大衆化に貢献し、日本の生活文化に寄与した役割は計り知れない》と評価されたことにある。

これまでの日本陶磁研究の歴史は、柳宗悦（やなぎむねよし）氏が提唱した「民藝（みんげい）」という一筋の流れもあった（柳 1984）が、主流は美術品としての陶磁器研究であった。その美術陶磁史の潮流のなかでは、波佐見焼は下手物（げてもの）として雑器の評価しか与えられていなかった。

それを、「日本の生活文化史」という新たな観点によって位置づけをおこない、歴史的な価値転換を果たしたのが波佐見古窯跡群の国史跡の指定である。この革新的な評価を推されたのは、当時文化庁の調査官であった坂井秀弥氏（のち、主任調査官・奈良大学教授）であり、坂井氏の歴史考古学研究における見識と卓見が大きいと考える。

波佐見町では、古窯跡関係の遺跡が国の史跡に指定にされたことで、調査を始めるに至った当初の目的が達成され念願がかなったことになる。これは、波佐見古窯群の確認調査を計画実施した町当局の努力の賜物であるが、調査にあたって尽力された町教育委員会の一瀬信雄氏の功績も忘れることはできないと思う。

調査によって世界最大の規模が確認された大新登窯は、窯体は残っているものの、焚き口付近などが工場等で壊されていた。だが、世界第二位の規模をもつ中尾上登窯跡は、階段状の段々畑になっていたことが幸いして、焚き口から窯尻までの登り窯の全容が残存していることが判明した。

そこで、町教育委員会は、波佐見焼が「日本の生活文化史」に果たした役割や価値を広く知っていただくために、世界最大級の規模をもつ中尾上登窯の環境整備を実施して、現在、一般に公開され現地見学ができるようになった。

整備された中尾上登窯の場所に立てば、対面に南北に長く伸びた大新登窯を望むことができる。そして、窯跡の足元のかたわらに目をやると、ゆがんだ碗や皿、割れた破片、窯道具などが谷に向かってたくさん捨てられていることに気づく。これは、物原（ものはら）とよばれている、焼物を生産するときに出た製品の失敗品や、窯壁の破片などの廃棄物を捨てた場所である。

いまの近代的設備の燃料窯にくらべると、昔の登り窯は出来不出来の歩留（ぶど）まりが悪く、失敗品が大量にでた。それでも窯では、それを上まわるものすごい量の製品が焼かれた。三股地区にある三股砥石川陶石採石場から切り取られた多くの陶石は、磁器という焼き物に姿を変えて、日本中に運ばれたのである。その代表である「くらわんか」とよばれる安価な磁器が、波佐見という地域の工人たちによって生み出されたのである。

波佐見町では、町をあげていろいろな地域おこしが取り組まれている。春には桜桃祭として陶磁器祭りが開催されている（現在、新型コロナ禍で休止になっているが）。また、波佐見の四つの皿山にある各工房では、競い合いながら、個性をもった器が作られている。波佐見を訪ねる機会があれば、皿山にある工房をめぐって、お気に入りの一品をさがし求められるとよい。波佐見の調査に関わるようになって、縁あって我が家にきた器たちは、何気ない日常のなかで野に咲く花のようなささやかな彩りを添えてくれている。

私たちの日常の暮らしの中にある磁器。もし、波佐見焼がたどったような歴史がなかったとしたら、私たちはふだん使いの焼物として磁器を使っていなかったかもしれない。家庭の身近にある清浄な白磁に文様を染付した愛らしい器を手に取られ、そのような歴史があったことに思いを馳せていただければ幸いである。

## おわりに〈大橋康二氏が語られた忘れられない言葉〉

波佐見古窯跡群の調査報告書を作成するため整理を進めていた1992年のことだったと思う。大橋康二氏に波佐見窯跡で出土した陶磁器鑑定と指導のため、長崎市立山にあった整理室に出向いていただいた。その折、波佐見焼について説明を受けていたときだったと思うが、大橋氏が、「いま、私たちが磁器を使っているのは、波佐見のおかげです」と話されたことがあった。その時から30年ほど経って記憶はややおぼろげになっている。だが、いただいた言葉は鮮明に覚えている。波佐見焼が日本の生活文化において果たした歴史的意義を見事に表現されたこの言葉を、標題として使わせていただいた。また、「歴史を映す鏡としての陶磁器」「生活文化を映す陶磁器」という観点で著された『海を渡った陶磁器』のなかでは、波佐見の果たした役割について論じられている（大橋2004 b）。

大橋康二氏には波佐見古窯跡群の調査から整理にいたるまで懇篤なる指導をいただき、今回の論稿においても浩瀚な研究業績に学ばせていただいた。深く感謝を申し上げたい。

400年余前に磁器生産をはじめた波佐見焼は、17世紀後半になると盛んに海外輸出されたが、中国景徳鎮窯が再興すると海外市場を失った。しかし、18世紀には国内市場に向けて大量生産する方式に転換して磁器の大衆化に貢献し、日本の生活文化のあり方を変えたことを述べてきた。地域考古学の大事さを説かれた森浩一氏は「考古学は地域に勇気を与える」と提言されている（森2002）。波佐見においては、「変革の精神」をもって乗り越えてきた歴史を掘り起こしたことになるのだろう。そのような波佐見で町おこしに取り組まれている若い方々には、ぜひ波佐見がもっている潜在的な可能性を引き出し、伝統を再構築して、未来へ向けて新たな姿・かたちを生みだしていただきたい。

**【謝　辞】**

随想のような拙稿の掲載をお願いすることになりました。考古学研究のために広く開かれた場を提供いただいている『西海考古』編集者の古門雅高氏、渡邊康行氏に感謝申し上げます。波佐見焼の研究に取り組まれている中野雄二氏には、関係資料を提供いただきました。この論稿も波佐見で調査を進めておられる中野氏の研究成果に大きく依っています。また、長崎大学多文化社会学部の野上建紀氏からは、さまざまな教示をいただきました。中野・野上両氏に感謝を申し上げます。

【引用・参考文献、波佐見焼関連文献】

相川　淳　1994「長崎唐人。・林公琰と大村藩の磁器創成」『長崎談叢』第82輯　長崎史談会
相川　淳　2001a「大村藩の帰化唐人と波佐見青磁」『大村史談』第52号　大村史談会

相川　淳　2001b「アジアの海と波佐見の青磁」『長崎談叢』第 90 輯　長崎史談会
太田新三郎　1962『波佐見地方陶祖の研究』 波佐見町教育委員会
大橋康二　1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
大橋康二・西田宏子　1988 a『古伊万里』別冊太陽　平凡社
大橋康二　1988 b「波佐見焼の変遷」『長崎の陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
大橋康二　1989『肥前陶磁』 ニューサイエンス社
大橋康二編　1990『海を渡った肥前のやきもの展』 九州陶磁文化館
大橋康二・坂井　隆　1994『アジアの海と伊万里』 新人物往来社
大橋康二　2001 西日本新聞コラム「古伊万里談義１～ 48」 西日本新聞
大橋康二　2004 a『世界をリードした磁器窯　肥前窯』 新泉社
大橋康二　2004 b『海を渡った陶磁器』 吉川弘文館
小山冨士夫　1978『青磁』陶磁体系 36　平凡社
坂井　隆　1998『「伊万里」からアジアが見える』 講談社選書メチエ・講談社
川口洋平　2007『世界航路へ誘う港市　長崎・平戸』 新泉社
佐賀県立九州陶磁文化館編　2000『日蘭交流 400 周年記念　古伊万里の道』 佐賀県立九州陶磁文化館
佐々木達夫　1988『畑ノ原窯跡』波佐見町文化財調査報告書第３集　波佐見町教育委員会
鈴田由起夫　1991『伊万里青磁』 古伊万里刊行会
田中　学　2018「長崎市中の輸入陶磁」『「文明のクロスワード長崎」－陶磁器に見る国際都市長崎－』平成 29 年度長崎県考古学会大会　長崎県考古学会
田中　学　2019「長崎の蔵屋敷跡の発掘調査と成果について」『対外交易の窓口　出島・長崎』令和元年度長崎県考古学会秋期大会　長崎県考古学会
長崎県考古学会編　2013「18・19 世紀における波佐見窯業の展開」『波佐見・くらわんかの時代』平成 25 年長崎県考古学会秋期大会資料
長崎県窯業試験場編　1982『波佐見古陶磁文様集』 肥前波佐見焼振興会
中島浩気　1980『肥前陶磁史考』 青潮社
永竹　威　1981『新装増補改訂　肥前やきもの読本』 金華堂
中野雄二・山口浩一編　1996『世界・炎の博覧会　波佐見青磁展くらわんか展』 長崎県波佐見町
中野雄二編　1999『波佐見焼 400 年の歩み』 長崎県波佐見町
中野雄二　2000「波佐見」『九州陶磁の変遷』 九州近世陶磁学会
中野雄二　2001 a「波佐見製品の海外輸出－ 17 世紀後半代を中心として－」『西海考古』第４号　西海考古同人会
中野雄二　2001 b「国指定史跡「肥前波佐見磁器窯跡」について」『大村史談』第 52 号　大村史談会
中野雄二　2004「18 世紀中葉～ 19 世紀中葉の波佐見窯業について」『金沢大学考古学紀要』27　金沢大学文学部考古学講座
中野雄二編　2006『大新登窯跡』波佐見町文化財調査報告書第 17 集　波佐見町教育委員会
中野雄二　2006「近世波佐見窯業の生産技術とその伝播について－ 18 世紀以降を中心として－」『肥後の磁器―その歴史と系譜―』 八代市立博物館未来の森ミュージアム
中野雄二　2008「近世波佐見焼きの歴史」『海路』第６号　海鳥社
中野雄二　2010「波佐見くらわんか茶碗のひろがり」『金大考古』66　金沢大学考古学研究室
中野雄二　2012『べんざらのひとりごと』 波佐見町教育委員会
中野雄二編　2013 a『くらわんか藤田コレクション』 長崎県波佐見町教育委員会
中野雄二　2013 b「18・19 世紀における波佐見窯業の展開」『波佐見・くらわんかの時代』平成 25 年度長崎県考古学会秋期大会資料　長崎県考古学会
中野雄二　2018「海外に輸出された波佐見焼」『文明のクロスード長崎』 長崎県考古学会
野上建紀　1995―96「有田から見た波佐見１～ 10」『陶説』第 513 号―524 号　日本陶磁協会
野上健紀　2018「陶磁器考古学と長崎」『大学的長崎ガイド』 昭和堂
野上建紀　2021「長崎の陶磁器にみるグローバル化」増崎英明編『今と昔の長崎に遊ぶ』 九州大学出版会
波佐見町役場・波佐見町教育委員会編　1976『波佐見史』上巻
波佐見町役場・波佐見町教育委員会編　1982『波佐見史』下巻
馬場　淳　1969『波佐見陶史』 波佐見町

藤野　保編　1982『大村郷村記』第３巻　国書刊行会
三上次男・佐々木達夫・大橋康二　1982『波佐見町古窯跡分布調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第２集　波佐見町教育委員会
宮﨑貴夫・村川逸朗編　1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第４集波佐見町教育委員会
宮﨑貴夫　2013「長与皿山窯跡－第二期操業期（1720 ～ 1820）の窯と製品を中心として－」『波佐見くらわんかの時代－ 18 ～ 19 世紀の磁器生産と流通－』平成 25 年度長崎県考古学会秋期大会資料　長崎県考古学会
宮﨑貴夫　2019『長崎地域の考古学研究』 筆者自費出版
柳　宗悦　1984「雑器の美」『民藝四十年』 岩波文庫・岩波書店　当初の「下手ものゝ美」が改題されている
山本博文　1999『長崎聞役日記－幕末の情報戦争』 ちくま新書・筑摩書房
森　浩一　2002『地域学のすすめ－考古学からの提言』 岩波新書・岩波書店
森村健一　1988「堺環濠都市出土の近世陶磁器」『考古学ジャーナル』297　ニューサイエンス社
李献璋　1991『長崎唐人の研究』親和文庫第 16 号　親和銀行
※上記に掲げた文献の他に、中野氏が調査担当している窯跡の発掘調査報告書がある。参照いただきたい。

# 西海考古同人会ホームページのご案内
https://saikaikouko.jp

## 西海考古

新着情報　令和3年11月7日

『西海考古』第9号 ,10号、11号のDL および執筆要綱

既刊号の目次および論攷（PDFファイルで全文紹介）

**お知らせ**　西海考古同人会のホームページです。

西海考古同人会は、長崎県の考古学研究を目的に県内の文化財担当者有志と考古学愛好者が集う名も無い勉強会からスタートしました。

その後、通信紙『西海ニュース』の発行を経て、1999年4月に『西海考古』を創刊し、2020年12月には第11号を刊行して現在に至っています。

# 【研究ノート】門前タイプ土器の検討

## －長崎県における縄文時代早期後葉の土器研究【序章】－

礒村　康行・大坪　芳典

### １．はじめに

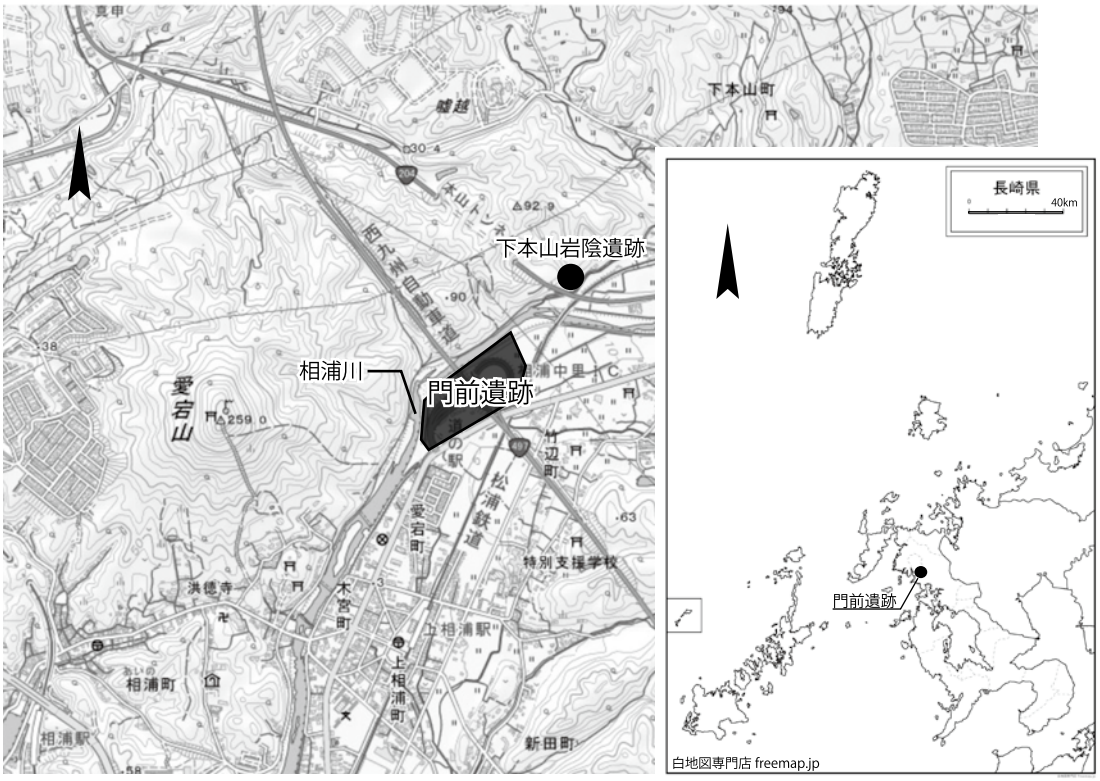
今回、分析対象とする資料が出土した門前遺跡（第１図）は、長崎県北部における佐世保市の北西部を流れる相浦川下流の標高８㍍に立地している。遺跡の西側に愛宕山を臨み、東側にある竹辺城跡の南東には将冠岳、但馬岳、弓張岳などの 300 ～ 400 ㍍の山々に囲まれる。門前遺跡は、これらの山々の中間に位置する沖積地を流れる相浦川の左岸に位置する。現在は、近世以降の新田開発により遺跡から河口までの距離があるが、近世以前は当遺跡と海とが近い距離にあったため相浦川は魚が多い汽水域であったと考えられる。実際に調査で罠の可能性がある杭の痕跡が多く確認されており、縄文時代に漁労を行っていたのであろう。また、遺跡の西側を流れる相浦川流域には、縄文時代の遺跡が見つかっており、泉福寺遺跡、岩下洞穴遺跡、下本山岩陰遺跡などが存在する。このうち、下本山岩陰遺跡は、当遺跡から 400 ㍍しか離れていない所に所在し、その距離間から門前遺跡と何らかの関係があった可能性がある。また、当遺跡は、調査の結果から相浦川の氾濫に幾度となくさらされているが、それでも縄文時代早期から古代から中・近世まで遺跡が形成されていることは、ドングリなどの貯蔵や漁労、その他水上交通の面で当時の人々にとっていかに水辺の場所が重要であったかという事を窺い知れる。

ここで検討を行う資料は、門前遺跡における平成 16 年度の発掘調査で、縄文時代早期の遺物が含まれる層で出土し、その後の接合整理の結果、ほぼ完形に近い状態で復元されており貴重である。整理作業当時、長崎県教育庁佐世保教育事務所の西九州自動車道発掘調査事務所において遺物整理から報告書作成を担当していた松尾秀昭氏（現佐世保市職員）から、発掘調査にも参加していた本稿執筆者の１人である大坪がその土器を拝見させてもらった際に、当時の知見ではどの型式の土器であるかを残念ながら返答できなかった。当時は、報告書でも型式不明とされていたが、それ以降の研究の進展をふまえ、今回は、鹿児島県で縄文土器を多く見てきた共同執筆者である礒村とともに、当時では分からなかった土器の型式を明らかにするために再検討を試みるとともに、今後の長崎県における縄文時代早期後葉の土器編年を解明する糸口としたい。

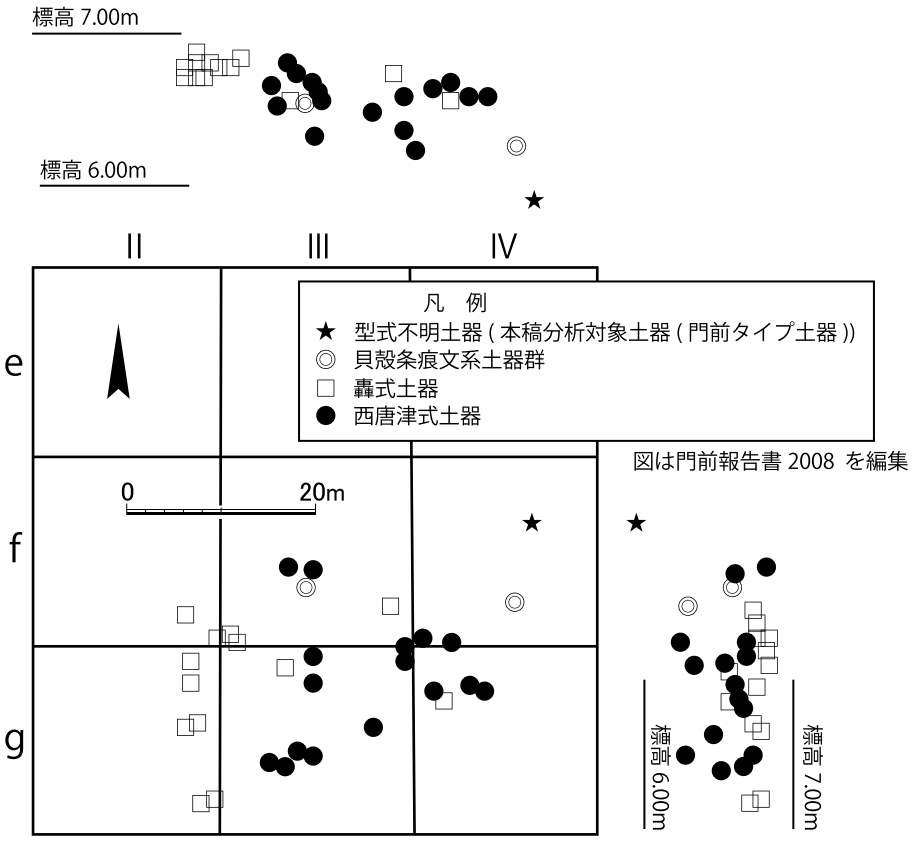
### ２．門前遺跡における縄文時代早・前期土器の出土状況

平成 16 ～ 18 年度実施の門前遺跡の調査で縄文時代早期から前期にかけて出土した土器は、平栫式・塞ノ神式土器（第Ⅰ群）、貝殻条痕文系土器群（第Ⅱ群）、轟式土器（第Ⅲ群）、西唐津式土器（第Ⅳ群）、曽畑式土器（第Ⅳ群）が確認されている。平栫式・塞ノ神式土器の出土数は少なく、轟式土器は、当遺跡から出土した遺物数の半分の割合を占めている。当遺跡で出土している平栫式・塞ノ神式土器、貝殻条痕文系土器群、轟式土器、西唐津式土器は、調査区の南西域に分布しており、今回、分析する土器は、その中でもⅣｆグリッドから出土（第２・３図）しており、周囲で同類の土器は確認できなかった。また、傾向的に曽畑式土器の時期になって、調査区の全域に広がりを見せる。

層位的（第２図）には、貝殻条痕文系土器群、轟式土器、西唐津式土器が標高６㍍より上層で出土し、




第 1 図　門前遺跡位置図（左図：S=1/25,000 ，右図：任意縮尺）




第 2 図　門前タイプ土器の出土位置図（S=1/800）

平栫式・塞ノ神式土器が標高6㍍前後で出土している状況であった。一方で、門前タイプ土器が、標高6㍍より下層から出土している事は、縄文時代前期より古い土器の可能性を示していよう。

## ３．門前タイプ土器の検討

今回、分析する土器（第4図）は、口縁部がやや外反し、胴部がやや膨らむ口径40.2㌢、器高43.4㌢を測る深鉢である。また、口縁部は、波状口縁で、底部は若干の上げ底を呈する。底径は8.4㌢とやや幅広である。

文様は、口縁部から頸部の外面にかけて文様帯が見られ、波状口縁の波頂部から縦に垂下する数条の隆帯を中心として、左右対称に波状もしくは横位の隆帯が数条施される。次に胴部外面の中位に文様帯が見られ、横位の隆帯が2条確認される。この隆帯は、土器の外周を一繋ぎで巡らされる事はなく、所々で途切れていたり、短い特徴の隆帯である。外面全体には、隆帯を貼り付けた後に、実測図には表現されていないが縄文を斜方向に回転施文し、口唇部にも縄文を施す。内面は、横位のケズリが認められる。

この資料の問題点は、明確にどの型式の土器か特定できない事である。そのため、他に類を見ない土器であるため、以降「門前タイプ土器」と仮称したい。出土状況から縄文時代早期に属する土器であることは絞れているが、どの土器とも型式学的特徴が完全に合致するものがない。そのため、この資料と同じような属性を持つ土器との比較を、一つ一つ行う事で答えに辿り付く手がかりが見えてくるかもしれない。この資料が持つ土器の属性の特徴は、器形や隆帯、外面への縄文の文様などである。これらの特徴と共通する当該期の土器を検討したところ、平栫式土器、苦浜式土器、右京西式土器のいずれかの型式の土器の可能性がある。それでは、門前タイプ土器と各々の可能性のある土器と比較し検討を行う。

可能性①

まず可能性として考えられるものに平栫式土器（第5図1・2）がある。平栫式土器は、鹿児島県霧島市の平栫貝塚より出土した土器から河口貞徳氏が設定した（河口1992）。

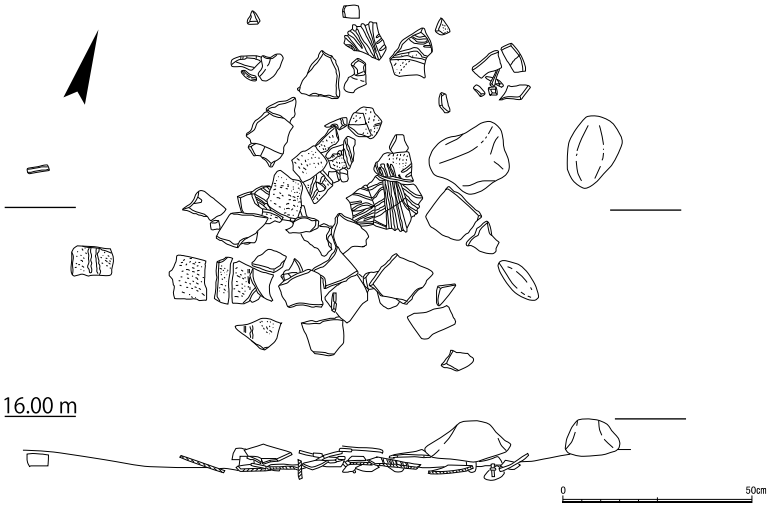
それでは、平栫式土器の一般的な特徴について整理したい。平栫式土器の器種は、深鉢や壺がある。口縁部は、肥厚するものが多く、外反し頸部がしまり、胴部が膨らむ。底部は、平底や上げ底のものもある。文様は、口唇部に刻み目を施し、胴部と頸部の境目にも刻み目を施した突帯文を貼り付ける。その他、口縁部や胴部を中心に刺突文や沈線文もしくはそれらを組み合わせた装飾性が豊かな文様を施す。胴部に撚糸文や縄文が施される。その他の特徴としては、口縁部が波状を呈するものがある。

門前タイプ土器と平栫式土器の共通点としては、口唇部の刻み目を施す事、口縁部の外反や胴部が膨らむ形状の点である。相違点としては、平栫式土器は口縁部が肥厚するが、門前タイプ土器は肥厚しない。また、門前タイプ土器の隆帯に比べて、平栫式土器の突帯文は太く、その形状が土器外周を巡るほどはっきりしている。

可能性②

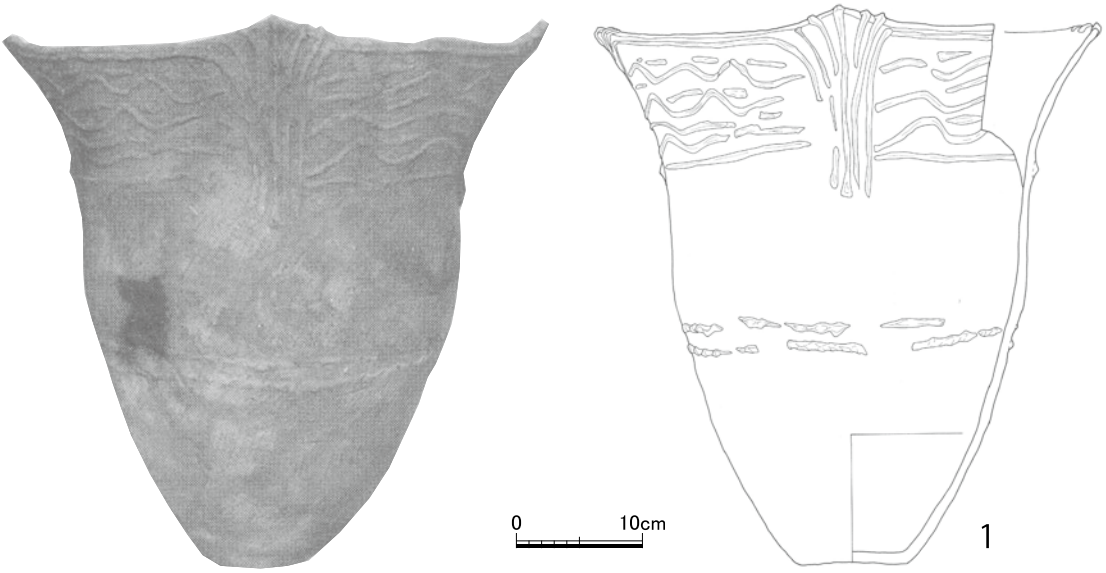
次に可能性があるものに苦浜式土器（第5図3・4）がある。苦浜式土器は、鹿児島県熊毛郡中種子町の苦浜貝塚より出土した土器が型式設定され、その後、南種子町の横峯C遺跡に堆積したアカホヤ層より下位から出土した土器により堂込秀人氏が再設定を行った（堂込1994）。

それでは、苦浜式土器の一般的な特徴について整理したい。苦浜式土器の器種は、深鉢である。器形は、



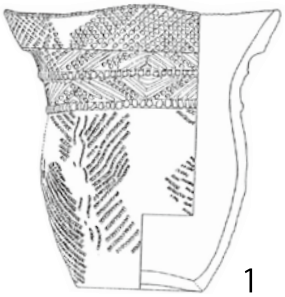

門前報告書 2008 を再トレース

第 3 図　門前タイプ土器出土状況 (S=1/20)

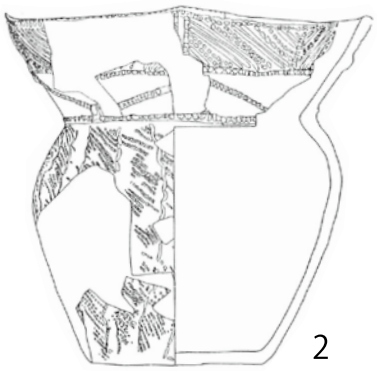



門前報告書 2008

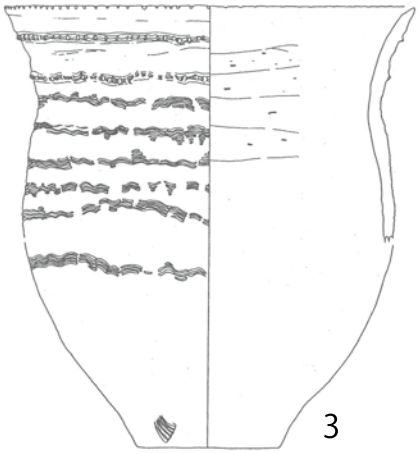
第 4 図　門前タイプ土器



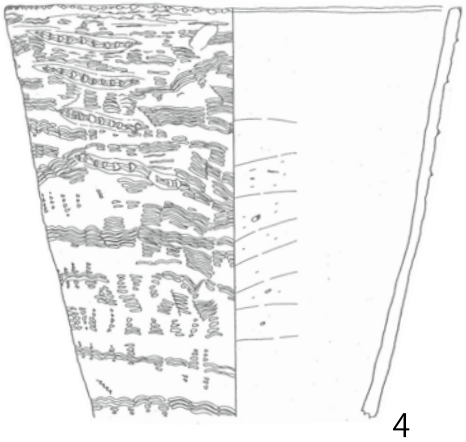

平栫式土器（石峰遺跡）



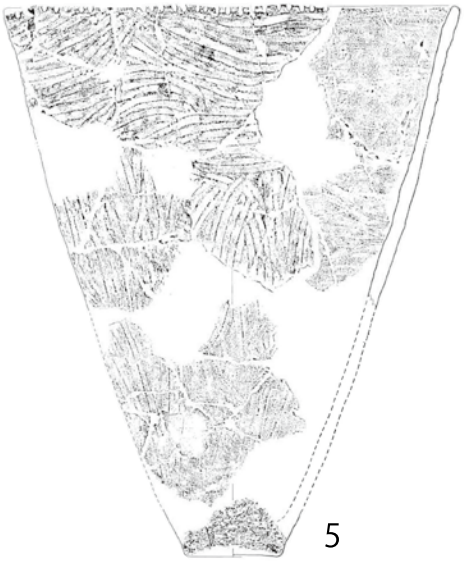

平栫式土器（石峰遺跡）




苦浜式土器（横峯 C 遺跡）

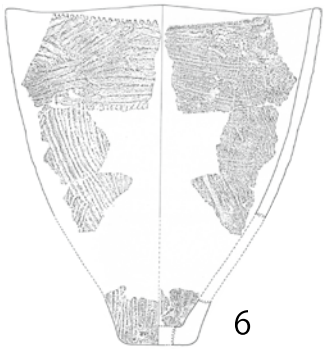



苦浜式土器（横峯 C 遺跡）




右京西式土器（右京西遺跡）

0 10cm




右京西式土器（山崎 B 遺跡）

第 5 図　平栫式土器・苦浜式土器・右京西式土器（S=1/6）

口縁部から底部にかけて直線的なものと、口縁部が外反して胴部が膨らむものがある。底部は、平底を呈する。文様は、口唇部に刻み目をもち、外面に貝殻による刺突文や直線状や曲線状の条痕文を施す。また、外面に縦位や横位に隆帯を貼り付けるものもある。この隆帯は、所々で途切れていたり、短い特徴をもつ。撚糸文は施されず、条痕文が施される。

門前タイプ土器と苦浜式土器の共通点としては、口唇部に刻み目を施す事、口縁部の外反や胴部が膨らむ形状、外面の隆帯の特徴が類似する。相違点としては、外面の文様が、門前タイプ土器には縄文を施すが、苦浜式土器には条痕文が施される。

可能性③

最後に可能性があるものに右京西式土器（第5図5・6）がある。右京西式土器は、大分県竹田市の右京西遺跡より出土した土器から桒畑光博氏が設定した（桒畑2002）。それでは、右京西式土器の一般的な特徴について整理したい。右京西式土器の器種は、深鉢である。器形は、口縁部が直線的もしくはやや外反し、胴部がやや丸みをもって底部に向かう。底部は平底を呈する。文様は口唇部に刻み目を施し、外面に横位、斜位、曲線状の微隆起線文を施す。外面に前型式の苦浜式土器に比べて、より明瞭に条痕文を施し、口縁部のみ微隆起線文を施すものもある。外面の施文方法については、ヘラや板状工具を器面に押し付けて、それを横方向や縦、斜方向に引く。その際、両側に押し出した粘土が微隆起線状になる。その他、微隆起線文の代わりに粘土紐を貼り付ける土器もある。

門前タイプ土器と右京西式土器の共通点としては、口唇部に刻み目を施す事、口縁部の外反や胴部が膨らむ形状、外面への横位の隆帯が貼り付けられている事である。相違点としては、門前タイプ土器は口縁部と胴部外面の中位に隆帯が貼り付けられるが、右京西式土器は、外面全体に微隆起線文を貼り付ける。また、外面の文様が、門前タイプ土器には縄文が施されるが、右京西式土器には条痕文が施される。そして、門前タイプ土器の器形は、頸部で外反するが、右京西式土器は外反しない。その他、門前タイプ土器は、底部に安定感があるのに対して、右京西式土器は底径が狭くなる事が挙げられる。

## ４．門前タイプ土器の評価

以上、可能性①から③として平栫式土器、苦浜式土器、右京西式土器と門前タイプ土器との類似性、相違点などを検討した。

今回検討している門前タイプ土器の最大の特徴は、何といっても隆帯の文様を貼り付ける事だと言える。そのため、口縁部が肥厚せず隆帯を付けるという特徴から、平栫式土器の可能性は無くなり、苦浜式土器か右京西式土器にしぼられてくる。縄文時代早期後葉の土器は、押型文土器以降に「妙見・天道ヶ尾式土器→平栫式土器→塞ノ神式土器→苦浜式土器→右京西式土器→鎌石橋式土器→轟A式土器」と変遷する。その苦浜式土器や右京西式土器も条痕文土器を基調とする土器であるが、苦浜式土器に比べて右京西式土器は器壁全体に条痕文を明瞭に施すという点と、門前タイプ土器が、縄文を基調としている点で候補から外れてくる。ただし、苦浜式土器も条痕文を基調とするが、右京西式土器ほどに明瞭でないという点で、より可能性は高いと考える。門前タイプ土器は、波状口縁であり、口縁部外面の文様帯の隆帯の文様構図も特殊な配置を成す。そのため、日常用の土器というよりは、ハレの場などで用いる特殊な土器と考えられる。その特殊性がゆえに、いずれの時期の土器かの判別が難しかった原因であろう。この土器が使用されていた時期の常用土器は、おそらく平坦口縁で、口縁部文様帯の隆帯も、横位に付けられていたと推測できる。この事も加えて考えると、門前タイプ土器

は苦浜式土器の器形や底部の形状、隆帯が所々で途切れていたり、隆帯が短い特徴をもつ点などで類似性が高い。ただし、苦浜式土器も器壁の文様が、条痕文を基調とするが、おそらく、特殊性の土器のためか、もしくは地域性による影響により、器壁の外面に縄文を施したと考えられる。

また、底部形態は、苦浜式土器の底部が幅広な平底であるのに対して右京西式土器が、底径の狭い平底である。そのため、門前タイプ土器の底部は幅広な平底であるため、苦浜式土器の底部形態に類似する。

最後に、塞ノ神式土器の器形は、口縁部と胴部間でくの字状に屈曲し、口縁部がラッパ状に外へ開く形状であるが、その後の時期に屈曲が緩み、最後は直線的な器形になる。門前タイプ土器は、この塞ノ神式土器系統の器形の中でも屈曲が緩む段階の時期と考えているが、この時期は、通常条痕文が主流であるが、塞ノ神式土器よりも古いと考えられる平栫式土器で見られる縄文の流れを、ひそかに後世に受け継いで残していた可能性がある。この様な分析から門前タイプ土器は塞ノ神式土器に後続する時期であろう苦浜式土器か、それに併行する時期の在地系の土器と位置付けたい。

今後、私どもは、門前タイプ土器を基軸に長崎県では今まで成されていない縄文時代早期後葉の土器の時間的・空間的様相を解明していきたいと考えている。

**【謝　辞】**

本稿の執筆に際して副島和明・古門雅高・渡邊康行・寺田正剛・東貴之・小石龍信・松尾秀昭諸氏に御協力・御教示を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

**【引用・参考文献】**

河口貞徳　1992「平栫貝塚」『鹿児島考古』26　鹿児島考古学会

九州縄文研究会　2006『九州縄文時代の低湿地遺跡と植物性自然遺物』第16回九州縄文研究会大分大会　九州縄文研究会

桒畑光博　2002「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第四紀研究』41 巻　第四紀研究会

桒畑光博　2014「轟式土器の編年と鬼界アカホヤテフラ（K-Ah）の年代」『九州における縄文時代早期末～前期前葉の土器様相』第24回九州縄文研究会大分大会　九州縄文研究会

杉原敦史・松尾秀昭・江上正高　2008『門前遺跡2』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書4　一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　長崎県教育委員会

副島和明・川端敏則・松尾秀昭・江上正高・石橋忠治　2006『門前遺跡』一般国道497号佐々佐世保道路埋蔵文化財発掘調査報告書　長崎県文化財調査報告書第190集　長崎県教育委員会

高橋信武　1986『右京西遺跡』荻台地の遺跡X　荻町教育委員会

高橋信武　1989「轟式土器再考」『考古学雑誌』75-1　日本考古学会

高橋信武　1998「縄文早期後葉の九州」『九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―』第8回九州縄文研究会鹿児島大会　九州縄文研究会

堂込秀人　1994「熊毛諸島の縄文早期土器の一型式」『考古学ジャーナル』No.378　ニュー・サイエンス社

堂込秀人　1998「苦浜式土器からみた塞ノ神式土器」『九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―』第8回九州縄文研究会鹿児島大会　九州縄文研究会

堂込秀人　2020「苦浜式土器再考」『九州考古学』第95号　九州考古学会

**『西海考古』第 13 号　執筆要綱**

判　型:Ａ４判（幅 210 ×長さ 297 ㎜）　　書　式:横書き（45 文字× 40 行）余　白:上 27 ㎜　下･右･左:各 25 ㎜（多少、変動する可能性があります）　図　版：横 160 ㎜×縦 240 ㎜（多少の超過は可能です）

題　名：明朝 15 ポイント　副　題：明朝 12 ポイント　筆者名：明朝 12 ポイント　本　文：明朝 10.5 ポイント　註：明朝 9.5 ポイント　文　献：明朝 9.5 ポイント　表・図版・写真などのキャプション：ゴシック 10 ポイント

内　容：論文・研究ノート・資料紹介・エッセー・近況報告など

※　副題がある場合には題名の次行に記し、前後に罫線を付加します。筆者名と題名（副題がある場合は副題）の間には空行（１改行）を挿入してください。節の最終行と次節名との間には空行（１改行）を挿入してください。

※　文献名は①執筆者（または編集者）、②発行年（西暦）、③「題名」、④『所収書名』、⑤巻次（シリーズ名等）、⑥発行者（発行機関）、⑦備考の順で記載してください。

※　文中の記号や単位語は、原則として全角１文字での表記

ミリ　キロ　センチ　メートル　グラム　トン　アール　ヘクタール　リットル　カロリー　パーセント　ページ　などを用いてください。

※　地名、遺跡名、型式名などで難解なものについては、ルビを付けてください。

※　外字については印刷所に一任します。（個人的に作成した外字は、原則として使用できません）

※　図版作成は番号・縮尺・方位・網掛けなど、執筆者側で可能な範囲でお願いします。

※　原稿はできるだけデジタルデータで提出してください。

※　図版に関しては、版下図版・データともに可ですが、挿入位置を原稿に明示してください。

※　原稿は図版・表・写真などを挿入し、編集済のデータと、挿入した図版・表・写真の個別データも提出してください。

※　打ち出し原稿の提出は任意とします。

１．投稿先：西海考古同人会事務局　　〒 850-0874　長崎県長崎市魚の町 6-15-902　古門　方

２．投稿締め切り：令和４年９月末日（締切厳守）３．校　正：編集後、著者校正は原則１回

４．註、引用・参考文献

（１）註と引用・参考文献の区分

註と引用・参考文献は区別します。註は本文と関連する補助的事項を記し、引用・参考文献は、他著者の見解等を引用する際に必ず明記してください。

（２）註の書き方

当該箇所の文字に続けて括弧書きで示し、本文末番号順に記載してください。

【例】（本文中）・・・・発見された（註 1）

（本文末）　註１　このような発見例は長崎県で３番目である。

（３）引用文献の示し方

他著者の文章をそのまま引用する場合は引用文を「」で明示し、本文中に括弧書きで著者名、出版年、該当頁を明記してください。引用・参考文献は本文末に著者ごとにあいうえお順で記載してください・

【例】（本文中）・・「引用文」と述べている（古門 2021 p. 32）。・・・

インターネットからの引用は､本文末の引用･参考文献欄に該当サイトの URL を明記してください。

５．その他　・図表および写真については、原則モノクロとします。

・折込図版は原則使用しないでください。

# 【研究ノート】石製羽口の集成

土岐　耕司

## はじめに

2001 年度に従事した長崎市深堀遺跡の調査において、筆者は「滑石製の羽口」というものに出会った。石鍋の素材として知られる滑石を羽口素材にしたこの遺物は、産地である長崎県においてしても、これまで類例を見ないものであった。しかしながらよくよく考えてみれば、「羽口が石製であること」自体が珍しいことなのではないかと思った筆者は、いつしか各地の報告書に接するたびに石製羽口を探すようになり、僅かずつではあるがそれらは蓄積されていった。

2019 年、大村市竹松遺跡から 2 点の滑石製羽口が出土したとの報を受け、思いがけずこの蓄積データが活用されることとなった（註 1)。これを大きなモチベーションとした筆者の集成は進み、その件数が更に増加したため、本稿において提示する。製鉄に関して全くの門外漢である筆者による集成データではあるが、後人の活用に資することができれば存外の喜びである。

## １．過去の集成および研究略史

【1959 年】

昭和 15 年以降、宮崎県内の鉱滓出土遺跡を精力的に調査・踏査した石川恒太郎は、稲葉崎宮田遺跡（延岡市）・富高大王谷遺跡（日向市）・和田遺跡（都城市）の 3 遺跡から、計 4 点の石製羽口出土があったことを報告している（石川 1959)。この中では「…そして石製鞴の羽口は殆ど常に弥生式土器を伴うことから、これは古いものであることが知られる。」（石川 1959:p90）と、これらの羽口が弥生時代に帰属するかのような記述がなされており、前後の文脈からすれば石川もそのように信じていたようである。しかしその採集経緯を検討してみると、これらは全て表面採集によるものと判断でき、時期決定の根拠とするには乏しいものであった。

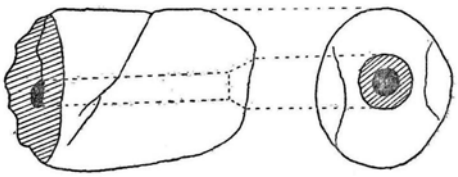


**図１　都城市和田遺跡の石製羽口**
**（縮尺不明、石川 1959 から転載）**

【1979 年】

松本健郎は、熊本県内の生産遺跡基本調査で選定された製鉄遺跡における出土遺物報告にあたり、石川の集成事例を紹介するとともに、熊本県内の石製羽口を集成している（松本 1979)。同書で報告した宇土城跡（宇土市）や既刊だった相良頼景館跡（多良木町）の他にも、西岡台遺跡（宇土市）や無田原遺跡（大津町か）でも出土していることを明らかにしており、「他に球磨郡内出土品という凝灰岩製羽口がもと八代厚生病院に所蔵されていたという。」（松本 1979:p105）とも述べている。

【1993 年】

朝岡康二はその著書の中で、沖縄では土製羽口の使用例が見当たらず、専ら砂岩（現地では「ニービ」と呼ばれる）を穿孔した「風口」を使用していることに言及し、「このような石の利用は、東南アジアの鍛冶に一般的に見られるものである。（中略）このような「ニービ」の使用が沖縄でいつごろから始まったのかは判然としないし、これだけを理由にして沖縄と東南アジアの共通性をいうことはできないが、ひとつの共通要素ではあると考えられる。」（朝岡 1993:p41）と述べている。

【1999 年】

大濵永亘は、八重山諸島における鍛冶遺跡を集成し、その中で得られた多くの石製羽口を紹介した（大濵 1999）。この中で大濵は「八重山一円でみられる砂岩製ふいご羽口は、徳之島ヨヲキ洞穴から採集の花崗岩製の大型ふいご羽口を模造したものであり、鉄器の生産技術が北から伝来したことを物語っている。」（大濵 1999：p319）という見解を述べている。また、それまで沖縄本島や宮古島での出土がない（金城 1994）とされていた石製羽口について、1991 年の那覇市首里城城壁発掘調査の際にもその出土があったことを示している。

【2005 年】

河野史郎は、大分市鶴崎町遺跡群（三軒町）の報告書において、出土した石製羽口について頁数を割いて特記している（河野 2005）。石川・松本の集成に加えて、大分県内及び福岡県小倉城跡の出土事例を示しており、石製羽口の小さな内径からこれを小鍛冶使用されたものと想定し、イラストを用いてその作業光景を分かり易く説明した。また朝岡が言及した沖縄や東南アジアの民俗事例から、中世後半における中継貿易の影響を想起している。

坪根伸也は、大分市下郡遺跡Ⅴの報告書において、市内の古国府岩屋寺遺跡および大友城下町第 1 次調査での石製羽口の出土事例を記述した上で、下郡地域が 1570 年に大友氏領になった際に関美作守がこの地に入り、1615 年にその息子の喜兵衛が柞原八幡宮の鍛冶職人を務めたという記録を紹介している。

【2012 年】

太田真理子は、河野の集成に延岡城内遺跡での出土事例を加え、石製羽口集成を再提示した（註 2）。

## ２．実測図の集成結果（道県別）

以下、発掘調査報告書にその実測図を掲載するものを概観する（表 1、図 2 ～ 13）。帰属時期を問わず、概ね北から県別に提示する。

（１）北海道：3 点（図 2）

渡島半島上ノ国町に所在する上之国勝山館跡の 2 冊において、それぞれ 3 点ずつの実測図掲載事例を見つけることができた。ただし、これら 3 点は各々同じ個体を再実測したものと推定できたため、後出の 3 点のみを掲載した。

この館跡は、後の松前氏の祖である武田信廣が 15 世紀後半に築いた山城で、16 世紀末頃まで武田・蠣崎氏の日本海側での政治・軍事・交易の一大拠点であった。個々の遺物の帰属年代についての記述はないが、館跡が営まれた期間の産物と見なされているようである。羽口の素材は全て「凝灰岩質泥岩」とされている。

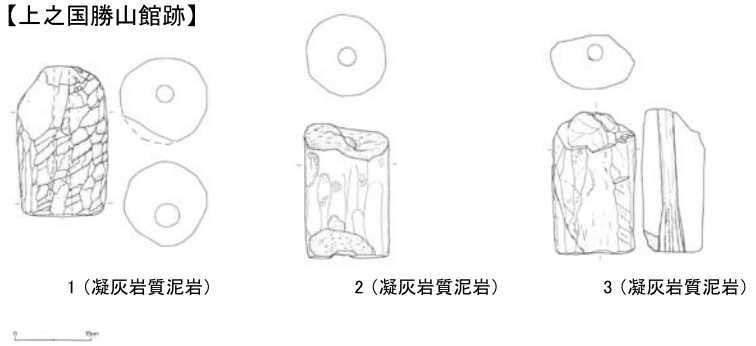



図 2　北海道の石製羽口　S=1/10

（2）愛知県：5 点（図 3）

清洲城下町遺跡 1 冊から、5 点の実測図掲載事例を認めた。全て 16 世紀末～ 1613 年に帰属する砂岩製の破片資料である。土製のものも 5 点掲載されているが、その内径についてはさほど大きな差はみられない。同書においては、「砂岩製と土製の使われかたの違いについては、温度をそれほど上げなくてもよい材料で長期間使える鋳造炉の様な構造のものと、そうでない複数羽口で材料に直接空気を送り続け高温を持続しなければならない大鍛冶炉の様な構造とで、使い分けられていたかもしれない。」（柴垣 2013:p72）との記述がなされている。

【清洲城下町遺跡】

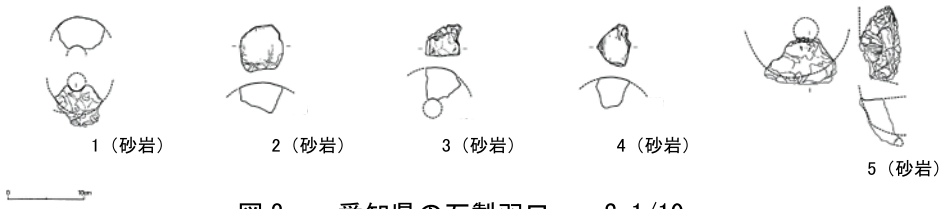



図 3　愛知県の石製羽口　S=1/10

（3）岐阜県：1 点（図 4）

岐阜市下切遺跡 1 冊から、ほぼ完形品 1 点の実測図掲載事例を認めた。実測図のスケールと観察表の数値が整合しておらず、表 1 における数値は観察表に従った（註 3）。

【下切遺跡】

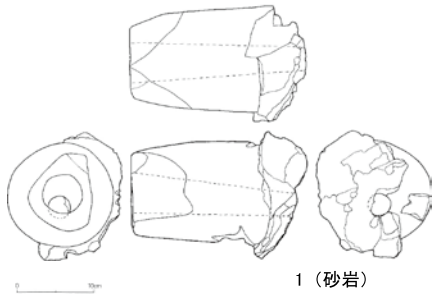



図 4　岐阜県の石製羽口　S=1/10

（4）福岡県：5 点（図 5）

北九州市小倉城跡 1 冊から、5 点の実測図掲載事例を認めた。いずれも砂岩製である。出土層位が確かで最新土層となる「中世 3 層」について、「古代の瓦や陶磁器・鋳造関係遺物など、15 世紀以前の遺物が大量に含まれている。この層が永禄 12 年の築城にあたって周辺域から運ばれ、形成されたことは明らかであり、周辺域特に丘陵上や砂丘上の営みが、この時大きく破壊されたことが考えられる。」（谷口 1997:p29）との記述があり、少なくとも 3 点の石製羽口の帰属年代の下限が西暦 1570 年であることが分かる。

【小倉城跡】

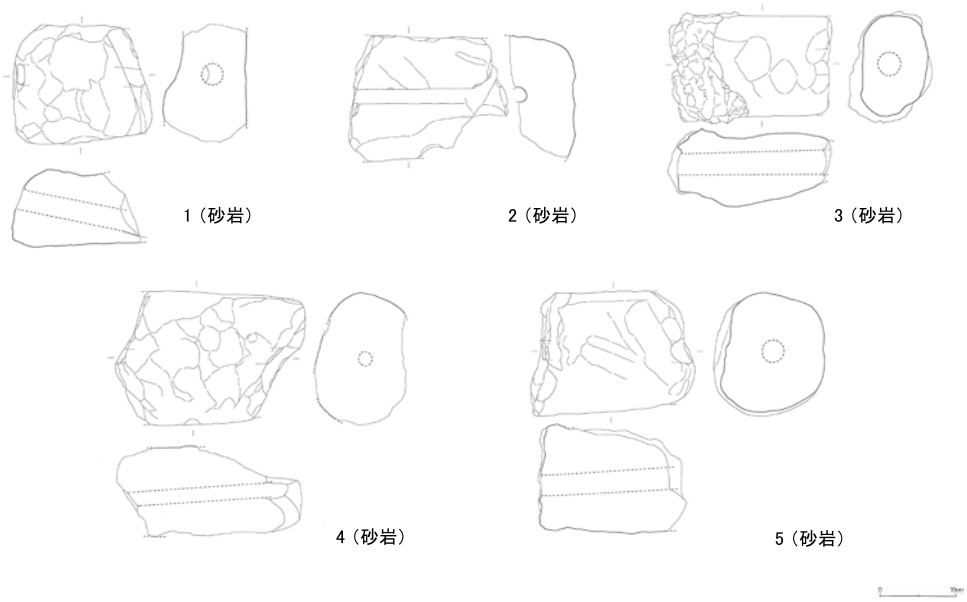



図 5　　福岡の石製羽口　　S=1/10

（5）大分県：22 点（図 6・7）

大分市内の 4 遺跡 6 冊から、22 点の実測図掲載事例を認めた。全ての資料が中世後半～近世に帰属するもので、安山岩製 5 点を除き全てが凝灰岩製である。鶴崎遺跡群（三軒町）においては、実測図を掲載した 6 点以外に小片が 59 点あったとされ、石製羽口の出土点数についての記述がある中では最も多い事例となる。

【中世大友府内町跡】

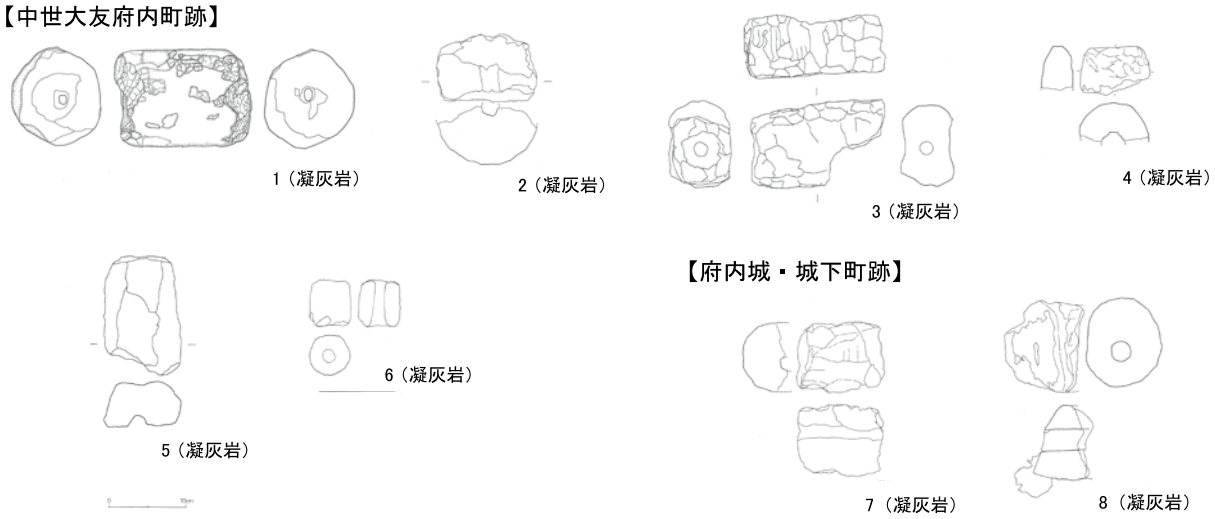
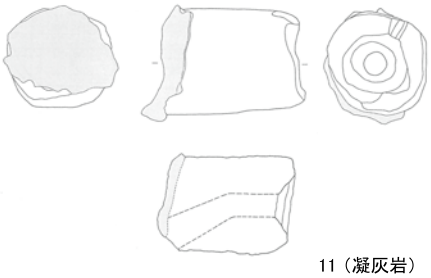



図 6　　大分の石製羽口①　　S=1/10

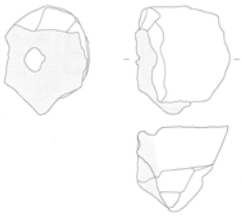
【鶴崎町遺跡群】

9（凝灰岩）

10（凝灰岩）

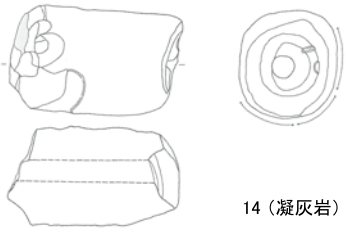


11（凝灰岩）



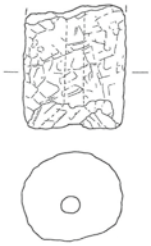
12（凝灰岩）

13（凝灰岩）



14（凝灰岩）

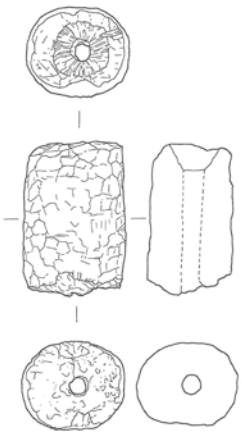
【下郡遺跡群】



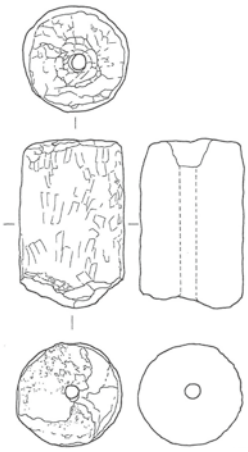
15（安山岩）

16（凝灰岩）

17（安山岩）

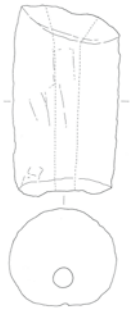


18（凝灰岩）



19（安山岩）

20（安山岩）



21（凝灰岩）

22（安山岩）

図７　　大分の石製羽口②　　S=1/10

（6）長崎県：13 点（図 8）

長崎市 2 冊 4 点（滑石 1・結晶片岩 2・砂岩 1）（註 4）、大村市 2 冊 3 点（滑石 2・砂岩 1）、島原半島 2 冊 6 点（全て砂岩）と、合計 6 冊 13 点の実測図掲載事例を見つけることができた。

長崎県の事例で特記されるのは、やはり滑石製のものが存在することである。これらは滑石製石鍋盛行期の産物である蓋然性が高く、石製羽口の中では古相を示すものとして重要である。滑石産地である当県においてこのような羽口が出土することは、ある程度自然なことと見なすこともできようが、「石鍋四つで牛一頭」といわれる当時の価値観を重ねて考えれば、当地における滑石材の潤沢さを物語っている事象であろう。

また、近世に帰属すると判断できるものが 3 遺跡 5 点得られており、仕様による損耗以外の欠損が少ないものが 3 点認められた。これを完形に近いと考えて前述の石鍋盛行期のものに比べると、明らかに丈が短いように感じられた（註 5）。

図 8　長崎県の石製羽口　S=1/10

（7）熊本県：4 点（図 9）

3 冊 4 点の実測図掲載事例が得られた。2 点が凝灰岩製で、もう 2 点が砂岩製である。多良木町相良頼景館跡出土のものが 2 点あり、源頼朝と同世代者である相良頼景の一代限りの居館名であることからすると比較的古いもののようにも思われるが、外濠の埋没課程において混入した遺物と見なされるため、上限は居館廃絶時、下限は近世となる。残りの 2 点も中世～近世のものと判断される。

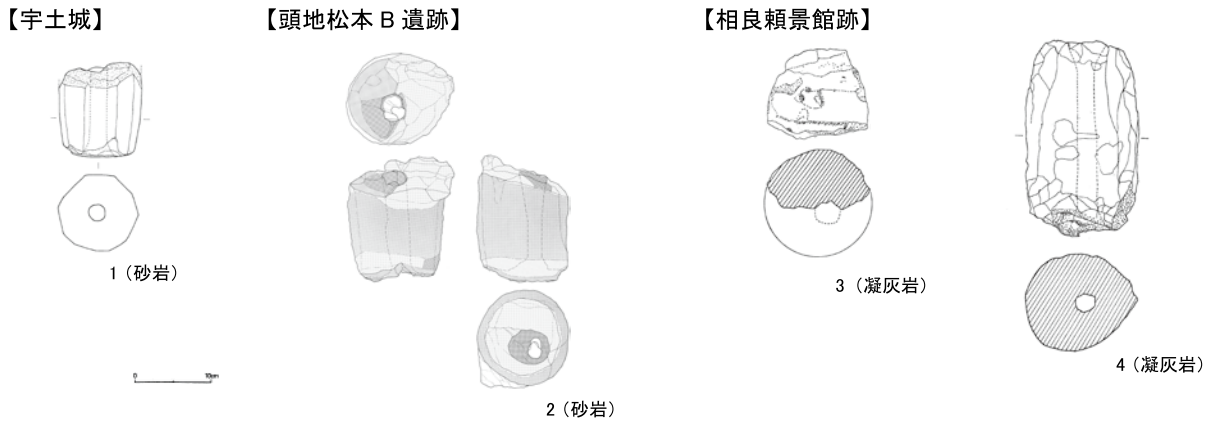



図 9　　熊本県の石製羽口　　S=1/10

（8）宮崎県：6 点（図 10）

5 冊 6 点の実測図掲載事例が得られた。多くが中世城郭からの出土であり、素材は凝灰岩製が多数を占めている。確実に石鍋盛行期、或いは近世の産物であると言えそうものは無い。

塩見城跡や野々美谷城跡出土のものが、完形品に近そうである。どちらも長さ 20cm を超えているが、同時に太さも有しているため、ずんぐりむっくりとした形状を見せている。

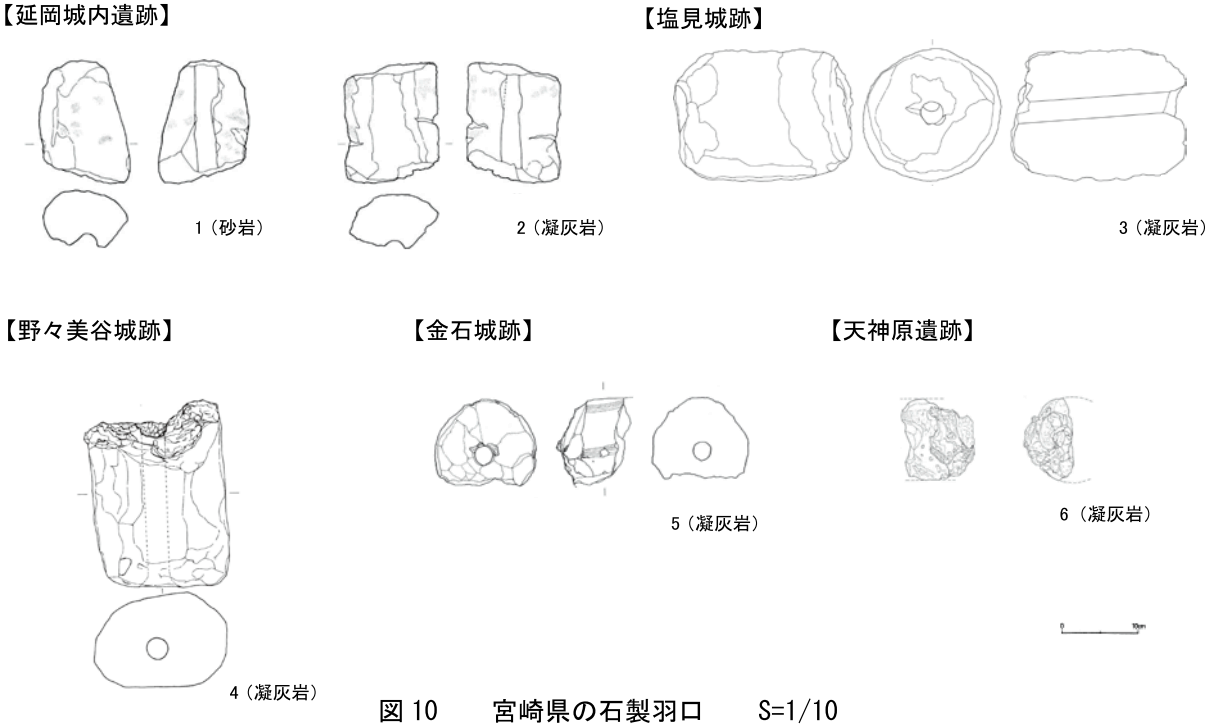



図 10　　宮崎県の石製羽口　　S=1/10

（9）鹿児島県：2 点（図 11）

2 冊 2 点の実測図掲載事例が得られ、どちらも薩摩地域に所在する遺跡である。指宿市橋牟礼川遺跡のものは 7 世紀の住居床面直上遺物であり、今回の集成作業上最も古いものとして扱われるものである。軽石製であるのが当地域性を示している上、ラッパ状に片側が開く形状であることが、他例との差異を際立たせている。また、実測図の掲載はないものの、表 1 で示したように徳之島からの出土が 3 例あることは非常に重要である。

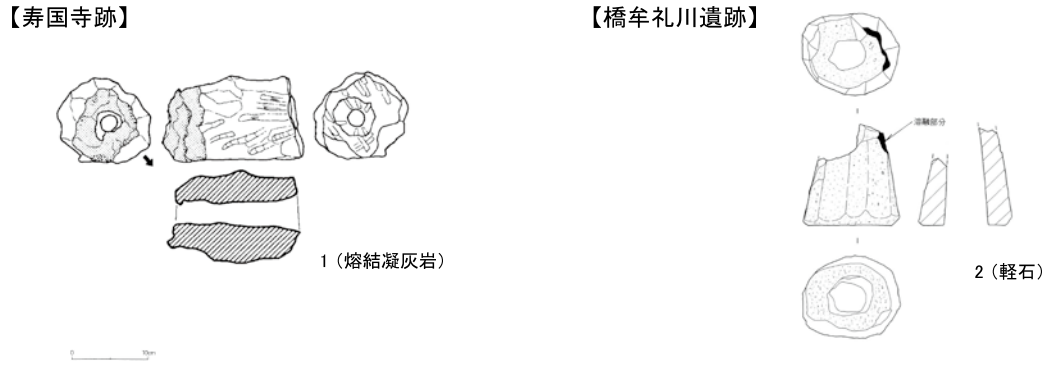



図 11　　鹿児島県の石製羽口　　S=1/10

(10) 沖縄県：18 点（図 12・13）

4 冊 18 点の実測図掲載事例が得られた。全てが八重山諸島（石垣島・西表島・与那国島）での事例である。石材も全てが砂岩であるが、大濵は「八重山の島々のスク時代にかけての各遺跡から発見されている砂岩性の鞴の羽口のほとんどは西表産だと思われる。（原文ママ）」（大濵 1999:p232）としている。

与那国島の与那原遺跡から出土した石製羽口は、明らかに大型・小型の２つに分類できる。このことについては「大型羽口については窪田蔵郎氏は大山遺跡の例から次のような見解を述べている「…羽口は踏吹子形式の大形吹子を使用し、高温を発生するよう多量の風を炉内に送り込み、溶融砂鉄に吸炭させて銑鉄を生産したものか、あるいは銑鉄を溶解するために用いられたものであろうと想像される。」このように大型羽口と小型羽口とは趣が若干、異なっていることが窺える。」（金城 1988:p176）と記述している。

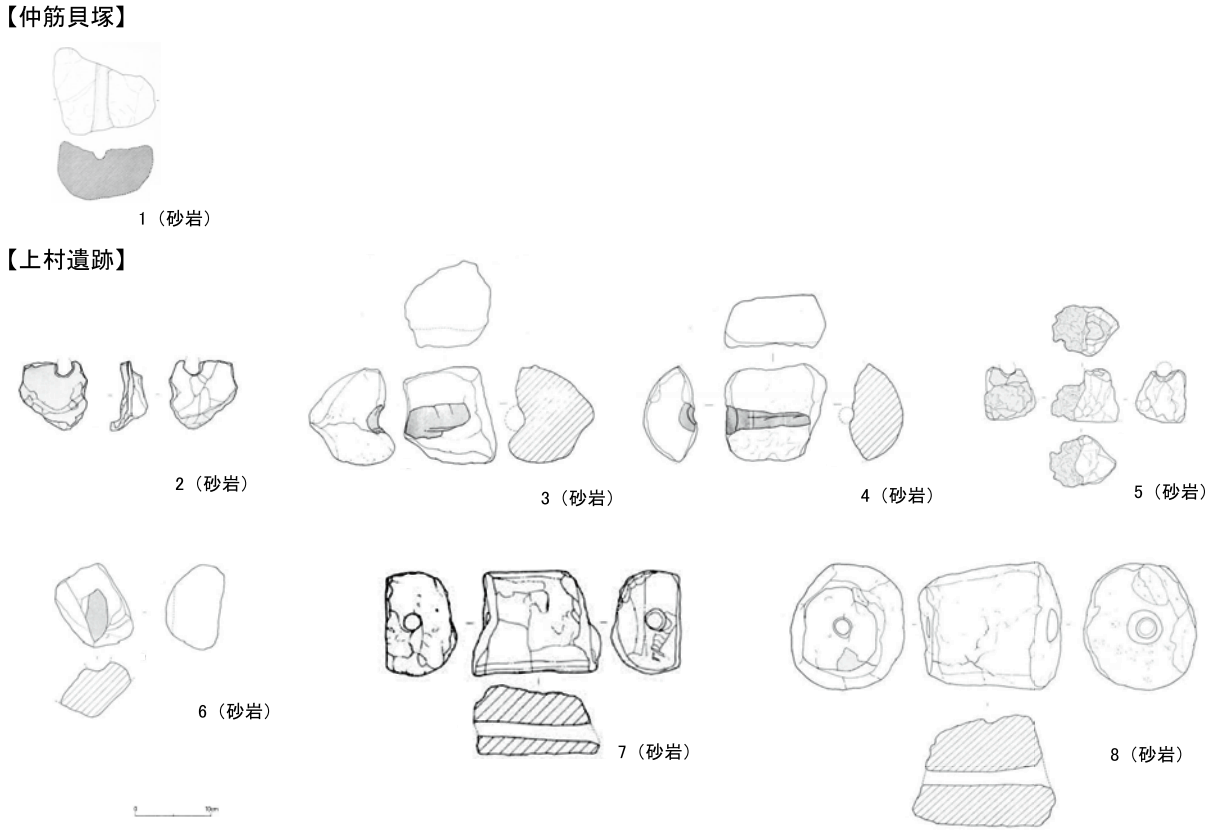
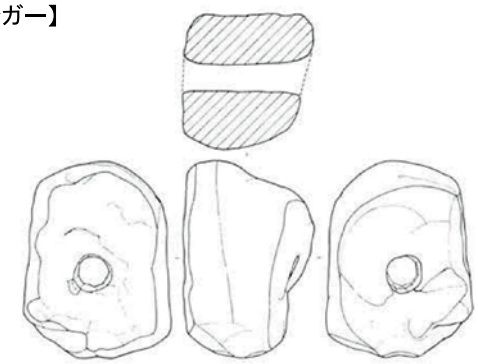


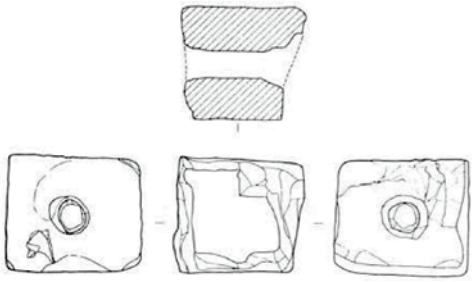

図 12　　沖縄県の石製羽口①　　S=1/10

【インガー】



9（砂岩）

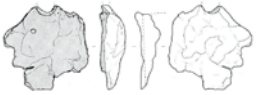
【高那村跡】



10（砂岩）

【船浦スラ所跡】

11（砂岩）



12（砂岩）

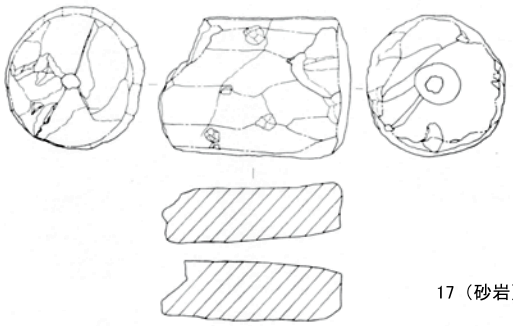
13（砂岩）

14（砂岩）

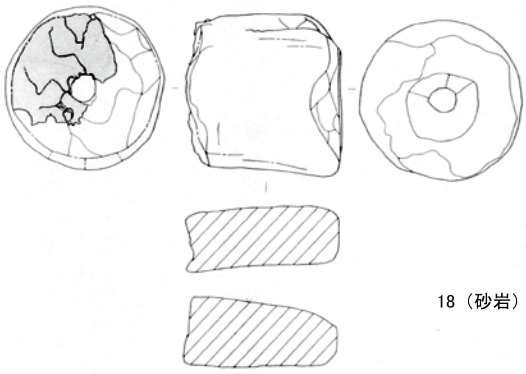
15（砂岩）

16（砂岩）

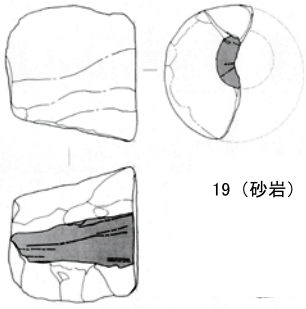
【与那原遺跡】



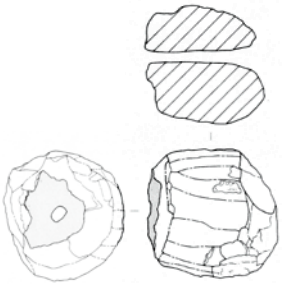
17（砂岩）



18（砂岩）



19（砂岩）



20（砂岩）

21（砂岩）

図 13　　沖縄県の石製羽口②　　S=1/10

## おわりに

加工し易いはずの土製ではなく、わざわざ石製の羽口が作られた理由は何だったのか。耐久性の良さということがまずは想像されるが、土製に比べて出土数が格段に少ないことを考えるならば、そのことだけが理由にはならないであろう。門外漢の筆者によるこれ以上の考察は控えるが、本稿が製鉄関連の研究者の目に留まり、石製羽口とは一体何なのかが解明される一助となることを願って止まない。

作業・執筆にあたり、以下の方々・機関から多大なご協力・ご配慮を頂いた。ここに御氏名を記し、心から御礼申し上げます（敬称略）。

沖野 実・古後 憲浩・島崎 直行・清水 宗昭・土橋 尚起・野﨑 拓司・花井 晶子・濱村 一成
二川目 直人・古門 雅高・松原 哲志・山梨 千晶・吉成 承三・渡邉 康行
公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター
公益財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
長崎県埋蔵文化財センター
沖縄県北谷町教育委員会文化課

**【註】**

**註 1** 『竹松遺跡Ⅴ』において、長崎県内における石製羽口集成表として、筆者作成の集成データが掲載された（報告書執筆者による一部追記・改変あり。）が、この内容に誤りがあったことを本稿執筆中に発見した。深堀遺跡出土の石製羽口は 3 点あり、その 3 点目は砂岩製でなく結晶片岩製である。訂正の上、深くお詫び申し上げる。

**註 2** 太田は『延岡城内遺跡』において、「延岡市稲葉崎宮田遺跡に関して、石川恒太郎著『日本古代の銅鉄の精錬遺蹟に関する研究』の中で「石製鞴羽口」とだけ記載してあるため、宮田遺跡出土の羽口の石材は不明である。」（太田 2012:p46）と述べているが、『日本古代の銅鉄の精錬遺蹟に関する研究』80 頁において、玄武岩製であることが記されている。

**註 3** 同書図 115 のスケールは、149 が 1/6、それ以外は 1/3 と示されているが、同図中には 149 という番号の遺物は掲載しておらず、152 の誤記であると考えた方が観察表とも整合的であったため、そのように取り扱った。

**註 4** 深堀遺跡出土羽口の個別の石材については、報告書では詳述されていない。同報告書の執筆・編集に携わった 1 人である筆者の記憶に基づいて、個別の素材について提示した。

**註 5** 深堀遺跡出土の 3 点については、報告書における実測図スケールと観察表の数値が整合していない。筆者の記憶では観察表の方が間違っているように思われたのでそのように扱ったが、今後確認を要することである。

**註 6** 古門雅高氏のご教示による（註 6 は表 1-1 に記載している）。

**【引用・参考文献】**

北海道

藤田 登 他　1982『史跡上之国勝山館跡Ⅲ』上ノ国町教育委員会

藤田 登 他　1984『史跡上之国勝山館跡Ⅴ』上ノ国町教育委員会

岐阜県

三島 誠　2014『下切遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第 128 集　岐阜県文化財保護センター

愛知県

柴垣 哲彦 他　2013『清洲城下町遺跡Ⅵ』清須市埋蔵文化財調査報告Ⅵ　清須市教育委員会

福岡県
谷口 俊治 他　1997『小倉城跡 2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 196 集　財団法人北九州市教育文化事業団

大分県
池邉 千太郎 他　2003『大友府内 6』大分市教育委員会
高畠 豊他　2003『府内城・城下町跡第 12 次調査報告書』大分市教育委員会
高畠 豊 他　2004『大友府内 7』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 49 集
河野 史郎　2005『鶴崎町遺跡群（三軒町)』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 58 集　大分市教育委員会
坪根 伸也 他　2005『下郡遺跡群Ⅲ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 61 集　大分市教育委員会
坪根 伸也 他　2007『下郡遺跡群Ⅴ』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 76 集　大分市教育委員会

長崎県
宮﨑 貴夫 他　1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 123 集　長崎県教育委員会
荒井 春房　2004『長崎県埋蔵文化財調査年報 11』長崎県文化財調査報告書第 175 集　長崎県教育委員会
阿部 常樹 他　2004『深堀遺跡』 長崎市教育委員会
辻田 直人 他　2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書第 4 集　国見町教育委員会
伊藤 健司　2010『三本松遺跡・木場製鉄遺跡』南島原市文化財調査報告書第 2 集　南島原市教育委員会
杉原 敦史 他　2020『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 12 集　長崎県教育委員会

熊本県
杉村 彰一 他　1977『蓮花寺跡・相良頼景館跡』熊本県文化財調査報告書第 22 集　熊本県教育委員会
松本 健郎　1979『生産遺跡基本調査報告書 1』熊本県文化財調査報告第 38 集　熊本県教育委員会
山城 敏昭　1999『頭地松本 B 遺跡（2)』熊本県文化財調査報告第 173 集　熊本県教育委員会

宮崎県
石川 恒太郎　1959『日本古代の銅鉄の精錬遺蹟に関する研究』 角川書店
矢部 喜多夫 他　1990『平成元年度遺跡発掘調査報告』都城市文化財調査報告書第 11 集　都城市教育委員会
桒畑 光博 他　1991『平成 2 年度遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第 13 集　都城市教育委員会
横山 哲英 他　1992『金石城跡』都城市文化財調査報告書第 19 集　都城市教育委員会
横山 哲英　1993『天神原遺跡』都城市文化財調査報告書第 23 集　都城市教育委員会
田中 敏雄 他　2012『塩見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 210 集　宮崎県埋蔵文化財センター
太田 真理子　2012『延岡城内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 217 集　宮崎県埋蔵文化財センター

鹿児島県
中村 耕治 他　1989『奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅰ』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書（49） 鹿児島県教育委員会
中村 耕治 他　1989『鬼入塔遺跡・長竿遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書（1） 天城町教育委員会
下山 覚 他　1996『橋牟礼川遺跡 XI』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第 21 集　指宿市教育委員会

沖縄県
関口 広次 他　1981『仲筋貝塚発掘調査報告』 仲筋貝塚発掘調査団
金城 亀信　1988『与那原遺跡』与那国町文化財調査報告書第 2 集　与那国町教育委員会
大城 慧 他　1991『上村遺跡』沖縄県文化財調査報告書第 98 集　沖縄県教育委員会
朝岡 康二　1993『日本の鉄器文化－鍛冶屋の比較民俗学－』 慶友社
金城 亀信 他　1994『カイジ浜貝塚』沖縄県文化財調査報告書第 115 集　沖縄県教育委員会

大濱 永亘　1999『八重山の考古学』 先島文化研究所
村上 恭通 他　2014『具志川城跡発掘調査報告書Ⅲ』久米島町文化財調査報告書第６集　久米島町教育委員会

**【参考 web サイト】**

奈良文化財研究所 「全国遺跡報告総覧」
https://sitereports.nabunken.go.jp/ja
上ノ国町 天の川がながれるまち「史跡上之国館跡　勝山館跡（国指定史跡)」
http://www.town.kaminokuni.lg.jp/hotnews/detail/00000285.html
岐阜県公式ホームページ 清流の国ぎふ「下切遺跡鞴羽口（ふいごはぐち)」
https://www.pref.gifu.lg.jp/kyoiku/bunka/bunkazai/27221/ibutsu/hida_ibutu/knh128-152.html

## 表 1-1　石製羽口の集成表

| 所在地 | | 遺跡名 | 番号 | 長さ | 外径 | 内径 | 石材 | 出土地点・他 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 北海道 | 上ノ国町 | 上之国勝山館跡 | | | | | 石製 | 26・27区 Ⅲb層 | 16cか |
| | | | | | | | 石製 | | |
| | | | | | | | 石製 | | |
| | | | 1 | *198* | 128 | 22 | 凝灰岩質泥岩 | 26J21区 Ⅱ層 | 15～16cか |
| | | | 2 | *178* | 110 | 20 | 凝灰岩質泥岩 | 27K7区　Ⅲ6・3層 | |
| | | | 3 | *188* | 110 | 21 | 凝灰岩質泥岩 | 26J21区 Ⅱ層 | |
| 愛知 | 清須市 | 清洲城下町遺跡 | 1 | － | 84 | 26 | 砂岩 | 072SD | 16c末～1613年 |
| | | | 2 | － | 124 | － | 砂岩 | | |
| | | | 3 | － | 108 | 25 | 砂岩 | 077SX | |
| | | | 4 | － | 126 | － | 砂岩 | | |
| | | | 5 | － | 142 | 32 | 砂岩 | | |
| 岐阜 | 岐阜市 | 下切遺跡 | 1 | 235 | 164 | *31* | 砂岩 | SK600 | 17c後半以降 |
| 福岡 | 北九州市 | 小倉城跡 | 1 | *168* | *154* | *28* | 砂岩 | 不明 | |
| | | | 2 | *(201)* | *(163)* | *20* | 砂岩 | 中世4層 | 永禄12年以前 |
| | | | 3 | *(219)* | *132* | *31* | 砂岩 | 中世3層 | 永禄13年以前 |
| | | | 4 | *(220)* | *(174)* | *20* | 砂岩 | 不明 | |
| | | | 5 | *(216)* | *164* | *14* | 砂岩 | 中世3層 | 永禄13年以前 |
| 大分 | 大分市 | 中世大友府内町跡 | 1 | 174 | 128 | 16 | 凝灰岩 | SE250（廃絶時） | 16世紀代 |
| | | | 2 | *(86)* | *132* | *24* | 凝灰岩 | SK137 | 廃絶が16c末～17c初頭 |
| | | | 3 | 175 | 107 | *17* | 凝灰岩 | SK139 | |
| | | | 4 | *(57)* | *91* | *29* | 凝灰岩 | SK155 | |
| | | | 5 | *(157)* | *100* | *24* | 凝灰岩 | SK309 | 16c後半以降 |
| | | | 6 | *(61)* | *54* | *22* | 凝灰岩 | SK828 | 16c末以降の廃絶 |
| | | 府内城・城下町跡 | 7 | *(111)* | 93 | 20 | 凝灰岩 | SD201 | 1597年以前 |
| | | | 8 | *(79)* | *117* | 26 | 凝灰岩 | | |
| | | 鶴崎町遺跡群 | 9 | － | － | 29 | 凝灰岩 | SK110 | 18c中頃 |
| | | | 10 | *(76)* | *149* | 29 | 凝灰岩 | | |
| | | | 11 | *(218)* | 142 | 30 | 凝灰岩 | | |
| | | | 12 | － | － | 30 | 凝灰岩 | SK114 | |
| | | | 13 | － | － | 30 | 凝灰岩 | SK115 | |
| | | | 14 | *227* | *141* | 30 | 凝灰岩 | SK70混入品 | |
| | | 下郡遺跡群 | 15 | *(164)* | 131 | 24 | 安山岩 | 140SX355 | 16c後半～末 |
| | | | 16 | *(219)* | 134 | 20 | 凝灰岩 | | |
| | | | 17 | *(236)* | － | － | 安山岩 | | |
| | | | 18 | *(202)* | 135 | 25 | 凝灰岩 | | |
| | | | 19 | (223) | 188 | 20 | 安山岩 | | |
| | | | 20 | 203 | 120 | － | 安山岩 | 140SX355付近表土 | |
| | | | 21 | 253 | 141 | 25 | 凝灰岩 | 106SD004 | 16c頃 |
| | | | 22 | (156) | 141 | *36* | 安山岩 | 116SX048 | |
| 長崎 | 長崎市 | 深堀遺跡 | 1 | *243* | *163* | *52* | 滑石 | J76・Ⅰg層 | 12～13c |
| | | | 2 | *237* | *151* | *46* | 結晶片岩 | イ-A・3a層 | 不明 |
| | | | 3 | *146* | *119* | *51* | 結晶片岩 | 鍛冶町 | 近世 |
| | | 万才町遺跡 | 4 | *103* | *91* | *43* | 砂岩 | B3区・SK15上層 | 1650年代～1690年代 |
| | 大村市 | 竹松遺跡 | 5 | 209 | 101 | *～43* | 滑石 | NR1 ⑤6662・6660 | 10～12c　※註6 |
| | | | 6 | (77) | 81 | － | 滑石 | NR1 ⑤6662 | |
| | | 三城城跡 | 7 | *(110)* | *78* | *23* | 砂岩 | 曲輪1横矢裾緩斜面 | |
| | 雲仙市 | 十園遺跡 | 8 | (86) | 70 | 20 | 粗い砂岩 | 21区1号製鉄炉 | 中世～近世 |
| | | | 9 | (64) | 76 | 27 | 粗い砂岩 | 21区P-16 | |
| | 南島原市 | 木場製鉄遺跡 | 10 | (67) | 78 | 17 | 粗い砂岩 | 鉄滓堆積層 | 17～18c |
| | | | 11 | 104 | 83 | 20 | 粗い砂岩 | | |
| | | | 12 | (52) | 76 | 23 | 粗い砂岩 | | |
| | | | 13 | (48) | － | 24 | 粗い砂岩 | 表採 | |
| 熊本 | 大津町か | 無田原遺跡 | | | | | 凝灰岩 | （記述のみ） | 不明 |
| | 宇土市 | 西岡台遺跡 | | | | | 凝灰岩 | （記述のみ） | 中世～近世初頭 |
| | | 宇土城 | 1 | *(124)* | *107* | *22* | 砂岩 | | 中世～近世初頭 |
| | 五木村 | 頭地松本B遺跡 | 2 | 166 | 119 | 19 | 砂岩 | 2号掘立柱建物周辺 | 16～17c？ |
| | 多良木町 | 相良頼景館跡 | 3 | (120) | 150 | 25 | 凝灰岩 | 東外濠 暗褐色土 | 明代～近世 |
| | | | 4 | 250 | 145 | 25 | 凝灰岩 | 西外濠 褐色粘質土 | 明代～17c前半 |
| | 球磨郡内 | | | | | | 凝灰岩 | （記述のみ） | |

## 表 1-2　石製羽口の集成表

| 所在地 | | 遺跡名 | 番号 | 長さ | 外径 | 内径 | 石材 | 出土地点・他 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 宮崎 | 延岡市 | 稲葉崎宮田遺跡 | | | | | 玄武岩 | 採集品（記述のみ） | |
| | | 延岡城内遺跡 | 1 | (168) | 126 | 26 | 砂岩 | SE1 | 近世以前？ |
| | | | 2 | (167) | 162 | 30 | 凝灰岩 | | |
| | 日向市 | 富高大王谷遺跡 | | | | | 砂岩 | 採集品・寄贈品（記述のみ） | |
| | | | | | | | 砂岩 | | |
| | | 塩見城跡 | 3 | 236 | 182 | *29* | 凝灰岩 | 水の手曲輪 | 14～17c |
| | 都城市 | 和田遺跡 | | | | | 砂岩 | 採集品 | |
| | | 野々美谷城跡 | 4 | *246* | *178* | *28* | 凝灰岩 | SA21 | 15～16c |
| | | 都之城跡 | | | | | 凝灰岩 | SC156（記述のみ） | 14～17c |
| | | 金石城跡 | 5 | *(91)* | *133* | *23* | 凝灰岩 | | 15c～ |
| | | 天神原遺跡 | 6 | *(88)* | *(108)* | － | 凝灰岩 | SC-5・中層 | 12～16c |
| 鹿児島 | 鹿児島市 | 寿国寺跡 | 1 | 185 | 110 | 50 | 熔結凝灰岩 | B地点 Ⅴa層 | 近世 |
| | 指宿市 | 橋牟礼川遺跡 | 2 | 133 | 125 | 40 | 軽石 | 4 号住居・床面直上 | 7c |
| | 徳之島 | ヨヲキ洞穴 | | | | | 花崗岩 | （記述のみ） | |
| | | カンジャエ鍛冶跡 | | | | | 石製 | （記述のみ） | 歴史時代 |
| | | アガリン竿 | | | | | 岩石製 | （記述のみ） | 歴史時代 |
| 沖縄 | 那覇市 | 首里城跡 | | | | | 石製 | （写真のみ） | |
| | 石垣島 | 仲筋貝塚 | 1 | *(114)* | 126 | *17* | 砂岩 | 表採 | 15c中葉～後半代 |
| | | ヤマバレー遺跡 | | | | | 砂岩 | | 14c後半～17c前半 |
| | 西表島 | 上村遺跡 | 2 | － | － | *21* | 砂岩 | B-3第2層 | 明代？ |
| | | | 3 | *(122)* | *129* | *29* | 硬質砂岩 | 表採 | |
| | | | 4 | *(133)* | － | 28 | 硬質砂岩 | B-1第2層 | |
| | | | 5 | *(88)* | － | *19* | 砂岩 | 第Ⅱ地区 | |
| | | | 6 | － | － | － | 砂岩 | | |
| | | | 7 | *160* | *136* | *20* | 硬質砂岩 | 大竹の根所表採 | |
| | | | 8 | *187* | *167* | *17* | 砂岩 | 表採 | |
| | | インガー | 9 | *173* | *261* | *35* | 硬質砂岩 | 表採 | |
| | | 高那村跡 | 10 | *166* | *177* | *38* | 硬質砂岩 | 表採 | 18c～ |
| | | 船浦スラ所跡 | 11 | － | － | *29* | 砂岩 | D-4 第3層 | 18c～ |
| | | | 12 | － | － | *22* | 砂岩 | D-4 第3層 | |
| | | | 13 | － | － | *21* | 砂岩 | C-2 第3層 | |
| | | | 14 | － | － | *24* | 砂岩 | C-4 第3層 | |
| | | | 15 | － | － | *27* | 砂岩 | D-4 第1層 | |
| | | | 16 | － | － | *25* | 砂岩 | C-4 覆土 | |
| | 波照間島 | 北村遺跡 | | | | | 砂岩 | 採集品 | 現代 |
| | | | | | | | 砂岩 | | |
| | 与那国島 | 与那原遺跡 | 17 | (236) | 182 | 22 | 砂岩 | 遺跡南端のキビ畑から採集 | 14c前葉～15c中葉頃 |
| | | | 18 | 196 | 200 | 34 | 砂岩 | | |
| | | | 19 | (168) | 182 | *38* | 砂岩 | | |
| | | | 20 | (162) | 162 | 15 | 砂岩 | | |
| | | | 21 | (56) | － | *26* | 砂岩 | J-18 包含層 | |

※ 上記表における、長さ・外径・内径の数値について。（ ）で示したものは残存値、斜字で示したものは筆者が図上計測したものである。

# 【資料報告】長崎市三重地区・東上（ひがしあげ）遺跡について

## －五島灘（角力灘（すもうなだ））を望む弥生時代砂丘遺跡の予察的評価－

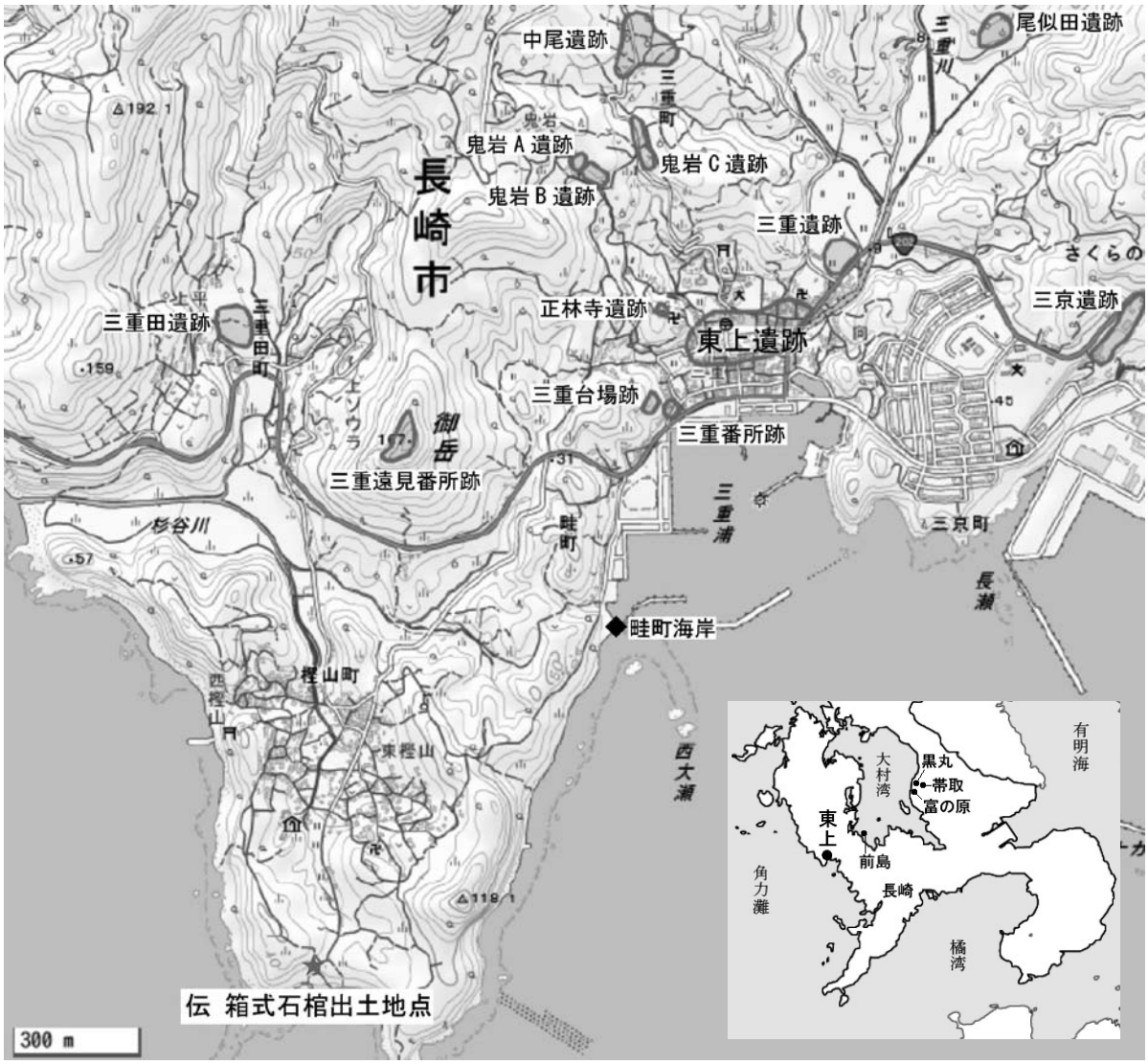
宮下　雅史・竹田　ゆかり・渡邊　康行

### はじめに

2020 年 11 月 28 日，筆者は東上遺跡を踏査して数点の遺物を採集した。このうち１点は長崎県内では希少例となる敲打有溝石錘で，被熱によると思われる部分的な赤色化や，長軸の端部に溝状の痕跡が観察されるなど，石錘本来の用途とは別の目的に転用されている可能性が想定されるものであった。

半年後，弥生時代の鍛冶遺構としては県内で２例目となる大村市帯取（おびとり）遺跡の礫石器を実見する機会があり，発掘調査と整理・報告書作成を担当された柴田亮氏（大村市教育委員会）の御教示を得て，この敲打有溝石錘が弥生時代の鍛冶に関係した石器の可能性があることを認識するにいたった。

また雲仙市火箱（ひばこ）遺跡の遺物を実見した際にも，帯取遺跡例と同様の痕跡を有する礫石器が存在することを知り，鍛冶作業と関係する石器に対する関心を，より一層深めることとなった。




第１図　東上遺跡の位置と周辺の遺跡（長崎県遺跡地図に加算）

こうした経過から，複数回にわたって東上遺跡に赴き，新たな認識で礫を注意深く観察した結果，溝状痕のある砥石や錆状付着物のある礫，部分的な赤色化・クラックがある礫など，興味深い石器類を採集することができた。これらは表面採集ではあるものの，鉄器製作に関係している可能性が考えられる資料である。東上遺跡では大形成人用甕棺を含む弥生時代中期～後期の墓地が知られており，北部九州との密接な関係を窺い知ることができる。そうした重要性から本稿では，前半（第一部）で採集遺物の紹介をもとに，鍛冶遺構存在の可能性を検討する。後半（第二部）では西彼杵半島西岸を中心とする先史遺跡の様相を概観し，東上遺跡から出土した遺物にもとづいて北部九州や大村湾との関係を述べ，さらに文献史料を加味して，三重地区特有の歴史的・地理的意義を考察する。

## 第一部　東上遺跡の概要と採集遺物の報告・考察

### １．東上遺跡と周辺の遺跡について

三重地区は長崎市の北西部に位置し，畝刈（あぜかり）を中心とする一帯は新長崎漁港がある地域として有名である。西彼杵半島南西部の五島灘に面する入江の砂丘や台地・丘陵部には先史時代の遺跡が点在しており，東上遺跡もそのひとつである（第１図）。周辺の台地には中尾（なかお）遺跡・尾似田（おにた）遺跡・鬼岩（おにいわ）Ａ～Ｃ遺跡・三重田（みえだ）遺跡・正林寺（しょうりんじ）遺跡・三重（みえ）遺跡などの遺物散布地が知られている。これらの遺跡では黒曜石製剥片などが採集されており，時期的には旧石器（鬼岩Ｃ遺跡）～縄文時代の遺跡と推定されている。しかし発掘調査が実施された例はなく，詳細な実態は不明である（註１）。

上記の諸遺跡については筆者らも現地を訪れたが，すでに遺物包含層は流出している可能性が高く，少量の土器細片が採集されたに過ぎない。こうした資料の貧弱な台地・丘陵上の遺跡に比べ，砂丘上に立地する東上遺跡は遺構や遺物包含層の遺存状態が極めて良好である。三重地区の遺跡のなかでも際立って重要な遺跡と言えよう。

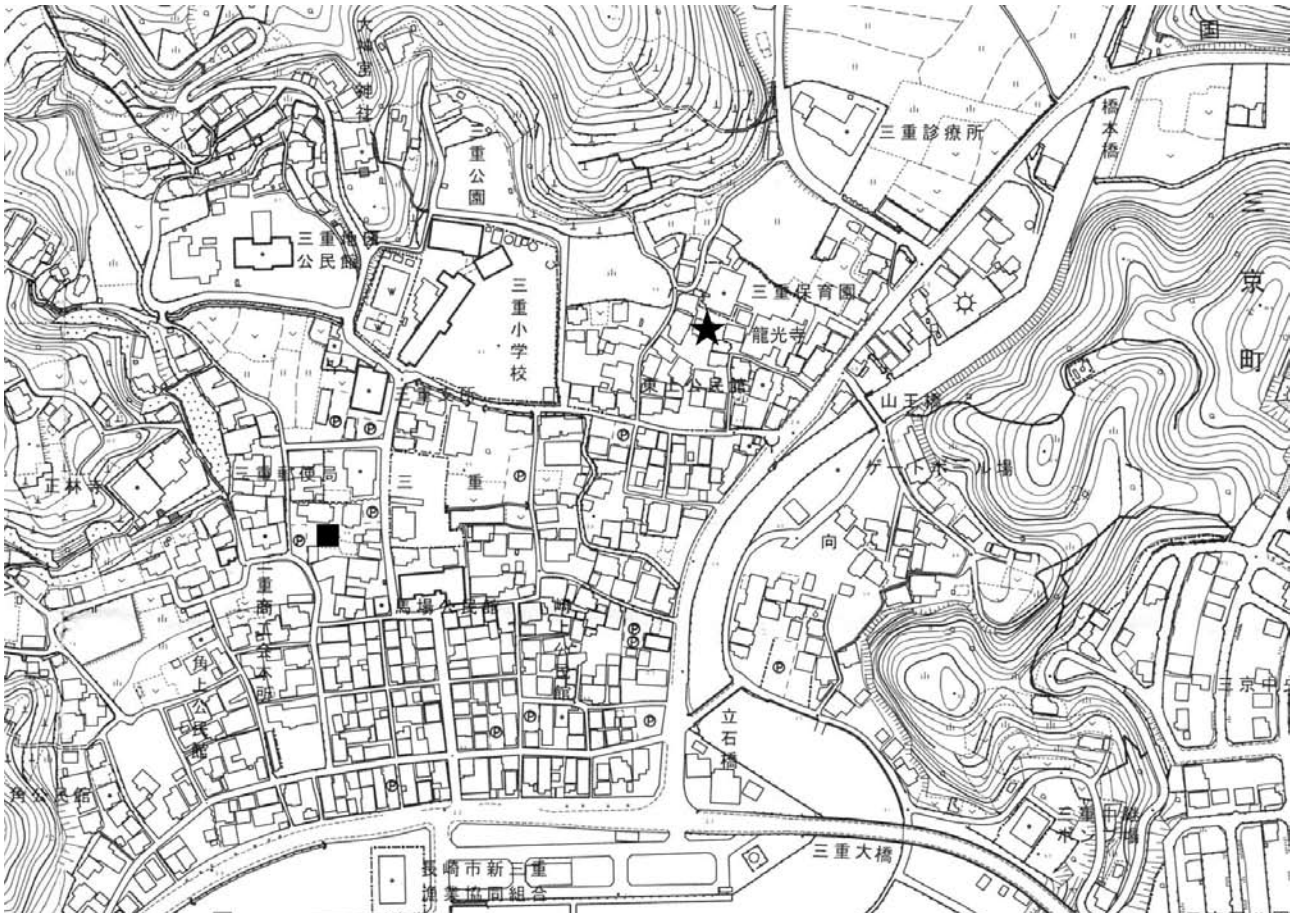
### ２．東上遺跡に関するこれまでの調査・研究

三重地区の考古学的調査は，1967（昭和 42）年４月 14 日に長崎大学調査団によって実施された試掘が最初のようである。『三重村史雑記』（註２）によれば，試掘地点は（当時の西彼杵郡三重村）馬場郷 440 番地の田口和四郎氏所有の畑地（第２図■印・註３）で，表土層の下位が層（Ⅰ），層（Ⅱ）に分層されたという。土層は，

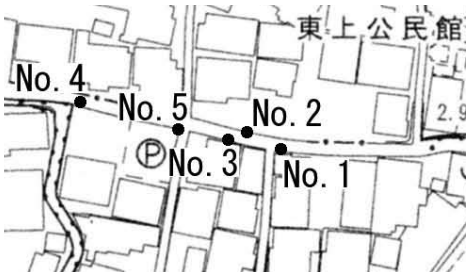
> 層（Ⅰ）：黒色礫土で玄武岩の円礫は 15 ～ 20 ㌢で，まれに結晶片岩の扁平礫を見ることができます。土質は粘性をもち山地からの流出砂の堆積が礫間に流入して混じったものであろうといわれております。
>
> 層（Ⅱ）：黄褐色礫土。Ⅱ層以下に見られますが礫は同じく玄武岩質の円礫でやや小形で５～ 10 ㌢程度です。付近の井戸掘り作業の状態聞き取りにより約４㍍堆積していると考えられ，礫塔（原文ママ）の可能性を考えて以下の発掘が中止になりました。

と記され，各層から少量の土師器（弥生土器？）・須恵器などが発見されているが，攪乱的な様相を呈しており，成果としては芳しいものではなかったようである。なお試掘地点は「馬場郷 440 番地」とされ厳密には「東上郷」ではないが，ほかに該当する遺跡がないため，ここでは便宜的に東上遺跡の一部と見なしている。遺跡名や正確な範囲については，今後に検討すべき課題である。

1972（昭和 47）年夏，筆者は畝刈から三重にかけての地域で分布調査（表面採集と聴き取り調査）を行ったことがある。東上郷における聴き取りでは「水道管敷設工事で人骨が出土した。板石を組み合わせた棺や羽釜のような素焼きの甕もあった」という情報を得たため，周辺の略図を作成し，その内容を記録した（第３図 No.１～ No.5）。




第 2 図　東上遺跡と周辺の地形（★：今回の遺物採集地点　■昭和 42 年の長崎大学による試掘地点）
※長崎市基本図 23・基本図 62 に一部加筆（複製使用承認については【引用・参考文献】の末尾に記載）




No. 1　甕棺（人骨 1 体）
No. 2　箱式石棺（人骨 1 体）
No. 3　箱式石棺（人骨 1 体）
No. 4　標石墓？（人骨 2 体）
No. 5　ヒトの歯のみ出土

第 3 図　1972（昭和 47）年の聴き取り調査結果

1999（平成 11）年 4 月には，長崎市教育委員会文化財課（現・文化観光部文化財課）による下水道管埋設工事の立会調査で，弥生時代の成人用甕棺を含む多数の遺物が採集されている（第二部参照）。

2013（平成 25）年になると，『新長崎市史』第 1 巻（自然編，先史・古代編，中世編）が刊行され，東上遺跡から出土した遺物が一般向けに公開された。さらに 2017（平成 29）年には『長崎市三重地区の郷土誌』（江越ほか 2017）も刊行された。同書における先史時代は，遺跡地図など既存の情報を最大限に活用して述べられているが，『新長崎市史』の記述（宮下 2013）に負うところも大きい。

## ３．遺跡の立地と採集地点の現況

東上遺跡の立地を考えるには『三重村史雑記』における「先史遺跡「三重砂丘」について」の記述が参考になる。長くなるが重要な内容なので以下に引用しておきたい。自然環境の項では，

「三重砂丘は尾似田方面から南行する三重大川の河口西岸に形成されておりまして三重浦に南面します。三重浦海岸には西大瀬，長瀬，トナカなどの浸蝕岩礁がありまして樫山東岸の断崖を洗う潮流は相当に激しく台風時の南風は海砂だけではなく多くの海礫を海浜に運ぶといわれます。三重砂丘はそのような海礫の礫塔（海中の礫が弱い風波によって海浜に運ばれ堆積したものをいいます。－中略－　三重のは玄武岩礫がほとんどでまれに結晶片岩の扁平な礫が混じっております）上に堆積したものと考えられ現在の護岸堤防下にはそれを裏がきすると思われる大礫が砂丘に多く見られます。一方，川口から約千米上流の大川が分岐する附近（通称ひわたし　干渡しか？）から同大川の西岸には自然堤防が見られ鬼岩山麓に至る水田地帯がこれに続いております　－中略－　往時はおそらく入江ではなかったでしょうか。　－中略－　砂丘は右にのべました礫塔上に立地しているとおもわれますが，西端の寺の下付近を基部として大川河口で陸地寄りに北折して立石橋付近を末端としております。」

と記されている。［礫塔］という用語をネットで検索してみたが，該当する用語はなく『大言海』で調べても同様であった。ここでは文脈から，砂礫堆のことを指しているものと判断している。

長崎市の地質図（新長崎市史附図）で確認すると，西側に位置する樫山や西大瀬には玄武岩分布域が見られるが，三重周辺の表層地質は西彼杵変成岩類が多くを占め，北側の山中には玄武岩の分布域は見られない（註４）。そのため三重川上流域からの転礫ではなく，引用した記述にみられるように沿岸流や台風時の強い波浪等によって玄武岩を主とする砂礫堆が形成されていると考えられる。その上部を三重砂丘が覆っており，弥生時代中期～後期の石棺・甕棺が埋置されているわけだが，砂層中には縄文時代以前の遺物は含まれていないようである。従って砂丘は縄文時代晩期以降に形成された可能性が高いものと思われる。

遺物の採集地点は三重町 163 番地の中尾久子氏宅周辺である（第２図★印）。三重保育園の南約 20㍍，1968（昭和 43）年の水道管敷設の際に石棺・甕棺が出土した地点（No.１～５）の道路交差点から北東側約 70㍍に位置し，標高は約５㍍を測る。背後に控える台地の南斜面は墓地となっていて直下は後背湿地の平坦面である。後背湿地は大雨で冠水することもあったというが，採集地点は後背湿地より一段高いため冠水しなかったとのことである。中尾氏宅の南側約 10㍍前の水道管敷設時の観察によれば，地下は砂層で遺物などは出土しなかったという。以上のことから，採集地点付近は砂礫堆のピークにあたり，水はけの良い好条件の立地であったと推測される。

遺物採集地点の現況にも触れておきたい。中尾氏によれば，住宅の東側には戦時中の空襲に備えて防空壕が掘られ，その後，畑地として利用する際に障害になる礫を軒下に寄せ集めたとのことである。

遺物は，そうして集積された礫のなかに混在している。石器は個々の礫を観察しながら抽出したがその在り方には偏在性が感じられた。原位置を離れているとはいえ，本来の遺存状況が一定の範囲内に集中的に存在していたことを示唆しているかのようである。畑の表面には土器片の散布もみられるが，ほとんどが１～２㌢程度の細片で，詳細を知り得ない。

畑の土壌は『三重村史雑記』に記された試掘調査時の層（Ⅰ）:「黒色礫土で玄武岩の円礫は 15～20㌢で，まれに結晶片岩の扁平礫を見ることができます。土質は粘性をもち山地からの流出砂の堆積が礫間に流入して混じったもの…」という説明に近い。ここでは砂層の被覆は見られないようである。

集積されている礫の多くは玄武岩と思われるもので，ほかに結晶片岩・石英の礫も見られる。砂岩

や粘板岩などの堆積岩類はこの周辺では見られないため，他所からの搬入石材を石器として利用している可能性が高い。堆積岩類の入手先としては三重の南方 12 ～ 17 ㌔に位置する伊王島・沖の島・香焼島などが考えられるが，西彼杵半島北側にも堆積岩の分布域があるため，その方面からの入手も考えられる。このほか帯取遺跡で台石として報告されている資料（報告書（柴田 2021a）第 56 図７）に似た，比較的大きな安山岩の板状節理片も見られた。

東上遺跡の南南西 700 ～ 800 ㍍に位置する畦町海岸（第１図◆印，写真６・⑦）には，結晶片岩とともに玄武岩の円礫や亜角礫が見られ，石核状のもの，礫器と思われるもの，削器状のもの，加工痕のある剥片なども含まれている。こうした人為的と思われる痕跡が見られるのは，玄武岩に限定されている（写真６・⑧）。土器が未発見のため時期は特定できないが，剥離面の鋭利なものと摩耗しているものの二者があり，時間差を示唆しているようである。この海岸一帯は玄武岩剥片の獲得を目的とした原産地的な場所であった可能性も考えられる。

## ４．採集遺物

大半は石器である。それも礫石器が主体で剥片石器は少なく，その素材となる黒曜石製や玄武岩製の石核・剥片などは皆無に近い。土器は縄文土器と弥生土器があるが，いずれも数点である。

### (1) 土器（第４図１～４）

**【縄文土器（１・２）】**

１は深鉢形土器の底部片である。内外面とも火膨れや剥落が著しく，文様や調整痕は観察できない。胎土に多量の滑石を混入しており，色調は銀灰色を呈する。類似した特徴は前期の曽畑式，後期前葉の阿高式系にも見られるが，底部形態から曽畑式とは考えられず，阿高式系の胎土は赤褐色を呈するものが多い。ここでは特徴的な色調などから中期後半の春日式あるいは並木式と考えておきたい。

２は外面に単節縄文を回転施文したもので，内面には横位のナデ調整が施されている。胎土には石英粒を含む。中期前半の船元式土器と思われる。

**【弥生土器（３・４）】**

３は外面にハケ目が残るもので甕の胴部片と思われる。４は丹塗土器である。壺の肩部であろう。

### (2) 石器（第４図５～第７図 26）

**【楔形石器（５・６）】**

いずれも長さが２㌢に満たない小形の楔形石器である。５は暗灰色気味の黒色黒曜石製で，平面概形が平行四辺形を呈し，下端の一部に原礫面が残る。６は色調は漆黒色を呈するが，微かに摩耗していて黒曜石特有の光沢が鈍化している。５・６とも側面には楔形石器に特徴的な裁断面が見られる。

**【石器未製品（７）】**

緻密な無班晶質玄武岩の扁平な礫を素材とする。意図的な剥離が施されているが，剥片剥離を目的とした石核とは考えにくいため，ここでは石器未製品としておく。

**【磨製石斧（８）】**

蛇紋岩製の両刃磨製石斧で，横断面はやや扁平な楕円形を呈する。幅：厚さの比は約３：２である。全面を丁寧に研磨しているが，側面には敲打整形の痕跡が残されている。刃部は緩い曲線を描くものと思われ，側縁との交差による明瞭な角は形成されていないようである。これらの特徴は乳棒状石斧に近いが，基部が尖らない点で微妙に異なる。時期的には縄文中期の土器に伴うものであろう。

**【敲打有溝石錘（９）】**

楕円形を呈する玄武岩水磨礫の表裏に，敲打によって１条の溝を施したものである。溝部は全体に

浅いが，幅は 10 ～ 15 ㍉程度でバラツキがある。正面側の溝部が素材の長軸とほぼ平行しているのに対し，裏面側の溝は斜交している。正面の右肩部には被熱により赤色化した平坦面があり，磨石的に使用された可能性がある。長軸の上端には溝状痕のような細い直線状の痕跡が多数残されており，下端は敲打痕らしきアバタ状の凹凸を呈する。正面左下端部と裏面側の一部にはタール状の黒色付着物が認められる（写真４左上）。

【砥石（10 ～ 16）】

10・11 は粘板岩製の小片で，砥石と考えられる資料である。採集資料は２点のみで，いずれも厚さが異なることから別個体と思われる。類似する「石盤」との比較については後述する。

12 は粒子の粗い砂岩製で正面に内湾する曲面があるほか，平行する溝状痕が観察される。右側面は緩やかに外湾する曲面で，部分的に暗褐色を呈する。同様の変色は正面の曲面にも見られる。

13 は小形の扁平な玄武岩礫を素材とする砥石で，両面の各所に溝状痕が観察される。溝状痕は細く長いもの，ごく短いもの，先細り状を呈するもの，浅く幅広のものなど多様である。

14 も玄武岩製で，小形水磨礫の一部に比較的短い溝状痕が見られるものである。正面の左斜下側は色調が異なり礫面より滑らかであることから，磨石として利用されている可能性がある。

15 は細長い棒状水磨礫を素材とする砥石である。横断面形は台形に近く，各面に溝状痕が残されているほか，極めて細い線状痕も観察される。裏面側の右方には鉄と思われる錆状の付着物（以下「鉄」とする）が見られる。手頃な形状だが，敲打痕など敲石としての使用痕跡は認められない。

16 は玄武岩の扁平な水磨礫を素材とする砥石である。両面に溝状痕があり黒色付着物も見られる。正面には礫面を鋭利な金属器で刮ぎ取ったような幅 7 ～ 11 ㍉，長さは 15 ～ 22 ㍉程度の痕跡が数カ所に見られる（写真２左上）。この痕跡の内部には長軸に平行する線状痕が観察され，端部の一方は礫面との間にわずかな段差を生じている。黒色付着物は,部分的に刮ぎ痕により失われていていることから，刮ぎ作業の前の段階で付着していたことがわかる（写真３下右）。この黒色付着物は外見上は 19・20・24・25 に見られる付着物と酷似するもので，同様の作業の結果として生じている可能性が高いものと思われる。

【敲石 (17 ～ 20)】

17 は葉理面で破断した砂岩の板状水磨礫を素材とする敲石・砥石である。裏面には交差する溝状痕が見られ，内部に錆状付着物が観察される。下端部には敲石として使用された際の敲打痕が見られる。自然面側にも錆色の部分が見られるが，錆状付着物かは判然とせず，自然現象の可能性もある。

18 は安山岩と思われる扁平な水磨礫を素材とする敲石である。正面下端には小剥離痕が，裏面側には大きな剥離面（破断？）面があり，稜線部は潰れている。裏面には溝状痕が見られ，砥石としても利用されたことを示している。

19 は全体に風化の進んだ方柱状水磨礫を素材とする。裏面上端の黒色を呈する小さな剥離面と周辺の礫面，および下端側の礫面に黒色付着物が認められる（写真４中段右）。正面側の大きな剥離面は，人為的な加撃によるものと思われるが，黒色の剥離面とはパティナが異なっており，古い時期に生じている可能性が高い。この剥離面末端の上位には近接する２カ所に「鉄」の付着が認められる。

20 も 19 と同様の玄武岩製敲石である。下端の両面は剥離面だが，稜線部は潰れていない。隣接する右側縁は被熱により黒色化しており（写真４上段），裏面中央やや左側には 16・19・24・25 と酷似する黒色付着物が見られる（写真４上段右）。

【被熱痕のある礫 (21 ～ 25)】

21 は玄武岩製で正面左側に熱破砕を生じており，クラックが走っている。下半分には境界が明瞭な赤色化部分が見られるほか，敲石としても使用された可能性がある。

22 は隅丸方形を呈する玄武岩の扁平な水磨礫で，両面の平坦部が赤色化している。周縁の一部にも同様の変色が見られ，クラックの発達が著しい。

23 は一部が張り出した形状の小形円礫で，正面側の長軸端部が赤色化している。赤色化の範囲は境界が明瞭ではないが，皮膜状の付着物に覆われているように見える（写真４下段）。

24 は正面中央の赤色化が顕著な資料で，溝状痕も見られるが被熱との先後関係は判然としない。裏面下端の一部と左側面には微細なフジツボ状の黒色付着物が認められ，左側面には「鉄」（鉄片状の付着物？）が見られる（写真４下段左）。

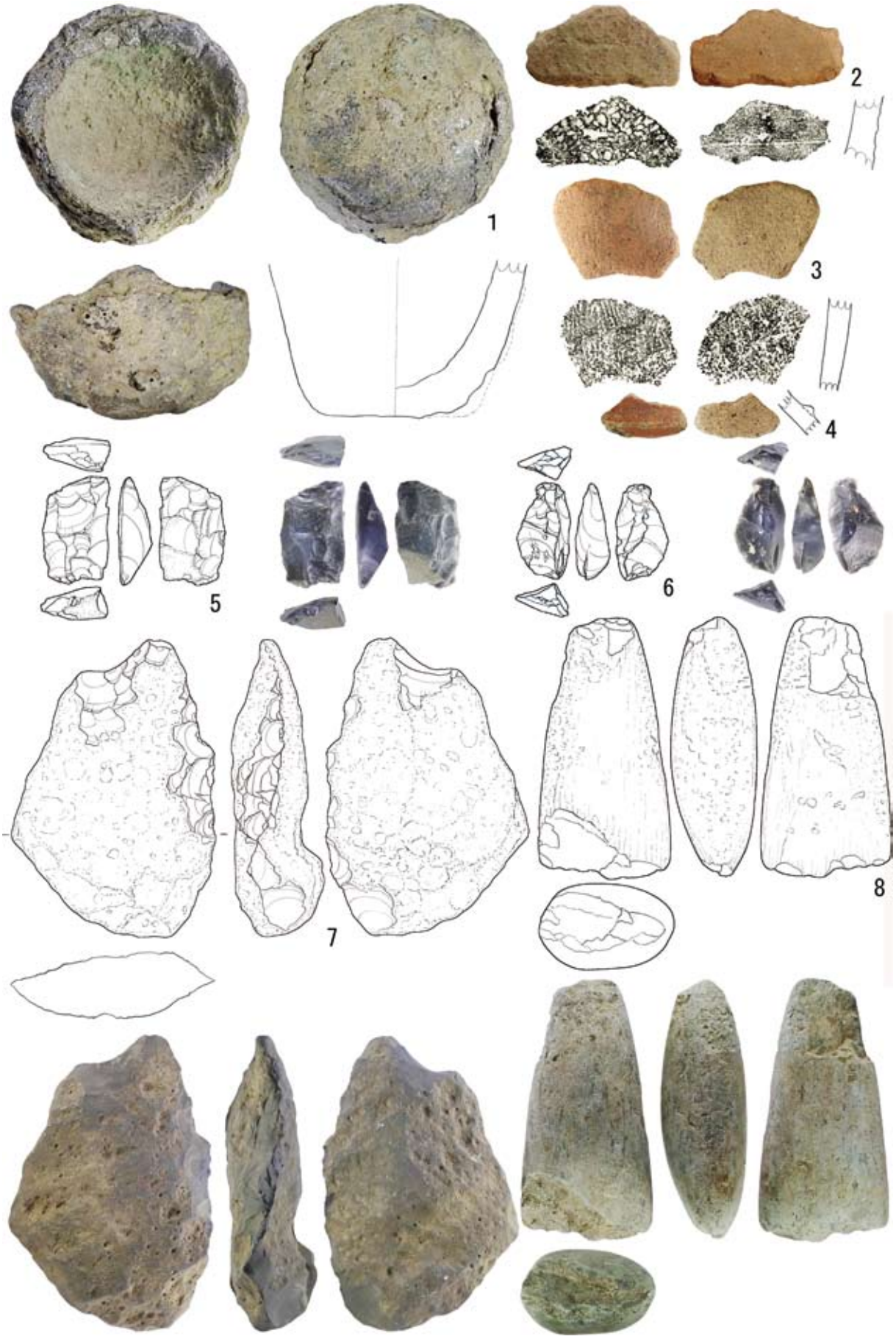
25 も玄武岩の小形円礫で，下側には 24 のように境界の明瞭な円形の赤色化部分がある。この赤色化した範囲を中心にクラックを生じており，周辺には黒色の付着物が見られる（写真４下段右）。

**【台石（26）】**

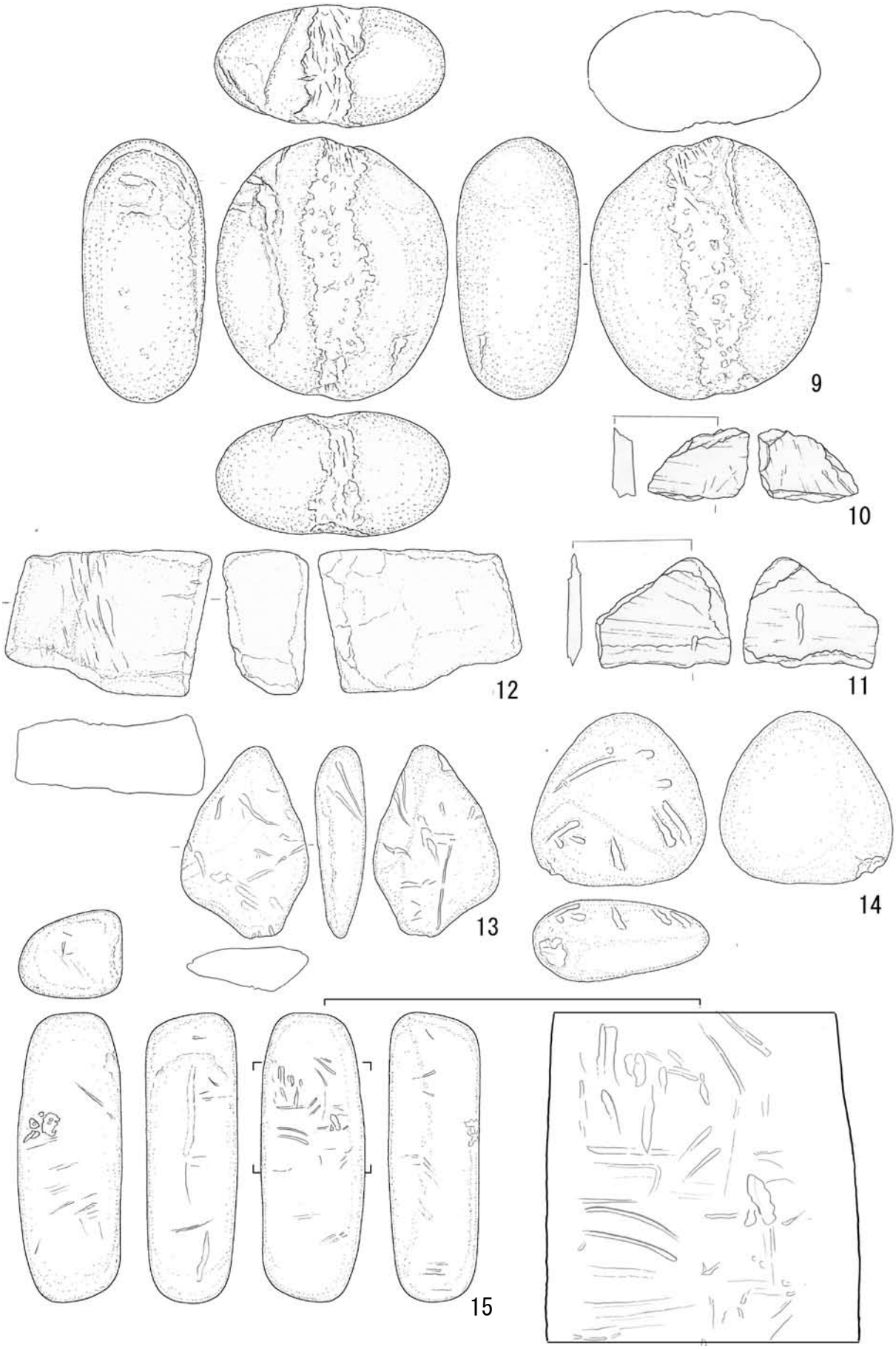
厚みのある長方形の玄武岩水磨礫を素材とする台石である。正面は平坦で，裏面は緩やかに傾斜し石皿状を呈するが，滑面ではない。正面側の右上隅と裏面側の上端部左右および下端は被熱によって破断しており，クラックが走っている。破断面を含む全体が赤色化していて，被熱が複数回におよぶことを示している。破断面に見られる赤色化は厚さ１～３㍉を測る。正面右側面下半のように端部が摩耗し，白色化している部分も見られる（第７図下左）。台石としての表面側には凹状の被敲打痕のほか幅 10 数㍉程度の直線的なダメージ（鏨（たがね）によるものか？）が平行して残されている（第７図下右）。

**表１　石器計測表**

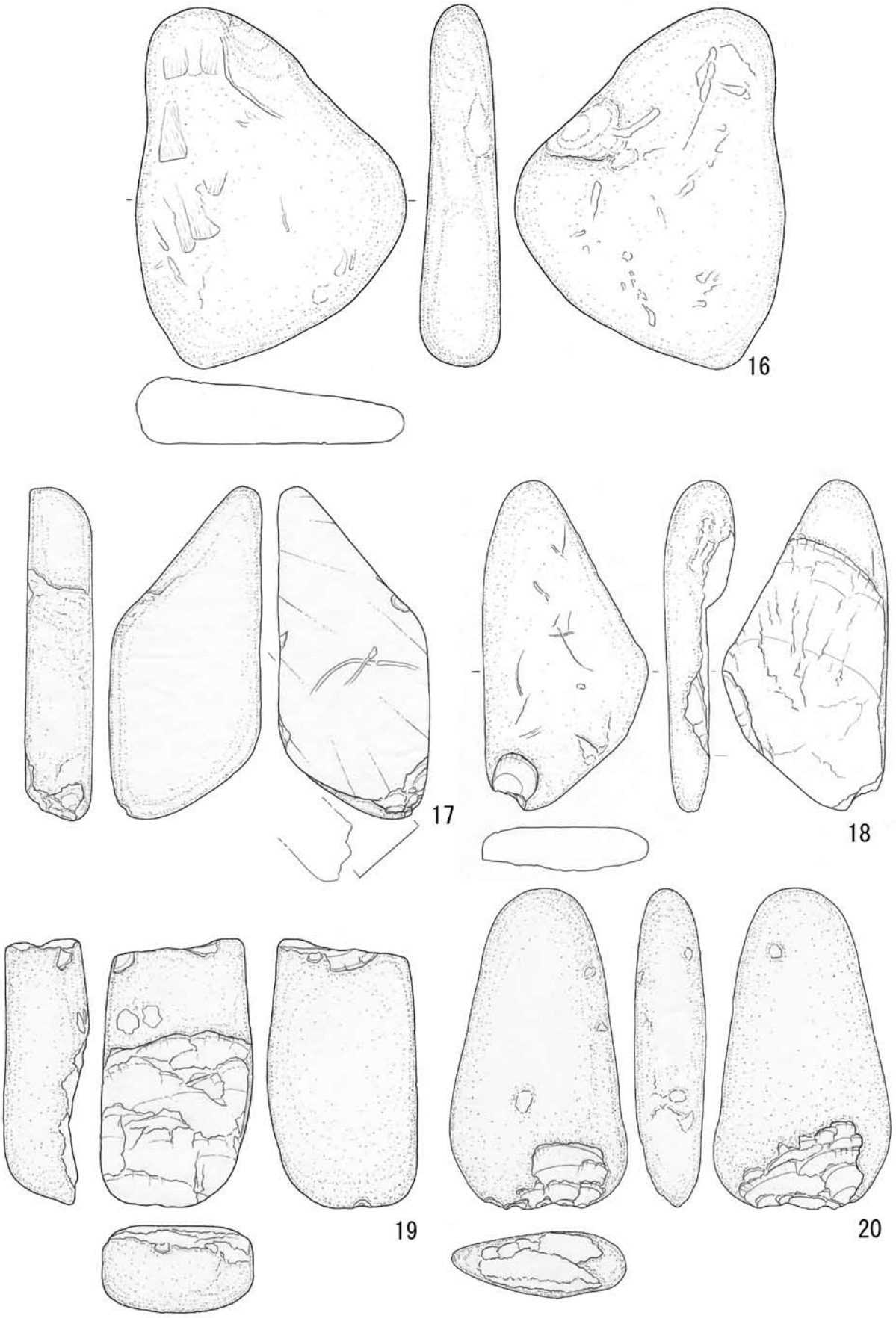
| 番　号 | 器　種 | 石　材 | 長さ（㎜） | 幅（㎜） | 厚さ（㎜） | 重量（ｇ） | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第４図５ | 楔形石器 | 黒色黒曜石 | 18.0 | 10.0 | 6.0 | 1.0 | 側面に裁断面あり。下端の一部に自然面を残す。 |
| 第４図６ | 楔形石器 | 黒色黒曜石 | 20.0 | 12.0 | 6.0 | 1.5 | 側面に裁断面あり。全体が微かに摩耗している。 |
| 第４図７ | 石器未製品 | 無斑晶質玄武岩 | 108.0 | 73.0 | 33.0 | 224.5 | 原礫面は凹凸が多いが，内部は黒色で緻密。 |
| 第４図８ | 両刃磨製石斧 | 蛇紋岩 | 94.0 | 48.0 | 31.0 | 176.5 | 刃部欠失。裏面の基部付近に長軸に直交する短い溝状痕がある。 |
| 第５図９ | 敲打有溝石錘 | 玄武岩 | 95.0 | 83.0 | 44.0 | 479.0 | 長軸の端部に溝条痕があり，全体に被熱による赤色化。タール状の付着物がある。 |
| 第５図10 | 砥石 | 粘板岩 | 13.0 | 18.0 | 3.5 | 1.0 | 帯取遺跡出土例との比較から砥石と認定。 |
| 第５図11 | 砥石 | 粘板岩 | 20.0 | 24.0 | 2.5 | 1.8 | 帯取遺跡出土例との比較から砥石と認定。 |
| 第５図12 | 砥石 | 砂岩 | 53.0 | 75.0 | 31.0 | 147.0 | 縄文時代の磨製石斧研磨用と思われる曲面（砥面）を切る形で多数の細長い溝状痕がある。 |
| 第５図13 | 砥石 | 玄武岩 | 69.0 | 46.0 | 18.0 | 58.0 | 両面に多様な溝状痕がある。 |
| 第５図14 | 砥石 | 玄武岩 | 61.0 | 61.0 | 30.0 | 141.5 | 正面側の数カ所にやや幅広で短い溝状痕がある。 |
| 第５図15 | 砥石 | 安山岩？ | 104.0 | 38.0 | 32.0 | 215.0 | 角柱状棒状礫の４面に溝状痕・線条痕が，一部に「鉄」の付着が見られる。 |
| 第６図16 | 砥石 | 玄武岩 | 128.0 | 96.0 | 29.0 | 476.0 | 扁平な水磨礫の両面に溝状痕があり，黒色付着物を切る形で金属器によると思われる刮ぎ痕がある， |
| 第６図17 | 敲石・砥石 | 砂岩 | 119.0 | 54.0 | 24.0 | 237.5 | 下端に潰れが見られ，裏面（葉裏面）の溝状痕の内部に錆状付着物が見られる。 |
| 第６図18 | 敲石・砥石 | 安山岩？ | 118.0 | 59.0 | 25.0 | 150.0 | 正面の礫面に溝状痕，下端に小さな剥離痕があり，裏面は下からの衝撃で大きく破断している |
| 第６図19 | 敲石？ | 玄武岩 | 95.0 | 53.0 | 32.0 | 270.5 | 正面下端の原礫面と上端側の小剥離面周辺に黒色付着物があり，「鉄」の付着も見られる。 |
| 第６図20 | 敲石 | 玄武岩 | 114.0 | 63.0 | 25.0 | 235.5 | 下側の両面に剥離痕，裏面側上半部に黒色付着物，右側縁下部に黒色化が見られる。 |
| 第７図21 | 敲石？（被熱礫） | 玄武岩 | 57.0 | 63.0 | 30.0 | 144.0 | 被熱による変色（赤色化）とクラックが見られ，一部に敲打痕が見られる。 |
| 第７図22 | 被熱礫 | 玄武岩 | 106.0 | 70.0 | 31.0 | 267.0 | 小判形を呈する扁平礫の表裏平坦部に，被熱による変色（赤色化）が見られ，クラックも多い。 |
| 第７図23 | 被熱礫 | 玄武岩 | 44.0 | 28.0 | 11.0 | 20.0 | 扁平な小形礫の突出部周辺に被熱による変色（赤色化）と皮膜状の付着物が見られる。 |
| 第７図24 | 被熱礫 | 玄武岩 | 26.0 | 53.0 | 21.0 | 35.0 | 正面中央に楕円形の赤色化が見られ，裏面左端とその周辺に黒色付着物と「鉄」が見られる。 |
| 第７図25 | 被熱礫 | 玄武岩 | 38.0 | 24.0 | 17.0 | 23.5 | 小形円礫の正面下半に比熱による変色（赤色化）とクラックが見られ，周囲に黒色付着物がある。 |
| 第７図26 | 台石 | 玄武岩 | 132.0 | 102.0 | 53.0 | 903.0 | 全体に被熱による赤色化と熱破砕が見られ，正面側には鏨状の工具によると思われる直線的なダメージが見られる。 |



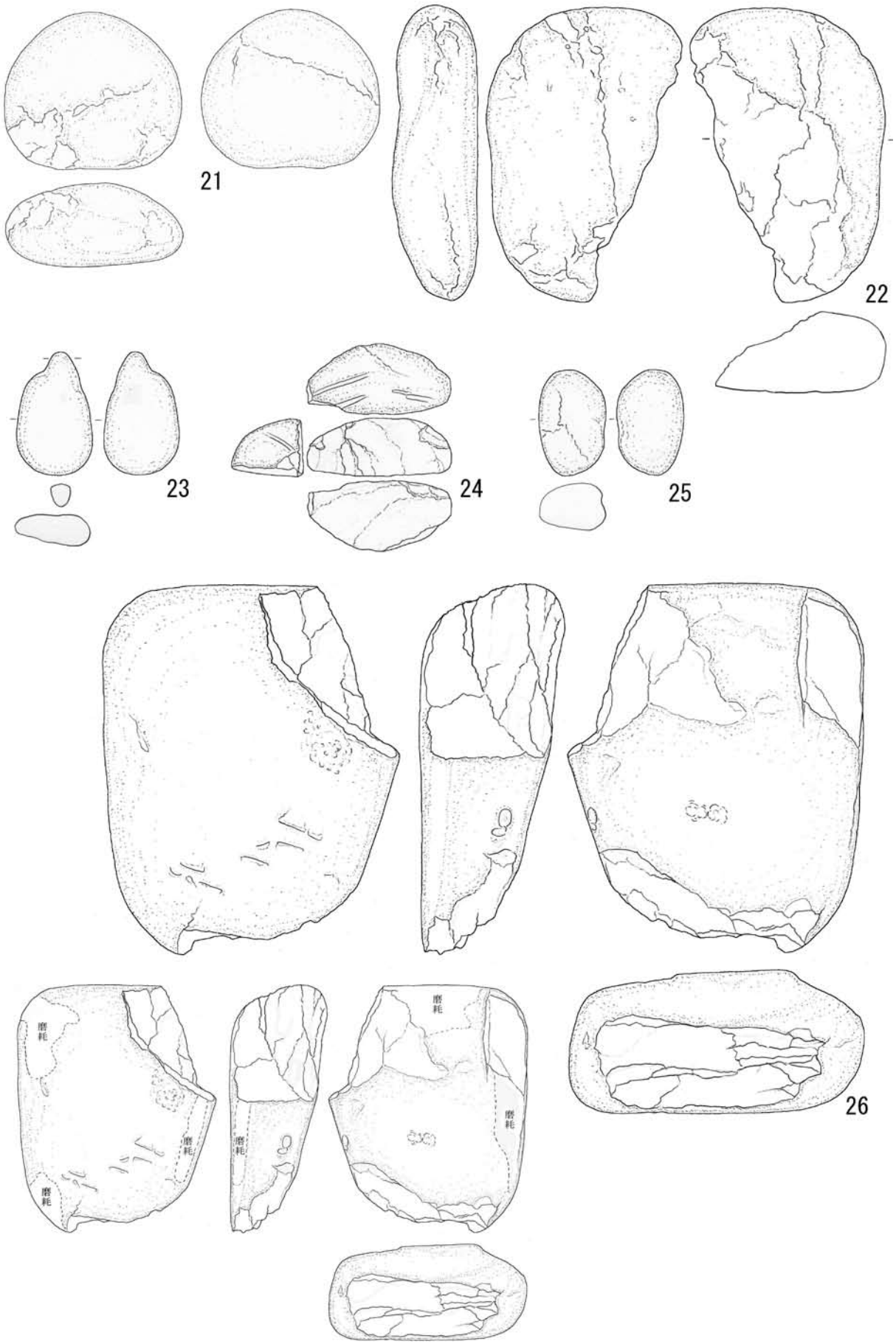

第４図　遺物実測図①　S=1/2（5・6は1/1）




第５図　遺物実測図②　S=1/2（10・11 は 1/1）




第６図　遺物実測図③　S=1/2




第７図　遺物実測図④　S=1/2（26 の縮小図（摩耗範囲）は 1/3）

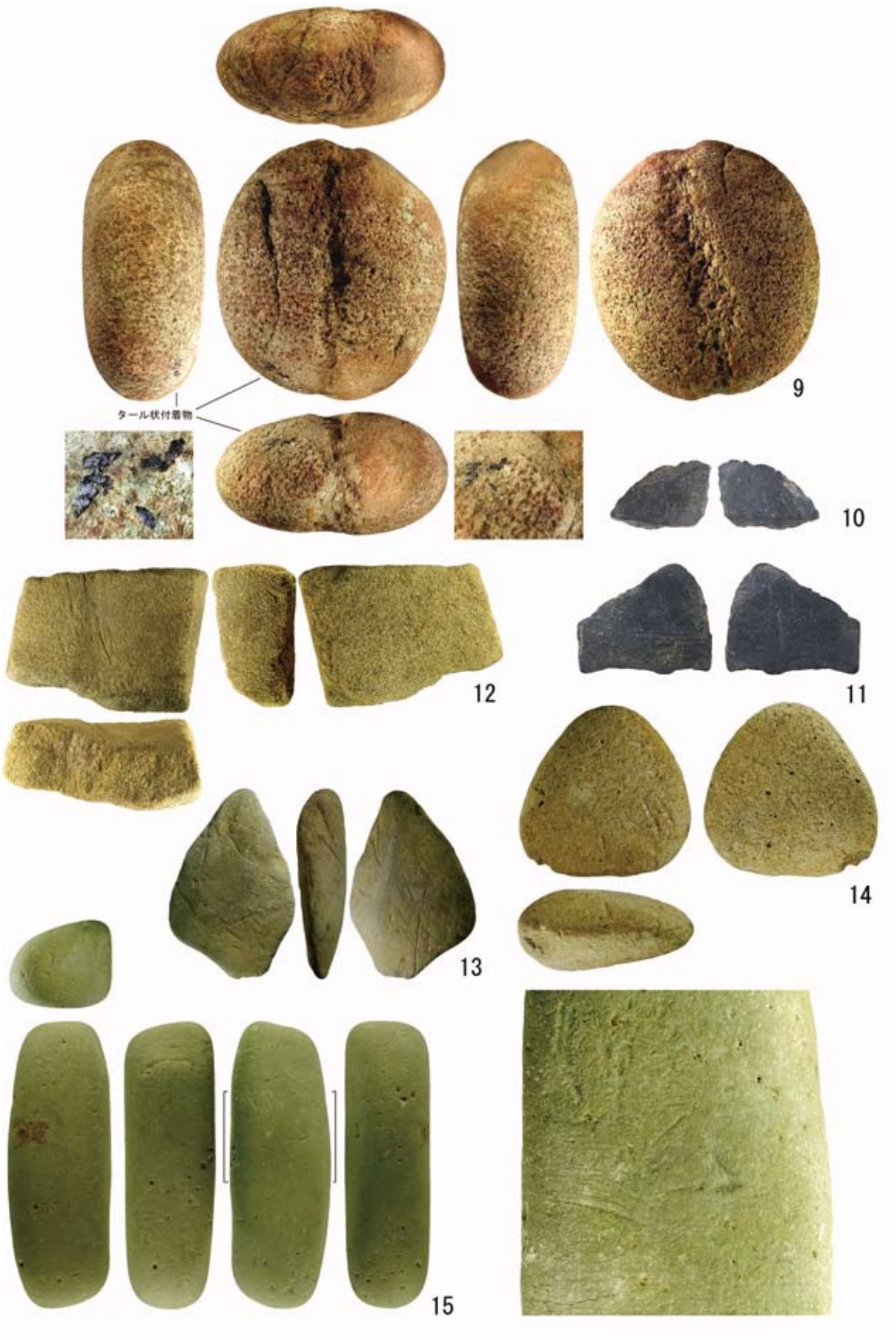



写真 1

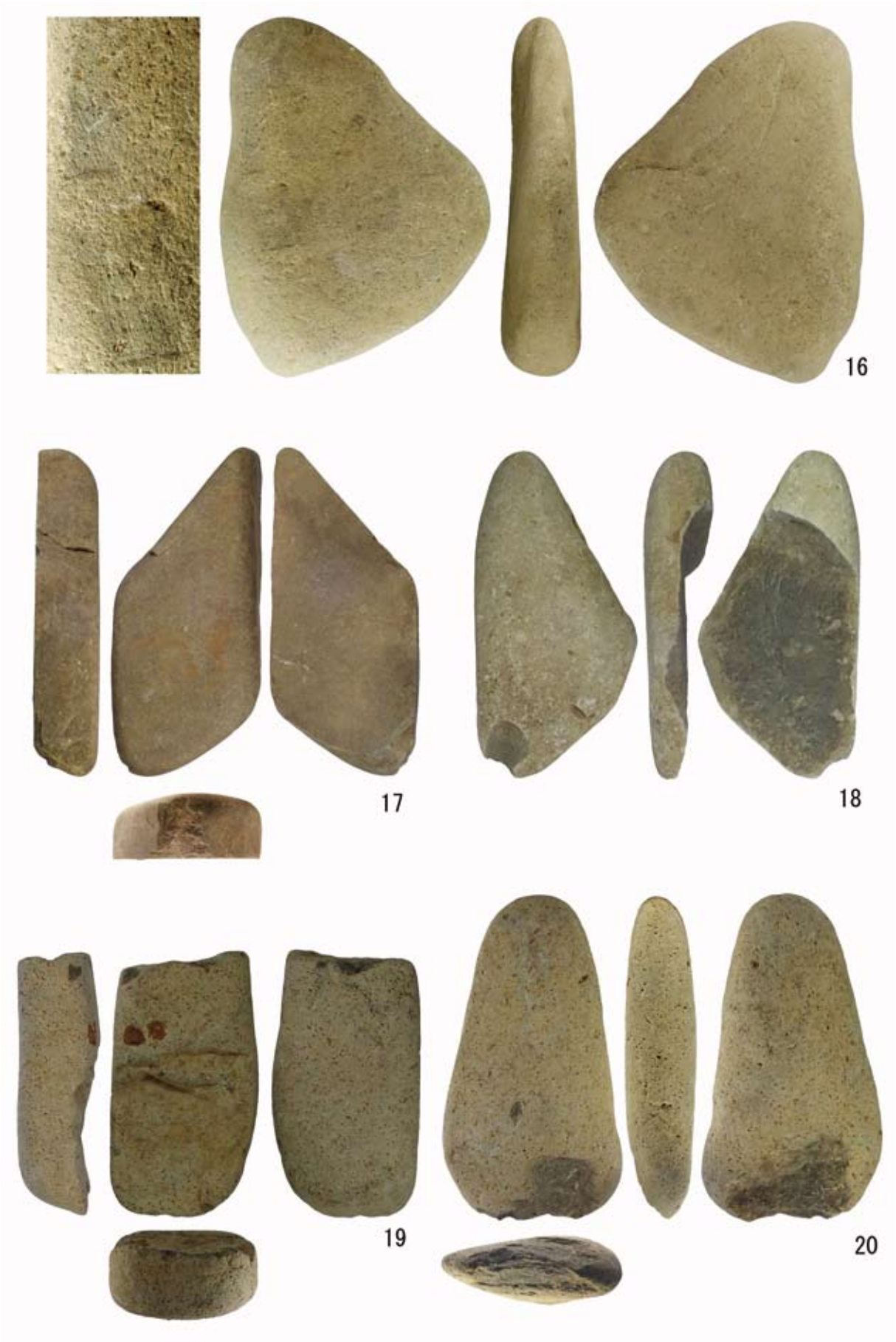



写真 2

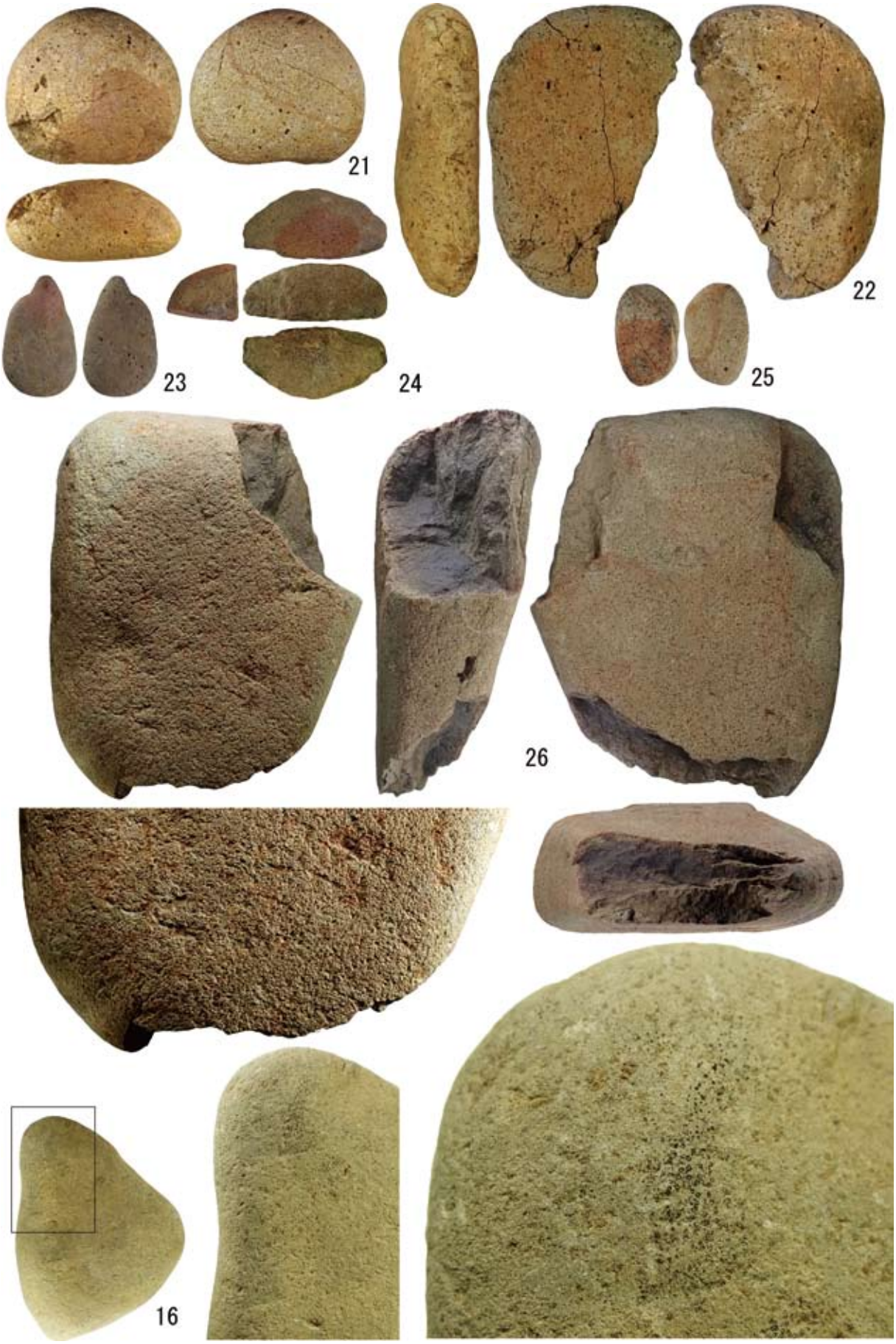



写真 3

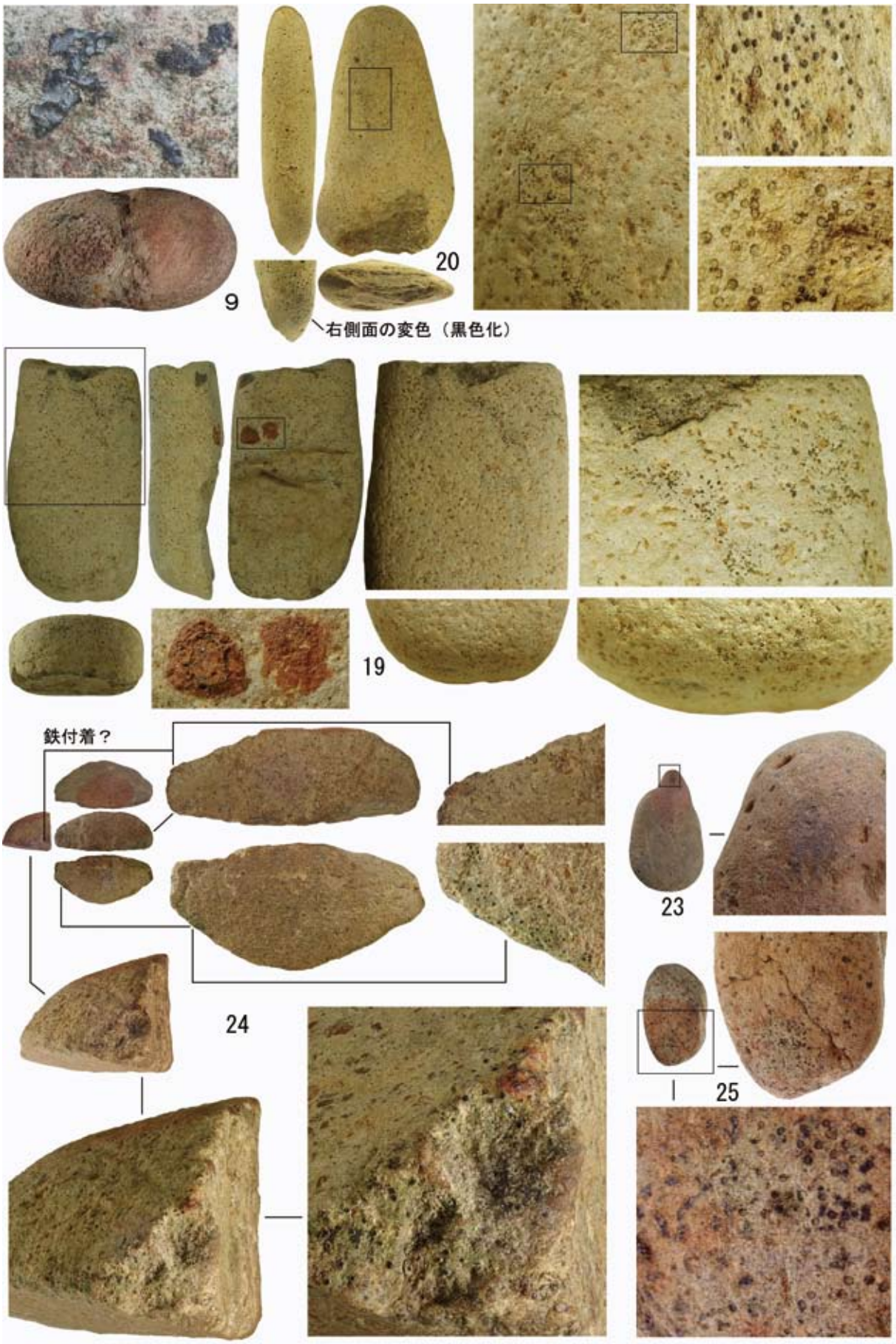


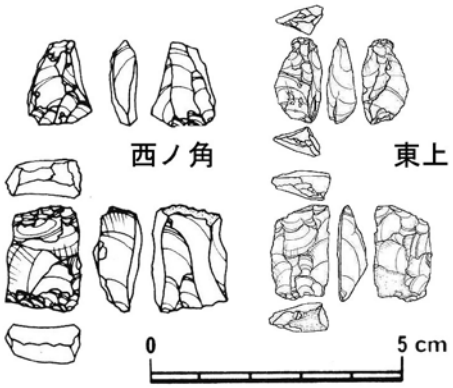

写真 4

## ５．遺物の検討

採集した遺物には，様々な特徴を見いだすことができる。それは形態的・技術的な面に留まらず，被熱痕や付着物などについても同様である。以下，それらの特徴について述べておきたい。

**（1）楔形石器について**　時期特定は困難だが，弥生時代にも存在することが知られている。県内で最初にそのことに言及したのは福田一志氏で，弥生中期中葉～古墳時代初頭を主体とする諫早市西ノ角（にしのすみ）遺跡の出土例(福田 1985)がそうである。

報告書では楔形石器について「５点出土しており，すべて漆黒色黒曜石を使用している。－中略－　弥生時代の楔形石器については，九州では筆者の管見にふれるところでは，現在のところ出土報告はなされていない。これは出土していないというよりも，弥生時代における石器の認識の在り方からくるものであろうと思われる。」と述べている。採集資料も黒色黒曜石製で石材・サイズ・形態など西ノ角遺跡例の一部に酷似している（第８図)。この類似性だけから東上遺跡の楔形石器を弥生時代の所産と断じることはできないが，両遺跡は時期的にも近接しており，興味深いものがある。



**第８図　東上遺跡（右）と西ノ角遺跡（左）の楔形石器**

**(2) 砥石について**　第５図 12 の砂岩製砥石は曲面と複数の細長い溝状痕が見られるもので，曲面は磨製石斧の研磨に用いられていた可能性がある。『石器の生産・消費から見た弥生社会』（森 2018）によれば，溝状痕とは「砥面に認められる，幅 2㎜ 以下で横断面形がＶ字状あるいはレ字状を呈する痕跡である。検証はされていないが鉄器を仕上げる際，刃先が接触することにより生じた痕跡と考えられている（略)。」とされるものである。長崎県佐賀（さか）貝塚（縄文時代後期中葉）から出土した 11 点の不定形砥石は緩やかな曲面を有し，磨製石斧の研磨に使用されたと考えられるが，溝状痕は認められない，とも述べられており，溝状痕が弥生時代以降の鉄器の研磨などで生じている可能性が高いことを示している。敲打有溝石錘（第５図９）の長軸端に見られる溝状痕も，同様の使用痕と考えられる。

８～18・24 には様々な長さ・幅・形状の溝状痕や線状痕などが観察される。17 のように溝状痕のなかに錆状付着物が残る例もあり，バリ取り・鉄器の研磨の結果として生じた可能性を示唆している。砥石の石材は玄武岩のほか，砂岩・粘板岩などの堆積岩も見られる。また蛇紋岩製の磨製石斧（第４図８）の裏側基部付近にも溝状痕が残されていて，石材選択の多様性を示している。

**(3) 粘板岩製砥石について**　この認定には微妙な問題がある。明治時代～昭和初期にかけての学校教育で現代のノートのように使われた「石盤」（註５）を誤認している可能性があるからである。

まず現存する完形品と遺跡で採集された破片から，石盤の特徴を確認しておきたい。写真５左は横 225 ×縦 152 ㍉，厚さ約２㍉である。全体が光沢を発するほど滑らかなのは頻回使用の結果であろう。写真５中央は木枠付きの石盤で，外寸：横 249 ×縦 174 ㍉，内寸；横 217 ×縦 144 ㍉，木枠の幅 15 ～ 16 ㍉・厚さ 11 ㍉を測る。石盤には他にも算盤付きなどのバリエーションがあるが，粘板岩自体は類似したサイズのようである。盤面や側面には，機械加工時の痕跡と思われる条痕を残している場合が多い。写真５右は竹松遺跡の採集資料で，面取された部分に機械加工時の痕跡がみられる。右下の表裏には格子状の線刻がある。こうした線や数字・文字が刻まれているのも石盤の特徴のひとつである。

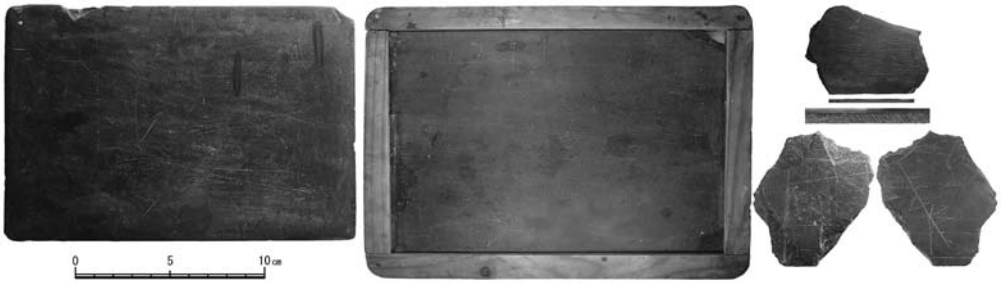



**写真５　左：磨耗による光沢のある石盤、中：木枠付きの石盤**
**右：竹松遺跡採集の石盤片（右上の側面は機械による加工痕がある）**

石盤は薄い粘板岩製のため，廃棄後は多数の小片・細片になっていることが多い。表面採集の経験では，１～２点の小片しか発見されない，というのは通常，考えにくいことである。

上記を踏まえた上で，改めて粘板岩製砥石を見ておきたい。いずれも扁平な粘板岩製の小片である。周囲は破断していて直線的な縁辺（面取り）はなく，機械による加工痕も認められない。11 の裏面には線状痕が見られるが，機械的なものではないようで，線刻はなくポリッシュも生じていない。この所見は帯取遺跡出土の粘板岩製砥石と共通するものである。さらに 10 の厚さが４㍉弱であるのに対し，11 の厚さは 2.5 ㍉程しかなく，それぞれが別個体と思われる点も石盤の可能性に否定的である。

帯取遺跡の粘板岩製砥石は，４基の鍛錬鍛冶炉を伴う竪穴建物跡（TJ1）から出土しており，鉄器の研磨に用いられた砥石である可能性が高い。東上遺跡の採集資料には状況的な担保はないが，帯取例に酷似しているため，同様の砥石と判断している。なお帯取遺跡・東上遺跡とも，さほど遠くない距離に古第三紀の露頭は存在するが，そこが粘板岩の産地であるかについては確認していない。

**(4) 敲石について**　敲石の多くは長さ 10cm 内外で，いずれも縦長で扁平な水磨礫を素材としている。形態的・サイズ的な共通性はあるが，使用痕跡は破断・剥離・潰れなど多様で，「鉄」らしき付着物や黒色付着物が見られることも大きな特徴である。カラカミ遺跡の報告書では「敲石は玄武岩の円礫を素材とするものが多いが，棒状・板状のものも認められる。－中略－　棒状・板状敲石は自然礫の端部を利用し，被熱が認められるものも存在する。基本的に素材形状を残すものが多い。」（森 2011）と述べられており，東上遺跡採集の敲石に共通する点が多い。

**(5) 台石について**　全体的に赤色化しているが，端部は摩耗して赤色部が失われ，白色化している部分がある。前掲報告書では「台石の端部が摩耗しているものが多いが，これは先述した棒状敲石と組み合わさって鉄器の鍛延，折り曲げ作業が行われた結果，稜が丸みを帯びたものと考えられる。」（森 2011）という興味深い見解が示されている。26 では明確な「鉄」の付着は確認できないが，正面側に見られる直線的な痕跡は鏨を用いた作業の可能性を示唆しているようであり，また端部の摩耗もカラカミ遺跡の台石と同様に，鉄器加工時の痕跡である可能性を考えておきたい。

**(6) 被熱痕跡について**　変色（黒色化・赤色化），クラック，熱破砕（破断）など一般的に被熱痕と理解されているものである。赤色化している範囲は境界が明瞭であることが多く，高温の熱源との接触が限定的であった可能性を示しているように思われる。クラックも変色部に見られることが多いことから，ヒートショックによるものと思われる。被熱痕跡は 23・25 のような長さ５㌢にも満たない小礫にも見られる。23 は端部が丸みを帯びて突出した小円礫で，変色の範囲が不明瞭ではあるものの突

出部分の片側が赤色化している。23 と類似した大きさ・形状で被熱部位が共通する小礫は帯取遺跡でも出土している（報告書の第 54 図４）。両者は類似した機能・用途を示唆している可能性があり，注意しておきたい。25 は 23 より小さな礫だが，正面の下半に範囲の明瞭な赤色化とクラックが見られ，黒色付着物が観察される。これも 23 と同様の用途で熱源と接触した可能性を示しているようである。

**（7）付着物について**　付着物は「鉄」と思われるものと黒色付着物の二種に大別される。「鉄」には肉眼で識別できる大きさのもの（15・19・24），ルーペで識別できる程度の微粒状のもの（24），溝条痕のなかに見られる錆状付着物（17）などがある。

黒色付着物の典型例は９の敲打有溝石錘に残るもので，タール状を呈し冷却時に生じたと思われる微細なクラックやアバタ状の窪みがある。このタール状付着物の上にも形状の不明瞭な黒色のものが付着しているように見える（写真４左上）。

このほか砥石の一部（16），敲石の一部（19・20），被熱痕のある小礫（24・25）にはごく細かな付着物がある（写真３～４）。詳細に観察すると点状，馬蹄形を含むリング状，フジツボ状の部分があり，微粒化した液体の飛沫が付着したものと思われるが，分析を経ていないため詳細には言及できない。付着物の正確な大きさは測定できないが，概ね 0.2 ㍉（点状）～ 0.4 ㍉（リング状）程度と思われる。

20 は側縁の下部に被熱痕（黒色化）がある敲石で，裏面に黒色付着物が残っている。上位側の付着物は小さな点状が多く，下位側ではより大きなリング状の付着物が多い（写真４右上）。これは敲石下端を機能部と仮定した場合，より遠く（上位側）に細かい飛沫が，近く（下位側）に大きな飛沫が付着していることになり，この敲石を用いた動作を推定する手がかりになる可能性がある。

**（8）敲打有溝石錘について**　器種名を「石錘」としたが，被熱痕・溝状痕・タール状付着物などの使用痕から推測されることは，一般的に考えられる石錘の用途とは大きく懸絶している。長軸と直交する形で幅広・帯状に色調が異なって見える点も，着柄しての使用を想起させるものである。「鍛冶に関係した石器ではないか？」との指摘から，新潟大学の森貴教先生に画像を見ていただいたところ「その可能性は十分ある」との回答で，「ジャワ・スマトラ島に住むサラワク族の鍛冶」の民族例に「蔓で固定した石槌」（村上 1998）があることを御教示いただいた。

この石器が当初から石槌として製作されたものならば，それは石錘ではなく敲石であり，砥石・磨石との兼用品ということになる。だが先の民族例のように石器の長軸に直交する着柄を想定した場合，溝は短軸方向に施した方が合理的であろうし，杵のような上下方向の直線運動を考えれば長軸と平行する着柄もありえようが，表裏の溝が斜交していることは，合理性を欠いているように思える。

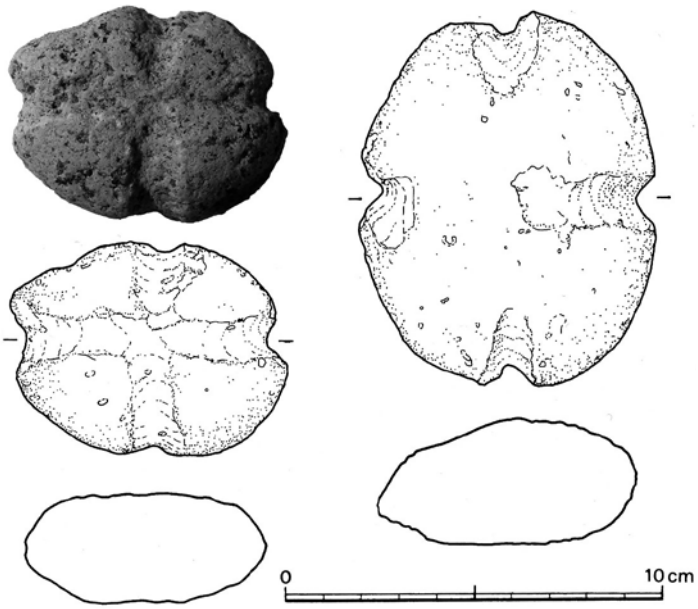
以上の理由から当該石器は，本来「石錘」として製作された後，別の用途に転用されたものと考えておきたい。石錘は海岸部に立地する遺跡が多い長崎県にあって普遍的な存在だが，その多くは素材礫に撃打の抉入部を施した打ち欠き石錘で，敲打による有溝石錘は，あまり例を見ないものである。本例は，東上周辺で入手が容易な玄武岩礫を素材としており，当地において製作された可能性が高いと考えられるが，「敲打」の系譜については，どのように理解すれば良いのであろうか。

163 点の石錘が出土した諫早市伊木力（いきりき）遺跡（多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編　1990）では重量が 1kg 以上のものを大型石錘，未満のものを礫石錘に大別し（宝珍 1990），さらに大型石錘は「A 類　主に扁平な楕円礫の短軸の両端ないしは１端に抉りを有するもの」と「B 類　主に厚手の楕円礫の短軸に敲打などによって溝をめぐらすもの」に分類されているが，A 類にも稜線を敲打によって潰しているものがあるなど，必ずしも敲打の有無が絶対的な基準になっているわけではない。数量的には A

類の 101 点に対しＢ類は９点と少ないが，これは製作時の手間や難易度に起因する比率であろう。

1kg 未満の礫石錘は 53 点で，１類～４類に細分されている。このうち１類～３類は抉入部位の差異による分類で，いずれも扁平な楕円礫に撃打を施す点では共通している。４類は「おもに厚手の楕円礫の短軸に敲打による溝をめぐらす」もので 53 点中３点が該当し，２点がⅦ層（曽畑式土器単純層），１点がＶａ層からの出土である。礫石錘でも敲打によるものは少ない（約 5.7 パーセント）ことがわかる。大型石錘のＢ類も層位不明を除く全てがⅦ層・Ⅶ’層からの出土とされる。敲打による石錘が縄文前期から見られることは確実だが，撃打での抉入加工が難しい厚手の礫を対象とする場合など，限定的に適用された技法と考えられる。

大村市の黒丸（くろまる）遺跡（町田編 1996）でも有溝石錘が出土している。第９図はⅢ－８区出土の安山岩製の有溝石錘である。左は長さ 73 ミリ，幅 35 ミリ，厚さ 19 ミリ，重量 147 グラムを測る。写真は実測図との対比のために後に追加したものである。右は長さ 100 ミリ，幅 80 ミリ，厚さ 34 ミリ，重量 315 グラムで，長軸・短軸の両端の撃打後，敲打を施しているようである。いずれも弥生前期後半から中期前半の土器に伴っている。このほか敲打による有溝石錘はⅢ－５区，Ⅲ－７区でも出土しているが，Ⅲ－６区の微量の晩期土器を除けば縄文土器は見られず，これらの敲打有溝石錘も弥生中期前後の所産と考えることができる。




**第９図　黒丸遺跡の敲打有溝石錘（報告書より転載）**
**写真は長崎県埋蔵文化財センター提供**

黒丸遺跡の石錘も，伊木力遺跡と同様に撃打による抉りを施しているものが多く，撃打・敲打を問わず長軸・短軸の双方に抉入部を作出するものが大部分を占める。これに対して東上遺跡の敲打有溝石錘は，長さ 110 ミリ，幅 100 ミリ，厚さ 54 ミリ，重量 479 グラムで，第９図左の石錘に近い。素材礫の形からは撃打加工が可能に思えるが，表裏に敲打による長軸１条の溝を施すだけで，撃打痕は見られない。

東上遺跡例に近いものとしては「瀬戸内型石錘」が知られている。特徴は「やや扁平な卵形石製品に１条の溝をめぐらせただけのもの」で「石材は花崗岩を主とし，砂岩がこれに次ぐ。重量は 100 ｇ前後から 400 ｇ台のものがほとんどである。中期前葉（Ⅱ期）には確実に存在するが，盛行するのは中期後葉から後期（Ⅳ期～Ⅴ期）で，古墳時代の例はあまり知られていない」（和田 1985）とされる。

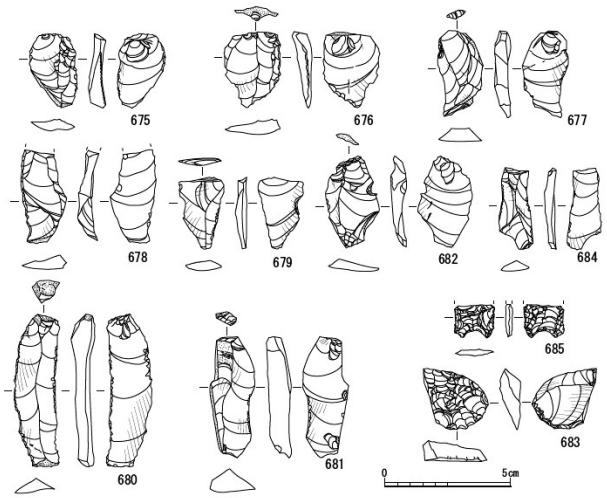
この記述は東上遺跡の石錘にもあてはまることで，時期的にも大きな矛盾はない。となると瀬戸内地方から伝わった情報に基づいて，東上遺跡で敲打有溝石錘が製作された可能性も浮上してくるが，長崎県域では弥生時代後期の貼り出し住居や島原半島の後期土器を除いては，瀬戸内的な要素はほとんど見られない（註６）という事情もあり，検討の余地を残している。

敲打の系譜について想像を逞しくすれば，弥生中期の黒丸遺跡に伝わり，技法そのものは受容されたものの，加工部位は縄文時代以来の伝統的な長軸・短軸双方の抉り込みが継承され，やがて後期になると「瀬戸内型石錘」のオリジナルに忠実な，長軸に１条の溝を施すタイプの石錘が作られた，と考えられなくもない。今後，関連資料の発見に期待したいところである。

**(9) 剥片石器の少なさについて**　黒曜石の剥片石器は楔形石器２点のみで，他には玄武岩を含めても 10 数点の砕片類が得られたに過ぎない。採集した 2021 年８月下旬は三重地区にも避難指示が発令された豪雨から半月を過ぎた頃で，採集には絶好の機会であった。にもかかわらず剥片石器類は礫石器とは対照的な少なさである。その理由を考えてみたい。

東上遺跡の主体は弥生時代中期後半～後期と推定される。これは一般に石器が衰退し急速に鉄器化が進むと考えられている時期である。長崎県域の弥生社会を俯瞰的に考察した論攷（古門 2020）では，長崎県本土部の石器と鉄製品の出土状況を整理した上で，「石器は下大隈式土器併行期（後期後半）には減少に転じ，西新式土器古段階併行（庄内式土器併行）以降は見られなくなる。一方，鉄器は高三潴式土器併行期（後期前半）から出土し始め，下大隈式土器併行期（後期後半）以降には頻出する傾向が窺える。住居跡から出土する石器と鉄器を見るかぎり，本県本土部では弥生後期に生産道具が石器から鉄器への転換が図られたことが分かる。」と述べている。

大村市の竹松（たけまつ）遺跡 TAK201303B1 区では弥生時代後期前半の住居址（SC124）から黒曜石製の縦長剥片（第 10 図）が出土しており，前掲論攷註 21 では「仮に流れ込みではないとすると，弥生時代後期の人々が（筆者註：縄文時代の剥片を）再利用するために収集したなどの想定をしないかぎり，合理的な説明がつかない資料である。」という見解が示されている。なかには 680 のように見事な石刃も含まれているが，全体としてはやや幅広で不定形のものが多く，頭部調整が施されていないなど，縄文時代後期前葉～中葉に盛行する鈴桶型石刃技法による剥片とは異なるものである。時期的には後続する後期後葉～晩期の剥片であろう。




**第 10 図　竹松遺跡 SC124 出土の黒曜石製縦長剥片・石鏃・削器（載告書より転載・一部改変）**

この縦長剥片の石材は夾雑物を含まない漆黒色・良質の黒曜石で，縁辺が鋭利で自然面の残存率はきわめて低く，薄身で，側面観の身の反りが小さい，という共通点がある。これは石器の素材として好適な条件を備えたもので，必要に応じて目的に適う剥片を取捨選択し，古門氏が指摘するように「収集」してきた結果と考えられる。

石器の終焉について『倭人と鉄の考古学』（村上 1998）では，「鉄素材の供給を受け鉄器製作が可能な期間とその供給が滞ったために鉄器が供給されずに石器を製作する期間とがあり，この二つの期間が交互におこったとすることも一つの解釈であろう。当然，前者の期間が次第に長くなっていくことは想定されるが，決して後者の期間がなくなってしまうことを意味しない。これによって弥生時代終末期や地域によっては古墳時代前期まで石器が生産されたことを説明しうる。」と述べられている。つまり鉄器化が進む過程で鉄素材の入手が困難だった期間は，原石獲得→剥片剥離→石器製作という従来的な工程を経ることなく，直接的に剥片を収集・加工し，代替利用していた，と考えられよう。

『アフリカ社会の研究・上巻』（今西・梅棹編 1970)）には，興味深い記述がある。「(ヤリの穂先の)「材料の鉄は，むかしは砂鉄からつくったというが，いまはたいてい外の部族から買うか，あるいは道ばたでひろってくる。道ばたで鉄をひろうというのは，ありうることである。数日かけて街道すじまで遠征すれば，交通事故や故障でうごけなくなった自動車が道ばたに放置されている。それを解体するのである。スプリングが１枚あれば，ヤリの穂が３本できる。」というものである。

東上遺跡における剥片石器資料の少なさは，石器から鉄器への移行期を示す象徴的な事象であり，わずかに残された砕片類は，竹松遺跡 SC124 出土例のような「収集された剥片」と同様の素材剥片が石器として二次加工された際に生じ，廃棄されたものと理解しておきたい。

## ６．東上遺跡における鍛冶の可能性

紹介した資料の多くは，弥生時代の石器である可能性が高く，溝状痕が残る砥石は諸遺跡の類例や先行研究から，鉄器のバリ取り・研磨などに使用されたものと考えられる。こうした礫石器の在り方は剥片石器の極端なまでの少なさと表裏をなし，弥生時代における東上遺跡が，鉄器化の進んだ社会であったことを如実に示しているものと思われる。当時の彼らが使用した鉄器は，東上遺跡の集落内で製作されたものなのか。この問題は鍛冶遺構が確認されれば解決するが，調査が実施されていない現状では，採集遺物が内包する情報に基づいて推察するほかない。

そこで有力な手がかりとなるのは，砥石・敲石・小礫等に見られる被熱痕跡であり，付着物である。被熱痕跡については再々述べてきたように，変色部分（主に赤色化）の範囲が明瞭で限定的であるという特徴がある。これは熱源が極めて高温で，接触部と非接触部が明確に分かれており，接触時間が比較的短かったことを示しているように思われる。

付着物も敲打有溝石錘に残されたタール状のものを筆頭に，砥石・敲石・被熱礫などに微細な黒色付着物が見られることは既に述べた通りである。前掲書（森 2018）ではタール状の付着物について,「砥石の表面に面的に付着した黒色で粘着質の物質であり，砥石は熱を受けているものが多い。タール状付着物がみられる砥石は長崎県壱岐市カラカミ遺跡，唐津市中原遺跡，福岡市野方久保遺跡など，鍛冶関連遺構が検出されている遺跡で主に確認されることから，鍛冶作業との関係が示唆される。」と記されている。この記述の前半部分は，敲打有溝石錘についても当てはまると考えて良いだろう。

また敲石類に見られる破断・剥離・潰れ・被熱などの使用痕から推測されることは，高温の熱源と強い衝撃を伴う行為であり，その結果として付着物が生じている可能性が考えられる。この付着物が，他遺跡の例と同様のものかは現時点では断定できないが，なかには「鉄」の付着も見られることから鍛冶作業との関係は十分に考えられるところである。

さらに台石の端部に見られる摩耗痕が，カラカミ遺跡の台石に見られる摩耗痕と類似していることを含めて総合的に考えれば，東上遺跡において鍛延・鍛接・折り曲げなどの鍛冶作業が行われていた可能性は，十分に想定されるところである。結論として憶測の域を出るものではないが，これらの礫石器類は「鍛冶」というキーワードを中心に相互の関係が想定されるものであり「弥生時代の鍛冶は「石器で鉄器を作る」過程」（村上 1998）という姿を彷彿とさせるものである。

カラカミ遺跡で鍛冶関係の遺構と考えられている第２号住居址は,「一辺約６ｍの隅丸方形を呈する大型住居であったと想定される」とのことであり，帯取遺跡で検出された鍛冶関連遺構を伴う竪穴建物跡（TJ1）も一辺約７㍍の隅丸方形と考えられている。

今回の遺物採集地点は，大雨でも冠水しない好条件の立地である。戦時中に防空壕が掘られていたという畑の地下に，一辺６～７㍍の鍛冶の作業場を伴う遺構が潜在しているという仮定で考えれば，防空壕掘削時に一部が破壊された可能性がある。遺物は，その際に露出したものと考えておきたい。

一般に砂丘遺跡の調査では豊富な遺物が出土し，墓（支石墓・石棺墓・甕棺墓），炉跡，集石などの遺構が確認される例も少なくない。しかし明確な建物跡の検出例はないようで，集落としての実態は未だに不明な点が多い。将来的に東上遺跡の発掘調査で建物跡が確認されれば，砂丘遺跡の全体像を解明する上での大きな手がかりが得られるものと考えられる。

## 第二部　東上遺跡の評価

### ７．西彼杵半島西岸地域の弥生時代遺跡

東上遺跡が所在する西彼杵半島西岸地域は，出入りの多い複雑な海岸線が連なり，大小の入江が各地に形成されている。入江の奥には砂礫堆の発達が見られる場所も多く，先史時代の遺跡は，入江奥に形成された浜堤上やその周辺の丘陵部などで確認されている。そして,浜堤に占地する遺跡の多くは,縄文前期曽畑式土器あるいはその前後の時期を始まりとしている。

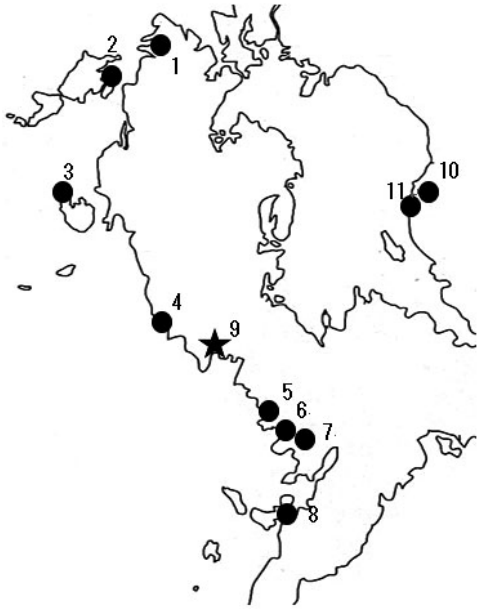
五島灘に面した西彼杵半島西岸地域において，発掘調査報告あるいは遺物等の紹介がなされた主な先史遺跡を北から見ていくと，天久保遺跡，寺島遺跡，雪の浦清水遺跡，串島遺跡，広平遺跡，出津遺跡，宮田石棺群，式見Ｃ遺跡，手熊貝塚，柿泊遺跡などがある。このうち，弥生時代の遺構あるいは遺物が出土した遺跡について概観する。

天久保遺跡は，西彼杵半島の北西部，西側に開口し深く入り組んだ天然の良港である面高港を見下ろす標高 40 ～ 60 ㍍の尾根筋斜面に占地する。1992 年（平成４）に長崎県教育委員会により発掘調査が実施された。遺物は旧石器時代のものから認められるが，中心となるのは縄文晩期終末から弥生中期後葉頃に形成された貝塚と,弥生前期の支石墓及び箱式石棺墓である。支石墓は３基確認されており，下部構造は小型の石棺と見られる。貝層からは，朝鮮半島系無文土器も出土している。

寺島遺跡は，西彼杵半島と大島との間に位置する寺島の北端の陸繋砂州に所在する。1978 年（昭和 53）に発掘調査が実施された。遺物は,縄文前期から中世までが認められるが,弥生土器は小片が多く,該期の遺構は確認されていない。

串島遺跡は,松島の北西端に位置する串島の南側に所在し,砂丘部と潮間帯に位置する貝塚からなる。1977 年（昭和 52）長崎県教育委員会により調査が行われた。貝塚部の混砂貝層中において，弥生前期から後期にかけての遺物が見られるが，前期後半から中期前半の土器がやや多く，中期後半の土器は欠落している。石器は抉入石斧，石ノミ形石器が出土している。

出津遺跡は，西に開口した浅い入江に注ぐ出津川の河口近くに形成された，南東方向に伸びる標高４～６㍍の砂丘上及び低湿地帯に占地している。1981 年（昭和 56），1982 年（昭和 57）の外海町教育委員会の調査では縄文後期の貝塚と弥生時代の石棺墓４基が確認され，南海産のゴホウラ製の組合式貝輪を装着した人骨が検出されている。また，1984 年（昭和 59）の長崎大学医学部の調査では，石棺３基が発掘され，前期後半の小甕や貝輪の副葬例が確認されている（古門 1985)。出土土器は前期から中期にかけて認められるが，土器以外に弥生時代の生活遺物はほとんど出土しておらず，この地は生活の場所ではなく墓地として利用されていたと推定されている。




1　天久保遺跡　2　寺島遺跡　3　串島遺跡　4　出津遺跡
5　式見Ｃ遺跡　6　手熊貝塚　7　柿泊遺跡　8　深堀遺跡
9　東上遺跡　10　帯取遺跡　11　富の原遺跡

第 11 図　関連遺跡位置図

式見Ｃ遺跡は，西に開かれた浅い入江の奥，式見川河口付近に形成された南西側に伸びる標高７㍍程度の砂堆上に所在する。曽畑式土器をはじめとする縄文土器や石器が採集されており，弥生土器は甕胴部片が１点採集されている（渡邊 1984)。

手熊貝塚は，西側に広く開かれた入江の奥，南東方向に舌状に伸びる浜堤（砂丘）上に立地する遺跡である。浜堤は標高３～５㍍程度で，背後にラグーン状の低湿地が形成されている。弥生土器は約50点が採集されており，中期初頭から中期後葉前半頃の城ノ越式，須玖Ⅰ式，須玖Ⅱ式といった北部九州系土器，中期末頃の黒髪式土器の特徴がみられる台付甕系土器が確認されている（長崎市文化財課 1994)。

柿泊遺跡は，山地に囲まれて形成された湿地を取り巻くように広がる緩斜面を中心に，旧石器・縄文時代の遺物包含地が点在する遺跡であるが，湿地に張り出した台地上のＤ地区において須玖Ⅱ式古段階の甕と台付甕系土器が若干出土している。

このほか,西彼杵半島域ではないが,五島灘に面した弥生時代の重要な遺跡の一つとして野母半島（長崎半島）の深堀（ふかほり）遺跡があるので，ここで取り上げておきたい。深堀遺跡は，縄文時代前期から近世にいたる遺跡であるが，特に弥生中期を中心とする大規模な墳墓群が知られる。また，弥生中期の土器を含む貝塚（混貝層）が確認されている。埋葬遺構はこれまでに70基以上の報告があり，その多くは弥生時代のものと見られている。土坑墓を主体として箱式石棺墓と日常土器を用いた幼・小児用甕棺墓が伴う，西北九州西岸地域に特徴的な埋葬習俗が見られる遺跡の典型例である。着装品には，類例の少ない南海産のイモガイ製有孔貝輪も見られる一方，青銅器等の威信財は所持していなかったようで，土坑墓に副葬された鉄剣があるほかは，これまでに金属器の出土例はない。弥生土器は前期から後期まで見られ，朝鮮半島系無文土器も出土している。

以上，西彼杵半島及び野母半島域の五島灘沿岸における弥生時代遺跡を概観した。これらの中には，墓域や貝塚が形成され，長期間にわたって活動が営まれた拠点的な遺跡と考えられるものも見受けられる。埋葬形態には石棺墓と土坑墓があり,長崎県本土部における一般的な墓制のあり方を示している。また，各地で貝塚が形成され，着装品として南海産のゴホウラやイモガイを用いた貝輪も出土していることなどから，当地方の弥生人が，縄文時代以来の漁撈・採集活動を主たる生業とし，海上交易を含め，海洋に主たる生活基盤を置く海人的性格を帯びていたことが想像される。なお，威信財，日常品に関わらず，金属器の出土例がほぼ皆無であるということを付け加えておきたい。

## ８．東上遺跡に見られる北部九州文化の影響

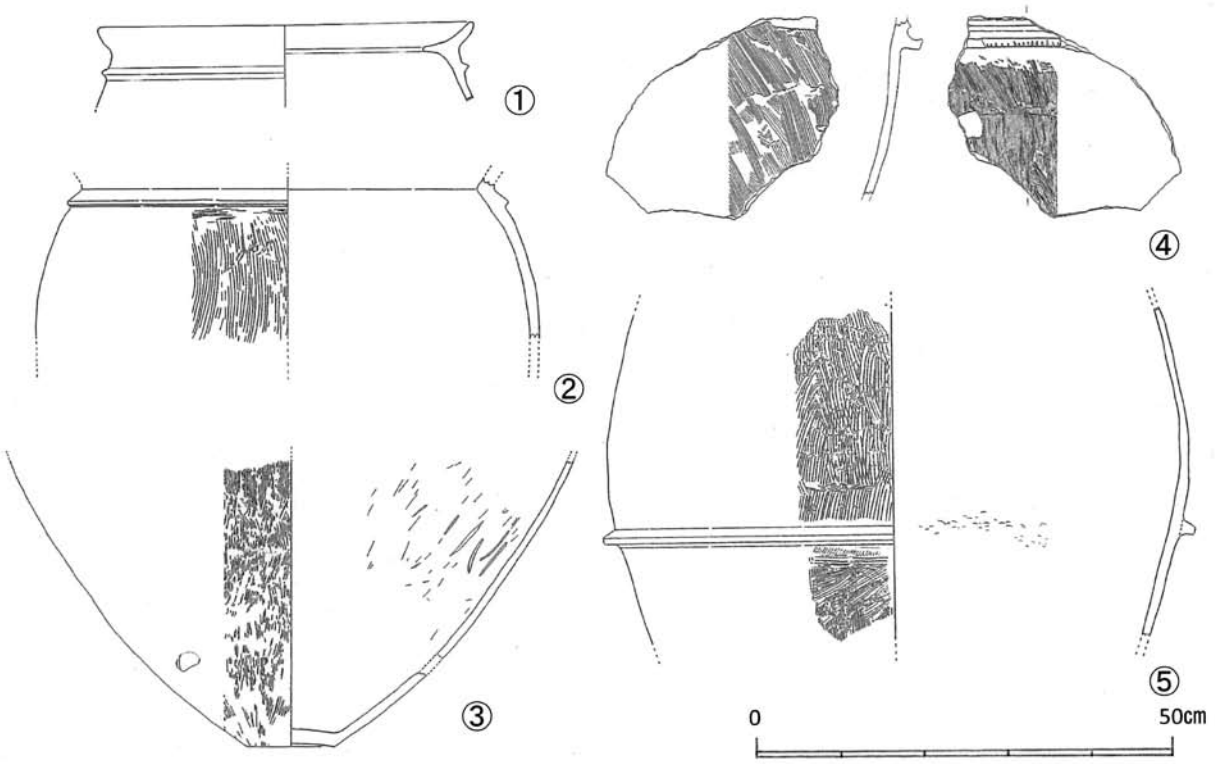
東上遺跡では，これまでに本格的な発掘調査の実績はないが，工事等の掘削による不時発見という形で，墳墓の形態に箱式石棺墓と甕棺墓が存在することが確認されている。

箱式石棺墓は，その規模や形態に関する記録はないが,『新長崎市史　先史・古代編』で副葬されていたとされる土器が報告されており（宮下 2012)，おおよその時期が推定できる。土器は２点あり，１点はほぼ完形の広口壺で，口径は15.0㌢㍍，胴部径は19.2㌢㍍，器高は16.9㌢㍍，口縁部から頸部に暗文を施し,胴部最大径のところに小突帯を１条巡らしている。もう１点は,鋤形口縁の小甕であり,口縁部径16.4㌢㍍，器高13.7㌢㍍，口縁部下に突帯を一条配し，その間に暗文が施されている。いずれも口縁部の形態から須玖Ⅰ式段階，中期前葉から中葉のものと考えられる。

甕棺墓は，1968年（昭和43）の水道工事で人骨と共に甕棺が発見されたといわれており，工事中に発見された成人用甕棺の破片は,1999年（平成11）に過去の管工事の埋戻し土から採集されている。『新長崎市史　原始古代編』に実測図が掲載されているが，土器の残存率は低いものの，胴部の復元径が少なくとも60㌢㍍内外となるような大きな土器が認められ,成人用甕棺と考えられる。器形等の特徴から,橋口達也の編年によるＫⅣａ式（桜馬場式）併行，おおむね後期初頭頃に位置づけられると見られる。

このように，東上遺跡では，土器や墓制において北部九州文化の直接的影響がみられる傾向がうか

がえる。特に，五島灘西岸域において成人用甕棺が発見されているのは東上遺跡が唯一であり，他の遺跡とは極めて異質であるといえる。そもそも長崎県本土部の弥生時代の墓制は，石棺墓や土坑墓が一般的であり，成人甕棺墓が出土すること自体が稀である。そのような中で，同時期の成人甕棺墓が出土した距離的に最も近い遺跡としては，大村市の富の原（とみのはら）遺跡がある。富の原遺跡は，弥生中期から後期にかけての集落や墓地が確認され，多数の成人甕棺墓と鉄戈，鉄剣が出土するなど，北部九州文化の影響が色濃い，大村地方における拠点的遺跡と評価されている。今回東上遺跡で採集された資料は，当遺跡における鍛冶遺構の存在を示唆しているが，成人甕棺墓の存在も併せると，東上遺跡には富の原遺跡や帯取遺跡といった大村地方の遺跡と共通する複数の要素が看取され，大村地方の弥生時代遺跡と直接的な関連性を持っていた可能性が高いと考える。




**第 12 図　東上遺跡出土の大形成人用甕棺**

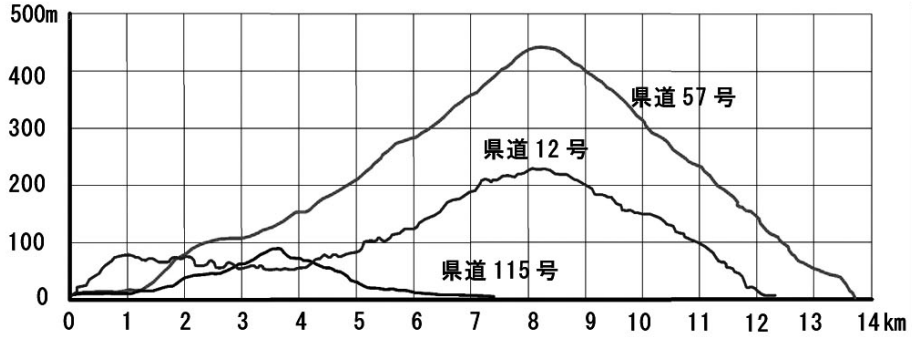
## ９．地理的特徴から見た東上遺跡の特異性

では，東上遺跡が五島灘に面した沿岸部の他の遺跡とは様相を異にし，大村地方の遺跡との共通性がうかがえる理由について探るため，大村地方との往来を念頭に，1862 年（文久２）に完成した『大村郷村記』の記述を参考にしつつ，三重地区の地理的特徴について概観したい。

大村と三重をつなぐルートとしては，まず，大村湾の唯一の出口である北側の早岐瀬戸を通り，角力灘を南下するという海上の道が挙げられる。この海路は「郷村記　三重村」の「諸方道法」において「城下江海上弐拾四里」として紹介されていることから，一般的なルートであったことがうかがえる。

一方，大村湾を海路で西彼杵半島東岸に渡り，半島を横断して外海に至るルートも存在していたと考えられる。「郷村記　三重村」の「往還道筋並川流之事」には，三重荘屋屋敷から西彼杵半島東岸部の村松村船着場まで次のように記している。

一　三重村荘屋より西海村境息引坂まで行程弐拾九町弐拾四間半，此道西海村へ越す往還道なり
内荘屋門前より畝苅村往還追分傍爾石まで拾町三拾四間，此間畝苅往還に委し
同追分傍爾石より牟田まで拾壱町四拾九間，此間左右畠山なり
同牟田より弐拾壱間，右山・田，左田にて，佐賀領の飛地なり，此邊總名牟田と云
同佐賀領飛地境牟田より息引坂の辻まて五町四拾七間，此間右田・野，左山林にて，佐賀領の飛地あり
同息引坂の辻より息引坂まて五拾三間半，此間左右畠なり，西海村越往還道此處にて終る
此處より村松村荘屋下船着波戸まて行程壱里六町三拾六間半



各県道の地形断面模式図は、国土地理院の地理院地図/GSIMaps のデータ及びツールをもとに作図した。断面模式図の縦横比は 10:1 である。

**第 13 図　西彼杵半島横断面図（ルート別の距離と標高の関係）**

これは，三重村の荘屋屋敷から西海村との境「息引坂」までの行程を記したものであるが，そこからさらに海路へ通じる村松村の船着場までの距離も追記されており，大村湾内の海上交通までを見越した往還として意識されていたことが推測される。これによると，全行程で 1 里 36 町 1 間，およそ 8 ㌔㍍弱の距離であったことがわかる。単純に数字のみで比較すれば，村松から大村城下までの海路を含めたとしても，海上 24 里の行程は大きく短縮されることになる。

西彼杵半島は，ほぼ全域にわたって 200 ～ 400 ㍍の丘陵が連なる隆起準平原であり，道路が整備された今日においても，半島の横断はかなり険しい印象がある（註 7）。そのような中において，現在の地図で見ると，西彼杵半島の基部となる三重・畝刈と西海・村松を結ぶ部分は，標高 100 ㍍を超えずに横断が可能な地形であることがわかる。今日，三重の集落から三重川に沿って北上し，最高位で標高 90 ㍍程度となる分水嶺を越えて西海川に至る県道 115 号線のルートは，高低差がさほど大きくなく，短距離で西彼杵半島を横断することができる。「郷村記」にある三重村荘屋から西海村境息引坂までのルートの詳細は明らかにはできないが，高低差や距離からみて，少なくとも西彼杵半島域において，少ない労力で横断できる稀少な場所と言えるだろう。

さて，稲富裕和は，富の原遺跡における鉄戈の流入ルートを，有明海側の佐賀平野か筑後平野の「クニ」から有明海を通じて諫早湾に入り，「船越」を越えて大村湾に至ったと想定している（稲富 1995）。また，宮崎貴夫は，有明海と大村湾を分ける「諫早地峡」，有明海と橘湾を分ける「愛津地峡」において，これら「船越」を押さえる遺跡（西ノ角遺跡，火箱遺跡など）が出現すると指摘し（宮崎 2011），弥生時代における有明海沿岸地域と大村地方との交流において，海上交通の結節点となる「地峡」「船越」が重視され，それを管理する海人集団の存在を推測している。西海・村松と三重・畝刈を繋ぐ陸路を，大村湾と五島灘を結ぶ「地峡」「船越」と呼ぶかどうかは別として，東上遺跡は，その五島灘側の出入

口に位置する遺跡である。大村湾と有明海・橘湾を結ぶ「地峡」とその周辺の遺跡のあり方になぞらえて考えるなら，本遺跡のある三重地区も，大村湾と五島灘との交通上の結節点として，他の遺跡・入江と比較して地理的な優位性を持っていたと考えてよいだろう（註８）。そして，このような地理的優位性から，富の原遺跡や帯取遺跡などを通じて甕棺墓・鍛冶を含む北部九州文化が東上遺跡にもたらされたと想定できるのではないだろうか。

次に，三重浦の入江としての特性を見てみたい。三重地区前面の三重浦は，西側の樫山地区が所在する南に大きく張り出した岬と，東側の大見崎（おおみさき）の丘陵に囲まれて形成された，南側に大きく開かれた湾の最奥部にあって,樫山の岬と三京町側の丘陵に挟まれた三重川の河口付近に所在する。したがって，北，東，西方向からの風や波の影響を受けにくいことが想定され，さらには，樫山の岬の付け根付近に位置しており，南西方向からの波浪に対してもさほど大きな影響は受けない入江であると思われる。「郷村記　三重村」においても，南からの風以外は良港と評価されている。『郷村記』から弥生遺跡の所在する他の入江を取り上げてみると（表２），三重浦と同じような評価を得ている入江は，近隣では福田浦くらいであり，出津や手熊，式見などのように，特に西方向からの風や波に影響を受けやすかった入江が多いことがわかる（註９）。

**表 2 『大村郷村記』に見る各入江の特性**

| 村　名 | 浦　湊 | 特　徴 | 付近の遺跡 |
|---|---|---|---|
| 黒崎村 | 長田浦 | 横 6 町，入 5 町，深さ 5 尋，海底小石原<br>南風・西風共に吹込の荒磯　船繋悪 | 永田遺跡 |
| | 出津浦 | 横 3 町，入 2 町，深さ 5 尋，海底小石交り<br>南風・西風共に吹込の荒磯　船繋悪 | 出津遺跡 |
| 三重村 | 三重浦 | 横 4 町，入 7 町，深さ 5 尋，海底白砂<br>浦口より 5 町大船繋場良，南風以外良 | 東上遺跡 |
| 畝刈村 | 畝刈浦 | 横 6 町，入 10 町，深さ 6 尋，海底砂<br>大船 20 隻余り繋良 | 畝刈遺跡，<br>畝刈の浜遺跡 |
| | （畝刈浦内）<br>京泊浦 | 諸国の通船繋場，大船不入<br>小船も南風の際は波高により不入 | |
| 式見村 | 式見浦 | 浦口姥瀬より口の瀬まで 150 間，入 128 間，白砂で船繋なし，<br>船懸り東北風良，西南風悪 | 式見 C 遺跡 |
| | 相川浦 | 浦口 83 間，入 52 間，深さ 7 尋，海底小石，陸白浜，<br>船懸り東北風良，西南風悪 | |
| 福田村 | 福田浦 | 横 13 町，入 20 町，深さ 18，9 尋，海底砂<br>南風悪，外何風にも船繋ぎ良 | 崎山遺跡 |
| | 小江浦 | 横 9 町，入 15 町，深さ 8 尋位，海底砂<br>遠干により船繋悪，東北風良 | 小江遺跡 |
| | 手熊浦 | 横 8 町，入 15 町，深さ 10 尋，底砂<br>遠浅により船繋悪，東北風良，西南風悪 | 手熊貝塚 |

このように，東上遺跡が所在する三重地区は，西彼杵半島の陸路横断に際し，比較的短距離で高低差も少ないルートで大村湾側に出ることができる陸上交通における要所であり，且つ地形的に南風以外の波浪の影響を受けにくい天然の良港であるという海上交通上の地形的優位性を備えた場所であったと考えられる。西彼杵半島西岸地域の中で，北部九州文化の影響が東上遺跡に顕著に見受けられるのは，このような海上及び陸上交通の要所として，大村地方の遺跡と結びついていたからではあるまいか。

稲富は，富の原遺跡を大村湾における海上交通の拠点と位置づけ，船越を介し有明海沿岸の佐賀平野や筑後平野の「クニ」とのつながりと，一方では大村湾外の平戸や壱岐，その先の朝鮮半島を見据え，大陸の先進文化流入の中継地的役割を果たした可能性を想定している（稲富 1995）。

この論にしたがって，東上遺跡をその地理的環境から評価すれば，拠点遺跡である富の原遺跡の周辺集落として，海上交通を担った海人集団が営んだ，外洋である五島灘と大村湾をつなぐ役割を持った遺跡ととらえることも可能ではないだろうか。いずれにしても，東上遺跡の様相解明については，将来，機会をとらえての発掘調査等による検証が待たれるところであり，その成果による研究の進展に期待したい。

## おわりに

東上遺跡は，西彼杵半島の海岸線に沿って点在する周辺の砂丘遺跡（出津遺跡，式見Ｃ遺跡，手熊貝塚など）と同様に，おそらくは縄文時代前期（曽畑式土器段階前後）を開始期とする遺跡であり，遅くとも縄文時代中期前半（船元式土器段階）以降の活動痕跡が遺されていることは確実である。

弥生時代には大形成人用甕棺を用いた墓地が形成されるなど，在地色の強い長崎県本土部にあって当時の最先端地域であった北部九州文化の強い影響が見られることが大きな特徴である。

これまで発掘調査の機会に恵まれなかったため，その実態については不明な点が多かったが，今回の採集資料は弥生時代の東上遺跡に「鍛冶」が存在した可能性を強く示唆するものであり，そうした想定を含めて大村地方さらに北部九州との関係を考え，東上遺跡を含む三重地区の地理的な重要性について巨視的な視点での論述を試みた。

東上遺跡が面する五島灘から超閉鎖性内湾である大村湾に入るには，水上交通手段としては針尾瀬戸を通らざるを得ない。しかし陸路での往来を考えた場合，第 13 図に示したように三重や畝刈を基点として横断するルートが距離的に最も近く標高差も最小になる。これは当時の拠点的集落と考えられている大村市・富の原遺跡や周辺遺跡（黒丸遺跡・帯取遺跡など）と，西彼杵半島西岸に立地する諸遺跡との交流を考える上で，きわめて重要な視点であろう。現時点では，三重－琴海を結ぶ一帯での先史遺跡は未確認だが，今後の踏査で新たな遺跡が発見される可能性に期待したいところである。

東上遺跡の範囲は，不明な点が多い。第３図に示したように，かつての水道管敷設や下水道管埋設工事の際に発見された甕棺や，東上公民館敷地内における石棺から，周辺に弥生時代の墓域が形成されていることは確実だが，今回の採集地点は，さらに北側の後背湿地との境界付近である。また長崎大学による試掘地点でも遺物が出土していることを考えれば，広範囲におよぶことが考えられる。

三重保育園の北側（後背湿地～三重川右岸に形成された自然堤防）は東上遺跡とは別に「三重遺跡」という名称で登録されているが，ここも東上遺跡の一部である可能性が高く，さらに北側の三重川に沿って広がる湿地帯も，稲作など食料生産の場として利用されていたものと思われる。三重の中心部は住宅が密集しているため遺跡の範囲確認も簡単にはできないが，地道な分布調査と詳細な聞き取り調査を重ねることで，いずれ全体像が明らかになるであろう。

『三重村史雑記』で下柳田眞苗先生は「一片の遺物が大遺跡の発見の端緒になる例は多いのです。「岩宿遺跡」などその代表的なものといえましょう。わたくしたちはつとめて三重の先史時代に着目し，ささいなものでも逃すことなくたんねんに積み重ねてよりよい資料を充実させたいものです。」と記されている。それから半世紀以上の時を経た今日，三重地区先史社会の一端を物語る資料を紹介することができた。今後も，さらなる遺跡の発見にもつとめていきたいと考えている。

本稿は，第一部１～３を渡邊，同４・５を竹田・渡邊，第二部７～９を宮下が執筆した。第一部６は三名の協議に基づき渡邊が執筆した。土器の実測・拓影は竹田が，石器の実測は竹田・渡邊が担当した。遺物写真は竹田・渡邊，現地の写真は渡邊の撮影による。

①三重の町並み

②三重の町並み（背後の墓地より撮影）

③遺物採集地点近景

④採集地点近景（背後の建物は三重保育園）

⑤軒下の礫集積状

⑥伝・石棺出土地点（☆）

⑦畦町海岸

⑧畦町海岸における加工痕のある玄武岩

写真 6

## 【謝　辞】

現地踏査･資料収集および原稿の執筆に際しては，中尾久子氏をはじめ多くの方々のお世話になった。以下にご芳名を記し，心より御礼を申し上げる次第である（敬称略・順不同）。中村信昭（三重地区連合自治会），木浦弘海・森　隆・岩　實雄（三重地区史談会），早崎常男・村角俊久（馬場自治会），久方勝子（東上自治会），中田英次郎・中田康子（(有）ナカタ），長崎市北総合事務所三重地域センターの皆様，森　貴教（新潟大学研究推進機構超域学術院），宮﨑貴夫・片山巳貴子（長崎県考古学会），寺田正剛（長崎県埋蔵文化財センター），中尾篤志・山梨千晶（長崎県教育庁学芸文化課），田中　学（長崎市文化財課），山口美由紀（長崎市出島復元整備室），川道　寛（西海市教育委員会），辻田直人･村子晴奈･早稲田一美（雲仙市教育委員会），柴田　亮･田島陽子（大村市教育委員会），中尾陽介･本田秀樹･皆元　渚･山口勝也（(㈱埋蔵文化財サポートシステム），古門雅高（西海考古同人会）

## 【註】

**註 1**　現状では樫山町周辺での先史時代遺跡は確認されていないが，現地を踏査した結果では地形的に良好な地点も多く，過去には南端部で箱式石棺が発見されたとの情報がある（第１図★印）。遺物がないため断言はできないが，弥生時代～古墳時代にかけての墓地である可能性があり，今後，踏査を重ねる過程で新たな遺跡が発見される可能性は，十分に考えられるところである。

**註 2**　『三重村史雑記』は昭和 40 年代に（当時の西彼杵郡三重村立）三重中学校で郷土史クラブを指導されていた下柳田眞苗先生がまとめられたものである。手書き・B5 版で 26 枚，三重地区の歴史・民俗を中心に多岐にわたる内容が詳細に記されており，実に貴重な資料である。発行年は不明だが，1967（昭和 42）年の試掘調査のことが記されており，三重村が長崎市に編入（1973（昭和 48）年３月 31 日）されるまでの間と思われる。幸いにも三重支所に保管されていることを知り，複写を入手することができた。

**註 3**　早崎常男氏・村角俊久氏のご協力により試掘地点を特定することができた。聞き取りでは，この周辺の地下は砂層の地点もあるとのことである。砂層と礫堆の境界が存在するのであろうか。

**註 4**　この地質図の縮尺は１/50,000 で，図上での１㍉は実際は 50㍍である。それが表示限界とすると 50㍍四方以下の分布域は地質図に反映されないことになる。三重川に沿って河床を目視したかぎり，ほとんどが結晶片岩であることから，玄武岩の分布域が山中に存在する可能性はきわめて低いと考える。

**註 5**　石盤については，「モノが語る明治教育維新　第 21 回　－明治期の花形筆記具・石盤」
https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/mono21 に詳しい。

**註 6**　古門雅高氏の教示による。

**註 7**　天保８年（1837）「肥前国彼杵郡之内　大村領絵図」（長崎歴史文化博物館所蔵）を見ると，当時から，現在の西海市大瀬戸町瀬戸西浜と西彼町大串を結ぶルートや，大瀬戸町雪ノ浦あるいは長崎市神浦と長浦を結ぶルートなど，西彼杵半島を横断する往還道が存在していることがわかる。今日においても，これらとほぼ同じルートで県道が整備されているが，いずれも標高 200㍍を越えて横断しなければならず，また，距離的にも 10㌔㍍以上となる行程である。

**註 8**　一方，大村湾側の村松地区や西海地区においては，東上遺跡に対応する弥生時代の遺跡はこれまで発見されていない。ただし，隣接する時津町子々川郷の沖に浮かぶ前島から弥生時代の石棺墓が出土しており，近隣に弥生集落の存在も想定される。

**註 9**　なお，余談であるが，五島灘沿岸域で，ゴホウラ製貝輪が出土した出津遺跡，イモガイ製貝輪が出土した宮の本遺跡，深堀遺跡は，いずれも南側に丘陵部を持つ海浜部に位置する傾向がうかがえ，少なくとも，三重地区とは逆に，南側からの風や波の影響を受けにくい場所であったことが考えられる。南海産貝製品の出土した五島列島の遺跡については，必ずしもこれに当てはまらないものもあるが，各入江の形状や開口方向，波・風に対しての入江の優劣性，そして季節による波・風の傾向と航海時期の関係性など，海浜部遺跡における細かい地形的特性の把握と分析は，海上交通におけるモノの流通やネットワークを考える際に，基礎情報として活用できるのではないだろうか。

**【引用・参考文献】**


稲富裕和　1995 「12　鉄の武器―大村湾沿岸の弥生時代」『長崎県の考古学 22 のテーマを探る』
長崎県考古学会編　ろうきんブックレット

梅棹忠夫　1970 「Ⅳ　牧畜民の社会　ダトーガ族の武器と狩猟　Ⅳ ヤリ」
今西錦司・梅棹忠夫編『アフリカ社会の研究　京都大学アフリカ学術調査隊報告　－上巻－』

柴田　亮　2021a 「第６章　帯取遺跡の調査」『大村市　市内遺跡発掘調査概報』10　長崎県大村市教育委員会

柴田　亮　2021b 「３　大村市帯取遺跡の発掘調査成果」『長崎県考古学会報』No.29　長崎県考古学会

下柳田眞苗（発行年不詳）『三重村史雑記』（旧長崎県西彼杵郡三重村立）三重中学校郷土史クラブ編

長崎県教育委員会　2018 『竹松遺跡Ⅲ』 新幹線文化財調査事務所調査報告書　第６集

九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

長崎市教育委員会文化財課　1994 「（資料紹介）長崎市における新発見の貝塚遺跡」
『長崎市立博物館報』第 34 号　長崎市立博物館

三重地区郷土誌編さん委員会（江越弘人ほか）　2017
『長崎市三重地区の郷土誌　どこにでもある村のどこにもない歴史　キリシタンの郷』

平井　勝　1991『弥生時代の石器』考古学ライブラリー 64 ニュー・サイエンス社

平野敏和・中村和正　1982 『出津遺跡』外海町教育委員会

福田一志　1985 「Ⅲ 二 石器」高野晋司編『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書 第 73 集　長崎県教育委員会

藤野保編　1982 『大村郷村記』第六巻　国書刊行会

古門雅高　1985 「外海町所在出津遺跡の埋葬と土器」
『長崎県地方史だより』第 26 号　長崎県地方史研究会

古門雅高　2020 「大形成人用甕棺墓分布周縁地域の社会　－長崎県本土部の弥生時代社会－」
『西海考古』第 11 号　西海考古同人会

宝珍伸一郎　1990 「Ⅴ 遺物 ３ 石器（5）石錘」『伊木力遺跡』
多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室編

町田利幸編　1996 『黒丸遺跡Ⅰ　都市計画道路出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書』
長崎県文化財調査報告書　第 127 集　長崎県教育委員会

宮﨑貴夫　2011 「長崎県地域の状況について－島原半島を中心として－」
『環有明海の交流－台付甕をめぐる諸問題－ 肥後考古学会・長崎県考古学会合同大会発表資料』
長崎県考古学会

宮下雅史　2013 「第３章　弥生時代の長崎」『新長崎市史　第１巻【先史・古代編】』 長崎市

村上恭通　1998 『倭人と鉄の考古学』青木書店

森　貴教　2011 「第 12 章 「カラカミ遺跡出土鍛冶関係石器の検討」
宮本一夫編　『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ　－カラカミ遺跡第１地点の発掘調査（2005 ～ 2008 年）－』
九州大学文学部

森　貴教　2018 『石器の生産・消費から見た弥生社会』九州大学人文学叢書 13　九州大学出版会

和田晴吾・中西靖人・吉岡幹幸・渡辺一雄　1985 「７ 漁猟具　１．土錘・石錘　B. 石錘」
『弥生時代の研究』第５巻　雄山閣

渡邊康行　1984 「長崎市式見遺跡採集の遺物」『長崎県の考古学〔Ⅱ〕』 長崎県考古学会


**※測量成果の複製承認について**

第２図：令和２年度作成　長崎市基本図 23（S=1/5,000）の複製
第３図：令和２年度作成　長崎市基本図 62（S=1/2,500）の複製
いずれも【承認番号：長都計第 698 号（令和４年１月 20 日）】

## 執筆者一覧（五十音順）

| | |
|---|---|
| 礒　村　康　行 | 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム |
| 大　坪　芳　典 | 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム |
| 竹　田　ゆかり | 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム |
| 立　谷　聡　明 | 佐賀県唐津市教育委員会 |
| 土　岐　耕　司 | 国際文化財株式会社 |
| 古　門　雅　高 | 西海考古同人会 |
| 宮　﨑　貴　夫 | 長崎県考古学会 |
| 宮　下　雅　史 | 長崎市役所文化観光部 |
| 渡　邊　康　行 | 西海考古同人会 |

**西 海 考 古**　第 12 号

2022 年 3 月 25 日　発行

発　行　　西海考古同人会
編　集　　西海考古同人会事務局
〒 850-0874
長崎県長崎市魚の町 6-15-902
古門　雅高　方
E-mail：cqe07660@yahoo.co.jp
郵便振替：01770-5-75643
印　刷　　オムロプリント株式会社